

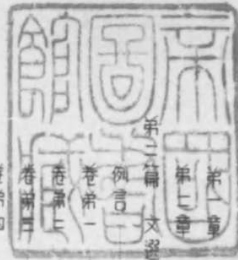
始



Q28
SH15

文選李善注所引尚書攷證目次

第一篇 文選李善注引文義例攷	九三	卷第十	一七三
引據各本文選李善注優劣攷	一一	卷第十一	一八四
第二篇 文選李善注引文義例攷	一一	卷第十二	一九八
文選李善注所引尚書條攷	一一	卷第十三	二〇四
第三篇 文選李善注所引尚書條攷	一一	卷第十四	二〇八
第四篇 文選李善注所引尚書條攷	一一	卷第十五	二一
第五篇 文選李善注所引尚書條攷	一一	卷第十六	二二
第六篇 文選李善注所引尚書條攷	一一	卷第十七	二二七
第七篇 文選李善注所引尚書條攷	一一	卷第十八	二三



卷第十九	三三六	卷第四十九	三九〇
卷第二十	三三七	卷第五十	三九三
卷第二十一	三三七	卷第五十一	四〇二
卷第二十二	三三八	卷第五十二	四〇四
卷第二十三	三三八	卷第五十三	四〇六
卷第二十四	三三八	卷第五十四	四一三
卷第二十五	三三八	卷第五十五	四二二
卷第二十六	三三八	卷第五十六	四二七
卷第二十七	三三八	卷第五十七	四三九
卷第二十八	三三八	卷第五十八	四五一
卷第二十九	三三八	卷第五十九	四六三
卷第三十	三三八	卷第六十	四六八
卷第三十一	三三八	卷第六十一	四七三
卷第三十二	三三八	卷第六十二	四七六
卷第三十三	三三八	卷第六十三	四七九
卷第三十四	三三八	卷第六十四	四八五
卷第三十五	三三八	卷第六十五	四九〇
卷第三十六	三三八	卷第六十六	四九四

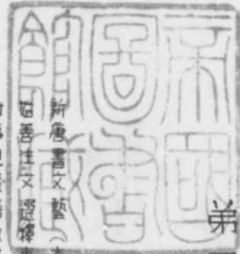
今本尚典「修五禮」	卷第五十八	五一七
下の夾注の位置は舊式に非ざるの攷	卷第五十九	五二八
卷第五十七	五二一	五四〇
第三篇 李善本尚書總攷		
第一章 總說	五五一	
第二章 李善本尚書と今本尚書	五五一	
第三章 李善本尚書と尚書定本	五五七	
第四章 李善本尚書と正義本尚書	五五八	
第一節 五經正義の撰定	五九八	
第二節 正義本尚書と尚書定本	五九八	
第三節 正義本尚書と今本尚書	六〇一	
第四節 李善本尚書と正義本尚書	六一一	
第五章 李善本尚書と現存諸古定尚書	六二五	
第六章 結論	六二五	

文選李善注所引尚書攷證

斯波六郎撰

第一篇 文選李善注引文義例攷

第一章 引據各本文選李善注優劣攷



新唐書文藝傳(李邕)傳に曰く、

邕善注文選傳事而忘意書成以問邕邕不敢對善詰之邕意欲有所受善曰試爲我補益之邕

附事見義善以其不可奪故兩書並行

と舊唐書此の事を記せず四庫全書

と後目文選注釋等此の説を疑す

又李匡又資暇集卷上に曰く、

邕

李氏文選有初注成者有覆注有三注四注者當時旋被傳寫之具紀重之本皆釋音訓義注解

と。李匡又始末未だ詳ならず。四庫全書自撰

要(卷百十八)定めて唐末の人と爲せり。

果して此の二書記する所の如く李善の生時既に其の文選注數種の異本有りしや否や、

胡氏本重刊・廣州重刊胡氏本續大文選・上海精印胡氏本重刊・懷德堂重刊汲古閣本續大文選・錄士
誦重校汲古閣本重刊・文成堂重刊汲古閣本續大文選・葉氏重刊本以上九種皆本館所注本、外に葉氏重刊士
誦堂所刊續大文選・舊鈔本文遊樂注存卷・此是印本也、以東洋大藏館所藏、明州刊本續大文選・足利學校藏、京裝仿宋刊本續大文選・
研究、刊本、江本續大文選・明重刊宋張守校正本續大文選・四部叢刊本續大文選・谷陵本續大文選・
萬善堂本續大文選・吳興學重校本續大文選・慶安本續大文選・寛文本續大文選・寛文乙未刊本續大文選・
就き較、善き者數通を遊び、榮伍以て其の是を求め沙を披して以て金を拾はば、庶幾
は榮賢の舊を影監せしむるを得むか。乃ち先づ右廿一通の中、較、善き者數種に就
き、各々其の性質を明かにし、且何種の本が最も多く李善注本の舊を有するかを攻へむ
と欲す。

(一) 板本

然るに島田翰謂へらく、吾が應安七年、奈良甫が尤本に據りて刻せし所と胡刻本とは
聞異同有るを以て胡氏據る所の尤本は悉く補刊有るべしと。右書註本題の條今此の本
を檢するに每巻書口「乙丑重刊」卷二第五葉、卷十第六葉「乙卯重刊」卷十第七葉「壬子
重刊」卷三第九葉、卷十第四葉「戊申重刊」卷十第五葉、卷十七第十葉「辛巳重刊」卷二第五葉、卷八
第十葉、卷十五第十葉「丁未重刊」卷二第五葉、卷八第十葉

刊卷二第五葉、卷十第四葉「丙寅重刊」卷四第十葉、卷五第十葉等の文字頻に見え殆んど枚舉するに能へば此
の尤本は寧ろ胡氏文庫本と異なり、寧ろ室町に傳へたる所と見ゆべし。然るに胡氏據る所の尤本は悉く補刊有るべしと。右書註本題の條今此の本
を檢するに每巻書口「乙丑重刊」卷二第五葉、卷十第六葉「乙卯重刊」卷十第七葉「壬子
重刊」卷三第九葉、卷十第四葉「戊申重刊」卷十第五葉、卷十七第十葉「辛巳重刊」卷二第五葉、卷八
第十葉、卷十五第十葉「丁未重刊」卷二第五葉、卷八第十葉

胡氏據る所の尤本必ずしも淳熙の原刻完本に非ず。而して尤本の據る所決して本善
單注本に非ず。歿書序に見ゆ且又胡氏此の本を刻するや未だ嘗つて雙校改易を加へ
ずんば非ざるなり。

胡克家攷異末尾に曰く「此跋（袁説友の跋を指す）末言尤之警校語雖未竟而其在所改易顯然已見」と。然るに程先甲遼海略例に於て胡氏を避じて曰く「胡氏考異號稱精審乃其以袁説友斷爛跋語有有補二字遂疑尤有所改易于尤本與袁本茶陵本參異者輒補尤改」（李鼎祚同）と。案するに程説非なり。攷異の文を託するに胡説據る所は袁跋の「有補」の二字に在らずして警校の二字に在り。袁跋既に「尤公博極羣書予親爲警校」と言へば其の改易せしこと固より疑ふべからず。西京賦注「小説家者流蓋出於稗官」攷異「流」於の二字を以て尤増す所と爲す。今惠鈔本を檢するに正に此の二字無し。王僧達和琅邪王依古詩注「甘泉賦曰往往離宮」攷異に曰く

取其圖可包義物也」漢書律曆志「匏蒲包切匏杓也」八十八 と言ひ、王國維《漢石經三
種本切韻五音》紐亦「匏」四十三「匏以氣爲飲器」の文有り。鄭玄本刊聲韻圖紐五音同。鼻
器也。乃ち玉篇以下、「匏」を飲器の字と爲し、以て樂器の意に用ひらるる「匏」の字と判
別せしなり。然るに今詩禮を檢するに郊特牲「匏竹在下」樂記「弦匏笙簧會守府
鼓」の「匏」は皆樂器の意にして大雅公劉「酌之用匏」郊特牲「器用陶匏以象天地
之性也」器用陶匏尚禮然也」「三王作中用陶匏」の「匏」は則ち皆飲器の意なる
に樂器の字、飲器の字俱に「匏」を用ひて區別有る歟し。然らば則ち玉篇以下飲器と
訓せる「匏」の字亦用ひて樂器の字と爲すを得べきなり。蓋し「匏」は「匏」の異體字
にして本其の義「匏」の字と異りしに非ざるべし。

翻つて再び王元長の文を攷ふるに、恐らくは文選本「觥」の字に作る。是を以て後人玉篇以下「觥」を訓じて飲器と爲すの説に泥して、妄に李善原注引く所の漢書の文を刪去し之に易ふるに禮記飲器の文を以てせしなり。是れに由りて之を觀れば胡刻本此の正文「觥」の字李善の舊なること當に疑ふべからざるなり。

卷二 西京賦 木則櫟栲欂櫨李注 郭璞山海經注曰欂一名梓閭爾雅曰栲櫨第十六

胡氏攷異に曰「袁本茶陵本爾上有楠亦作桤四字案此校語錯入注也二本正文作楠蓋善柁五臣楠而著此耳」と。足利本六字本四字善柁本、足野本、徳富本、京師本に同じ。今敦煌出土唐鈔本殘卷第六卷を檢るに此の本と正に同じ。

卷卅六 仕彥宣德皇后令要不得彊弱之名使奎宰有寄

欠

欠

行年時は各本必ずしも同一ならずと謂はる。其書目、日本書紀、古事記、日本書影、長澤規矩
に據れば、徳富氏編する所は卷第廿九冊にして、天孫御書目後篇卷七に記する所の書本なりと、
徳富氏編する所の明州本卷第廿六冊、天孫御書目後篇卷七に記する所の書本なるに似たり。然らば、徳富氏本と傳氏
本とは同一編に屬するかと疑はる。

圖書寮藏本東洋文庫藏本天孫御書目後篇卷七第十五銘する所及び王國維兩浙古刊本
放下記する所俱に書末盛欽の跋有るに、此の本は則ち之れ無し。

近藤守重石文故事卷二全書本に、此の本を以て北宋の原刻初印本ならむかと疑へども、
足利學校藏本書目六冊には、紹興中明州に刊せる者の後印修補本なりと有す。原本を
檢するに後説謬らざるに似たり。

予曩に胡刻本、袁本四部書刊本を以て、此の本と對校せしに、此の本尤も袁本と相近く、
本表本にはしき注を并せ、而も此の本較々善注の舊式を採ずと思はるる所決して渺なからざ
りき。今左に其の二三例を示さむ。

卷六魏都賦「漢罪流弊……或浮泳而衣戲」の注、此の本は「善曰左氏傳、流四凶族……
善曰左氏傳曰、窮爾小國……善曰漢書淮南王曰……」第廿八葉に作りて三「善曰」有る
に、袁本四部本は惟注首の「善曰」のみ有り、其餘皆之れ無し。此の本妄に「善曰」
の字を加ふべきに非ず。是れ善善注本、本其の正文三分せられ、注は各條の下に分
録せしなり。胡刻本正に
斯くの如し。

卷州八任彦昇、周范始興、作求立太宰碑表「五教以倫百揆時序」の注、此の本「尚書帝曰
契汝作司徒敬敷五教」第廿八葉表に作るに、胡刻本四部本「五教」の二字を重

ねす。袁本亦此の二字を重ねず且其の下二格を空にす。此の注「五教」の二字を疊する者是なり。攷弟二篇に詳なり。

卷六十陸士衡弔魏武帝文「踰鎬京而不渡」の注此の本「尚書曰既克商二年王有疾不念」第三に作るに胡刻本四部本俱に「念」を「豫」に作り袁本は則ち「念」に誤る。此の注「念」に作る者是なり。攷弟二篇に詳なり。

(イ) 明袁聚仿宋刊本六家文選六十卷 舊集文選科大學藏

詔家の書目を檢するに袁氏仿宋本と稱する者數種有り。其の主たる者左の如し。
(1) 天祥琳琅書目卷十 第六家文選六十卷を載せて曰く

前編就序次李善上文選註表并國子監奉刊文選詔言次呂延祥進五臣集注文選表後明袁聚語語：序後標此集精加校正絕無舛誤云々 標記下文略す 又五十二卷末葉標母昭高負時云々 下文略す 此二條宋塾中本有之係存其舊其六十卷末葉有吳郡袁氏善本新雕隸書本記則袁聚所自標也聚語語云余家藏書百年見購索宋刻本昭明文選中略 殆數十種家有此本甚稱精善而註釋本以六家爲傳因命工細離匡郭字體未少改易始於嘉靖甲午成於己酉計十六載云云 其四十四卷末葉標丁未六月初八日李宗信雕五十六卷末葉標戊申孟夏十三日李清離

と。而して琳琅書目は其の載する所を以て標刻甚精校勘亦密實與宋塾同工と評せり。
(2) 丁丙善本書室藏書志卷卅八六家文選六十卷 明袁氏仿宋刊本を載せて曰く

卷一第四行六臣名後割去一行惟存皇明重刊四字第三十卷後有皇明嘉靖壬寅四月立夏日吳郡袁氏兩庚早堂善本雕兩行第四十卷後有此蜀郡廣都縣袁氏善本今重雕於吳郡袁氏之嘉慶堂嘉靖丙午春日國朝改廣都縣爲豐流縣屬成都府四行第四十一卷後有缺章二字

と。此れ等皆琳琅書目の記せざる所而して丁志は第五十二卷末葉標記揮塵錄を誤りて揮塵錄に作ると云へるに琳琅書目之を言はず。又丁志は各卷末の題字を擧ぐるに甚だ詳なるに其の書序の後に此集精加校正云々の標記有りと言はず。卷四十四末葉丁未六月初八日云々の標記有りと言はず。卷六十末吳郡袁氏云々の本記有りと言はず。然らば則ち丁氏録する所は琳琅書目載する所と異板なるに似たり。
(3) 郭邦述聖瘦山房藏書善本書目卷三十六家文選六十卷 六十冊嘉靖己酉袁聚刊本を載せて曰く

此書丁目記名卷後題字甚詳余書皆大半有之惟六十卷後袁聚總題失去又五十六卷後戊申孟夏十三日李清離一行亦被裁失而三十二卷後皇明嘉靖丙午夏雕 印篆文南征一行四十六卷後嘉靖丁未李夏晦日藏亭記一行皆爲丁所未見

と。郭録する所は明かに丁志記する所と異り亦琳琅書目載する所とも同じからず。蓋し琳琅書目載する所は袁氏の原刻本にして丁志郭目記する所は皆後人作偽重雕せる者なるべし。 書目袁氏原刻本に據りて作偽せる者甚だ多し。今琳琅書目を十及び同編卷十九に見ゆ。

今輯是堂大庫藏する所を檢するに昭明文選序を先に、次に李善上文選註表并國子監注教節文次に呂延祖上五臣集注文選表并上遺高力士宣口敕を掲げ次に目錄有り、毎

半葉十一行、行十八字、小注は行廿六字、上下單欄、左右雙邊白口、板心下隔刻工氏名有り、其の刻工氏名の内李善堂、唐鑑、陸致和、亦重刻茶庵本の板心に有り、每卷第一行「六家文選卷第幾」第二行「梁昭明太子撰」第三行「唐五臣注」第四行「崇賢館直學士李善注」と題す、而して昭明文選序の後に「此集精加校正、絕無舛誤、見在廣都縣北門裴宅印賣」の十一字、行を標し、卷六十尾「吳氏表氏善本新雕」の兩行本記有り、又卷六十末文選刻跋有り、曰く「余家藏書百年、見藏家宋刻本、昭明文選有五臣六臣李善本、巾箱白文小字、大字殆數十種、家有此本、甚稱精善、而注釋本以六家為優、因命工細雕、郭字體未少改易、刻始于嘉靖甲午歲、成于己酉、計十六載、而完用費浩繁、梓人艱集……」皇明嘉靖己酉春正月十六日吳郡汝南袁生聖題于嘉趣堂」と又

- 卷第廿尾「吳郡袁氏重雕宋刻廣都縣本于嘉趣堂嘉靖甲午孟春正月二十四日」行二
- 卷第卅尾「皇明嘉靖壬寅四月立夏日吳郡袁氏兩庚草堂善本雕」行二
- 卷第卅二尾「皇明嘉靖丙午夏臘四日南征」行一（天授環珠書目卷十に曰く、嘉靖丙午、袁氏刻也、此書也）
- 卷第卅三後題下「丙午春日」起第五行（高文忠公集諸生：晚秋謝湖之上自號謝湖）
- 卷第卅四尾「戊申三月初一日周撰十六日付刻」行一
- 卷第卅五尾「嘉靖戊申孟夏十一日周撰寫十五日李宗信刊」行二
- 卷第卅七尾「嘉靖二十五年增月十二日吳郡袁氏校刊」行一
- 卷第卅八尾「嘉靖丙午十月望日吳郡陸家雕」行一
- 卷第卅九尾「丙午十月望日重雕及涇」行一
- 卷第四十尾「此蜀郡廣都縣裴氏善本今重雕于汝郡袁氏之嘉趣堂嘉靖丙午春日」行二

「國朝改廣都縣為雙流縣屬成都府」行二
 卷第四十一前後大題下標に「載亭」の二字有り、後題の次に
 「付梓板十四片 陸板五片嘉靖丁未三月吳郡陸潮雕 羅模」行二
 卷第四十二尾「嘉靖丁未春二月 羅模」行一
 卷第四十三尾「丁未四月初三日 羅模」行一
 卷第四十四尾「丁未六月初八日李宗信雕」行一
 と標するの外、卷第四十六尾、卷第四十七尾、卷第四十八後題下、卷第四十九尾、卷第五十尾、卷第五十一尾、卷第五十二尾、卷第五十四尾、卷第五十六尾、卷第五十八尾、卷第五十九尾、皆標識有り。
 此の本恐らくは琳琅書目載する所と同板なるべし。内閣文庫東方文化學院京都研究所亦此の本に後編本なるに似たり。

袁氏本の據る所に就いては、朱彝尊宋本六家注文選跋に曰く、
 六家注文選六十卷宋崇寧五年鐫印至政和元年畢工墨光如漆紙質堅緻全書完好序尾謝云見在廣都縣北門裴宅印賣蓋宋時蜀府若是也……是書袁氏家……
 續守齋石文故事 蜀府宋本雕刻以行故傳世特多 張書亭藏卷五十二
 卷五十二の袁氏本に以て、然るに華德輝は書林清話卷三第七及び卷五第六に於て袁本を以て宋張之綱據校本、輯本に據れる者なりと稱し、郎園讀書志卷十五第一に於ては崇寧本に據れりと爲す、張之綱本は李善注前に在り五臣注後に在りて、袁本と同じからず、されば、張氏所記非なること明かなり、疑へり、但訪書に上下の文を定するに當り、字は「己」の字の誤なるに似たり。是を

以て朱氏説竟に易ふべからざるに似たり。但辨證書目後篇卷七第十三條記する所に依れば東坡此六
は同書長氏考訂諸大書本亦工部於中謂諸字西字身三時中校仲書工部云々に作る蓋月り就
は字本類多し。書目後篇に據りて作出せる者此の本果して朱氏の原刻本なりや否やを知ら
ずと雖も今姑く此の本に據りて袁本の輕傳れる所を攷へむと欲す。

卷四左太冲三都賦序「左太冲」の下に注此の本は「歐陽修晉書曰左思字太冲都邑
豪貴競相傳寫偏于海内」の八十一字に作る。第十三條然るに胡刻本四部叢刊本茶陵本
致異。淳野本俱に「偏于海内」の四字を「三都者劉備都益州張魯故作斯賦以辨衆
惑」の四十六字に作る。定刊本は注を今集注本卷八に檢するに袁本と全く同じ。

胡刻本以下皆向注を混入せしなり。

卷四四曲字建七故九流之寃。注應劭漢書宮室の二字當に儀曰見公侯九流者也。第
胡刻本「流」を「族」に作り四部叢刊本茶陵本淳野本俱に「流」に作る。今集注本八
四條を檢するに正に「流」に作りて此の本に同じく且つ正文の「族」亦「流」に作る。

表注案諸に曰く「勢音然らば李善本正文注如に「九流」に作れるを知るべく此の本
注「流」に作るは向ま善の舊を替するなり。

卷四十六陸士衡墓士賦序身命注小雅曰勛美也。第六條表

胡刻本四部叢刊本淳野本俱に「小雅」を「爾雅注」の三字に作る。胡氏攷異に曰
く「袁本爾作小無注字是也茶陵本亦誤衍」と。集注本第五條表正に「小雅曰勛美
也」に作りて袁本と同じ。引く所は廣話の文なり。

卷四十六王元長三月三日曲水詩序時乘飲位。注周易曰時乘六龍以御天。第十二條表

胡刻本四部叢刊本茶陵本引致異淳野本俱に此の注無し。初章鉅文遊篇語に曰く「下
句御氣引莊子則此當引易時乘六龍」と。今集注本卷九十一上を檢するに此の本に同
じ。

卷四十七王子淵聖主得賢臣頌春秋法五始之要。注善曰漢官解詁謂儒曰五始一曰元二

曰春云々初章表

胡刻本四部叢刊本茶陵本引致異淳野本俱に「善曰漢官解詁」の六字無し。集注本九
十三條表案ずるに此の本に同じ。無き者は奪せしなり。

此の類甚だ多し。今其の五例を示すに止む。

胡克家文選攷異據る所の袁本は果して何如の書なるかを知らずと雖も攷異引く所を
以て此の本に照らすに多く相合す。是を以て本論文中袁本を校するに當りては多く
攷異論ずる所を用ふ。蓋し前人の功を没せざらむことを欲すればなり。

(二) 張守節校本六家文選六十卷目錄一卷

昭明太子文選序を前にし次に李善上文選注表并せて國子監准敎節文次に呂延祥進集
注文選表并せて上連將軍高力士宣口敎次に目錄有り。

每卷第一行六家文選卷第幾第二行梁昭明太子新統撰第三行唐李善呂延祥劉良張銑李
周翰呂向註第四行皇宋紹興二年子固張守校正此の下一格皇刊と題す。

各半葉十行、行大字十八、小字廿六、板心に刻工氏名及び大字小字の字數を記し、其の墨終及び文邊幾卷の字體は則ち參差齊しからず。卷五十六末葉復題の次に「戊申孟夏十三日李清離」の一行有り。各卷首「陸氏子附」「項子京家珍藏」「克菴」等の印を押す。

張守字は子固、崇寧元年の進士、宋史卷三百七十五傳有り。然れども其の文邊刊行の事有りしや否やを知らず。又偏く書目を檢するも紹興二年刊本六家文邊有るを見ず。今此の本を以て袁本に照らすに概ね相合し、且其の卷五十六末葉記する所の戊申云々の十字亦袁本の有る所なれば、此の十字の筆致亦此の本恐らくは明の時坊估射利の徒袁本に就いて作偽して其の贗を售れる者なるべし。此の本既に商估の作偽に係るかと思ふべきも、而も亦間、袁本に比して優れる所有り。其の例左の如し。

卷二西京賦於前則終南太一注尚書曰終南博物漢書曰太一山古文以爲終南五經要義曰太一名終南山杜預武功縣此云終南太一此の字刪去せる者の如し山明矣
胡刻本「二山明矣」の四字を「不得爲一山明矣」の七字に作る。胡氏攷異に曰く「袁本茶陵本無不得爲一四字案二本有脫文今無以補之尤所校添未必闕同善舊也」云。

今此の注を細讀するに李善の意「漢書及び五經要義に據れば終南は即ち太一にして一山兩名有るに似たり」とも而も西京賦正に終南太一と連擧するを以て是れ二山

なること明かり」と謂ふなり。卷十西征賦「面終南而背雲陽」の注「漢書武功山有太一古文以爲終南此賦下云太一明嶺終南別山西京賦曰於前則終南太一二山明矣」と謂へる亦此の注と同意なり。

然らば則ち此の本「二山明矣」に作る者、疑も是にして袁本「山明矣」に作るは「山」の上「二」の字を奪せるなり。袁本「山明矣」に作る者、疑も是にして袁本「山明矣」に作るは「山」の上「二」の字を奪せるなり。袁本「山明矣」に作る者、疑も是にして袁本「山明矣」に作るは「山」の上「二」の字を奪せるなり。

卷五十沈休文思倖傳論帝弟宗室相繼屠戮注尚書曰天用剿絶其命孔安國曰剿截截絶謂滅之也袁本此の注の下「剿」の字を「勦」に作る。「勦」に作る者非「剿」に作る者は則ち李善の舊を採る。攷第二篇に詳なり。

右の二例を見れば此の本亦攷據に資するに足るを知らむ。是を以て本論文數、此の本を引用す。文中六家本と稱する者即ち是れなり。

(木) 四部叢刊本六臣注文選六十卷

此の本は上海涵芬樓藏宋刊本を影印せる者なりと謂はる。四部叢刊書録には其の據る所の宋刊を匡貞傲恒拒觀毅の諸字音關等と記するのみなれども予此の本に就いて調査せし所に據れば恒(考宗諱) 卷四十三第四葉書卷四十四第四葉書卷四十五第四葉書卷四十六第四葉書卷四十七第四葉書卷四十八第四葉書卷四十九第四葉書卷五十第四葉書等の字亦關等と記する。此の調査白木蓋に「然らば則ち涵芬樓本は南宋末の刻本なるを知るなり。而も此の本必ずしも完本に非ざるに似たり」

り。即ち卷州より卷州五に至る六卷は、其の筆蹟全く餘の卷に異るのみならず餘の卷は左欄外に篇題を標記せるに此の六卷は然らず餘の卷は注中空格を存すること無きに此の六卷空格甚だ多し。是れ此の六卷他本より采りて此の本に配せしなるべし。漢野圖書餘賦の所に余賦注中空格を存すること甚多し而して此の本の空格全く餘賦本に合はず此の本配する所は余賦本に合ふなり。此の本と宋寧州州學本六臣注文選に據れるに似たり。又詳に此の事を論じ。寧州州學本は既に五臣李善注本に據りて其の五臣注と李善注との敘次を互に易へたる者なるかと疑はるれば此の本に於ても亦之を證することを得。乃ち。

凡そ文選載す所の同一篇の正文に於て李善の注を施せる語句と五臣の注解せし語句とは必ずしも一致せず。是を以て、同一篇の正文なりとも、李善本夾注の位置と五臣本の夾注の位置とは必ずしも同一ならず。今幸にして、集注本卷第七十九、集注本は其の正文を李善本より采れば李善の舊式を存す。五臣注本卷廿條存し同一正文にして兩本俱に存する者六篇有れば、李善の舊式を存す李善の舊式を以て、李善本夾注の舊式五臣本夾注の舊式皆之を知るべし。然り而して此の本既に李善注を先にし五臣注を後にするを以て其の卷四十の六篇即ち集注本卷に十九五臣本卷に俱に存存する所の六篇の夾注の位置當に集注本と合すべきに、其の實然らずして卻て五臣本と合し、又其の卷二西京賦卷四十五答客難解嘲の介節亦唐鈔李善單注本と合せず。此れ疑ふべきの一なり。

李善單注本に決して正文中に音釋を夾注せず、五臣注本は則ち正文中に音釋を夾注すること、唐鈔李善單注本並鈔五臣注本殘卷に據りて明かなり。然るに此の本正文中に音釋を夾注して多く五臣の言と合す。此れ疑ふべきの二なり。

に非ざるを以て此の本の例に據れば、此の注當に「善曰如淳曰地理志云杜倉精曰一尉官名也」に作るべきなり。然るに今如淳以下の九字を向注に系けたるは、是れ本五臣李善注本が五臣注を第一にし李善の采れる舊注を第二にし、然る後に善曰の二字を以て李善の自注を記し起す例なるに、是李善の采る此の條偶々李善の自注無く隔つて「善曰」の二字無かりしが爲に、此の本誤りて如淳以下九字をも向注に屬すと爲し直に五臣李善注本の舊を襲へるならむ。此れ疑ふべきの四なり。

卷五十六陸佐公石關銘「前賓四營却背九房北通二轍南濤五方」の李注此の本は「然路羅門門北故云却背也」の句に終り又向注に「周禮曰應門二轍漢書曰秦地五方雜錯此五方謂吳之五方也」の文有り。義甘然るに章本六家本は李注「故云却背也」の下「後注同」の三字有り。而して胡克家曰く「袁本凡云後注同者皆祥善入五臣然則此後李注の故云却背當有周禮曰應門二轍漢書曰秦地五方雜錯然此五方謂吳之五方也二十

六字今其所載向注中也」と。今此の本は李善を前にし五臣を後にしなから唐禮以下の廿六字惟向注中に在りて李注には之れ無く而も李注末「後注同」の三字亦有る無し。是れ此の本は五臣李善本に據りて其の五臣と李善との鈔次を互に易へ且つ李注末の「後注同」の三字を刪削せしなるべし。此れ疑ふべきの五なり。

右の諸點に據りて之を效ふるに此の本勅する所の李善注は決して李善甲注本より劣れるには非ざるやし。然れども此の本の李注を以て較長と爲すべき者數なからず。左に其の數例を擧げむ。

リ。即ち卷州より卷州五に至る六卷は、其の筆蹟全く餘の卷に異るのみならず、餘の卷は、左欄外に篇題を標記せるに、此の六卷は然らず。餘の卷は注中空格を存すること無きに、此の六卷は空格甚だ多し。是れ此の六卷、佗本より采りて此の本に配せしなるべし。淳野書院蔵する所の本、注中空格を存すること甚だ多し。而して此の本の空格全く淳野本に合はば、然らば此の本配する所は、淳野本なり。此の本、宋・魏州學本六臣注文選に據ねるに似たり。予別に「版本文獻の研究」二篇を呈し、而して魏州學本は既に五臣、李善注本に據りて、其の五臣注と李善注との銜欠を互に易へたる者なるかと疑はるれば、此の本に於ても亦之を證すること可なり。

卷廿八陸士衡散詩三首、此の本は「流離新友思」の首を以て第二に列す。集注本校語に據れば、此の首を第二に列するは音決本、五家本、陸善經本なり。此れ疑ふべきの三ナリ。

卷四十五楊子雲解嘲「東南一尉」の注、此の本は「向曰一尉官名也如淳曰地理志云杜會稽」に作る。然れ此の如淳以下の九字は本李善が漢書の舊注を采れるにて是れ向注

に非ざるを以て、此の本の例に據れば、此の注當に「善曰如淳曰地理志云杜會稽向曰一尉官名也」に作るべきなり。然るに今如淳以下の九字を向注に系けたるは、是れ本五臣李善注本が、五臣注を第一にし、李善の采れる舊注を第二にし、然る後に善曰の二字を以て李善の自注を記し起す例なるに、是れ本六臣の如し。此の條偶々李善の自注無く随つて「善曰」の二字無かりしが、爲に此の本誤りて如淳以下の九字をも向注に屬すと爲し、直に五臣李善注本の舊を襲へるならむ。此れ疑ふべきの四ナリ。

卷五十六陸佐公石關銘「前審四管却背九房北通二轍南達五方」の李注、此の本は「然路障門北故云却背也」の句に終り、又向注に「周禮曰應門二轍漢書曰秦地五方雖錯此五方謂受之五方也」の文有り。然るに、音本六臣本は李注「故云却背也」の下「後注同」の三字有り。而して胡克実曰く「音本凡云後注同者皆科善入五臣然則此後注の後注也。當有周禮曰應門二轍漢書曰秦地五方雖錯然此五方謂受之五方也二十六字今在其所載向注中也」と。今此の本は李善を前にし五臣を後にし、ながら周禮曰以下の十六字、惟向注中に在りて、李注には之れ無く、而も李注末「後注同」の三字、亦有る無し。是れ此の本は五臣李善本に據りて、其の五臣と李善との銜欠を互に易へ、且の李注末の「後注同」の三字を刪削せしむるべし。此れ疑ふべきの五ナリ。右の諸點に據りて之を攷ふるに、此の本載する所の李善注は決して李善單注本より采れるには非ざるべし。然れども、此の本の李注を以て較、長と爲すべき者、尠ならず。左に其の數例を擧げむ。

卷十四班固通賦巨滔天而戾夏兮 注善曰尚書曰象恭滔天 第十四卷裏

胡刻本袁本六家本此の注「象」の上「尚書曰」の三字無く茶陵本に據る。胡氏攷異「尚書曰」の三字有るも而も「善曰」の二字無くして之を舊注に系く。此の本「善曰」「尚書曰」有る者歟も是なり。

卷卅謝靈運齊中諸書詩賦疾豐嚴錄 注國語曼施曰我教茲暇豫之事君書昭曰昭閑也舊樂也 第九卷裏

胡刻本袁本此の注「君」の下「幸之」の二字有り。六家本今集注本卷五十九上を檢するに「幸之」の二字無く曹子建七敎注引く所の國語集注本及び今の板本皆亦此の二字無し。此の二字無くし胡克家云ふ此の注「幸之」の二字有る者は衍せしのみと。卷卅謝靈運始出尚書省詩賦卷如賢 注毛詩曰詠詩茶苦其甘如賢 第十五卷裏

胡刻本袁本宗陵本 袁宗陵本六家本此の注「謂」を「爲」に作る。胡克家曰「爲」當作謂各本皆誤」と。今集注本卷五十九下を檢するに正に「謂」に作りて此の本に合し今本毛詩台風亦「謂」に作る。

卷四十六魏延年三月三日曲水詩序施命發號必酌之於故實 注尚書穆王曰發號施令用有不編 第九卷裏

胡刻本袁本六家本此の注「穆」の字を「武」に作る。今集注本卷九十一上を檢するに正に「穆」に作りて此の本と合し又尚書四命篇を攷ふるに當に「穆」に作るべく當に「武」に作るべからざるなり。

(ハ) 茶陵陳仁子刊增補六臣註文選六十卷 淺野圖 書館藏

每半葉十行行十八字小注雙行行二十三字白口單邊板心下隔刻工人氏名有り。目錄の前に「諸儒謬論 古迂陳仁子輯」と題して諸儒の文選に關する記事十三條を擧げ其の末三字を色して「文選一編皆纂輯秦漢魏晉文選中間去取或不免涉諸君子議論謹錄卷首因舉其意收拾遺漏者亦起秦漢迄昭明所選之時得四十卷刊行名文選補遺云大德已刻茶陵古迂陳仁子書」と識す。識語の後「茶陵東山陳氏古迂書院刊行」の長方木記雙行有り。

目錄の首行に增補六臣註文選目錄と題し次行に梁昭明太子蕭統撰第三行に唐李善

注各臣註第四行に茶陵前進士陳仁子校補と書す。各卷前後の標題は或は大臣註文選卷第幾に作り或は增補六臣註文選卷第幾に作りて必ずしも齊一ならざるも增補の二字を冠する者多きに居る。而して正卷に於ては陳仁子校補の一行は之れ無し。

陳仁子字は同甫四庫總目提要 古迂と號す。茶陵の人宋末薦舉に廢りしも 宋に於て元にはへず。博學好古別墅を東山に營み人東山の陳氏と稱す。博學好古別墅を東山に營み人東山の陳氏と稱す。博學好古別墅を東山に營み人東山の陳氏と稱す。博學好古別墅を東山に營み人東山の陳氏と稱す。

清學部圖書館善本書目集部總集類に曰く 增補六臣註文選六十卷 宋陳仁子校補宋刊本每半葉十行行十八字小十九字高七

鄧正閻羣碧樓善本書錄卷一に曰く

右二通床板と稱せらるるも二本皆題して「前進士」と言へば其の

梨德輝郎園讀書志卷十五に曰く

其の餘記する所並に
圖書館蔵本と合す

右一通元板

清學部圖書館善本書目集部に曰く

增補大臣注文選
行欽同前
宋尹奉增補大臣注文選玄指可
此係明翻本

又丁丙善本書室藏書志卷卅八增補六臣注文選六十卷明綸蒙萊陳氏刊本を載す。丁記する所に據れば其の本諸儒諸論一卷陳仁子譚語茶陵東山陳氏古迂書院刊行の本記有

ること淺野本と同じきを知るも、其餘の異同詳ならず。

右二通明板

今、淺野本を以て右の諸書目記する所に照らすに編する所の宋板とは固より相合せず又葉志載する所の元刻本、學部書目載する所の明翻本とも其の小字雙行の字數に於て相同じからず。然らば則ち淺野本は自ら是れ又一本なるべし。而して、淺野本板心に於て見ゆる刻工、漆喰填隙は亦嘉靖間袁氏刊せし所の六家文選の板心に見え、嘉靖開李元陽重刊列國本十三經王疏板心にも又胡克家文選攷異袁氏所屬城の版廣に修改茶陵本某に作ると謂へる者、香雪齋香雪齋顧夢星著述したる古詩十九首集注卷廿四此の本皆胡氏所謂の修改本と合すれば、淺野本恐らくは嘉靖頃の修改本なるべし。

嘉靖頃の修改本なるべし

今、淺野本に據て陳氏刊本の由來を推すに、其の本蓋し四部叢刊本と同種の本に出づ。乃ち(1)淺野本と四部叢刊本とは行款全く同じく、(2)李注引文複出の例兩本幾んど皆相合し、(3)前項四部叢刊本の條に於て述べたる彼の本の特質は此の本亦之を備ふる等其の證なり。第一葉表篇題を書して直に「兩都賦序」の四字に作るに四部叢刊本は先づ「班孟堅兩都賦二首」の八字を題し、一行を隔てて「兩都賦序」と題す。

此の本は李善注中發凡起例の處皆佐の文と區別せざるに四部叢刊本は皆眉線を施して之を謝す。

卷一 西都賦 北彌朔方而亘長樂

四部叢刊本「方言」の下「日」の字有り、「通」の上「古字」の二字有り

(二) 舊鈔本

(イ) 李善單注本文選殘卷二種 古綴本

羅振玉古綴善殘卷六收むる所の敦煌出土文選殘卷四種の内、李善單注本二種有り。甲卷は、張平子西京賦三百餘行を存して、末行に「文選卷第二」の五字を題し、卷尾に「永隆二年二月十九日弘濟寺寫」の十二字を識す。高宗永隆元年西紀六百一十八年は、顯慶三年六百五十八年李善文選注を上れるの後廿二年に當り、唐會要卷六、後撰の條、李善文選注を上れるは、顯慶六年六百五十六年李善卒する唐書上に先だつこと九年なり。乙卷は、東方曼倩客難「不可勝數」より、楊子雲解嘲の「或釋褐而傳」までの約百廿行を存す。文中「虎」「世」「治」の諸字皆缺筆し、「旦」の字は則ち缺筆せず。緯編以て高宗の時の内府本かと疑へり。古文

此の二種悉らくは、現存李善注文選中の最古の本とるべく、據つて以て今本の誤を正すべき者甚だ多し。甲卷と今本との同異に就いては、既に高步瀛文選李注義疏卷二に詳攷有れば、今復た述べず。乙卷に就いては、未だ詳説せる者を見ざるを以て、今胡刻本・足利本・袁本六家本・四部叢刊本・武野本、皆非にして、惟此の本のみ是なる例數條を左に記せむ。緯編に此の甲乙兩卷の校勘記を附せし由、其の異文に記されたるものも未だ之を見ず。

谷客難鞋纒垂_五所以塞臆_板
力懸之於是_以當兩月所以塞臆也_{劉兆毅引傳注曰黃色也土斗反}

板本注「駐蹕」の上に「薛綜東京賦注曰」の七字有り之於是以當兩耳所以響肥世」の十二字を「冠兩邊當耳不欲聞不急之言也」の十三字に作る。又劉兆以下の十四字無し。

案するに「答客難」の正文「所以聖賢」の句有れば其の注亦「……所以聖賢也」に作る者を以て是と爲す。蓋し李善自ら正文を釋せしなり。然るに其の釋薛綜東京賦注と相似たるを以て、後人等に蒙迷して今本の如く作り且劉兆以下の十四字を刪去せしなり。

答客難鄭會其之下齊注漢書鄭會其謂上曰臣請說齊王……趙雍會其能歷下守戰備二

板本「臣」の下「清」の字無く「通」の下「健倉其」の三字無く「戦」の下「之」の字有り。今漢書郡倉其傳を檢するに尙此の本引く所と合す。

解嘲四分五割則爲韓國注晉灼曰此直道其分離之意耳鄒陽傳云齊北四分五裂秦之國也四分則交午而裂如田字也第五篇表

版本注「四分則文午」以下十一字無し。漢書楊雄傳注「魯灼を引いて此の十字」字齊
 又云「文午有り。漢書楊雄傳注「魯灼を引いて此の十字」字齊
 のみ。

解頤徽以紉墨

板本注「音」を「東」に作る。王念孫、宋祁引く所の蕭說音義に據りて、今本文送注の「東」を改めて「音」に作る。二讀以同聲の條、是なり。此の本未だ誤らず。

解嘲二老歸而燭燭注孟子曰伯夷避紂居北海之濱聞文王作興曰盍歸乎來吾聞西伯善養老者太公避紂居東海之濱聞文王作興曰盍歸乎來吾聞西伯善養老者二老者天下之大

板本注太公よ善善者者までの廿七字無し。梁氏疏證に云ふ「林先生曰善注二老七疑案只引伯夷而遺太公益有脫文」七疑案と。今此の本は則ち文完し。李周論此の文に注して曰く「李善引伯夷與太公爲二老甚誤」と。疑ふに於ては論見る所の善注、尙正に此の廿七字有りしなり。

此の本「作」に作り、本「作」に作る、また其の意同有るに明かに異なる時は、

解朝樂穀出而無懼注史記曰樂穀伐曹破之燕昭王死子立爲燕惠王……召樂毅殺樂毅畏
許遂西降趙惠王恐趙用樂毅以伐燕第六篇

今の各本「召」の下二「奉」の字皆之れ棄く「降」を「弄」に作る。又四部叢刊本「懋王恐」を「懋太恐」に作り四部叢刊本淺野本は「伐燕」の上「以」の字無し。然るに史記樂毅傳此の本と正に合す。

此の二本最も善く李善單注本の舊を保てりと雖も惜しい疵有する所二本を合して總に四百數十行に過ぎず。之を單注爲卷尙二十餘卷を有するに比ぶれば其の量に於て彼に及ばざること甚だ甚しと謂はざるべからず。

き者量た多きを以てなり。
予自ら端らず文選集注本文及び李善注校勘記を擬し以て板本の謬誤を訂正に走有
り既に其の若干巻編略成れり。今中に就き胡刻本・定刊本・袁本・六家本・四部書刊本・文野
本皆誤りて而を集注本欄り誤らずと思はるる例若干條を摘出し以て集注本の價便を
彷彿せしめむと欲す。

(甲)此の本に據りて板本篇題・類目の誤を正すべき例

(1)此の本每巻首其の巻内の篇目を列する例有るに巻第八卷首惟左太冲蜀都賦一首
を記するのみにて三都賦序を記せず。又巻第八内蜀都賦題下及び巻第九内吳都賦
題下の序は五部かにせず。
集注本卷第八下其
の序は五部かにせず。
是れ其の據る所の李善本本三都賦序を以て獨自篇を爲さしめざりしなり。蓋し序
は賦の小引なれば宜しく自ら一篇を爲すべからず。若し序一首獨自一篇を爲すべ
くんば當に之を序類に收むること皇南士安三都賦序に於けるが如くなるべきなり。
上野氏集文選巻第一下自記蜀都賦三都序に作り又篇題は蜀都賦一首序都
賦一首に作りて蜀都賦序の下のみ「序」二字無し。是れ本序を以て賦の小引二篇せしなり。
然るに今の板本篇第四卷左太冲三都賦序一首獨自篇を爲して蜀都賦以下と相對立
し胡刻本總目・子目六臣注諸本總目・子目無し。皆亦同じ。板本非なり。
(2)卷第七十一類目「策秀才文」の一字に作る。
策秀才文は策の俗字。胡刻本定刊本皆誤りて策秀才文と。策秀才文有り。今の板本篇
第七十六卷「文」の一字に作る。



案するに文選類目理當に「文」と名づくる者有るべからず。板本「文」の一字に作る
は蓋し其の前巻の類目「令」「敘」「表」等皆一字なるに涉りて「策秀才」の三字を誤
り奪せしなるべし。郡齋讀書志卷廿李善注文選六十卷の條に文選の類目を擧げて
正に「策秀才文」に作る。讀書志卷廿李善注文選六十卷の條に文選の類目を擧げて
正に「策秀才文」に作る。今の文選と改すしむ相同じなり。是れ見る所の李善本尚誤らざ
りしなり。

(乙)此の本に據りて板本正文の誤を正すべき例

(1)誤字奪字を正すべき例

(1)卷第七十三下曹子建求自試表使名臣史筆事列朝策。第三卷表(景印本の誤
字を記す。下此に改す)
板本卷廿七「策」を「策」に作る。案するに板本「策」の字と形相似て誤れ
るなり。總志卷十九
魏志「策」に作りて尚誤らず。五臣書注に曰く「名書史筆列朝
廷所策」と。是れ五臣本既に「策」に作りしなり。

(2)卷第八十五上嵇叔夜與山巨源絕交書吾以不如嗣宗之資而有優弛之關。(子孫書
第二卷)

今此の下の本善注を據するに曰く「嵇叔夜也」と。又孰に曰く「言我無嗣宗口
(胡刻本)吾不如嗣宗之資而有優弛之關
(定刊本)吾不如嗣宗之資而有優弛之關
(袁本)吾不如嗣宗之資而有優弛之關
(四部本)吾不如嗣宗之資而有優弛之關
(六家本)吾不如嗣宗之資而有優弛之關
(策秀才文)吾不如嗣宗之資而有優弛之關

不論人之誤……「寧」也」と。是れ其の正文當に「寧」に作るべくして當に「寧」に作るべからざるなり。板本「寧」に作る者は「寧」字形相近くして誤れるなり。此の書上下の文を案するに「吾以」に作り「寧」に作りて文證頗も順。集注本の是なること知るべし。晉書卷四十八亦正に「吾以」に作り又「寧」に作りて集注本と合す。

(3) 卷第百二上王子淵四子講義論今刺史歸部以流遷舒化以揚君第十八葉板本卷五十一「君」を「吾」に作る。此の論上下の文を案するに「舒化以揚君」は上文「揚君使美」及び「何必歌咏詩賦可以揚君」と相應するを以て當に「舒化以揚君」に作るべく當に「揚君」に作るべからざるなり。陸善經注に曰く「舒布風化以揚揚君美」と。是れ陸氏本尚誤らざるなり。觀智院本文文選東方文選化學東方文選景本に據る亦正に「揚君」に作る。板本は「君」字形相似て誤れるなり。

(4) 卷百十三上并馬習誅序今本并馬二字互に例す。其の本篇題及び注中引く所並并馬。晉故并馬守關中侯扶風馬君辛第十八板本卷五十七「故」の下「并」の字無し。六臣注本按陸無し。非なり。

(5) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(6) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(7) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(8) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(9) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(10) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(11) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(12) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(13) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(14) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(15) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(16) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(17) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(18) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(19) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(20) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(21) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(22) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(23) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(24) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(25) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(26) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(27) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(28) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(29) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(30) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

(31) 卷第五十六陸士衡祝歌詩悲風賦行軌傾雲結流第四十葉裏板本改の字を正すべし例

引するの要有らむや。和るべし。集注本「九原」に作るの是なるを。晉語に曰く、九原、大子、復、故、向、也、也。今傳本、反、其、文、爲、九、原、に作りて、誤、九、原、に作りて、其の字、不、く、所、は、言、語、に、「九原」に作る。然らば則ち板本「九京」に作る者は是れ後人注「京當尙原」を以て誤り解して李善の校語なりと爲し。韓紹休文選等集注六、其、京、尙、尙、原、を以て、李、公、安、に、正、文、の、京、を改めて、「原」に作りしのみ。善の語と爲す。是を以て其の立、尙、尙、原、と誤りて、六臣注諸本の校語及、其、注、に、據、れ、は、五、臣、本、自、ら、九、原、に作りて、五、臣、本、を和る。李善本五臣本、本、亦、く、就、く、れ、る、に、非、ず。李善本の舊注、に、即て、五、臣、本、に、非、ず。此の禮記鄭注「京當尙原」は亦亦休文冬節後至丞相弟詣世子車中詩の注に引がる。集注本、亦、未、然るに板本は其の注上文引く所の禮記釋文「九京」を爰に改めて「九原」に作り、且つ李善連引せし所の鄭注「京當尙原」の四字を刪去す。是れ亦後人「京當尙原」を以て李善の校語なりと誤解せしに因るの失なり。

(3) 卷第八十八陳孔璋檄吳將校部曲文氣高志遠似若無前。第十、葉表板本卷四十四「前」を「敵」に作る。案するに李善此の句に注して「漢書元后詔曰運獨見之明奮無前之威」を引けば其の正文當に「無前」の語有るべく尙に「無敵」の語有るべからざるなり。集注案詔に曰く「五家本前尙敵」と。又齊注に曰く「自以爲無敵矣」と。是れ五家本既に「無敵」に作りしなり。然らば板本は五臣本によりて李善の舊を改めしなり。

(ハ) 行文を正すべき例

(1) 卷第九左太冲吳郡賦秀麗而論抑非大人之所壯觀也第六篇系胡刻本兩魄而論都抑非大人之所壯觀也

〔定利本〕	論都邑	〇
〔賣本〕	論都邑	〇
〔四部本〕	論都邑	〇
〔湯野本〕	論都邑	〇

胡刻本「論」の「都」の字有り、四部叢刊本、淺野本「都邑」の二字に作りて「善本無邑字」と校注し、足利本、素本亦「都邑」に作りて而も校語無し。案ずるに胡氏攷異に曰く、「何秋緒造檢堂朱云都字衍涉下論都而誤今案所說是也旁處而論與上篇觀而等偶同各四字不當偏贅一字」と。胡說从ふべし。此の本「論」の一字に作る者氣も是なり。此の本案語に曰く、「五家本論下有都字」と。然らば「都」の字を行せるは五家本に始まるに似たり。夫の「都邑」に作る者の如きは則ち板中の訛なる者に屬す。

王念孫此の「郡」の字有る者を是とし且つ劉注「言羣蠻蜀地亦是曲僻之土」讀本に
古本有るの文に據りて上句「握轡而筭」の下亦當に「地」の字有るべしと謂へるは
舊書雖甚だ誤る。此の賦の正文を細讀するに「握轡而筭」「旁魄而論」の下皆
復た鉅字有るべきに非ず。此は「解」の意に非ず。「論」は「編」の意に非ず。加之王據る所の劉注
是なる者は是れ本後人行閒に記せし語にして劉逵の原注に非ざるなり。に異や。定刊本
是なる者は是れ本後人行閒に記せし語にして劉逵の原注に非ざるなり。に異や。定刊本

(2) 卷第七十九任彦昇琴彈劉整一首は板本と甚だ詳略有り。即ち「分前奴教子出伯第十五」の下板本は「血已入衆云々」の卅四字多く此の字數劉刻本に據る。六注は「整」諸本小異下此に仿示。「便打息送」第十七の下板本は「整及母并奴婢等六人……」如法所編整郎主」の

(2) 卷第七十九任彦昇琴彈劉整一首は板本と甚だ詳略有り。即ち「分前奴教子出伯第十五」の下板本は「血已入衆云々」の廿四字多く、此の字數劉整本に據る。六注は「整」諸本小異下下に仿示。「便打息遠」第十七の下板本は「整及母并奴婢等六人……」如法所編整即主」の

六百九十六字多く、「悉以法制從事」^{「悉」}の下板本は、「婢采香云々」の卅五字多し。而して此の本の案語に據れば、右の卅四字は鈔及び五家本に有り、六百九十六字と卅五字とは前に五家本に有りと云ふ。^{「案語」とは「婢采香」の鈔及び五家本の文を有する所と云ふ}

又板本のみ之れ有る所の前後七百六十五字の下を檢するに、李善の注解一も有る無し。是れ或は其の文體の性質上注解を要せざりしに因るかと疑はれざるに非ざるも、而も前後約八百字に對して李善全く注せずとは放ふべからず。又板本「如法所稱整卽主」の下李善注有りて曰く「昭明刪此文太略故詳引之今與彈相應也」と。此の「詳引之」の三字を跋するに是れ李善昭明の刪略せし所を注中に援引せりとの謂にして是れ正文中に插入せりとの謂には非ざるなり。然らば則ち集注本之れ無くして、而も板本のみ有る所は皆後人の増添に係ること容に疑ふべからざるなり。^{此の昭明刪此文太略昭明刪此文太略云々の條無し。然らば昭明刪せし所を注中に引き且知るべからず。向れにせば李善の原本を跋する所の彈文は、是の原本に於いて甚だ略なりしことは疑ふべからざるなり。}

三條家藏善鈔五臣注文選^{唐本文化館書}「並已入衆不分遺」の卅二字^{謂到本の此の字に誤して二字少し}

に「」を施して與本之れ無きことを示し、又足利本文選「整便打息遺」の「遺」の字の下右角に「已下家本无之」と朱書し、「如法所稱整卽主」の「主」の字の下右角に「已下家本有之」と朱書し、其の家本は「整及母姪婢等六人」如法所稱整卽主」の約七百字之れ無きことを示せり。三條家本及び足利本の校者何人なるかを知らずと雖も、其の據つて以て攷せし所の本は較集注本に近かりしを知

三條家本校する所の字は今の板本の仕ては幾多字を定刻本校者轉る所の字は今の板本よりほ
る。約二百字少かりしと雖も、而も板本に於ては二百餘字を定刻本校者轉る所の字は今の板本よりほ
然れは今の板本とする所の字は今の板本に於ては二百餘字を定刻本校者轉る所の字は今の板本よりほ
られに非ずして恐らくは加へたにせられたるものなるべし。
板本姜澤劉整文李善の舊を失せること右述の如し。然るに六臣注諸本は此の彈
文中李善本本之れ有るべからざる所に於てすら、猶且李善本と五臣本との異同を
収せり。凡そ六臣注諸本校語の信ずべからざるること此の一例に據りて之を知
るべし。蓋し六臣注本編者引く所の李善本五臣本する者は是れ決して善本に非
ず、轉寫の訛誤後人の竄改増添甚だ多き本なりしなり。
今此の彈文板本に於ては前後約八百字を削し、而して其の下李善の注解一も有る
べき事實に據りて之を推すに、夫の卷第四十五載する所の孔安國尚書序杜元凱春
林左氏傳序の若きも李善全く注を施さざれば、彼の二篇亦或は後人の増加せし所
に非ざるかと疑はる。彼の二篇の文章略同文意序に於て述べる竊端未探の方針と合せざるに似
たに非ざるかと疑はる。此の點より見ても亦本校の疑はるる所は後人の増加せしものと疑はる。然れ
ば梁章鉅「是時正義已頒故未於此篇加撰注」及後春秋左氏傳序兩篇皆不復注し、
と謂へるも恐らくは是れ臆の說からざるべし。
ひ、卷八十五下趙鼎鼎與岳茂育書斯所以情憫於長衢也、
の下に「按書而歎息」云々の語あり。胡克家校書に曰く、宋晉書無按書而歎息陳云
據注則此五字行引く所見は陳云云、
書而歎息者故添六字以罪善二本、
而所見仍不誤、
之不安、
輒取五字於是善以五臣亂之矣、
當加訂正」と。今此の本

正に按書云々の五字無し。是れ李善の舊を存するなり。但此の本佗本との同異を校するを常に此の文五字按書云々有りと言はず。然らば此の數字を衍する者似ずしも五臣本より始まるに非ざるに似たり。

(丙)此の本に據りて板本李注の誤を正すべき例

(イ)誤字を正すべき例

(1) 卷第五十九上虞子諱時卿叔卿字曼卿 注楚詞曰叔卿曼卿之紛々 第二葉裏 板本卷卅四「叔」を「敦」に作る。案するに板本の如くは文證通すべからず。是れ「敦」「叔」字形相近くして板本誤れるなり。板本卷廿二王康琚反招隱詩注卷廿三阮嗣宗詠懷詩注卷廿四曹子建贈丁儀詩注卷廿九張景陽雜詩注引く所皆尚誤らず。今本楚辭九章卷回風亦正に「敦」に作る。
(2) 卷第七十一王元長永明九年第秀才文用能敷化一時 注謝承後漢書 板本卷卅六皆「郡」を「都」に作る。案するに板本卷五十九沈休文齊故安陸昭王碑文注謝承後漢書を引いて「郡」に作り集注本此の注と合す。又謝承後漢書陸修傳に曰く「南陽陸修伯潁川太守以族賢擢爲伯潁以光國朝」と。說文陸修伯潁此の注「郡」に作る者は是なり。板本「都」に作るは字似て誤留せしなり。王元長文注及の沈休文注引く所を采りて而て「郡」に作るは非なり。

(3) 卷第七十三上曹子建求自試表成亮商屯而固他誓 注史記曰成王車伐淮夷踐奄 第十二葉裏

板本卷卅七皆「踐」を「徐」に作る。案するに注引く所の史記は周本紀の文なり。今の史記「踐奄」に作りて此の本の注引く所と異れども段玉裁は既に今本史記の「踐」の字は「踐」の誤にらむかと疑ひ、古文尚書撰異と集解又尚書大傳亦正に「踐奄」に作れば、口部踐四聲韻譜本、韻部第二葉裏に據る。尚書成王政事、成王史記の舊を存すと謂ふべし。然らば則ち此の本に據りて今本文選の誤を正すべく、亦以て今本史記の誤を正すべし。板本文選「徐奄」に作る者は注上文引く所の「孔安國曰淮夷徐奄之屬」に涉りて誤れるならむ。

(4) 卷第七十九任青昇奏彈曹景宗自頂至踵功歸造化 注孟子曰墨子兼愛摩頂放踵 踵趾趾曰放至也 第九葉裏

板本卷四十俱に二「放」字皆「致」に作る。案するに板本卷五十五劉孝標廣絕交論「摩頂至踵」の注孟子此の文及び趙岐注を引いて皆亦「放」に作り集注本此の注と正に合す。是れ李善據る所の趙注本五字本より「放」に作りて「致」に作らざりしなり。然らば則ち今本此の注に「致」の字は「致」の字は「致」字形相似て轉寫誤れるか否らずんば後人「致」に作れる孟子 今本文選卷廿九文選注王上書注孟 子此の文及び劉岐注を引いて「致」に作る。に據りて改めしなり。因縁記開卷八文選注引孟子曰墨子兼愛摩頂放踵趾趾曰放至也」と。墨子兼愛の「致」の中、當時此の二字を誤れることある。此の誤る所は任青昇文の注なるべし。然れども王應麟集解の文選注本に此の誤下の註注著し誤れり。

習瀾四書攷異孟子上に「江書任彈兩注所引致於踴者疑當時劉注本編如屈任彈下趙岐二字當本爲劉攽傳寫者遺譌然爾」と。言ひ又焦循今本文選劉孝標文注引く所と任育昇文注引く所と互に異れるに據りて「可見趙以注本唐世已有其二」孟子正義と言へる皆非なり。

(5) 卷第九十三劉伯倫酒德頌有責什公子縮紳處士

司馬相如封禪書曰因雜繒紳

板本卷四十七俱に正文及び注引封禪書の「紳」の字を皆「指」に作る。胡氏攷異注引封禪書の文を校して曰く「案此有誤也下引如淳當に臣讀に作るべし曰給赤白色不得此作指與之不相應疑正文自爲編故不取指也

負義否則當有指指異同之注而未全各本皆同無以訂之」と。今此の本正文及び注引封禪書俱に正に「紳」に作れば板本「指」に作る者の非なること甚だ顯明。

板本卷五十范蔚宗後漢書二十八將傳論注封禪書及び臣瓚注を引いて尚誤読らず。

此の注直に封禪書を引いて漢書を引かざれば其の引は文意に據るなり。然らば文意に據る所の封禪書（今本篇題は封禪文）に作り注内引く所多く封禪書に作る本「紳」に作りなりと本編に作る赤崎宣の誤なり。

本書文を正すべき例

又(1)卷第五十六陸士衡撰詩翼之飛輕軒轅之策索騏
曰驚波四駱載駝駝之華世四葉裏

板本卷廿八皆「四旗」より「駕彼」までの十字無し。胡克蒙攷異に曰く「陳云衆其當作駕彼是也各本皆誤」と。定するに「衆其」「駕彼」字形相洵らざれば

是れ板本の謄寫に非ず。蓋し李善本、小雅桑扈「乘其四旗云々」の二句を引いて正文「翼翼」に注し、又四牡の「駕彼四駟云々」の二句を引いて正文「驥驥」に注せしむ。板本法「其」の下に十字を奪せしのみ。

②卷第五十九下謝玄暉始出尚書詩歡娛講兄弟

板本善世皆正文の「娛」を「虞」に作り注「孟子曰驩虞如也」の七字無し。案ずる

に李善孟子を引いて詩正文「歡娛」に注す。而も語は「娛」に作り注引孟子は則

ち「虚」に作りし加、故に注中又一「虚與妖通」の文有るなり。板本卷廿一「張景陽詩」

史記「朝鮮名號」の注亦「孟子曰霸者之民無成也」を引き且「姓與成」

「禮」の上尊文有ること應に疑ふべからざるなり。轉寫定丁注の孟子曰云々を纂す政に
「文」の字を改めて「禮」とし、

引卷第五十九下謝玄暉和徐都曹詩風光草際浮
注楚詞曰光風轉蕙汜崇蘭王逸曰

光園謂雨已日出而園草木有光色也年廿八
髮衰

板本卷世「雨已」の二字無し。字ずるに、板本卷世三招魂王注正に「雨已」の二字

有りて集注本此の注と合す。此の二字有りて文読乃ち完し。無き者は舊せしのみ。

（牛）卷第六十二江文通雜體詩雲天亦遠亮
莊子曰夫道莫帝得之以登雲天

板本卷上一篇「夫道」の二字無く文語完かにす。是亦誤りて此の二字を差せしむり。任孝大宰師論王に社の二字有り。

五卷第八十五下趙景福與嵇茂齊書曰導西山則馬首靡託注漢書楊雄反騷曰何恐

日薄於西山 第十九卷

板本卷四十三「畜」の上「何」の字無し。宋するに藝文類聚卷五十六賦類引く所の楊雄反駁「何怨日薄於西山」に作りて正に「何」の字有り集注本と合す。今反駁上下の文を攷るに其の文證に於ても其の句法に於ても此の「何」の字有る者を是と爲す。板本此の字を奪せしなり。今の漢書楊雄傳本「何」の字無し。宋祁曰く「今上句末の字下疑有何字」と。宋說是なり。
(6) 卷第九十三陸士衡漢高祖功臣頌平陽樂道 注論語曰晉而樂道 第六十二卷
板本卷四十七俱に「道」の字無し。梁章鉅曰く「宋樂下當有道字今皇侃本高麗本俱有道字唐石經道字廟漆本書幽憤詩注及史記仲尼弟子列傳引並有道字觀幽憤詩云樂道閑居此頌亦云樂道若引論語僅一樂字不足爲諸矣」文選篇謂と。梁說是なり。今此の本正に「道」の字有り。

(ハ) 竄改の文を正すべき例

(1) 卷第九左太冲吳都賦劇孟奇瀾 注余雅曰河水清且瀾 猗猗大波爲瀾郭璞曰言湍瀾也 第九卷

板本卷五俱に正文「猗」を「瀾」に作り注「余雅曰」以下の一字を「毛詩曰河水清且瀾」の字訓刻本に依る訓改竄に云ふ多本余雅本「瀾」を「猗」に作る。定刻本曰郭本「瀾」を「猗」に作る。爾雅曰大波爲瀾の十六字に作る。

宋するに板本の正文は「猗」に作り注は則ち毛詩の「瀾」と爾雅の「瀾」と

を并せ引くは此の本の初めより爾雅の「猗」を「瀾」と郭注とを引いて正文の「猗」に合せしむるに如かざるなり。板本後人の竄改を経たること當に疑ふべからず。蓋し余雅と毛詩と其の文相似たるに因り此の竄改を爲せしなり。胡氏等改板本此の注に據りて猗を瀾に改めたり

李善本甲書を引けるに其の文、乙書の文と相似たるが爲に後人妄に李注の甲書曰を改めて乙書曰に作れること此の例と同じき者尠ならず。蜀都賦注本「周易曰萬國咸寧」集注本也ハを引けるに胡刻本西都書刊本野本「周易」を「尚書」に改め任彦昇宣德皇后令注本「礼記曰小雅曰高山仰止」集注本也ハを引けるに今の板本俱に「礼記曰」を「毛詩」に改め王元長三月三日曲水詩序注本「韓詩曰無聲漸鳥」集注本也ハを引けるに今の板本俱に「韓詩曰」を「又曰」に改めて其の上注の「毛詩曰」を承くるが如き是れなり。

(2) 卷第四十七書子建贈徐幹詩文昌宮與 注張孟陽總都賦注曰文昌正殿名也 第二卷
板本卷廿四皆「張孟陽」を「劉涓子」に作る。宋するに今本文選卷六左太冲總都賦四部書刊本野本は「劉涓子」に作る。胡刻本定刻本集本は舊注作者名を題せず。而して許異行謂へらく總都賦當に張孟陽注と題すべしと。說詩に文選篇記胡氏等改竄卷二第廿五篇の說を以て許氏は舊注詩注引く所の劉涓子總都賦注を胡氏等改竄の說に同し。是を以て許氏は舊注詩注引く所の劉涓子總都賦注を以て張孟陽總都賦注の誤と爲せり。然るに高步瀛は卷六總都賦は當に張孟陽注と題すべしと爲しながら而も舊詩注引く所に就いては則ち曰く「書子建贈徐

幹詩注引劉淵林注與此賦注卷六楚辭賦合疑張劉注語偶爾相同と。今、隋書經籍志總集類記する所左思三都賦三卷及び西京賦李善注引く所劉淵林注曰云云等劉淵林注曰云云に據れば劉淵林注に似たりと雖も曹子建詩李善注引く所に至つては此の本明かに張孟陽に作りて劉淵林に作らず、而も其の語板本文選錦都賦舊注と正に合す。然らば則ち許氏説是にして高説非なるを知るべきなり。又此の本「張孟陽」に作る者亦以て卷六楚辭賦の舊注は張孟陽の作にして劉淵林の作に非ざるの一證と爲すべし。

(3) 卷第四十七曹子建贈徐幹詩曹子建何人和氏有其道注韓子曰楚人和氏得璞玉於楚山之中奉而獻之武王武王使玉人相之玉人曰石也王謂其左足武王蒙文王即位和又獻之玉人又曰石也謂其右足文王蒙成王即位和乃抱璞而哭於楚山之下王使玉人理其璞而得寶焉遂名和氏之璧第四十一葉裏板本俱に二「文王」皆「成王」に作り、「成王」を「文王」に作る。案するに今

本卷四十五班固堅客卿賦注「韓子曰楚人和氏得璞玉於楚山之中奉而獻之成王使玉人理其璞而得寶焉名曰和氏之璧」を引き成王玉人をして璞を理めしめたりと爲すは集注本此の法と合して今本此の注と合せず。然るに卷卅九鄧陽獄中上書自明の注韓子をして「武王蒙成王即位和又獻之玉人又曰石也則其右足也」に作れると卷廿五盧子諒答魏子悌詩注及び卷四十二曹子建與楊德祖書注俱に韓子をして「文王玉人をして璞を理めしめて寶を得たり」に作ることは皆今本此の

注と合して集注本此の注と合せず。

今後漢書孔融傳注を攷るに曰く「韓子曰楚人和氏得璞玉於楚山之中獻之武王武王使玉人相之曰石也王以和爲謬已則其左足及文王即位和又奉其璞玉人又曰石也又則其右足文王蒙成王即位和乃抱其璞而哭楚山之下云々」と。其の文集注本此の注引く所と互に詳略有りと雖も武王・文王・成王の世次は兩者相合す。又淮南子覽冥訓高誘注漢書鄧陽傳應劭注後漢書陳元傳李賢注並に和氏得璞の事を記して其の王の世次皆武王・文王・成王に作る。然らば則ち集注本此の注李善の舊を採りて今本は則ち後人の改作を經たるを知るなり。今本韓子注和氏得璞王武王・文王に作り李善注に李善據る所の本是なるに似たり。

板本卷卅四俱に「祥」を「鞠」に作る。案するに周易穆文に曰く「鞠鄭王肅作祥」

と。李鼎祚本亦「祥」に作る。今此の本の注に據れば李善の周易は正に「祥」に作

りて鄭玄王肅と合せしを知る。板本「鞠」に作るは後人今の周易に據りて改めし

なり。

凡そ李善文選一書に注して周易を引くや王弼注韓康伯注を并舉せる者王肅注を并舉し鄭玄注を并舉せる者よりも其の數遙に多し。是に由りて之を相せば其の主として據れるは王弼本周易なりしかと疑はる。果して然らば此の注亦王弼本より采れるなるべし。而して此の注若し王弼本に采れりとせば李善の據れる王

蜀本は今本と異り、本陸徳明用ふる所と異りしを知るなり。

(5) 卷第七十一、王元長永明九年策秀才文法令章注老子曰法物意章詒時多有第

三章意板本卷卅六俱に「物」を「今」に作る。案するに書書治要引く所の老子徳經河上及

び四部叢刊景宋刊河上公本老子徳教俱に正に「物」に作り又北平研究院古本道徳

經校刊引く所の景龍二年道徳經碑武内博士老子原也に定景福二年道徳經碑・奈良聖語

藏舊鈔河上公本殘卷書亦「物」に作る。然らば李善據る所の老子本より「物」に作

りて「今」に作らざりしなり。板本文選此の注「今」の字は後人今の老子に據りて

改めたるか否らずんば、正文「法令」に涉りて誤れるのみ。馬敘倫老子霞詒「法

令」を是として今本文選李善注引く所を諸學すれども、是れ李善の舊には非ざる

なり。

但此の注引く所の「法令」今の河上公本と合し今の王弼本と合せざるの故を以

て直に李善據る所の老子は即ち河上公本なりとは斷ずべからず。

凡そ李善文選一書に注して引く所の老子或は河上公注を糾擧し或は王弼注を連

引して而も王弼注を連引する者數に於て稍多し。是れ李善主として王弼本を

用ひ而も文選正文の意王弼注に合せざる者有りて乃ち河上公本に據れるに似た

り。今王元長の文正に「法令」意章板本章を訂正しに作る。然らば李善之に注す

るに隲し若し其の河上公本は「法物」に作り王弼本は則ち「法令」に作りたら

むか何ぞ正文と合する王弼本を引かずして正文と合せざる河上公本を引くこと

を爲さむや。是れに由りて之を觀れば李善見る所の王弼本本より「法物」に作

りて「法令」に作らざりしに似たり。陸徳明老子音義王弼本と河上公本との異

同を注記するを例とするに編文選注に引く王第五十七章「物」今「令」の異同を記せず。

然らば陸見る所の王弼本河上公本亦俱に同一字に作りしかと疑はる。

(6) 卷第七十三下曹子建求自試表名無坐於竹帛注墨子曰以其所書於竹帛傳遺後

子孫第六篇裏板本卷卅七俱に「所」を「功」に作る。案するに楊徳祖答臨滌侯將注亦墨子此の文

を引いて今本は「以其所獲書」に作るも集注本卷四下は則ち「獲」の字無く此

の注引く所と正に同じ。是れ李善據る所の墨子固より「以其所書」に作りて「

以其功書」に作らず亦「以其所獲書」に作らざりしなり。今墨子墨子問語を致

ふるに卷四無憂下「以其所書於竹帛」に作りて集注本と正に合す。文又卷二尚

賢下卷七天志中卷九非命下卷十二書義卷十三魯問に見え其の語微しく殊るも而

も皆「功」に作らず亦「所獲」に作らず。然らば則ち今本文選此の注及び楊徳祖

將注諸人意を以て改めし所なること當に疑ふべからざるなり。

(7) 卷第八十五上嵇叔夜與山巨源絕交書仲尼不假蓋子夏譏其短也注家語曰孔子

將行雨無蓋門人曰商也有焉孔子曰商之爲人也甚短於財吾聞學人文者推其長者達

其短者故能久也梁人交者以下十六字此の本王肅曰知念蓋甚也第十一篇裏

板本卷四十三俱に「甚短」の二字を「密短」に作る。案するに、板本の如くんは「密短」の二字甚だ不審なり。段に「密之商人也」(句)短於財と雖も亦文應行らず。今説苑四集判本を攷るに亦此の記事有りて而も正に「甚短於財」に作り、卷十七雜言集注本引く所の家語と合す。又今の家語致思篇本文は「甚短於財」に作り、注は「甚密甚也」に作りて既に是非と雖も尙「甚」の字を存す。陳主列論譚然らば則ち此の注集注本欄り李善の舊を存して今本は皆後人の竄改を爲たるなり。今本文選注此の竄改を經たる所以の者は疑ふらくは淺人王肅注を誤り讀んで「短」を「密甚也」と爲し、後世中經諸書に此の注に遂に上引家語本文「甚短」を改めて「密短」に作るに至れるなるべし。今の家語本其のまゝ短は密甚也の短の字を等し、遂に此の本に據りて今本文選の誤を訂すべく亦今本家語の誤を訂すべし。

(8) 卷第八十八陳孔璋檄吳將校部曲文賊義殘仁。孟子齊王曰臣弑其君可乎孟子曰賊仁者謂之賊。義者謂之賊。賊之人謂之一夫。誅一夫紂矣未聞殺也。干禄字義に「不殺」曰賊仁者謂之賊。義者謂之賊。賊之人謂之一夫。誅一夫紂矣未聞殺也。干禄字義に「不殺」其君第廿七集表

板本卷四十四俱に「殺」の字皆「紙」に作る。案するに孟子此の文「殺」に作る者未だ其の辭を得ず。然れども、敦煌本檀弓成篇春秋經傳集解殘卷俱に古籍藏板正平板論語太師府立圖天文板論語集解光緒庚子未年刻本舊鈔論語義疏諸本鈔記に據る。今本の「紙」の字を多く「殺」に作り、又陸德明經典釋文「殺」の字を出して「紙」と音し、或は「紙」の字を出して「本作殺」と注する者甚だ多き。殺の字を多く「殺」に作る

推せば此の注「殺」に作る者李善の舊なること當に疑ふべからざるなり。段玉裁經韻樓集春秋經傳集解二字聯別攷の條に凡そ三經三傳の「殺」を用ひて「紙」と爲す者は皆論字なりと謂へども、説本義文紙字其の説遽に从ふべからず。考見を以てすれば「殺」は較後出の形聲字段玉裁文解字詁林下古書本自ら「殺」の字を用ふること多かりしがと疑はる。其の「紙」に作りて此の注引く所と合す。文選に案するに「其」の字有る者三書に爲す。阮元孟冬校勘記定刊本

(二) 衍文を正すべき例

(1) 卷第九丘太冲皇都賦句凡餘牙自成鋒穎。注 韓伯陵若司馬遷書曰有能者見鋒穎之秋。秋の下段をくは「鋒」の字を導す。今本卷十四之秋字に無鋒穎作贈韓詩注に「鋒」の字有り。穎刀末也段駉友第廿五集案板本皆「韓伯陵」の上「禮記曰刀却刃極穎鄭玄曰穎鋒也」の十四字有りて「秋毫」の下「穎刀末也云々」の七字無し。案するに板本注引く所の禮記及び鄭注は少備に見ゆ。原本鄭注韓詩に作るは誤なり。今少備の文を攷るに「穎」は「刃」に對して鋒を自せば此の賦「鋒穎」の語と其の用例同じからず。然らば此の注韓伯陵の書を引いて乃ち足る。又禮記を引くこと有るべからざるなり。蓋し後人禮記曰云々を行間に記せしを轉寫者誤りて本注中に屬入し又李善原注穎刀末也云々の七字を奪せしなるべし。

(2) 卷第六十一上鮑明遠代君子有所思物足厚生沒。注 老子曰人之生動皆之死地十有三夫何故以其生之厚。第廿二集表

板本卷卅一俱に「人之生」の下、「生之厚」の三字有り。案ずるに今本の如くんば文説書かず。是れ「生之厚」三字下文に涉りて行せしなり。今の老子亦正に此の三字無し。此の注引く所今本老子と異り北平研究所蔵古本道徳經校刊翻する所の古本と合す。

(3) 卷第百十六王仲寶補淵碑文浪東野之秘寶 注 東野未詳一日雜書學准隋曰顧命云：然野當與梓々古序字也 第卅八葉表

板本卷五十八俱に「東野未詳」の上、「王隱晉書庾亮曰知足如誅黃龍去」胡公汝舟曰誅黃龍去胡公汝舟曰誅黃龍去の文有り。

案ずるに注上文明かに「東野未詳」と言へるに其の下又王隱晉書を引いて正文の「東野」に注すること有るべからず。板本の王隱晉書より居東野までは李善の原文に非ざること當に疑ふべからざるなり。

今本文選李善注中の文にして後人の増添せし所かと疑はるる者の内叙を興味を覺ゆるは其の鈔或は陸善經注と合する者有ること是れなり。左の(4)(5)(6)(7)は其の例なり。

(4) 卷第五十九下謝玄暉和王著作八公山詩平生仰令圖千嘆命不濟 注 平生既自謂也左氏傳汝并其後也 齊曰君子能知其過必有令圖々天所警也薛君韓詩章句曰千嘆歎也也詩曰子之不淑 第廿五葉裏

板本卷卅一俱に此の注「不淑」の下又「楊泉五湖賦曰臣功定積蓋寓今圖不淑已見從塵幽憤詩」四部本、海野本不淑已見云々也毛詩傳曰臣功也毛詩曰子之不淑也何之何之何之也の條有り。案ずるに板本に

依れば左氏傳を引いて正文「令圖」に注し薛君章句を引いて正文「千嘆」に注し毛詩を引いて正文「不淑」に注し更に五湖賦を引いて復た正文「令圖」に注し「不淑云々」と記して正文「不淑」に注す。此れ「令圖」「不淑」の注疊出して而も後記の注の敘次正文の語次と相合せず。今本注楊泉五湖賦以下を行せること應に疑ふべからず。今本文選注楊泉五湖賦今此の正文下の鈔を檢するに楊泉五湖賦を引いて其の文今本文選注と相同じ。

(5) 卷第六十一下江文通雜體詩夕飲玉池津 注 傳玄擬楚辭曰登崑崙救玉池裏 第卅四葉裏

板本卷卅一俱に「傳玄」の上「衡山記曰空青嶺有天津玉池」の十二字有り。而して陸善經注亦衡山記を引いて板本李注引く所と正に同じ。板本李注衡山記を引くは惟此の一條のみ

(6) 卷第七十一任彦昇宣德皇后令夫功壯不費故庸勳之典蓋關 注 楊書曰平州之臣功大弗當詔臣曰 第廿三葉裏

板本卷卅六箇「周書」の上「言功績既高在平不費故庸勳之典蓋關而不論」の十九字有り又「周書曰云々」の下「史記周本紀曰功蓋天下者不費」の十五字を引く。案ずるに周書卷八第廿六の文は「其の功大なるに而も上より費せられざる」を謂ひ史記周本紀の文は「其の功極大非常天下無二なるが故に卻つて費せられざる」を謂ふ。兩書用ふる所の「不費」の語其の義各異る。凡そ李注の例其の義互に異る二文を並列して證と爲すこと無きを以て今本注「言功績」以下の十九字及び「史記」以下の十五字は皆後人の増加せし所なるべし。

今此の正文下の陸善經注を攷ふるに曰く「史記刷通曰功蓋天下者不當周礼王功曰勳人功曰庸言庸勳之典以紀常功、在不當故關而不録」と。蓋し陸善經は正文「不當」の語の解李善と其の説を異にせしを以て別に史記を引いて此の注を爲せるなるべし。而して此の陸注は今本李注衍せる所の文と甚だ相近し。

(7) 卷第九十一下王元長三月三日曲水詩序紹清和於帝猷 注春秋元命苞曰元年春

王正月苞天口口清和之口口 第三篇表

板本卷四十六側に春秋元命苞以下の廿一字無く、「言以清和之德繼於大道楊子雲劇秦美新曰鏡淳粹之至精勝足利本勝を清和之正聲」の卅字有り。然るに此の正文下の鈔に曰く「清和調帝之德也言以清和之德紹繼於帝之大道也陽雄美新云鏡純粹之至精勝清和之正聲」と。何ぞ其の文の今本李善注と相近きや。

今本文選李注を以て集注本收むる所の諸注と對校するに(4)(5)(6)(7)の如き例甚なからざるを見る。是れ本集注編者李善の原注と鈔或は陸注と相合する者有る時は之を李注に略して鈔又は陸注に詳にせしに因るか、將に今の李注往往鈔或は陸注を混すること猶今の李注時に五臣の注を混するがごときに因るか。將又後人李注中に偏入せし文儒、鈔若しくは陸注と闇合せしに因るか。此の問題の解決は獨り今本文選の性質を愈々明白ならしむるのみならず亦鈔陸善經注の本質を闡明ならしむるに與りて力有るべし。

以上記せし所に據りて李善注は固より類目篇題正文に至るまで集注本偏り最も多く

李善の舊を存するを知るべきなり。蓋し集注本世に出でて廬山の眞面目明かなるに庶幾しと謂ふも過言に非ざるべし。是を以て本論文の援引に於ては集注本收むる所の李善注を最も重んぜり。

注 古詩曰淚下沾裳衣。裳衣の二字
ひて正す。

楚辭曰光風轉蕙汎崇蘭

(ハ) 正文據る所の原文、正文と語句引く例——李善自述注例「文雅は即ち此の例を謂へるなり。

兩都賦序以興廢繼絕

宣德皇后令劒氣凌雲而屈迹於

之上唯聖人能爲之「板本」爲之「改」

(2) 内容上の引論

(1) 正文文義の據る所を示す例

陸士衡贈馬文龍還任丘令詩我
毛詩曰「日」の字四部本に缺りて補ふ。我求懿德

曹子建求通親親表天稱其高者以無不覆地稱其廣

燕不昭

注禮記子夏問曰何謂三無私孔

10

卷之四十七

正文據る所の事實を示す例

西長洲詩思媚皇儲高步承華

自試表，使得西屬大將軍當一校。

魏志曰太和二年遣大將軍曹真

註の爲の引文

先づ正文中の話の意義を明か

鮑明遠樂府「東武吟」占夢書注
占謂自隱度也
求自試表注占謂自

度而應募爲占募也吳志曰中郎

機吳將校部曲文及其抗衛上國

抗衛讀對舉以爭輕重也史記陸

先づ正文中の語甲を解して乙

注
王・除王
下の「王」の字、集注本に據
りて補ふ。板本皆奪す。

板本「階」を「除」に作りて理通せず。今集
りて正す。板本卷二西都賦亦正に「玉階」に作

引文の態度

(一) 原文を節略して引くことと有るの例

蜀都賦驚浪雷奔

王受命惟中身卷五

書注「乙は甲なり」

例

豫州文は此の賦を引いて亦
に作るは非なり。唐鈔本正

十二 漢表

○
○
反
事

鄭玄曰：梧，捷る也。今集

口
の
言
を
辨
し
て
食

卷四
第九葉裏

郊路

二葉表
むが身、
官の文を引

無見仰光耀而捫天

灼曰𠂔古𠂔字也

城詩霸功興密縣

說文曰寓籀文字字也

(3) 正文の句讀を明かにする爲の引文の例

仕彥昇奏彈曹景宗不有嚴刑誅當安實景宗即主臣謹案云々
注（即主の下）王陽晉書史記自初曰醉酒荒迷昏亂義度臣即主

(一)に來ず。附書、凡そ新自注の「臣」字無し。今集注本に據りて補ふ。胡代云然以主爲句則臣當下讀也。今の名本注「即」の上「臣」の字無し。今集注本に據りて補ふ。胡代云然以主爲句則臣當下讀也。

胡說非なり。若しはの注「即王臣」に作はるは李善之を引いて正文「臣」の字に於て句すの證と爲すこと有るべからず。當に葉注「臣」の字「即」の上に打るに从ふべし。

卷四十
第三條表

(4) 正文の誤字を正すが爲の引文の例

潘安仁關中詩亂離斯瘼

注韓詩曰亂離斯莫爰其

王仲寶諸廟碑文餐東野之妙寶

主
一曰板本皆又曰に作る非なり
今集注本に據りて正す。
雖書零准聽曰額命云天
集注李璣に作る。
珠河圖杜東攄

注本に作る。天に作る。地球の器也。曲引曰御東序之秘寶然野

富戸村を 集注中に破りて讀む 古内宣光

の態度

注 枚 乘七發曰波涌（集注本涌に作る。根本卷四十七發も亦涌に作る。）而湧起（涌起横奔似雷行卷四）の句と「横奔似雷行」の句との間に四

十餘句百九十五字有り。此の注節引せしなり。

王元長永明九年策秀才文。祥正而青旗肅事。
注禮記曰孟春之月天子駕蒼龍載青旗躬耕帝籍。
卷卅六
六
策表

既刻本禮記月令に據れば、「孟春之月」と「天子」との間に六十四字有り、「天子」と「駕蒼龍」との間に八字有り、「載青旗」と「躬耕」との間に百七十字有り。

原文を節略して引用するに際し、原文の字句を改修すること無きに非ず。例は卷四十二「魏文帝與吏部書」「光武言年三十餘壯年十歲所更非一吾德不及之年德之齊矣」を卷四十九「李重臺告魏太子牒」「雖年齊肅主才實倍之」の下に引いて、「魏文書胡氏校云曰「實本京」陳本魏文作「吾德不及」主年與之齊矣」に作るが如き是れなり。

(二) 正文の叙次に順ひて引文の原綴を改むること有るの例

張平子西京賦若夫翁伯濁質張里之家擊鍾鼎食連騎相過

漢書貨殖傳、翁伯、張氏、涇氏、張里、以馬醫而鉅鍾卷二 貨殖
以洗今之漢書と合す。則而鼎食張里、以馬醫而鉅鍾卷二 貨殖
漢書貨殖傳、翁伯、張氏、涇氏、張里、の順と爲す。史記地理志、種

漢書貨殖傳叙伯張氏、質氏、灌氏、張里の順と爲す。傳史亦同。

傳亦同。

張平子東京賦晉哲玄覽

尚書曰當作聖明作哲
卷三 葉裏

尚書洪範「明作哲，睿作聖」に作る。
老十陽三才大辨論語會通卷六
 註引く所節を先聖を後にす。

(三) 正文に順ひて引用原文の文字を改むることを爲さざる例

正文と引文と其の用字互に異りて而も書義相同じき時は兩者同言義なる所以を附記するか若しくは佗に證を求めて兩者同音義なる所以を明かにし決して徑に引文の文字を改むることを爲さず。

(1) 兩者同音義なる所以を附記する例

(1) 某與某古字通之附記する例

張景陽詠史詩朝野多歡娛

注 孟子曰霸者之民驩虞如也王逸楚辭注曰娛樂也娛與虞古字通用 卷十一 第五篇表

王元長三月三日曲水詩序信可以優游暇豫作樂崇德者歟

孫子兵法曰人效死而上能用之雖優游暇豫令猶行也譽與

豫古字通

(ロ) 某與某通と押記する例。

劉越石扶風歌。惟昔李騫期。

注 周易曰歸妹愆期遲歸有時王肅曰行過也襄與行通也 弟十九 葉表

曹子建求通親親表禁固明時

(ハ) 某與某音義同と増記する例

禁與連聲音義同此連聲之本旨也

(二) 某與某同と附記する例

木 某與某古今字と附記する例

(ハ) 某某一世と附記する例

宋王神女賦毛嫱鄠佚不足程式西施掩面比之無色

(2) 佗に證を、求むる例。

左太冲吳都賦造姑蘇之高臺臨四遠而特建

古詩一十九首奄忽若嚴塵

主
爾雅曰飄飄
胡代攷異案飄

卷五十一

第八卷

沈休文贊故安陸昭王碑文而皇情眷眷所深可

此の正文は「屋」に作り、李善據る所の毛詩は「葉」に作りて、兩者相合せざる

正文と引文と、文字互に異りて、其

して意を以て引文を改めざる例

枚叔七發出學入塾命曰醫毒之機

王文考魯靈光殿賦規矩應天上憲萬物注。詩定之方中作爲楚宮卷十一。謝玄暉和伏武昌書孫承公城詩卜揆崇離殿注。詩曰揆之以日作爲楚室卷十。第七十一葉表江文通雜體詩注卷五十九。第七十二葉表王績傳師陸希聲注引所居宮名。李善引所的主詩是鄭風定之方中之文。今本毛詩「定之方中作于楚宮」揆之以日作于楚室」に作る。是を以て阮元毛詩校勘記に曰く「宰正義云作爲楚立之宮也下句同考此乃正義說經之義耳非其本經字作爲也序下正義云而首書作于楚宮作于楚室可證詩經小學云宰喪大記注云爲或作于楚之說也李善文選注引作爲楚宮作爲楚室所謂以被引之考文古本作爲爲正義」文選傳本卷一と。今古籍叢考收むる所の敦煌本毛詩楚卷第五葉裏を檢するに正に「作爲楚宮」「作爲楚室」に作りて李善引所と合す。見るべし唐の時此の如く作る本有りたるを。御覽卷二百三十七詩作爲楚李善之を被引せしに非ざることを疑ふべからず。山井君起の古本亦必ずしも正義を采るに非ざるを知るべし。王先謙詩三家義集注と並し音義詩と讀へるは非なり。張平子西京賦聲肌分理注。鄭玄周禮注曰聲破裂也卷二。高步唐曰「周禮鄭注見攷工記旅人聲作聲各李氏所據本作聲耶抑以爲通假字也」李注義疏卷三。第七十八葉表。鄭注考工記云聲破裂也說文從手辟聲也」と。琳據る所の考工記注亦「聲」に作

れるに似たり。然らば此の注引く所本より「瞿」に作る。李善「薛」を以て「瞿」の通読の字と爲し徑に改めて「瞿」に作れるには非ざるなり。説文を以てするに第五上字を以て破字と爲すは吾輩所不爲の字と爲せるなり。左太沖魏都賦習情表慶。注説文曰瞿旦明也。卷六葉集の注有右四枚七行「葉集數而符瞿」(葉七葉末)の注引く所合同じ。家するに今の説文第七篇上日部に曰く「瞿旦明也从日者聲」と。而して「瞿」の字は則ち新増に在りて「瞿」を訓ず。是を以て沈濤曰く「文選魏都賦謝靈運越嶠溪行詩七發三注引此字皆作瞿乃崇賢以今字易古字耳非古本有瞿無瞿也」。説文古本攷(清嘉慶刊)と。然れども鈕樹玉曰く「瞿鏡濤云李善文選注引説文瞿旦明也凡瞿見疑古本説文本足瞿字後爛脫作瞿樹玉按牌雅有瞿無瞿玉篇瞿通説文瞿字之次其訓旦明之瞿則杜俗字中瞿説當是瞿字之條」と。鈕説甚だ理有り當に从ふべし。右の瞿の字然らば則ち沈氏易字の説終に犯見たるを免かれざるなり。右四條惟今本原文にのみ據りて爲せるも善引文改字の説を駁す。

西京賦送故散騎 注説文曰飲捕魚也。卷二葉集高步瀛曰く「説文魚部曰鰣捕魚也無瞿字此李就正文改」第七十三葉表も重鈔本李善注第五此の説文を引かず。蓋し今本此の注後人の増す所なるべければ以て李善の改字と斷すべからず。

西京賦展李參門誰能不覺 注 說文曰營惑也 第十七篇裏
 胡紹侯曰く「今日部營惑也從目營省聲按經典通作營善以營爲營惑故引說文營
 作營者依正文改也」 文選卷之四(海樓集校本)と。然れども唐鈔本李注 第十八此の說文
 を引かず。

沈休文和宣城詩神文疲夢寐 注 說文曰文會也 第十三篇裏
 胡紹侯曰く「今說文送會也按此善順正文而改許」 第十八此の說文
 本卷五十九下李注此の說文を引かず。

右三條後人の本増かと思はるる注に據りて爲せる改字説を駁す。

陸士衡漢高祖功臣誥駁民效足 注 尚書曰又曰俊民用章 卷四十七
 胡克家攷異に曰く「尚書本作駁善導引爲俊者駁與俊同已具卷谷内兄希叔詩無
 妨其引作俊也」 某表 第十と。

案するに李善前に於て「某與某同」と注せば後必ずしも具に之を言はざるの
 例は之れ有り。卷九北征賦「息郢鄢之邑鄉」の注漢書「幽郢」を引いて「幽
 與郢同」と言ひ卷十西征賦「化流岐幽」の注史記「立國於郢」を引いて「郢
 與幽同」と言ひしを以て卷四十六王元長三月三日曲水詩序「篇勳郢詩」の注
 に於ては「周禮曰篇章章土鼓幽篇又曰仲春擊土鼓歌幽詩以迎暑也」を引いて
 而も「郢」「幽」の同異を記せざるが如き是れなり。然れども斯の類に於ても李
 善引文の文字を改めて正文に合せしむることを爲さず。是を以て李善の尚書

「駁」に作れども功臣誥正文「俊」に作るが故に後には正文の「駁」に之に順ひて尚書
 「駁」を改め引いて「俊」に作るこの胡説は从ふべからざるなり。況や功臣誥注
 引く所の尚書は集注本 卷九十三第五 正に「駁」に作りて「俊」に作りたるをや。

王子淵四子講德論百姓征從無所措其手足 注 方言曰征從惶遽也：從章容切 五
 十一、第十

王筠城術編に曰く「王肅四子講德論百姓征從注引方言曰征從惶遽也然方言征
 從遽也論作征從李善即改方言以就之此遽注之通病也知非刻訛者注又曰從章
 官切不爲征作音是本作征也」 咸豐十年刊本

案するに集注本 卷百二十二 是は正文及び注引方言の「征從」皆「征從」に作り注
 「從章容切」亦「從章容反」に作る。 漢書本征從に作り從然らば李善本正文
 本より「征從」に作り注引く所の方言亦「征從」に作りしなり。其の「征從」
 に作れるは皆後人の改むる所李善方言を改めて正文に就けるには非ざるなり。
 玄應音義卷第十(海樓集校本)卷十三十九
 第廿四條に方言を引いて「征從」に作る

右二條後人の竊易を經たる注に據りて爲せる改字説を駁す。

以上述ふる所に據りて李善引文改字説の安なること推して知るべし。段玉裁
 曰く「凡引古辭同字異者必仍其字而爲之說李善注文選其例最善 古文尚書協異(七)
 十五卷十と。又許契行曰く「經典同異李氏自據各經師本文隨文選所用而引之、
 校文選者每不尋究但據今時傳習之本竊易李氏所引之文」本文選(文淵閣叢書)と。

十五

海の賦沈の詩共に歳暮の語有りて李善前者に注しては毛詩を引き後者に注しては韓詩を引く者は漢賦歳暮を以て歳晚の候と爲して毛詩歳暮と合し其の歳暮を訓せず。沈詩は以て年老の意と爲して韓詩と合するが故なり。

王元長三月三日曲水詩序雜文宋於宋義亂時聲於縣羽

注毛詩曰桃之夭灼灼其華又曰子如柔荑又曰烏鳴嚶嚶韓詩曰板本舊韓詩の二字を又の二字に作る。非なり。宋注本に據りて正す。板本舊韓詩。絲學黃鳥薛君注の字誤し。曰縣聲文貌。第四十六賦注韓詩及の詩注を引いて代りて合す。縣聲黃鳥薛君注の字誤し。曰縣聲文貌。第四十六

本善「縣羽」の注のみ特に韓詩を引く者は毛詩縣羽。縣聲小鳥貌の訓此の本善の「縣羽」の注のみ特に韓詩を引く者は毛詩縣羽。

正文の用例と其の證叶はざるを以てなり。

魏延年始安郡還都與張湘州登巴陵城樓作詩前贈京臺閣
注說苑曰楚昭王遊於荆臺司馬子期諫曰荆臺左洞庭右彭蠡荆或爲京。卷十七
應休勝與滿公談書是京臺之樂也得無流而不反乎

注淮南子曰令尹子昭請飲莊王許諾子昭具於京臺。莊王不往曰吾聞京臺者南望
衡山北臨方皇左江右淮其樂也錦若吾漢德之人不可以當此樂也恐流而不能自
反。卷四十二

應書の「京臺」に注しては淮南子を引けるに韓詩「京臺閣」に注しては則ち說苑「荆臺」を引いて淮南子「京臺」を引かざる者は說苑「左洞庭右彭蠡」の文有りて韓詩の注に適應せるを以てなり。詩上文三句洞庭左衡山右彭蠡の文有り。

王子淵四子講德論告甯陽商歌以干齊桓

注淮南子曰甯陽本不遇也。越一以作甯陽。商歌車下而桓公慨然而悟。五

又齊桓有管鮑驪甯九合諸侯一匡天下

注說苑鄒子曰甯陽叩轅行歌桓公任之以國政。第十卷表

淮南子說苑告甯陽商歌以干齊桓。第十卷表

但同一事實にして諸書記する所互に異なる時は其の信すべき者に従ひて分別引用す。

文選正文と合する者を以て是と爲さず。例へば陸士衡漢高祖功臣誥奇謀六書

嘉慶四迴注漢書曰陳平凡六出奇計或陳陳之世莫得聞宋奇謀六書

張良向高祖書第六陳平出奇第四皆權謀非正也然陳之此言有符仲子之說未詳相

承而誤或復此の字集注本別有所憑也。卷四十七

りも驚きが故に直に法言注を采ることを爲さざるなり。

(2) 正文作者の據れる原文に異同有る時は其の中に就き正文に近き者を擇んで之を引く例

嵇叔夜琴賦紹陵陽度巴人

注宋玉對問曰既而曰陵陽白雪國中唱而和之者彌寡然集所載與文選不同各隨所用而引之。卷十八

文選卷四十五宋玉對楚王問曰「其爲陽春白雪國中屬而和者不過數十人」

に作りて琴賦「陵陽」と合せす。故に李善此の注宋玉集より采れるなり。

江文通雜體詩兩無帝女靈

注宋玉集云楚襄王與宋玉遊於雲夢之野望朝雲之貌有無焉王問此是何氣也玉對曰昔先王遊於高唐是而晝陽夢見一婦人自云我帝之季女名曰瑤姬云々

第一

此の注引く所は高唐賦なり。李善之を文選より采らずして宋玉集より采れる者は文選收むる所は「自云我帝之季女」を「曰妾巫山之女也」に作りて江の詩「帝女」の語と合せざるが爲なり。

(3) 正文作者の據れる原文其の解詁説有る時は正文作者の以へりと思はるる者を擇びて之を引く例

潘安仁寄婦賦據妾袖以數息

注毛詩曰抱衾與袖寔命不猶毛詩傳曰衾被也袖單被也

曹子建贈白馬王彪詩何必同衣情

注毛詩曰抱衾與袖毛詩曰衾被也鄭玄曰袖床帳也據與袖古字同

曹詩正文「情」に作り而して「情」の本説は帳なるが故に余足袖謂情之帳也李善之に注しては鄭箋の「抱衾與袖」を引いて毛傳「被也」を采らざりしなり。

蓋し李善は潘の賦を以て毛傳に以へる者と爲し曹の詩の「情」の字をば鄭

箋に以へる者と爲せしなり。

但李善は務めて正文作者の據れりと思はるる者を采らむとせしと雖も其の實必ずしも當らざる者尠ならず。例へば漢人の作據る所の尚書は主として今文なるべきに李注は概ね傳孔傳本を引用し魏人の作據る所の詩は必ずしも毛詩に非ざるに李注主として毛詩を引用せるが如き是れなり。蓋し李善の文選を以てしては正文の用例と相合せざる者有りて始めて異種の本に據りしなり。然らば則ち李善の引文主として當時の通行本に據れることを以て其の引文態度の義例と稱すべきに似たり。然れども是れ李善の本意に非ず。李善の時學術未だ發達せず四部の書の傳來盡くは明がたりしを以て自ら通行本を主とせしのみ。是を以て此の義例専ら李善の意を采りて其の形を采らざるなり。

(七) 引文惟其の語形のみを采りて其の語義を采らざる例

謝宣遠張子房詩李來扶輿王

注毛詩曰李來晉字孔安國尚書傳曰李來也

案するに注引く所の毛詩は太雅縣の文なり。而して彼の鄭箋に曰く「李來也」と。今此の注毛詩を引いて謝詩の「李來」の語を諸うと雖も是れ惟其の語形のみを采りて其の語義を采らず。故に又尚書孔傳を引いて謝詩「李來」の「李」は「來」と訓すべきことを明かにせしなり。

陸士衡中韓武帝文、蓋不以高明之體而不免卑濁之累

注 尚書曰高明柔克高明謂日月也 卷六十 第十葉

案するに注引く所の尚書は洪範の文。洪範孔傳に曰く「高明謂天」と。今此の注尚書を引いて陸文「高明」の語を證せりと雖も而も其の解は孔傳に从はず。故に又「高明謂日月也」と言へるなり。

(八) 某書の本文甲と本文乙下の注とを併せ引く例

王元長永明九年第奏才文肺石少不寃之人諫林多夜哭之鬼

注 周禮曰外朝之法左九棘孤卿大夫位焉右九棘公侯伯子男位焉右肺石達窮民

此の注今の各本互に異同有り

馬鄭司農曰肺石赤石也窮民天民之窮而無告者 卷六十 第十葉

案するに今本周禮に據れば此の注引く所の周禮經文は伏官朝士に見え、鄭

司農注は則ち大司寇に見ゆ 今本周禮は鄭注に引

陸士衡奏士賦序而成王不遺憐否於懷

注 尚書曰武王既喪管叔及群弟流言於國曰公將不利於孺子孔安國曰成王信流言而疑周公 卷四十六 第二葉

案するに今本尚書に據れば此の注引く所の尚書經文及び孔傳皆金縢に見

之而も孔傳「成王信流言云々」は經「武王既喪云々」の下に杜らずして經「于後公乃爲詩以貶王云々」の下に杜り。

(九) 正文作者と略同時の人の作を引いて相證する例——何平叔景福殿賦注に「蘭許

昌宮賦を引き其の下注例を記して「然十何同時今引之者轉以相明也他皆類此」と言へる者即ち此の例を讀へるなり。

王仲宣贈蔡子篤詩風流雲散一別如兩

注 鸛鳴賦曰何今日以再絕 今の文選卷三「何今日」 陳琳檄吳將校曰兩絕于天然諸人

同有此言未詳其始 卷十三 第十葉

曹子建七啟揮袂則天野生風慷慨則氣成虹蜺

注 劉劭趙都 板本「都」に作る事なり 賦曰照氣成虹蜺揮袖起風塵文與此同未詳其本

也 卷十四 第十葉

(十) 釋義の篇の引用は正文より後に成れる書に據るを避ける例——李善自述注例「

詩釋義或引後以明前」兩都賦の一條は即ち此の例を讀へるなり。

卷二張平子西京賦に注して杜預左氏傳注劉逵魏都賦注並約古今注を引き卷

十三宋玉風賦に注して司馬遷史記班固漢書許慎說文を引く等此の例に屬す。

(十一) 正文の一語句に對する引文は惟一條に止まるを常と爲す。

李善正文の一語句に注して引く所の文は引論(語句内容)釋義皆惟一條に止

まるを常とす。正文の一語句に注して引く所の文は引論(語句内容)釋義皆惟一條に止

まるを常とす。正文の一語句に注して引く所の文は引論(語句内容)釋義皆惟一條に止

まるを常とす。正文の一語句に注して引く所の文は引論(語句内容)釋義皆惟一條に止

其の特例左の如し。

曹子建七做采英奇於仄陋

注 邊章草臺頭曰舉英奇於仄胡刻本則作非反。今從注本。及六臣本。據以改。亦同。陋尚書白明明揚仄

陋卷四十五

陸士衡漢高祖功臣謂伊人邦家之彥

注 又曰上注毛詩

右二例正文の直接據る所の文と正文據る所の文の本づく所とを引く。卷四十七

鮑明遠樂府（放歌行）登伊白壁照將起黃金臺

注 王隱晉書曰段匹磾討石勒進心故安縣故縣太子丹金臺上台郡國經曰黃金臺

易水東南十八里燕昭王置千金於臺上以延天下之士二說既異故具引之卷四十八

陸士衡挽歌詩死生各異倫祖載當時

注 禮曰登祝堂大室祖飾棺乃載鄭玄曰祖爲行始也其序載而後飾白虎通曰祖

告始也

始載於庭轎車飾祖稱故名祖載也白虎通與鄭說不同故俱卷四十六

引之

右二例異說を併せ舉ぐ。

王元長三月三日曲水詩序殷殷均平建壽

注 呂氏春秋曰又曰舜陶於河濱釣於雷澤登爲天子賢士歸之萬人舉之陳陳殷

殷無不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

敗莫不歡悅高談曰殷殷坂本舊本に重ぬす。非なり。盛也呂氏春秋曰舜爲天子輒輒

右一例文選正文異同有り是非定め難きが爲に李善兩證を併引せしなり。

李善注正文一語句に對して引く所の文惟一條に止まるを常とするを以て今本

文選正文の一語句に對する注其の故無くして數條の引文有る者は皆後人の竊

改増添する所なるかと疑はる。左に其の數例を擧げむ。

鮑明遠樂府（結客少年場行）追懷懷百憂

注 楚辭曰勇士失職而志不平又曰惟鬱鬱之憂癯兮志坎壈而不違王逸曰坎壈不

遇貌也卷四十八

此の注引く所の「楚辭曰勇士失職而志不平」は正文に於て當る所無し。蓋

し此の注本「楚辭曰坎壈兮勇士失職而志不平」の文王逸曰坎壈不遇貌也

の十三字に作りしを轉寫「坎壈兮」の三字を奪せしが爲に後人「又曰」

以下の十五字の數を補へるなり。今集注本卷五十六を檢するに「勇士」の

上「坎壈兮」の三字有りて「又曰」以下の十五字正に之れ無し。

謝玄暉觀朝雨詩既覽百常觀

注 張景陽七命曰表以百常之關西京賦曰通天眇以鍊峙勁卷五十六

權薛綏曰臺名也爾雅曰觀謂之關卷五十六

此の注爾雅を引く者は謝の註は「百常觀」に作り七命は「百常關」に作

りて兩者相合せざるにより「關」は即ち「臺」なることを明かにせむが爲に

外ならず。是を以て爾雅曰以下七字は當に本七命の文の直下に在るべき

なり。又卷二西京賦を攷ふるに、碎綺殺の句に注して「通天臺名」と謂ひ「倍尋曰常」と謂へるも百常を以て臺名とは爲さず。而も段に百常を以て臺名と爲さば、西京賦文義終に通ずべからざるなり。

然らば、則ち此の注西京賦曰より臺名せまの廿二字は漢人の妄りに増す所なること各に疑ふべからず。今集注本卷五十九下を檢するに正に此の廿二字無し。

王元長三月三日曲水詩序幽明獻期

注曾子夫子曰天道曰圓地道曰方方曰幽圓曰明禮記曰明則有禮樂胡氏攷聚に云ふ、則有禮樂の五字無し。此れ大抵補せしなり。幽則有鬼神卷四十六と説き及り集注本此の五字無し。

此の注引く所の曾子に據れば、此の正文「幽明」の語は天地と解すべく、注引く所の禮記に據れば、正文「幽」の字鬼神と解すべし。引文二條有りて其の說各異れは、李善の解意に知るべからず。今集注本卷九十九下を檢するに、此の注禮記の上「又曰」の二字有り。乃ち知る李善曾子に據りて解を爲し禮記は惟一説として引けるに過ぎざるを。又禮記以下或は漢人の増す所なるも亦知るべからざるなり。

(丙) 引文の記載

(一) 注引く所の書は其の書名のみを記し篇名、章名等の小目は之を記せざるを常にす。但、正文注解上必要有る時に限り小目をも併記す。

鮑明遠樂府(苦熱行) 赤阪正文及び注の(阪)集注本本舊本に作る。横西阻。

注漢書西域傳杜欽曰又歷大頭嶺小頭嶺之之の字集注本に據りて補ふ。山赤土身熱之阪令人身

熱無色頭嶺卷三十八

王元長永明九年策秀才文敬法郵制卷四十六

注尚書虞書曰欽哉欽哉惟刑之郵卷四十六

王元長三月三日曲水詩序臣聞出豫卷四十六

注周易豫卦曰先王作樂般卷四十六

李注既に此の義例有り。是を以て今本文選注妄に引書の小目を併記せるは皆

李善の舊に非ざるなり。左に其の二例を示さむ。

張平子西京賦若夫翁伯卷四十六

注漢書翁伯曰翁伯以販稻而傾縣邑漢代以胃脯而連騎云々卷四十六

此の注「翁伯」の三字正文と異なる無ければ本之れ有るを要せず。且、引く所は翁伯傳の文にして、官職志の文に非ず。今本此の三字有るは漢人妄

に増す所李善の舊に非ざるなり。唐鈔本正に此の三字無し。

馬季長長笛賦卷四十六

注世治切切當に反し韓書程臣傳曰昱於魏武前定爭聲氣高遠人松之乃止

段玉裁曰「文選長笛賦必聲聲標李善引國語及韋注云古治反殊誤苦治

切當是昭字、白雲刺也。下引魏書程昱傳云々、是則从召之昭於植廢而不相涉也。^(一)
說文第廿二注
 上昭字^(二)之注
 支「植」之語に注すれば又魏書を引くの要無し。^(三)
義例ニの而も魏書「植之」の語正文「植」と相渉る無きこと正に段玖の如きをや。^(四)
註三を以て
 同せりとするも「植」に注し是を以て此の注魏書程昱傳以下の廿三字疑ふは本後人筆記の文決して李善引所に非ざるなり。責本空陵本此の廿三字無し。胡氏攷異是なり。
 の金蓋に轉寫の誤にして支

(二)既に前文に於て佗の文を引いて注せる語句後文復に出づる時は、必ずしも重ねて文を引かず、惟「某已見上文」又は「某已見某篇」と記す。李善自ら其の注例を述べる者の内左の四條は即ち此の例を謂へるなり。

(1) 石渠已見上文然同卷再見者廿云已見上文務從省也位皆類此西都賦又育天驕石渠典補之府注南都賦

(2) 諸夏已見西都賦其異篇再見者並云已見某篇佗皆類此。卷二東都賦「光漢京于諸夏」の注

前條「同卷再見者並云已見上文」と記し、此の條「異篇再見者並云已見某篇」と記す。而も異篇にして同卷なる者固より多ければ、兩條記する所相抵牾するに似たり。前條「同卷」當に「同篇」に作るべきかと疑ふ。

(3) 諸夏已見上文其事煩已重見及易知者直云已見上文而它皆類此此處應有注

此の條は、(一)と相似て而も其の實相異なる。此の條は既に前篇に於て注せる詠加後の詠篇に於て數出づる時は再見に於てのみは「已見某篇」と記すれども三見以後には於ては惟「已見上文」と記するに止め、語意強ひて注し都賦に於ては詠
於是は「諸君已見西都賦」と記し東都賦後文に於ては「諸君已見上文」と記するが如き是れなり。又人の知り易き者は再見より直に
「已見上文」と記し、縦へ異辭に出づとも「既見某篇」と記者は、(二)と云ふ詠西都賦
を引いて主として建書この語西都賦に於て建書を引いてます。而も其の二人の知り易きを關連
る即ち賦に於て始めて再見西都賦」と號して直に建書せし已見上文」と記して「已見西都賦」と記せざる
是れなり」と讀ゆなり。

(中) 辭大己の字體鈔本見西郡賦凡人姓名及事易知而別卷重見者云見某篇亦從省也
忙皆類此卷ニ西京賦但樂大之貞國の注

(3)に於て「其事易知者直云已見上文」と記し又此の條「事易知而別卷重見者云見某篇」と記するは兩條相祖歸するに似たりとも其の實然らず。(3)の「其事易知者直云已見上文」は同卷再見の者に就いての立例にして此の條は別ち異卷重見の例なり。

李善「已見上文」「已見某篇」の例と立つることゝなるの如し。但今本文遊に據れば卷を重ねるに从ひ、「已見上文」と記する者愈多かる。「已見某篇」と記する者益々少く、集注本は然らず。謝玄暉と孫都曹詩註胡列年并目録已見上文（此二條に於て）集注本は「已見上文」に作す。謝玄暉と孫都曹詩註胡列年并目録已見上文（此二條に於て）集注本は「已見上文」に作す。謝玄暉と孫都曹詩註胡列年并目録已見上文（此二條に於て）集注本は「已見上文」に作す。

南子及び高誘注等を用いて注せるに足らず。袁本・六家本は「陳拜夜光見西都賦」に作るが如き見れり。此の類胡克家改註は常に提出せる者非ざるを以て其の是非邊に定むべからざるなり。蓋し今本多く後人の改竄を経て盡くは李善の舊を存せざるなり。殊に四部叢刊本・茶陵本に至りては「已見上文」「已見某篇」に作る者至卷を通じて續に數條に過ぎず其の餘皆引文を提出し而も其の提出往後誤認有れば其の後人の添寫を被ること短も多きを知るなり。今本李注皆に引文を提出して而も誤認有る例左の如し。

卷廿八 繆熙伯提散詩安能復存我

胡刻本注生也存已見上文惟注本「生也」之存已見上文

四部本注生也尸子曰其生也存

今門有車馬之行安未するに其の注「尸子曰其生也存其死也亡」を引く。然らば則ち四部本は彼の注に據りて尸子を提出し而も誤りて其の上に「生也」の二字を冠せしなり。

卷卅一 江文通雜體詩（陳思王贈友曹植）延陵輕寶劍

胡刻本注延陵已見上一以胡刻本注「延陵」爲準。蓋延陵子寶劍非所惜。李注卷卅

延陵也

四部本注吳郡賊曰有吳之關國也遠自太伯宣於延陵嫡女至德太伯也高節克謙

延陵也

の作に擬せる者なれば此の注當に舊の詩を引くべし。吳郡賊を引く何爲れぞ。蓋し四部本は「延陵已見上」に作れる本に據り誤りて吳郡賊を引けるなり。

(三) 引文冒頭「某曰」の字有る時は引書書名下「曰」の字を書せず。蓋し繁重を避くるなり。

國語趙盾子難曰雀入于海鳥蛤難入于淮（卷廿一）（第十六表）
管子桓公曰夫鴻鵠有時而南有時而北（卷廿三）（第九表）

但此の例李善の立つる所なりや文選書寫者の立つる所なりや尚ほ疑ふべし。然れども今本文選に據れば明かに此の義例有るなり。是を以て梁章鉅が卷卅八庚元規議中書令表注「尚書穆王曰今命汝作朕股肱心膂」を以て「此君身膂之文今書作今予命爾作股肱心膂注蓋約舉其詞故尚書下無曰字」（文選帝紀卷卅一）と謂へるの非なるを知るべきなり。

第二篇 文選李善注所引尚書條攷

例言

一、此の篇に於ては、文選李善注引く所の尚書經文を抽出して、逐條南昌府學刻本尚書と較し、以て李善引く所と今本と異なる所以を攷證す。

二、南昌府學本尚書は宋の十行本を以て主と爲せりと謂はるるも、錄表古碑書其の據る所の十行本は、元明間の修補本にして、而も南昌本盡くは原刻に从はず。錄表古碑書其の據其の誤を以て善と爲せりしことを言へば、十三經注疏に載いて記せし所に據る。其の誤すしも善本に非ざることを明かなり。然れども、此の本最も廣く行はるるを以て、今之を用ふ。

三、李善引く所の尚書と今本尚書との異同を攷ふるには、先づ(1)李善引文の態度(2)李善引く所の尚書は常に同一本に據りしか、將異本を并用せしがを明かにせざるべからず。(1)は既に第一篇第二章に於て之を明かにせしも、(2)は今之を知るに由無し。是に於て、姑く、李善引く所の尚書は盡く同一本に據れりとの假定の

下に此の篇を草せり。
 一 李善引く所の尚書經文、文選各本互に異同有る者は、先づ文選各本を詳載して李善の舊を攷定し、然る後に其の經文と今本尚書との異同を攷證せり。
 一 今の文選に據れば李善引く所の尚書、今本尚書と相合するに似たる者も、古書引用する所の尚書或は今殘存する所の隸古定尚書等より推せば、今の文選注引く所の尚書恐らくは、後人の改作に係るか、と疑はるる者無きに非ず。然れども其の文選注内に於て、塙證を得ざる者は、今すべて益闕に从へり。
 一 文選正文作者は明かに今文尚書に據りて文を爲せるに、李善之に注して悉く偽孔氏本尚書を引けるは、是に非ずと雖も、文選正文の用例、偽孔傳の說と悖る無き者は、今論ぜず。
 一 此の篇に引く所の文選正文及び李善注は、胡克家原刻本を以て底本と爲せり。此の篇に引く所の今本尚書下に記せる卷數・葉數は、南昌府學原刻尚書注疏本に據れり。

卷第一

班孟堅 兩都賦序

故阜陶歌虞
法尚書阜陶歌曰元首明哉股肱良哉庶事康哉
今本尚書益稷篇阜陶拜手稽首臚言曰
帝曰乃唐歌曰元首明哉股肱良哉庶事康哉
帝曰今本尚書益稷篇阜陶拜手稽首臚言曰
帝曰伯三國名臣序贊注俱に尚書此の文を引いて「阜陶」皆「欲辭」に作る。李善據る所の尚書「欲辭」の字を用ひて「阜陶」の字を用ひざりしに似たれば、
此の注亦當に「欲辭」に作るべきかと疑はる。
又三國名臣序贊注引く所は「哉」の字皆「才」に作りて李善の舊を存するに似たれば、
此の注三「哉」の字皆不當に是れ「才」に作るべきかと疑はる。
西土者老
尚書曰西土有衆
今本尚書泰誓篇中

西都賦

蓋聞皇漢之初經營也

注尚書曰厥既得吉ト乃經營

今本尚書召誥篇厥既得ト則經營

案するに殷王武丁曰く「後漢書班固傳注尚書曰厥既得吉ト則經營按此依孔傳增吉字

也不可從」古本尚書召誥篇七篇所釋然れども李善此の注引く所亦正に「吉」の字有れば、

古本尚書或は此の字多き者有りたるかと疑はる。今召誥篇の文を攷ふるに上に「太

保朝至于洛ト宅」と曰ひて其の下「厥既得ト」と曰へば、下文「ト」の上「吉」の字有る

者、説に於て優れるに似たり。史記魯公世家「居焉」

此の注「乃」の字、佗の證無し。再攷を竣つ。史記魯公世家「居焉」

帶以洪河涇渭之川

注尚書曰導河自積石南至于華陰

今本尚書禹貢篇導河積石至于龍門南至于華陰

案するに、卷十二木玄虞海賦注卷十六司馬長卿長門賦注卷五十九沈休文齊故安陸昭

王碑文注俱に尚書此の經文を引いて「積石」の上皆「自」の字無く、今本尚書と合す。

彼の諸注引く所に據れば、此の注「自」の字を行するに似たり。然れども其の實余

らす。彼の諸注後人の刪去を經たるのみ。
水經注に曰く「河水東源又發于西壑之外出于積石之山山沿經曰積石之山其下有石
門河水冒以西流是山也積物無不有」山經之文此山在積石之山其下有石門
揚守卿水經注卷三に曰く「禹貢導河自積石」禹貢導河自積石
說多主禹貢導河自積石又通典に曰く「孟堅又以禹貢導河自積石遂疑潛
流從此方出」浙江嘉興本禹貢卷十四州之此皆古本尚書「自」の字有りたるの明證に非
すや、史記禹本紀卷八下第五篇表
今本尚書禹貢の句法を攷ふるに「導某水」に作りて「自」の字を用ひざる者有
り。「導弱水至于合黎」「導黑水至于三危」「導汎水東流爲濟」是れなり。「導某水自某
山」に作りて「自」の字を用ふる者有り。「導淮自桐柏」「導渭自鳥鼠同穴」「導洛自熊
耳」是れなり。而して「導某水某山」に作りて「自」の字無き者に至りては則ち惟
「導河積石」の一句のみ。疑ふらくは此の句亦本「自」の字有りて「導某水自某山」
の句例に从へるを轉寫誤りて「自」の字を奪せしなるべし。
案沈休文齊故安陸昭王碑文注並に謂ふ導河積石導淮自桐柏導渭自鳥鼠同穴導洛自
熊耳は皆其の水其の山より出づるに非ず。待其の山より以て之を導くのみと。二家
の説の如くんば「導河積石」の句亦當に「自」の字有りて佗の三句と同例なるべし
に似たり。
此の注引く所「積石」の下「至于龍門」の四字無きは李善之を節去せしなり。

注 尚書曰導渭自鳥鼠同穴

今本尚書禹貢篇第八卷文同じ。

注 尚書曰百寮師第七卷

今本尚書皋陶謨篇第四卷師第七卷

案するに卷四十三孫子刑爲石仲容與孫皓書注亦尚書此の經を引いて足利本四部叢刊本淺野本は此の注と正に合し集注本胡刻本六家本は「寮」を「僚」に作る。疑ふらくは李善の舊旨「寮」に作りしに轉寫者或は改めて「僚」に作り竟に參差齟しからざるを致せるなるべし。尚書釋文「百僚」を大書し小注に曰く「本又作寮」と。然らば李善據る所の尚書は釋文引く所の一本と合せるに似たり。「寮」は即ち説文の「寮」の字、九經字樣六部に云ふ寮。説文を攷ふるに寮穿也从穴寮聲四部叢刊大序本。寮好兒从人寮聲第八卷上。是れ「寮」「僚」兩字其の音相同じく其の義互に殊る。而して穿説文六部穿通と訓せらるる寮の字引伸して亦「小空也」五經文字七年と訓せらるれば百寮の字本當に「寮」に作るべく其の僚に作る者は假借の字なり。

注 尚書曰綴衣虎賁第八卷

綴衣虎賁第十五卷

今本尚書五刑篇周公若曰拜手稽首告嗣天子王矣用威戒于王曰王左右常伯常士準人綴衣虎賁第十五卷

案するに此の注引く所節に从ふ。

此の正文「贅衣」に作り注引尚書は則ち「綴衣」に作る。是を以て李善尚書を引くの下段に「公羊傳曰贅猶綴也」を引いて「贅」「綴」通用を明かにせり。今本公羊傳

の文無し文選卷中世劉超石勒通表注亦「公羊傳曰贅猶綴也」を引く卷中五

注 尚書曰湯湯洪水方割第九卷

今本尚書堯典篇第二卷文同じ。

案するに卷十二木玄虛海賦注卷廿九張景陽雜詩注並に此の經を引いて皆此の注引く所と同じ。

注 尚書曰决石碣石入於河第九卷

今本尚書禹貢篇决石碣石入於河第五卷

案するに今本尚書語助の「于」の字李善引く所數く「於」に作る。是れ李注本より「於」に作りしか抑、初の「于」に作りしを後人改めて「於」に作れるが邊に定むべからず。

東都賦

天人致誅

注 尚書曰我則致天之罰第十三卷表

今本尚書多方篇第十三卷表文同。

主人致亡

注 尚書曰主人保厥居第十三卷表

今本尚書旅獒篇第十三卷表生民保厥居第十三卷表

案するに足利本文選・四部書刊本文選並に正文及び注引尚書皆生民に作り六家文選は正文のみ「生民」に作りて注は「生人」に作る。又尚書正義は「生民」に作りて經文と合するに孔傳は「生人」に作りて經文と合せず。蓋し東晉の書本「生民」に作りしを唐の時「民」の字を避けて「人」の字に作ることに有りたるに因りて此の混亂を致せるならむ。

故下人號而上訴

注 尚書曰並告無辜于上下第十三卷表神祇第十三卷表

案するに既に第 頁に出づ。

遂起大河跨北嶽

注 尚書曰至于北岳第十三卷表

今本尚書舜典篇第十三卷表文同じ。

案するに正文「嶽」に作りて注は「岳」に作りて兩者相同じからず。是れ本より然りしか。抑々轉寫改字せしか。今明かにし難し。

隳行天罰應天順人斯乃湯武之所以昭王業也

注 尚書武王曰今予惟隳行天之罰第十三卷表

今本尚書牧誓篇序武王第十三卷表與受獻于牧野作牧誓

經王曰第十三卷表今予發惟恭行天之罰第十三卷表

案するに此の注「發」の字無きは蓋し李善之を略せるならむ。

此の注「隳」に作りて今本尚書と異なるは自ら是れ李善據る所の尚書此くの如かりしなり。

今本尚書此の「恭」の字古本皆「隳」に作る。武内博士景照敦煌本・内野本二本京都府

所に二恭三善治受四天明七年刊本五俱に「今予發惟隳行天之罰」に作り六以上三本皆偽後漢書班固傳七

得る八注百兩本列傳第九尚書武王曰今予惟隳行天之罰十を引く。是れ其の明證なり。

皮錫瑞今本尚書胡紹煥文選並に此の注引く所「隳」に作るの故を以て李

善今本尚書に據れりと謂へるは皆謬れり。

「恭」「體」同異の攷、詳に第14頁に見ゆ。

遼都改邑有殷宗中興之別焉。
注尚書曰盤庚遷於般。第二十四卷表

今本尚書盤庚篇上盤庚遷于般。第二十四卷表
案するに「於」「于」異同の攷既に第14頁に見ゆ。

即土之中有周成陸平之制焉。
注尚書曰詔曰王來紹上帝自服于土中。第二十四卷表

今本尚書曰詔篇。第二十四卷表
案するに卷三張平子東京賦注「尚書曰自服于土中」を引く。又卷十潘安仁西征賦

注尚書此の文を引いて「周公曰云云」に作り、「服」を「履」に作る。攷第14頁に見ゆ。

允恭乎孝文

注尚書曰允恭克讓。第二十四卷表

今本尚書堯典篇允恭克讓。第二十四卷表

案するに今本文選卷四張平子南都賦注「卷九班叔皮北征賦注」卷十一何平叔景福殿賦注「卷七曹子建求通親親表注」劉越石勸進表注「卷四十八班孟堅典引注」俱に尚書此の文を引いて皆此の注と同じ。但、案注本卷九吳都賦注引く「恭」を「體」に作り

今本具部賦注此の文を引かず。卷七十三下求通親親表注引く所「恭」を「體」に作り、「讓」を「履」に作る。「體」に作り、「履」に作る者、李善の舊を存するに似たり。此の注疑ふらくは後人の改竄を経たるなるべし。

憲章稽古

注尚書云。若稽古帝堯。第二十四卷表

今本尚書堯典篇。若稽古帝堯。第二十四卷表

案するに、卷十一王文考魯靈光殿賦注「亦尚書を引いて其の文此の注と同じければ、李善據る所の尚書「堯」に作りて「巳」に作らざりしを知る。第二十四卷表

唐初孔傳本尚書「堯」に作れる者、未だ作に例證を得ざれども、今尚書說命上「巳」の字凡そ五見、說命中凡そ三見、說命下凡そ六見、西伯既黎凡そ四見、微子凡そ三見する者、

皆「堯」に作りて「巳」に作らざれば「曰若」も亦「堯若」に作りて李善引く所と相同じき本有りし事推して知るべきなり。

陳喬樞曰く「古文皆作堯若無作曰者、遠周書武穆解堯若稽古曰昭天之道、昭帝之軌、遠周書本古文也、據武穆解亦作堯若是古文作堯之證」。續說文卷二第五篇。鄭注本尚書亦「堯若稽古帝堯」に作り、又、武穆子「堯若稽古天皇氏地皇氏人皇氏」

即不足證本の文有れば、古文本「堯」に作るとの説或は然るべし。

考聲叙之所被

注尚書曰東漸于海西被于流沙朔南暨第十四葉裏

今本尚書禹貢篇東漸于海西被于流沙朔南暨卷六

案ずるに卷廿應吉南晉武帝華林園集詩注尚書を引いて此の注と同じなり卷廿四曹

子建七放注引く所集注本卷六に在りては「暨」を「界」に作りて李善の舊を存するに似

たれば疑ふらくは此の注亦當に「界」に作るべし放第

武億經讀考異に曰く「文選車都賦注引朔南暨聲敘東京賦注引又作聲敘訖于四海李

氏並從兩讀經と。案するに武氏の説非なり。東都賦注引く所は李善孔讀に从へ

る者なるも東京賦注に於ては則ち尚書を引くの上「善曰」の二字無ければ本是れ

薛綜の讀自ら介りしか或は後人鄭注本若しくは蔡傳本に據りて添加せる者鄭注

「暨」の二字を下の兩賦注者人各異る。李善兩讀に从へるに非ざるなり。

登靈臺考休徵

注尚書曰休徵第十六葉裏

今本尚書洪範篇卷三文同じ。

案するに卷廿四曹子建七放注尚書を引いて此の注と同じ。

注尚書曰宅朔方曰幽都第十六葉裏

北動幽崖第七行

今本尚書典範篇卷二文同じ。

案するに卷五左太冲吳郡賦注卷七楊子雲甘泉賦注卷九楊子雲長楊賦注卷廿八陸士

衡樂府注卷廿四曹子建七放注俱に尚書を引いて皆此の注と同じ。

陳百京而贊聖后

注尚書曰玼璫于臺后第十六葉裏

今本尚書舜典篇卷三文同じ。

案するに卷五十三陸士衡辨亡論注亦尚書此の文を引いて足利本四部叢刊本澤野本

六家本俱に「璫」を「璠」に作る改第廿八三頁

胡刻本此の注「尚書曰」の上「百僚已見上文」の六字有り足利本六家本同じ。

四部叢刊本澤野本は則ち「尚書曰百寮師師」の七字に作る。四部叢刊本澤野本は

西都賦注に據りて提出せるに似たり。凡そ此の類皆論せず。

歌九功舞八佾

注尚書禹貢曰水火金木土穀惟修正德利用厚生惟和九功惟敘第十六葉裏

今本尚書大禹謨篇禹曰隔句水火金木土穀惟修正德利用厚生惟和九功惟敘卷四惟歌

案するに此の注「禹」の下誤つて「章」の字を行す。李注理由無くしては論名を記さず。第 頁参照。

又、卷卅六王元長永明十一年策秀才文注、布尚書此の文を引いて、胡刻本は「九功惟序」
 九序。惟歌に作り、卷六左太冲魏都賦注、鳥賁「西戎即敘」を引いて各本並に「敘」
 を「序」に作り、卷十九東周微補注、詩注洪範「各以其敘」を引いて各本並に亦「敘」
 を「序」に作れば、此の注「九功惟敘」の「敘」の字當に「序」に作るべきに似たり。
 然らば則ち李善據る所の大島謨は、羣書治要引く所、後漢書班固傳注引く所、
 列傳第卅下、及び足利古本、考文第廿九、と合し、今本尚書と合せざるを知る。説文を攷ふるに、
 敘、次第也。又、卅下、序、東西也。九、卅下、二字其誼異、は尚書此の文誼に於ては、「敘」字に
 作る者是なり。然れども、段王叔は「經傳多假序爲敘、周禮、饗饔、序、序注多釋爲次第是
 也。説文序と曰ひ、毛詩次第の字皆「序」に作りて「敘」に作らざれば、と既説は毛詩校勘
 記(文選釋義)卷二、古本尚書亦「序」を段りて「敘」と爲せる者有りしならむ。
 懼其移心之將明而怠於東作也。
 注 尚書曰分命敘叙平秩東作 第廿七葉表
 今本尚書堯典篇分命敘叙仲宅嵎夷曰暘谷賓賓出日平秩東作 第廿九葉表
 案するに、袁本、胡氏、袁引、六家本此の注「叙」の字を「仲」に作る。
 卷五十九沈休文齊故安陸昭王碑文注、本尚書此の文を引いて各本俱に「叙」に作り
 卷卅六王元長永明九年策秀才文注引く所は「仲」に作る。「叙」に作る者想りくは
 轉寫の誤ならむ。

耳目弗營

注 尚書曰弗役耳目百度惟貞 第廿七葉裏
 今本尚書旅獒篇不役耳目百度惟貞 第廿七葉裏
 案するに、卷四十六任彦昇王文憲集序注、尚書此の文を引いて亦「弗」に作る。陸士衡
 五等論注引く所不に作るは、又「目」の下「則」の字多し。足利古本、雲窗叢刻本、内野本
 蓋し後人之改めしなるべし。
 尚書及び後漢書班固傳注引く所、第廿七葉裏、皆「弗役」に作りて李善引く所と合す。
 凡そ今本尚書「不」の字李善引く所及び、魏古定尚書羣書治要皆「弗」に作る者數
 ふるに勝ふべからず。多く弗に作る。或は古文尚書本「弗」の字を用ひて「不」の
 字を用ひざりしが。
 卷卅六任彦昇天監三年策秀才文注「尚書曰百度惟貞」を引いて「惟」を「唯」に
 作る。攷第卅六頁に見ゆ。
 學校如林

注 尚書曰受率其旅若林 第廿七葉裏
 今本尚書武成篇第廿三葉、文同じ。

案するに、卷四十三孫子荆魚石仲容與孫皓書注、尚書を引いて此の注と同じ。

注 尚書曰玄德升聞乃命以位 第廿七葉裏
 注 尚書曰玄德升聞乃命以位 第九行。

今本尚書舜典篇卷三 文同。

案するに、卷四七劉越石勸進表注尚書を引いて此の注と同じく、卷四一江文通雜體詩注、卷四十五班孟堅答賓戲注並に「玄德升聞」の四字を引く。

尚書釋文舜典第二「曰若古帝舜曰重華叶亨帝」の下小注に曰く、「方輿本或此下更有滑悲文明溫恭允塞玄德升聞乃命以位凡廿八字異聊出之於王注無施」に據る。蓋し此下

允懷多福

注尚書曰非人允懷第十八葉裏

今本尚書伊訓篇卷八 允懷第十四葉裏

案するに「人」「民」異同の攷既に第一二頁に見ゆ。

注又曰永膺多福

今本尚書畢命篇予小子永膺多福卷十九

案するに、卷三張平子東京賦注、卷四十四陳孔璋檄吳將校部曲文注並に尚書を引いて

此の注と同じ。

五行布序

注尚書曰五行一曰水二曰火三曰木四曰金五曰土第十九葉裏
今本尚書洪範篇一五行一曰水二曰火三曰木四曰金五曰土卷十二

第五葉裏

案するに、今本尚書洪範此の五行及び下の五事八政五紀皇極三德稽疑庶徵五福の字の上各一二より八九に至る次第の字有り。江賢謂へらく尚書今古文本文皆此等數

目の字無し、個孔氏譯り増して以て世を欺くなり。詳に尚書畢命篇洪範第六十八第六十三葉經

疏略然るに段王叔は則ち謂へらく此等數目の字今文尚書は之れ無きも古文尚書は

本より之れ有りと。詳に古文尚書畢命篇第六十三第六十八葉に見ゆ。今李善此の注引く所五行の上「一

の字無く卷十九東廣徵補註詩注及び卷四十六王元長永明九年策秀才文注並に八政を

引いて其の上皆「三」の字無く卷六左太冲魏都賦注皇極を引いて其の上「九」の字無く又春秋

左氏傳昭公元年正義「尚書洪範云五行一曰水二曰火云云」を引いて五行の上亦「

の字無し。阮別本卷四十一第六十八第六十三葉此の下孔中獨傳を

建和引くを以て其の據る所は孔傳本なるを知る。此れに據れば、個孔氏本亦本數目無か

りしかと疑はる。但李善及び孔穎達引く所或は節に从へる無きを保し難ければ、未

だ以て遽に定むべからざるなり。

李善此の注尚書を引いて句末「也」の字有るも、以て異文と爲すべからず。引文句末の

助字及び鈔本注末の助字皆或は之を増し或は之を刪ること有るは古人の常なり。

蓋し紙幅餘白の有無に因りて之を増損せしのみ。山井鼎平氏此の義に據せず、是を以て其の七校考

字校注(活録注)

と謂ふ。

尚書洪範篇

尚書洪範篇

注 尚書曰庶草蕃廩 第十九葉東
 今本尚書洪範篇庶草蕃廩 卷十二
 案するに卷三張平子東京賦注卷十一何平叔景福殿賦注卷十九東廣微補注詩注並に
 尚書を引いて此の注と同じ。但景福殿賦注引く所足利本・四部叢刊本・澤野本・六家本並
 に「廩」を「蕪」に作る。致翁一九〇頁に見ゆ。
 昭慶德兮彌億年
 注 尚書曰公其以予萬億年命天之休 第十九葉東
 今本尚書洛誥篇 卷十五 文同じ。

卷第二

張平子 西京賦

於前則終南太一
 注 尚書曰終南惇物至于鳥鼠 第三葉東
 今本尚書禹貢篇 卷六 文同じ。
 案するに卷廿二沈休文鍾山詩應西陽王叔注尚書を引いて此の注と同じ。但此の注
 足利本・袁本・四部叢刊本・茶陵本・等皆「至于鳥鼠」の四字無し。胡克家文選攷異此の
 四字無き者を以て是なりと爲す 第四葉東 也此の注此の四字有るを妨げされば其の是
 非遽かに斷すべからざるに似たり。
 連岡乎嵎冢
 注 尚書曰嵎冢至于荆山 第三葉東
 今本尚書禹貢篇 卷六 文同じ。
 厥田上上
 注 尚書雍州曰厥田惟上上 第二葉東
 第八行

年傳文連周書尙良夫略篇の文惠棟古文尚書攷主鳴盛
尚書古碑の說に據ると致ふるも亦「頃」に作りす。然れども古書「頃」字を以て「繁」字に通借する例有れば朱熹說文解字通義
朱熹說文解字に據る尚書此の文亦唐初本或は「頃」に作る者有りたるか。
姑く記して再致を諒す。

姑く記して再攷を族の

「命主丁巳年三月廿二日申時生，同早立。」

此の注引尚書繫辭には「正文」
と合せて、李善其の高麗に注せ
ざる例古寫本文源に數見。今本は多く相致せしむ。
抑々本文注

王肅造周書

二、其の字相合せしを傳寫一を改めたるか。今之を明かにする能はず。
 三、其の字相合せしを傳寫一を改めたるか。今之を明かにする能はず。
 四、其の字相合せしを傳寫一を改めたるか。今之を明かにする能はず。

郊甸之內鄉邑殷賑

今本尚書禹貢篇 卷六 文
第卅葉表

案するに李善尚書此の經

篠簞敷衍
注
尚書曰璫琨篠簞既敷
第十葉
第三行

今本尚書禹貢篇瑤琨篠簜

高才、李善文選本注義疏卷三に云ふ、「如今本則當作瑤琤篠簞、曰篠簞既數」と、定するに高説非なり、李善何の要ありて此の二句を并せしかむ。蓋し李善本「篠簞」の句を引き、後人又「瑤琤篠簞」の句を宛記す、而して轉

寫誤りて二句を併せ、原注の上
「瑤環」の二字を行せしのみ。

[illegible]

此の注既に禹貢「篠簜既敷」を引いて「簠」を「勇」に作り、卷四十四「陳王孫其號乃作」

此に據りて之を推すに李善據る所の尚書は「勅」の字皆「勅」に作りしに似たり。

凡そ今本尙書「敷」の字古本皆「勇」に作る。尙典「敷奏以言」敦煌本釋文「勇」の字

左出し、内相承以緒孔傳故亦爲古字」と。
 岩崎本、羅氏敦堦本並に皆「勇」に作り、洪範「用敷錫厥」

島田本德富蘇峰「勇」に作り、畢命「惟文王武王敷大德于天

下
の字無し
岩崎本
見せざる
是れ其の
證なり。

説文を攷ふるに、通布也。从寸、甫聲。寸部。取敗也。从匕、甫聲。匕部。兩字音相同。く、養亦

相近し。而して陸徳明對陸本安
樂釋文顏師古顏師古
字師古の字多く古に行はれ、玄應
第五上葉表の字多く後に行はれ、而も其の音義

馬致遠寫本經解釋云發音夜語補正に曰く「野蠻語之後起字」と馬説にふへさに似たり。

「專」の字篆體「寸」に从へるに後或は「万」に从ひ或は「方」に从ふは蓋し「𠂔」「𠂔」相似て誤變せしなるべし。

南翔衛陽

注尚書曰刑及衛陽惟荆州第二十三葉表
案するに既に第九八頁に出づ。

從容之求寔侯定儲

注尚書曰從容以和第二十三葉表

今本尚書君陳篇殷民寬而有制從容以和卷十八
案するに唐寫本文選第九葉此の注無し。

盤于游畋

注尚書曰不取盤于游畋第十三葉表
左より第四行

今本尚書無逸篇文王不取盤于游畋卷十六
案するに唐寫本文選此の注「尚書曰」の下「文王」の二字有り今本卷十四補延年補白馬賦注

「不」を「弗」に作り亦作る。盤を「般」に作り正文亦同「游畋」を「遊田」に作り第十三葉表

て殆んど李善の逸を符す。何を以て唐寫本の善なるを知る。曰く今本尚書五子之

取篇「盤遊無度」意傳略く五子之取此の文選卷十五張平子歸田賦注引く所「盤」を「般」に

作りて第十三葉表唐本王篇第十八之後分舟部般字下唐寫本及北堂書鈔卷十一引く

「般」「盤」同聲の致弟
二七頁に見ゆ。

所と合し又羅氏敦煌本尚書と合す。是れ李善釋る所の尚書般樂の「般」の字血に从は

ざるの證に非ずや。然らば此の注亦「般」に作る者を以て是なりとなすべし。又此

の賦下文「逞欲歌歎」の李善注に云ふ「孔安國尚書傳曰田獵也田與畋同」卷十五葉表

彼の注引く所は無逸篇の傳なり。而して内藤博士景照敦煌本尚書及び内野本尚書

無逸篇此の文並に亦「遊田」に作る。是れ知る此の注「遊田」に作る者李善の舊なるを。

多方篇今尚書本選田段注曰く「詩齊風無田甫田正義引書作田田田」と。

段氏撰異第十三葉表陳氏經說攷卷二十九葉表皆今本文選に據り「西京賦李善注尚書曰不

敢盤于游畋」を引いて證と爲すは是に非ず。

五軍六師千列百重

注尚書曰張皇六師第十四葉表

今本尚書康王之誥篇卷十九文同じ。

耽樂是從

注尚書曰惟耽樂之從第十七葉表

今本尚書無逸篇惟耽樂之從卷十六

案するに唐寫本文選此の注「耽」の字を「湛」に作りて内藤博士景照敦煌本及び内野

本尚書無逸篇と合す。是なり。

王鳴盛曰く「論衡語意篇引作湛致毛詩凡耽樂字皆作湛古字如此」尚書後漢書注卷三
 と。莊子則陽篇「衛靈公飲酒湛樂」四部書刊本卷八國語周語下「處於湛樂」二部書刊本卷三
 大戴禮記保傳篇「樂而湛」四部書刊本卷三皆亦「湛」に作りて「耽」に作りす。
 説文に據れば「湛」は没也。水部「耽」は耳大垂也。耳部「湛」に作りて「耽」に作りす。
 湛樂の意に用ひらるゝは皆「湛」の段借。説文下本部なりと謂はる。段氏説文解字の注「耽」の字
 然れども古人「湛」の字に注して或は「樂之父」と曰ひ毛詩傳或は「過於樂也」
 と曰ひ大戴禮記皆樂遊其の度に過ぐることを謂へば先づ湛没の「湛」の字有り其の引
 申の義湛樂となり即ち事類而して後に「湛」の會意文字派生せしに非るかと疑はる。
 果して然らば湛樂の「湛」は「湛」の假借には非ず從つて湛樂の字「湛」に作る者其の
 古愚を存すと謂はざるべからず。

多歷年所

注 尚書曰般禮配天多歷年所第二十七卷表

今本尚書君奭篇般禮配天多歷年所卷十六
 案ずるに高步瀛云ふ此の注「禮」の下當に「陟」の字有るべしと。李注然れども
 唐寫文選亦「陟」の字無し。卷十九後、是れ轉寫誤りて此の字を奪せしか。抑、李善
 注本より此の字無かりしか。邊に定むべからず。尚書此の經の下文「天惟純佑命
 云々」の傳に曰く「般禮配天惟天大佑助其王命云々」と、傳文「般禮配天」の可

正に經上文を引く而も「陟」の字無し。又文選卷四十三丘布範與陳伯之書注「尚書
 周公曰故般陟配天多歷年所」を引く。彼の注或は本「般禮配天」に作りて此の注
 と同じかりしを後人「陟」の字を補ひて亦偶々「禮」の字を奪せるに非る無けむや。
 但尚書「般禮配天」に作る者未だ此の證を得ざれば今闕疑に从ふ。

此何與於般人禮記禮記前八而後五居相圯耽不常厥土盤庚作詰帥人以苦
 注 尚書曰自契至成湯八遷第二十八卷表

今本尚書帝告篇序文同し。卷七
 案ずるに胡克家云ふ此の注「書」の下當に「序」の字有るべし。改與と。今本文選

に據れば李善尚書各篇の序文を引いて或は「尚書序曰」に作り或は「尚書曰」に作
 りて劃一ならず。而も孔安國尚書序を引いては多く「尚書序曰」に作る。李善用
 ふる所の尚書は偏孔氏本にして書序各篇に分冠せられたるべければ尚書序李善本
 李善本篇序を引いては「尚書曰」に作り偏孔安國序を引いては則ち「尚書序曰」
 に作りて之を判ちしに非ざるかと疑はる。果して然らば篇序を引いて而も「尚書
 序曰」に作る者は後人妄に「序」の字を加へしのみ。李善注以て篇内の文と經文とを連引す、是れ序と
 凡そ此の類復た論せず。

注 尚書序曰盤庚五遷
 今本尚書盤庚篇序初葉表文同じ。

卷第三

張平子 東京賦

競相高以奢麗

注 尚書曰弊俗奢麗也 初聲義

今本尚書畢命篇敝化奢麗萬世同流 卷十九

案するに此の注「弊俗」に作りて、今本尚書「敝化」に作れると同じからず。然れども

卷四十沈休文奏彈王源注尚書此の文を引いて亦正に「弊俗」に作れば是れ李善據る所の尚書自ら此くの如かりしなり。
卷五左平吳郡張注引く所「弊化」に作れども畢注本に在りては之を引かざる。疑ふらくは後注後人の増添せる所致第 同註詳あり。

「弊」に作りて「敝」に作る者他に徴有り。
畢書治要引く所卷三 及 岩崎本

尚書内野本尚書是れなり。説文を攷ふるに「弊」有りて「弊」無し。「弊」の本義は頓仆なり。
第十篇上 段王裁「弊」の字に注して曰く「弊本因大什製段倍爲凡仆之僻俗又引伸爲利弊字遂改其字作弊訓困也惡也此與改弊爲弊正同」

の釋文「敝本作弊」と曰ひ禮記郊特牲釋文亦「敝本亦作弊」
と曰ひ又數理本刊譯
 補闕切韻十四祭の部「弊」の字を以て紐首と爲して「毗祭反因
舊に因に作るべし校勘記に云小

本作敝本作弊」
第十行と注し其の紐別に「弊」の字を收めて「數名」と注すれば漢唐の時

利弊の字多く「弊」に作れること明かなり。

「弊」の字は則ち説文敝衣と訓すれば第十篇下是れ利弊の正字。今本尚書「敝」に作る

は唐以後小學輿り文字正俗の辨論せられてより改めし所ならむ。

尚書「俗」に作る者未だ例證を得ず。然れども李善此の注尚書此の文を引く者は正

文「奢麗」の語を證せむが爲なれば其の尚書は本「弊化」に作れるを之を引いて「俗」

に改むるの要無く亦引文改字は李注の例に非ず。
參照 又卷四十奏彈王源注引け

る者は正文「弊俗」の語を證せむが爲なれば若し李善據る所の尚書「弊化」に作るは

彼の注之を引くに由無きなり。

此れに據りて之を證せば李善據る所の尚書正に「弊俗」に作りて「弊化」に作りたり

しこと當に疑ふべからざるなり。

今尚書此の文の下の他孔傳を摘するに曰く「言敝俗相化卑服奢麗雖相去萬世若同

一流」と「敝俗相化」の四字以て經文「敝化」の二字を釋す。傳既に釋して「敝俗

相化」となすに其の經「敝化」に作りは其の語甚だ不習にあらずや。未だ他孔氏の

何人なるかを知らずと雖も何ぞ其の此に至らむや。疑ふらくは此の爲經本「弊

俗奢麗」に作り傳乃ち「弊俗」を訓釋しては「相化」の二字を添へて「弊俗相化し

と爲し「奢麗」を訓釋しては「卑服」の二字を添へて「卑服奢麗」と爲せるならむ。

果して然らば獨り李善引く所のみ能く偏孔氏の舊を存すと謂ふべし。
 蘭朝亮今本尚書に據り「敝化」の語の本つく所を致へて「詩關雎序云『上以風化下』」
 蓋變風斯敝化矣」尚書集注卷末と謂へるは竟に牽強の失を免かれざるなり。

所推は此所存は固
 注尚書曰推は固存邦乃其昌第三卷表

今本尚書仲虺之誥第八卷表文同じ。

案するに卷五十八類延年宋文皇帝元皇后京策文注「尚書曰邦乃其昌」を引く。

且高既受命建家造邦區夏第三卷表

注尚書盤庚曰永建乃家用肇造邦區夏第四卷表今予將試以汝遷永建乃家第五卷表

重誥篇惟乃丕顯考文王第四卷表用肇造邦區夏第四卷表

案するに此の注「用」の上當に「又曰」の二字を補ふべし。高步瀛「用上版庫誥曰三字否則上無盤庚二字此作又曰二字」李注集解卷三と謂へるは非なり。李善他の書を引くや理無くしては篇名を書せざれば此の注「重誥曰」の三字を補ふべきに非ず。又此の注引く所の「永建乃家」は本盤庚其の民に告ぐる所の言。故に此の注「盤庚曰」に作るも是れ篇名を書せるには非ざれば「盤庚」の二字固より刪るべきに非ず。是を以て此の注惟「用」の上「又曰」の二字を補うて乃可なるのみ。又「又」は此の尚書に承く「盤庚」を以て此の注惟「用」の上「又曰」の二字を補うて乃可なるのみ。

なり。後人群りて「盤庚曰」を承くと爲す。故に終に又曰の二字を刪去せしなり。

武有大啟土宇

注尚書曰建邦啟土第三卷表

今本尚書武成篇惟先王建邦啟土第十二卷表

案するに卷廿四陸士衡苦留長淵詩注卷四十任孝昇奉彈曹景宗注卷四十七史李山出師頌注俱に尚書を引いて皆此の注と同じ。

豈如宅中而圖大

注尚書曰自服于土中第四卷表

案するに既に第一・二頁に見ゆ。

許洛背河左伊右瀍

注尚書曰予朝至于洛師卜瀍水東瀍水西惟洛食第四卷表

今本尚書洛誥篇予惟乙卯朝至于洛師卜河朝黎水狀乃卜瀍水東瀍水西惟洛食第五卷表

案するに卷廿一謝宣遠張子房詩注尚書を引いて此の注と同じ。李善節に从へるなり。

盟津達其後

注尚書曰東至于盟津第四卷表

此れを李善詩注に載せしむ。今段主はる文尚書武成卷三。朱珔父國漢書四の說に从ひて李注となす。

今本尚書禹貢篇又東至于孟津第廿五葉表
 案するに此の注「盟」の字に作るは是れ李善據る所の尚書自ら然りしなり。
 今本尚書の「孟」の字古本或は「盟」に作る。案據る所「師渡孟津」泰誓上「大會于孟津」の兩「孟」の字神田本尚書本に據る。皆「盟」に作り内野本は皆異本「盟」に作る者も尙記す。此れ其の證と爲すべし。子盟津に作る。書孟治要亦大會
 王先謙謂ふ古文は「孟」に作り今文は「盟」に作る尚書孔傳卷六と。王説以ふべからざるなり。

注 臣在輟流錫以大岷

尚書曰導河至於岷江東過大岷第廿五葉表
 今本尚書禹貢篇導河積石第廿五葉表東至于岷江又東至于孟津東過洛汭至于大伾第廿五葉表
 案するに梁氏勅證に曰く「書本云東過洛汭至于大伾此約舉其文耳」第廿五葉表と。然れども卷廿四陸士衡贈馮文麗詩注卷四十三丘希範與陳伯之書注卷六十陸士衡弔魏武帝文注並に「尚書曰東至于洛汭」を引けば李善見る所の尚書或は「東過大岷至于洛汭」に作られて「洛汭」「大岷」互に倒せしに非るかと思はる。但未だ其の切證を得ざるを以て姑く記して再致を俟つ。皮錫瑞漢書注引經考卷二
 段王叔曰く「東京賦臣在輟流錫以大岷善注引東過大岷此正釋文又作之本也」古文尚書
 卷三第廿五と。「岷」に作る者尙數證有り。續漢郡國志注「尚書禹貢至于大岷」を引き

卷三第廿五 尚書正義「得山云再成英一岷岷字經曰山再重曰英一重曰岷傳云再成曰岷與爾雅不同」と曰へば論纂阮本同是れ劉昭及び孔穎達等據る所の尚書亦李善本と合せしなり。
 説文を攷ふるに坏丘再成者也第廿五葉表坏有刀也第八篇上。然らば「岷」は「坏」の異體にして「得山釋文」を出し「岷」を用ふるは「坏」の誤傳ならむ。

注 曰伯相宅ト惟洛食

尚書曰召公既相宅ト惟洛食第五葉表
 今本尚書洛誥篇序召公既相宅經批ト河朔黎水枕乃ト關水東漣水西惟洛食批又ト漣水東亦惟洛食第廿五葉表
 案するに此の注引く所「召公既相宅」の五字は之を序より採り「ト惟洛食」の四字は則ち經文を節引せしなり。李注往往此の例有り。卷十潘安仁西征賦注召誥篇の序と經とを連引するが如き是れなり。高步瀛此の注を以て召誥篇「惟太保先周公相宅」と洛誥篇「批ト河朔云々」とを鈞取せりと爲せる李注義疏卷三は非なり。
 周公初基其繩則直第五葉表

注 尚書曰周公初基作新大邑于東國洛

尚書曰周公初基作新大邑于東國洛第五葉表
 今本尚書康誥篇第廿五葉表文同じ。
 案するに卷廿二穆延年卑囑幸京口侍遊蘇山作注尚書を引いて「新作大邑」に作り

「作新」の二字互に倒す。致弟五ノ其
に見ゆ。

偷安天位

注 尚書曰天位 第五卷裏

今本尚書太甲篇下卷八 文同し。

案するに卷四十九干令什晉紀總論注卷五十二魯元首六代論注並に尚書を引いて此

の注と同じく卷十潘安仁西征賦注卷四十六陸士衡豪士賦序注卷五十八王仲寶褚淵

碑文注引く所「天」の上「伊尹曰」の三字多し。
干時燕民罔敢或貳

注 尚書蒸民乃粒 第五卷裏

今本尚書益稷篇蒸民乃粒 第五卷裏

案するに此の注上引「毛詩曰」以下疑ふらくは李善注ならむ。「蒸」亦「同異」の致弟

書哲玄覽

注 尚書曰睿作聖明作哲 第五卷裏

今本尚書洪範篇明作哲 第五卷裏

案するに卷廿陸士龍大將軍誡會被命作詩注亦尚書此の文を引き各本或は「睿」に作

り或は「睿」に作りて齊しからず。然れども彼の注に在りては本皆「睿」に作れるを
或は五臣本正文「睿」の字に涉りて差されたる疑あり且卷四十六王元長三月三日曲

水詩序注引く所各本皆「睿」に作りて「睿」に作らざれば此の注亦「睿」に作る者蓋し

李善の舊なるべし。

胡紹煥文選箋證に曰く「此用虞書睿哲字本書魯靈光殿賦睿哲欽明同而陸士龍大將

軍誡會詩睿哲推賢處子諒贈劉琨詩潘哲推皇則又用商頌潘哲推尚文睿潘雅出古字通

用注皆引卷三と。胡氏此の賦及び魯靈光殿賦潘哲の字を用ふと謂ふは

非なり。與典「潘哲」の語は姚方興上る所の或本に見え是れ偏中の偏に屬する者張

衡王延壽安んぞ之を見るを得む。李善姚本の偽作たるを知らずと雖も而も此の

注與典を引かすして洪範を引く者は蓋し此の正文「睿」に作りて「睿」に作りざるを

以てなり。

説文を案するに叔邵に曰く「睿突明也从収从目从谷省睿古文睿」下 叔邵に曰く

「睿深通川也从収谷聲也谷所流也從収或从水睿古文睿」下 又今本玉篇

目部第四十八 廣韻十三解 並に亦潘安仁西征賦潘哲推皇則又用商頌潘哲推尚文睿潘雅出古字通

用字蓋然相判るべし。洪範經文睿哲推賢卷三 李善惟此の二字を分り。是を

以て此の賦「睿哲玄覽」卷廿陸士龍詩「睿哲推賢」卷四十六王元長曲水詩序「儲

佑睿哲在躬」に注しては皆洪範「明作哲睿作聖」を引き卷十一魯靈光殿賦「潘哲

欽明」卷四十六魏延年曲水詩序「皇上以睿文承歷」に注しては皆與典「潘哲文明」

段上龍詩注王元長文注
引く所當亦「哲」に作る

を引く。李善引文の精到概ね此くの如し。但胡氏「書」古字通用するを以て國正文「書」の字に作るとも其の注は則ち當に長發「治哲」の文を引くべき者有るに李善皆尚書を引くは誤れりと謂へるは是なるに似たり。出づ。説各條に
國華煥麟曰く「説文川篇穿通流水世穿本訓通故川華乳爲容深通川也古文作書從書聲亦變易爲浚行也書轉入隊華乳爲叙深明也通也古文作書」文昭二第廿七葉と。此れに據れば「書」は「書」の音轉華乳の字なり。
此の注哲の字今本尚書に異るも晉書五行志上百兩本卷十七引く所及び晉書叢刻本尚書卷五並に「明作哲」に作れば龍詩注王元長文注李善據る所或は亦「哲」に作りて哲に作りたりしか。但洪範「明作哲」の傳文を案するに「昭」了と訓すれば其の字説文に於ては「哲」の字説文五上に當りて「昭」の字説文五上に當らず。是を以て洪範此の文當に「哲」に作るべからずとの説有り。沈氏注王元長文注李善據る所或は亦「哲」に作りて哲に作る者有る亦妨げざるなり。唐初以前本尚書字俗字多かりしこと胡氏家訓書證篇龍詩注王元長文注
此の注引く所今本尚書と其の文次異る者は蓋し李善の正文に順ひて之を改め引けるに因るにて其文本より異れるには非ざらむ。小雅小旻「或哲或謀或肅或文」鄭玄「書曰書作聖明作哲聖作謀恭作肅從作文」を引いて亦今本尚書と文次異る。

而して毛詩正義に云ふ「順此詩經故倒彼書文也」と古人引文自ら此の例有るに似たり。

要荒來簡

注尚書曰五百里要服又五百里荒服

今本尚書禹貢篇卷六第廿葉表及裏文同じ。

案するに卷廿七劉起石勸進表注尚書を引いて此の注と同じ。

昇惟帝臣

注萬邦黎獻與惟帝臣第四行

今本尚書益稷篇萬邦黎獻與惟帝臣第五葉

案するに胡克家攷異此の注「萬」の上當に「尚書曰」の三字有るべしとなし第一葉裏

孫星衍皮錫瑞等も亦此の注を以て李善尚書を引けるなりと爲す。果して然らば李善據る所の尚書「萬」に作りて「共」に作らず今本尚書と異りて今文と合するに似たり。

然るに註に怪しむべきは卷廿七潘安仁藉田賦「具惟命臣」第七葉裏の注「西晉書」京賦曰具惟帝臣」を引きて尚書を引かず卷廿四潘正叔閣陸機出爲吳王郎中令詩「具惟近臣」第十七葉の注亦東京賦を引いて尚書を引かず。而して卷廿四陸士衡贈馮文龍詩廿五葉「奄有黎獻」第九葉裏の注に至りては尚書を引くも「共惟」に作りて「具惟」に作らざることを是れなり。潘安仁の賦潘正叔の詩皆正に「具惟」の文有り

若し李善の尚書「具惟帝臣」に作らば、何ぞ之を引かすして東京賦を引けるや。李善彼の二注に於て尚書を引かす、而も陸士衡詩注尚書を引いて正に「具惟」に作る是れ其の據る所の尚書「具惟」に作らざりし明證に非ざるか。若し然らば此の注「萬邦」以下八字は蓋に其の上「尚書曰」の三字を脱せしのみ、に非ずして尚訛誤ありと謂ふべく直に以て李善の尚書此の如しと斷すべからざるに似たり。

訪萬機詢朝政
注尚書曰一日

注
尚書曰一日二日萬幾第九卷表
第五行
此れ胡本薛注と爲し他本皆李注に屬せしむ
今胡氏攷異の説に从ひて李注と爲す。

今本尚書皋陶謨篇一日二日萬幾卷四弟廿二葉裏

察するに、卷卅六仕孝昇天、監三年策秀文、注文卷四十八、孟孟聖典引注文卷五十六、陸佐公石闕銘注、俱に尚書を引いて、皆此の注と同じければ、李善撰る所の尚書正に「襍」に作れるを知る。

胡昭瑛此の注に、本に據りて胡氏用ふる所疑ふらくは毛季、此の正文、疑ふべきに作れるべしと讀へるは、例行逆施の見なり。

後漢書李膺注尚書此文を三引して
列傳第八上馬援傳第四十三卷
傳第四十四馬援傳
皆「機」に作り文選等

今本尚書典義「納于大麓」の傳及び大禹謨「帝曰格汝禹朕宅帝位三十有三載云々」

の傳に尙「葛樵」の文を存す。是れ卑陶譯經文も亦本「樵」に作りし痕跡に非るか。
江蟹尚書集注音疏に僞孔本「棧」に作ると云へども經解本各録善第
十五第八集索是れ惟今本に據れり。

の說、其の非なること前述の證佐によりて之を知るべし。蓋し、倘孔傳「機」を訓して「微」となせるを以て、後人微の訓に拘して、妄に經文「機」を改めて「筴」に作れるに至るのみ。倘孔本本より「筴」に作れるには非なるなり。

たれる處を以て採とせざるも、本鳥刊傳に足るの說非なり。澤人の注「解韻(借字)を注する」に之曰く、「此は本字たることなきに於て其の訓を施す有り、毛詩傳箋其の例多し」として、鸛孔也尚書を傳する。亦其の例に依つては、鸛へ鸛孔也と云ふは、鸛と鸛とも其の經文は、鸛と爲すなり。

格叔夜與山巨源絕交書注引く所「萬」を「万」に作りて李善の舊を存するに似たれば此の注亦本「万」に作りしかと疑はる。「萬」「万」の攷彼の條に見ゆ。

發京倉散禁財

尚書曰：「散鹿麋之財，發鉅橋之粟。」卷十一
五十一
今本尚書武成篇散鹿麋之財，發鉅橋之粟。卷十一
五十一

案するに鍾士李愷蜀文注尚書を引いて集注本「鉅樹」を「巨樹」に作る見ゆ。

勸業省
注 尚書曰屢省乃成 第九卷表
第五行
足利本六家本並に「成」の下「功」の字有り、
六家本「乃」を「功」に作る。

今本尚書益稷篇屢省乃成卷五 第二葉表
案するに李善文選を注して尚書此の文を引くこと惟此の一條のみなれば今本尚書と同じき者其の舊なるか、「汝」に作り「功」の字有る者其の舊なるか終に之を定む

之經義述聞に云ふ「文當謂肩髻戚扶無髻者謂自上帝以至靈神徧其尊卑大小之次而紀之無有般亂也」從前本に據る嵯峨山房と。皮氏今文尚書攷證卷十八王引之の説を是なりとし漢人今文の義當に是くの如くなるべしと云へり。今此の賦「戚扶」の語を説するに其の義亦王引之の解に从ふべきに似たり。王肅此の經の注或は偏孔氏と異りて王引之の解と同じかりしか。

又案するに、李善此の賦の「羣望感枝」に注して、洛誥「感枝無文」を引けば、賦上文「元祀惟稱」に對しても亦、當に洛誥上文「稱枝元祀」を引讀すべきに似たり。

神歆馨而顧德

注
尚書曰明德惟馨
第五行
第十二葉表

此の注各本詩綜に屬せしむ。胡氏攷異、高氏善政皆謂、尚書の上「善旦」の二字を奪すと。今二氏の説に従ふ。

今本尚書君陳篇卷十八
第十一葉表 文同じ

四靈鑒而允懷
注 尚書曰民其允懷
第十二葉表
左より第四三

今本尚書周官篇卷十八第七葉表 文同じ

蒸蒸之心感物曾思。

尚書曰虞舜蒸蒸
東行

今本尚書堯典篇師錫帝曰有鰥牡註二壯曰虞舜帝曰兪予聞如何岳曰瞽子父頑母嚚象傲克
諧以孝烝註三又格格註四烝表註五
案するに孔傳に據れば此の經讀んで當に「孝」字を以て句し、「烝烝」の二字は下に

「蒸」兩字異同の攷。第五・七頁に見ゆ。

文德既昭

注尚書曰誕敷文德 第十四集卷第七行

今本尚書大禹謨篇帝乃誕敷文德

案ずるに卷四十四陳孔璋檄吳將校部曲文注亦尚書此の文を引いて「勅」を「令」に改めば此の注當に本相同じかるべし。攷彼の條に詳なり。

同衡律而壹軌量齊急舒於寒燠

注、尚書曰同律度量衡

今本尚書舜典篇第三葉表文同し。
注又曰謀恒寒若豫恒煥若胡氏汝翼に曰く「袁本茶陵本課作急是也」と四部叢刊本六家本亦「急」に作る。此れ當に訂すべし。

今本尚書洪範篇曰豫恒燠若曰急恒寒若

案するに、朱文選集釋に曰く、「豫字乃孔傳本當に今孔傳本と違ふし。古孔傳本所に作らざりしこと此の注引く所とすべし。正義云鄭

王本作舒又自史記漢書及各志多作舒舒與豫因通也但此顧正文作舒註如作豫當云兩
與舒通今無此語知王本作舒矣明殆校者據今本尚書所改也上 李氏梅村家範本卷四
與舒通今無此語知王本作舒矣明殆校者據今本尚書所改也上 李氏梅村家範本卷四
與舒通今無此語知王本作舒矣明殆校者據今本尚書所改也上 李氏梅村家範本卷四

宋説是なるに似たり。卷六十陸士衡弔魏武帝文注「尚書曰王有疾弗愈」を引いて正に「愈」に作れば今尚書は此の注亦本「舒」或は「愈」に作りて「豫」に作らざりしならむ。内野本尚書及び雷窗叢刻本尚書洪範傳に「愈」に作る。

此の注「愈恒寒若」を先にし「豫恒燠若」を後にするは今文尚書と合するに似たり。今文尚書此の經の文次今本と異なること皮氏今然れども李善絶えて今文尚書を引かざれば、文尚書攷證卷上第廿一葉裏に見ゆ。

此の注賦の正文に順ひて文次を改め引けるか否らずんば李善據る所の古文尚書自ら是くの如かりしのみ。

廣多福以安危

注尚書曰永膺多福第十七葉裏

今本尚書畢命篇予小子永膺多福第十九葉表

案するに胡代攷異に曰く「袁本此七字作多福已見東都賦是也」と。足利本六家本並に袁本に同じ。胡代多く袁本を信じ其の「已見某篇」に作り或は「已見上文」に作る者は皆袁本を是として搜出せる者を非とす。然れども異篇再見する者各本盡く搜出する有り又袁本「已見」に作るも集注本は正に搜出する者有れば李善は異篇再見する者を以て盡くは「已見某篇」に作りしに非ること明かなり。是を以て胡代惟袁本にのみ是れ據りて他本の搜出せるを悉く李善の舊に非ずと爲すは遽に从ふべからざるなり。此の辨得た論せず。

重古之人九譯敘指首而來王

注

尚書曰禹桉桉第四葉裏四裔來王第十八葉表

今本尚書兪兪典篇禹桉桉第四葉裏于桉桉第二十一葉表暨島第二十二葉表

大禹謨篇無怠荒第四葉裏四裔來王第十八葉表

案するに此の注四夷の上當に「又曰」の二字有るべし。各本皆奪す。

所書惟賢所寶惟穀

注尚書曰所書惟賢第十八葉裏則通人安第三十三葉表

今本尚書旅獒篇所寶惟賢第三十三葉表通人安第三十三葉表

案するに蔡師古匡謬正俗卷二に曰く「惟解也蓋語之發端書云惟三月故生魄惟十有三祀王訪于箕子之類是也古文皆爲惟字而今文尚書變惟爲推者同音通用假義無別」

と。此れに據れば類見る所の古文尚書皆「惟」の字を用ひたるが如し。然れども易詩奇字等に「惟」「唯」通用の例有り朱氏說文假借左傳は專ら「唯」を以て語習と爲し論語亦多く「唯」を用ふれば李富孫說文解字正俗古文尚書古鈔本或は間々「唯」の字を以て語習と爲せる者有りたるかと疑はる。說命下「爾惟鹽梅」文選鈔集注卷二十一引いて「唯」に作り旅獒「百度惟貞」卷卅六仕考昇天監三年第才文李注引いて「唯」に作り大誥「爾惟哲人」卷五十四陸士衡五等論注引いて「唯」に作り無逸「文王受命惟中身」卷五十九王蘭樞說院寺碑文注引いて「唯」に作り又君澤「明德惟馨」和府昭卷八百六十四吉田金兩引して皆「唯」に作り秘府略此の兩條並に今本作惟と考証す。康誥「惟民其康乂」後漢

書揚賜傳列傳第四十四陳蕃傳列傳第五十六並に引いて皆「唯」に作るが若き其の證なり。然らば則ち此の注「唯」に作る若ししも轉寫改むる所とのみ斷すべからざるに似たり。

卷卅七孔文學屬福衡表注尚書此の文を引いて「通」を「途」に作れば此の注亦當に「途」に作るべきかと疑はる。

況慕帝業而輕天位注尚書曰天位報欲第十九葉表胡氏攷異に曰く「報本此二字作天位」是なり。

案するに既に第一二八頁に出づ。

猶憐憫於一人注尚書曰憐憫惟屬第四行胡氏攷異に曰く「憐憫」當作「憐」是なり。

今本尚書曰命篇憐憫惟屬中夜以興卷十九

案するに卷廿魯子建書詩注尚書を引いて此の注と同じく又卷卅四枚叔七發注引

「中夜以興」の四字多し。

草木蓄無注尚書曰庶草蕃庶第三行足利本四部書刊本に「草木蓄無」を「草」に作りて校持無し。

案するに既に第二二頁に出づ。

上下共其應注尚書曰黎民於變時雍第五行

今本尚書堯典篇第八葉表文同じ。

案するに卷十一何平叔景福殿賦注卷廿魯子建書詩注卷卅五張景陽七命注卷四十四司馬長卿難蜀父老注卷五十五陸士衡漢連珠注卷五十六魯子建王仲宣詠注俱に尚書を引いて此の注と同じ。但七命注引く所李善の舊「雍」を「邑」に作りしかと疑はる。致遠注若し彼の注本「邑」に作れりとせば他の注引く所も亦本「邑」に作りしなり。

注又曰庶穠賦注

今本尚書堯典篇第九葉表庶穠賦卷二

又堯典篇庶穠賦分北三苗案するに卷十一景福殿賦注卷五十八王仲宣詠注尚書を引いて此の注と同じく卷廿陸士衡皇太子宴玄圃宮飲堂有令賦詩注卷四十八楊子雲劇秦美新注引く所「允釐百

工」の四字多し

凡人心是所學體安所習

尚書曰夫常人安於俗學溺於所聞第三行足利本四部書刊本に「所聞」を「所聞」に改む。

案するに胡氏攷異に曰く「尚當作尚君二字各本皆誤此所引杜更法篇也」卷一胡說是なり。蓋し轉寫先づ「尚君」の二字を奪し後漢人「書」の上段に「尚」の字を補へるなり。

太澤之德聖威社於此

注 尚書曰明德惟馨 第六行

今本尚書君陳篇 第八行 文同じ。

卷第四

張平子 南都賦

居漢之陽

注 尚書曰唯家導漾東流爲漢 初葉表 第五行

今本尚書禹貢篇 第六行 文同じ。

案するに此の注尚書曰云々の下「鄭玄曰漾水至武都爲漢」を引けば其の據る所は鄭注本尚書なるべし。此の注孔傳を採らずして鄭注を引ける者は蓋し孔傳漢水と武都との關係を明にせざるに鄭注之を明にせるを以てなるべし。

流滄浪而自陸

注 尚書曰漢水又東爲滄浪之水 初葉表 末行

今本尚書禹貢篇 唯家導漾東流爲漢又東爲滄浪之水

珍差琅玕

注 尚書曰厥貢琅玕 第四葉裏 第五行

今本尚書禹貢篇 厥貢惟玕琅玕 第六行

注 又曰惟玕玉會

今本尚書洪範篇 第十五葉表 文同じ。

金銀琅玕

注 尚書曰厥貢玕琅玕 第四葉裏 第四行

案するに既に右に出つ。

黃間機張

注 尚書曰若虞機張 第五葉裏 第七行

今本尚書太甲篇上若虞機張往省括于度則釋 第十九葉表

且其君子弘懿明敷 校語に云ふ善本は明敷を會哲に作り

敷哲世已見東京賦 第六葉裏 第三行

案するに此の注「敷哲世」の三字は李善正文「敷」の字を釋せるのみ。然らば其下直に「已見東京賦」と注すべからざるに似たり。或は四部叢刊本澤野本較、李善の舊を採するか。

允恭溫良

注 尚書曰允恭克讓 第六葉裏 第五行

今本堯典篇允恭克讓 第六葉裏

案するに既に第一。二頁に出つ。

賦納以言

注 尚書曰敷納以言第七卷表 左より第三行

今本尚書益授第敷納以言第十卷表

案するに正文「賦」に作り注は「敷」に作りて兩者相合せず。李注の例當に「賦」「敷」同

異の語有るべし。今此の語無く且つ左氏僖公廿七年傳夏書を引いて「賦」に作れは

江晉曰「左傳左傳同」或は李善見る所の尚書亦「賦」に作りて正文と合せしか否らずん

は此の注本「左氏傳夏書曰賦納以言」に作りしなるべし。卷五十五陸王衛漢律注に左氏傳

後人の改竄を疑て直に「毛詩云」に作り卷廿六左氏傳宣德皇后今注に禮記曰小雅曰云々

を引くを今本亦改竄を疑て直に「毛詩曰云々」に作れる所有り。

注 尚書曰五月南巡狩第五卷表

今本尚書尚典篇五月南巡狩卷三

案するに李善數「尚書曰歲二月東巡狩」を引いて皆「狩」に作り今本尚書と異りて、釋

文引く所の一本と合すれば此の注「狩」の字亦李善の尚書自ら此くの如かりしなり。

「狩」「守」異同の攷第一八九頁に見ゆ。

左太冲 三都賦序

若斯之類匪香于茲

注 尚書曰不香如自其口出第八卷表 左より第三行

今本尚書泰誓篇不香若自其口出卷十四貨表

案するに泰誓此の經の上文「人之有技若己有之」の傳は「人之有技若己有之」と

曰ひて「若」の字を用ひ此の「不香若自其口出」の傳は「不香如自其口出」と曰ひ

て「如」の字を用ふ。然らば今本「不香若自」の「若」は本「如」に作るこ此の注引

く所の如かりしがと疑はる。卷五十五陸王衛漢律注に左氏傳宣德皇后今注に禮記曰小雅曰云々

古梓堂本尚書卷五十五陸王衛漢律注に左氏傳宣德皇后今注に禮記曰小雅曰云々

蜀都賦

萬國對峙

注 尚書曰萬國既寧第九卷表

案するに集注本卷八第廿六此の注「尚書」の二字を「周易」の二字に作る。是なり。引く

所は周易乾象傳の文なり。西都賦注既に之を引く。故に此の注「萬國已見上文」

に作る者は西都賦注を指すなり。然るに胡刻本四部叢刊本澤野本此の注尚書を引

「共」「恭」古今の字と爲し遂に尙書奉と訓するの共を改めて悉く「恭」に作れるは非なりと。恭字假借

今李善引く所の尙書を攷ふるに恭敬の字本より「龍」に作り傳奉と訓するの字亦「龍」に作る。

此の注及び非通親親表注引く所の「允龍」卷廿七頌延年宋郊祀歌注及び卷四十八班孟堅典引注引く所の「嚴襲黃輿」は皆恭敬の字「龍」に作るの例なり。卷一班孟堅東都賦注「今予惟龍行天之罰」を引き卷四十四鍾士李檄蜀文注「予惟龍行天之罰」を引けるは傳奉と訓するの字「龍」に作るの例なり。

恭敬の字奉と訓するの字均しく「龍」に作りて分別せざるは獨り李注引く所の尙書のみに非ず。岩崎本尙書維氏敦煌本尙書亦然り。

尙古文鳳征「乃或弗龍邦又常刑」說命上「龍思道」岩本教本は恭敬の字「龍」に作るの例なり。尙古文甘誓「今予惟龍行天之罰」文弗龍命以上教本

盤庚上「各龍尔事」岩本盤庚中「龍起弗龍」盤庚下「龍兼民命」牧誓生以上岩本教本は奉と訓するの字「龍」に作るの例なり。

又堯典「象恭治天」後漢書董卓傳注六十二董卓傳注引いて「恭」を「龍」に作り、卓陶謨應而恭、後漢書楊震傳注五十三楊震傳注引いて「龍」に作る。

說文を攷ふるに第三篇上其の部に曰く「龍給也共龍聲」段注傳容切九部校と。此れ

人部の「共」段注傳容切九部校と音義同じきなり。段注傳容切九部校又第十篇下部に曰く「恭肅也从心共聲」と。此れ下部の「龍」段注傳容切九部校と音義同じきなり。段注傳容切九部校

然らば則ち「龍」は供給の字にして恭敬の字の若きは當に「恭」又は「龍」に作るべし。

然れども「恭」「龍」二字音義同じく「龍」は亦「恭」と音相同しければ古或は「龍」の字を以て「恭」の字と爲せり。

朱珔曰く「春秋楚恭王召覺權勳篇作製王書象恭治天漢書王尊傳作象龍宜作龍爲是製殆假借字」說文假借義證と。此れ「龍」を以て恭敬の字と爲すの例なり。而も猶宮に轉寫「龍」を誤りて「恭」に作れるを疑ふべし。段注傳容切九部校

緯釋卷五載する所の漢成陽令唐扶頌「處士闔閭羣班應念唐君爲立碑」班字官脩同司太子讓公讓襲班業次縣注治尙書殿陽の「龍叔謙」に至つては是れ石刻轉寫の誤筆を疑ふべからず。而も「龍叔謙」名字相配するを以て此の「龍」の字固より恭敬の意なること亦疑ふべからざるなり。

又歷代鐘鼎彝器款識卷六載する所の孟和鐘「嚴執天命」の「龍」釋文讀んで「恭」と爲し劉心源奇觚室吉金文述四載する所の陳侯因齊鐘「皇考考武趙公穆敬大業」の「龍」釋文讀んで「恭」と爲す。而も「龍」兩字之を說文に照らせば其の形較「龍」に近し。

此れに據れば「龍」を以て恭敬の字と爲すこと全文よりして然るなり。是を以て王

氏第二種本切韻二冬「某」字の後に「𦵏」字を出して「按說文拓作𦵏」に「世古字与上同」と注せるは固より其の所。
竊に疑ふ所「𦵏」字本異體間文其の音義を并にせし非ず。而して云、
俱悉𦵏」は皆同一文より誤引せる者ならむと。王筠說文釋例「𦵏」字下の

此の如く致へ来うは、古本尙書恭敬の字及び傳奉と訓するの字、章の異なれば恭と恭とは異なり、皆「龍」に作る有るを妨げざるなり。

夫の段氏恭敬の字供奉の字分用の説の若きは原本尚書に於ては可は是ならむとと云ふ唐初孔氏本に於ては必ずしも當らず。随つて其の衛包奉と訓するの誤を改めて「恭」に作るとの説亦从ふべからざるなり。蓋し東晉の尚書本より「龍」の一字を以て「恭敬」の義と爲す。是を以て後人「龍」「恭」古今の字なりと謂ひて「龍」を改めて悉く「恭」に作りしに過ぎざるならむ。此の注の「龍」の字主通親親表注引く所は「龍」に作る。李善見る所の尚書「龍」に作

其琛賄則琨瑤之阜

注
尚書曰瑶琨篠簜
第七葉表
左より第三行
集注「玉」を「簞」に作る是なり。竹に从ふの字
古多く竹に从ふ。今本偶々之を存するのみ。

今本尚書禹貢篇瑶琨篠簜

齊南冥於幽都

注
尚書曰宅朔方曰幽都
第七行

案するに既に第一の四頁に出づ。

此の條、集注本卷九第四十條表に在りては、劉注の末に位す。

今今本文選李善注文を攷ふるに尙書を引くの下尙王餘泉室窮陞北戸の注有り而して此れ等の語正文に於ては皆幽都の上に在り。然らば幽都を注せむが爲に引ける尙書は當に北戸の注の下に在るべくして王餘泉室の注の上に在るべからず。乃ち知る今本皆非にして獨り集注本のみ是なるを。

都釐般而四與來既第九葉表末行

尚書曰四隠既宅此の注板本皆之れ無し、今集注本（卷九第五十七葉裏）に據る。

今本尚書禹貢篇四隅既宅

案するに此の願の正文各本皆「興」に作りて「興」に作る。法のみ「興」に作れるを知る。

るに注引尚書に「陶」に作りて而も本善^{（一）}と「陶」同異を辨せざる。其の誤を正し、
に作りて正文と相合せしなり。願延年三月三日曲水詩序注亦尚書此の經文を引い

尚書古本「**與**」に作る者有りたるの證第四三。頁に見ゆ。

干函受鑑
尚書曰
梅爾干
第十一條
第五行
胡氏攷異に曰く「尚上當有善曰二字各本皆脱」と
九の王上下の文を放るに胡説是なり今胡氏に従ふ

今本尚書牧誓篇梅爾士比爾干

案するに此の注「稱」の字當に「比」に作るべし。蓋し尙書上文に涉りて誤れるなり

卷第六

左太冲 魏都賦

尚書曰庶民罔不懷初葉表
注 尚書曰庶民罔不懷定刊本、四部書刊本、定野本、國語館の二書と異なり。

今本尚書皇陶謨篇庶民罔不懷初葉表
案 するに「皇書治要引く所正に「屬」に作り第六葉表此の注と合す。段玉裁曰く「屬衛

包改作屬屬。攷正義孔訓勉勵王訓勉勵屬云屬作也鄭說本爾雅釋詁古者砥礪勉勵皆作屬無作屬勸者屬本早石引伸爲勉勵屬作不獨鄭本作屬王孔本亦作屬也」初葉表

此の注及び治要引く所以て段説の嫡證と爲すべし。

附麗皇極

注 尚書曰皇極皇建其有極初葉表
今本尚書洪範篇五皇極皇建其有極初葉表

五則內勳 案 するに攷既に第一〇九頁に見ゆ。

注 尚書曰崇信初葉表
今本尚書崇信初葉表

注 尚書曰崇信初葉表
今本尚書崇信初葉表

謀觀謀筮

注 尚書曰謀及卜筮初葉表
今本尚書洪範篇初葉表

案 するに李善此の經を引くこと凡そ二回文皆同じ。

用觀羣后

注 尚書曰肆觀羣后初葉表
今本尚書舜典篇肆觀羣后初葉表

案 するに卷十一「孫卿公遊天台山賦」「肆觀天宗」注卷十九「孟諷諫詩」「庶尹羣后」注並に亦此の經を引いて皆「羣后」に作る。「羣后」佗書に於て微無し。

然れども此の正文及び諷諫詩正文明かに「羣后」の語有れば其の注引證する所亦當に「羣后」の語有るべく當に「東后」の語有るべからず。而も尚書一書に於て「羣后」

の語數見するに李善特に「肆觀羣后」の文を引けは是れ李善の誤筆に非んば則ち其の尚書本より「羣」に作りて「東」に作りざりしなり。

今禮記王制を案するに「歳二月東巡守至于岱宗柴而望祀山川觀諸侯」の一節其の文宛然と相似て而も「諸侯」に作る。「諸侯」の語較「羣后」に近し。

又史記封禪書「尚書曰屬」歳二月東巡狩至于岱宗岱宗泰山也柴望秩于山川遂觀東后東后者諸侯也」初葉表の文有り風俗通山澤篇亦「謹按尚書歳二月東巡狩至于岱宗

崇信宗泰山也望於山川遂見東后東后諸侯也。四部書刊本卷の文有り。「東后」當に東方之諸侯と謂ふべくして惟「諸侯」の二字を以て傳すべからざるに似たり。然るに二書「東后諸侯也」と謂ふ者は是れ「東后」の「東」の字誤謄有るに非るかと思はる。

又典下文「如岱禮」「如初」「如西禮」を併せ攷ふるに岱宗の下「肆觀羣后」に作る者を以て較、長と爲す。

是れに由つて之を觀れば古本尚書或は「羣后」に作る者有りたるかと疑はる。

昭和十年春既に此の條を草せしも固より專輒の言意未だ安からざる有り。昭和十一年十月二日加藤常賢教授より丁山説文關疑答辭に「東」「肆」の關係を説くと致へらる。乃ち丁氏の者を閱するに其の説大要左の如し。

「東」は本「東」の字聲と東と雙聲なるが故に古文樂を借りて東方と爲す。「東」を重ねて「肆」の字有り。其の本義を舊偶と爲す。即ち東(東)の義の引伸なり。而して「肆」の字は則ち「肆」に从ひ又肆の聲に諧へば「肆」の字の義本より「肆」の字より生ず。第廿八卷九章

丁氏主として殷虛卜辭を以て據と爲し其の説頗る條理有り。

但是より先王筠説文同諸侯注俞樾記名錄全書皆「東」「肆」兩字に非すとの説あるに丁山は則ち「東」「肆」一字に非すと謂へるは遽に从ふべからず。

今説文「肆」獄之兩書也在廷東以肆治事者以曰。第五篇上を攷ふるに其の「在廷東」

と謂へるは其の字「肆」が故なり。是れ鄭君「肆」を以て「東」と爲せるの證なり。若し「肆」を以て「東」に非すと爲さば何に由つてか「在廷東」と謂ふを得む。或は疑はす「肆」の字義は本「東」の義より生ずとの説は丁氏を采るべし。鄭君既に「肆」を以て「東」と爲し而も「肆」の字「東」に从はすして「肆」に从ふ。故に「肆」の字形に據つて又「獄之兩書」と謂へるなり。

是れ鄭君「肆」を以て「東」と爲せること當に疑ふべからず。

是に於てか予は「東」「肆」同字の説は王俞兩氏に从ひ「東」は「東」の假借にして「肆」

「肆」の字義は本「東」の義より生ずとの説は丁氏を采るべし。今此れに據りて更に鄭君を逞しうせむに尚書「肆觀東后」は本「肆觀肆后」に作

られしに非るかと思ふ。既に「東后」に作らば或は「肆」を讀んで「東」と爲して「東

后」に作れる尚書出づべく又「肆」を讀んで「肆」と爲して「肆后」に作れる尚書出づ

べし。而して「肆」は「肆」に訓せらるゝを以て毛詩大雅公劉傳太平御覽卷又「肆后」に

作れる尚書出でたるなるべし。五帝本紀亦「肆后者諸侯也」に作りて文義乃ち完し。

匪徒匪弼
注尚書曰既勤樓新初行

今本尚書梓材篇卷六 文同し。

納言有章
注 尚書典命作納言初 卷六

今本尚書帝命作納言初 卷六

案するに、此の注李善の舊は「汝」を「女」に作れるに似たり。攷弟

頁に見ゆ。

庶土罔寧
注 尚書曰庶土交正第十 卷六

今本尚書島文同し。

剋罰方命
注 尚書曰方命第十 卷六

今本尚書堯典命作命 卷六

抗阻率由
注 尚書曰率由第十 卷六

今本尚書微子之命第十 卷六

案するに、微子之命第十 卷六
合す。卷卅五元注無公九錫文注尚書此の文を引いて而も「道」を「道」に作るは、
蓋し後人今の尚書に據りて改めしなるべし。
上空拱而司契

注 尚書曰空拱而天下治 卷六

今本尚書武成空拱而天下治 卷六

案するに、此の注「天下化」に作る者微無し。卷四十七王子淵聖主得賢臣頌注亦尚

書此の文を引いて各本皆「天下治」に作る。

於時東殷即序
注 尚書曰西武即序第十 卷六

今本尚書禹貢篇西武即序第十 卷六

案するに、伯孔氏本尚書此の經「序」に作る者他書に於て微無し。然れども大禹謨「九

敘惟敬」卷一東都頌注卷卅六王元長永明十一年策才文注引いて「序」に作り洪範

「各以其敘」卷十九東廣微補註詩注引いて「序」に作れば今本尚書「敘」の字李善本に

杜りては則ち「序」に作りしかと疑はる。

「序」敘同異の攷既に第一。六頁に見ゆ。

東漢書註

注 尚書曰厥貢漆終厥誼文 卷六

今本尚書禹貢篇第八葉 文同し。

延唐樂奏九成

注 尚書曰滿卅九成鳳凰來儀 卷六

今本尚書益稷篇滿卅九成鳳凰來儀 卷六

案するに李善「鳳皇來儀」を引くこと凡て十二回。今の文選「鳳」に作りて此の巻に引く者二回、各本皆鳳に作り又卷十四劉公幹贈從弟詩注及び卷五十九陳思王詩注引く所明刻本鳳に作る。今本尚書と異なる有り。今干祿字書を檢するに鳳皇の字「皇」を正「鳳」を俗とす。玉王樹云「小鳳皇の字、皇に作る、後人皇と通用して然れども漢碑既に鳳凰を用ひ建康唐。又慧琳音義卷八十三に「考聲切韻正作鳳字從凡」と言へは其の字由來久しきを知る。但李善據る所の尚書果して「鳳」に作りしか抑々文選を轉寫する者其の常用の字に从ひしか今之を明かにする能はざるなり。

三趾而來儀注尚書曰鳳皇來儀第十三葉裏左より第五行

案するに攷既に右に見ゆ。注今本尚書益稷篇鳳皇來儀第十四葉裏

宅心醇粹注尚書曰宅山阜根第十四葉表

今本尚書康誥篇宅心知訓第十四葉裏胡氏攷異に據れば此の注唯七本のみに有り云ふ。

案するに梁氏所證に曰く「李注引尚書以樽宅心醇粹句此當因下文山阜根積而崎嶇可致誤耳」卷九第三。是なり。

器其神器注尚書曰將遜于位第十四葉表

今本尚書堯典篇序第十四葉表胡氏攷異に云ふ、堯本在殷本此の注無し。無き者は脱せしなりと。足

天穆有終又帝德沖矣注尚書曰天穆永終第十四葉裏

今本尚書大禹篇第十四葉裏文同じ。

注尚書曰帝德廣運注今本尚書大禹篇益曰都帝德廣運第十四葉裏

權惟庸蜀注尚書曰及庸蜀人第十七葉表

今本尚書牧誓篇及庸蜀羌髡玁狁玁狁第十五葉裏

案するに卷四十九千令什音紀總論注尚書此の經文を引いて節に从ふこと此の注と同じ。

雖信險而勦絶注尚書曰天用勦絶其命第十八葉表

今本尚書甘誓篇天用勦絶其命第二葉表

案するに卷十四征賦注卷五十四思傳傳論注並に尚書を引いて此の注と同じ。但思傳傳注足利本六家本は別ち「勦」に作りて辛善の舊を存するに似たれば此の注亦當に「勦」に作るべきかと疑はる。攷第四十二頁に詳なり。

卷第七

楊子雲 甘泉賦

若夢牙之調琴

注 尚書曰樂典樂教周子

今本尚書曰樂典樂教周子

般惟其制剛

注 尚書曰惟其制剛

今本尚書曰惟其制剛

案するに此の注「惟」に作りて「金」に作るは李善見る所の尚書自ら然りしなるべし。段玉裁曰く「工」字他書皆作「佳」山海經南方不距之山巧倕其西郭傳云倕是巧工也。根雲一下。淮南子說山訓注「倕是之巧工也」。四部書刊本卷。最本玉篇卷廿七上神字下注「世本作規矩准繩宗忠曰佳倕臣也」。亦皆「佳」に作る。此の注胡刻本「作共工」に作りて「作」字有る者是なり。卷十一何平叔景福殿賦注引く所「命汝作共工」に作りて亦正に「作」の字有り。是れ李善據る所の尚書本「作」の字有りしなり。

古本尚書「作共工」に作る者有りたること尚明證有り。敦煌本釋文殘卷「々共工」を大書し其の下「本或作々作共工」と注す。此れ證の一。

尚書正義與典此の經の傳を釋して曰く「今命此人作共工」單疏本卷三又堯典「驩兜曰都共工方鳩嬴功」の傳「共工官稱」を釋して「與典命作共工知共工是官稱卷三」と曰ひ「乃命羲和欽若昊天」の傳を釋して「皐陶爲土塗作共工卷十四」と曰ふ。又禮記明堂位「垂之知鍾」注「垂堯之共工也」正義に曰く「按堯典塗作共工謂舜時也鄭不見古文故以爲堯時」單疏本卷三と。知るべし孔氏等見る所の

駢本與典「作共工」に作りしこと當に疑ふべからざるを。此れ證の二。
盧文弨尚書注疏改正卷十四 記廷芳十三經注疏正字卷十四 皆與典正義「今命此人云汝作共工」の「作」を以て衍文なりと爲すは非なり。與典正義務めて傳文「其謂倕其職事」を述ふと雖も其の正義文中自ら「作」の字有るを妨げず。況や堯典正義亦正に「作共工」に作るをや。若し與典正義の「作」字を以て衍文と爲し隨つて其の經文亦「作」の字無かりしとせば、堯典正義何に由つて「作共工」を引いて其工の官名たるを證するの意と爲すを得むや。但堯典正義に於ては與典を引いて其工の官稱なることを證せしに與典正義乃ち共工を以て官名に非ずと爲す者は惟各其の傳文を幹旋せしのみ。是れ疏家の通弊にして亦傳注に忠實なる所以。

吳士鑑唐寫本經典釋文校語下通雅釋文及舜典正義に據りて、孔氏所見亦有作字」と謂ふ。吳說是なり。

内野本尚書正に「作共工」に作る。此れ證の三。

太平御覽禮儀部廿一卷五「尚書舜典曰帝曰兪咨垂汝作共工」を引く。此れ證の四。

賈公彦周禮正義序に曰く「鄭云禹至禹登百揆之任格司空之職爲共工與虞故曰垂作共工蓋作朕虞是也」と。此れに據れば鄭本亦「作」の字有りたるに似たり。

又景福殿賦注引く所「垂命汝作共工」に作りて「垂」の下「命」の字多し。堯典正義

後引する所舜典正義衍述する所皆亦「命」の字有り。然らば唐初「命汝作共工」に作る尚書有りたるか。

行遊目乎三危注導黑水至于三危第五卷表

今本尚書禹貢篇卷六文同じ。

於是欽柴牢祈注尚書曰至于岱宗柴第六卷表

今本尚書舜典篇卷二文同じ。

東嶺滄海西耀流沙注尚書曰弱水餘波入于流沙第六卷表

今本尚書禹貢篇卷六餘波入于流沙第六卷表

潘安仁 藉田賦

常伯陪乘注尚書曰左右常伯第八卷表

今本尚書立政篇王左右常伯第十五卷表

天九土之宣弗任注尚書曰禹別九州任土作貢第九卷表

今本尚書禹貢篇序禹別九州隨山濬川任土作貢初葉表

欽哉欽哉惟穀之卬注尚書曰欽哉惟刑之恤第十卷表

今本尚書舜典篇欽哉欽哉惟刑之恤第十卷表

案するに卷卅六王元長永明九年策秀才文注此の經を引いて「恤」を「卬」に作る。「卬」

の字字善の舊なるに似たり。疑ふらくは、此の注當に本同じかるべし。

敦煌本釋文殘卷「卬」を出し其書鈔卷四十三抄引く所亦正に「卬」に作る。

凡そ今の尚書「卬」の字古本皆「卬」に作る。盤庚中「永敬大恤」岩崎本羅氏敦煌本

雲岡本俱に「卬」に作り呂刑「乃命三后恤功于民」岩崎本「卬」に作る。而も岩崎本

敦煌本雲岡本俱に「恤」の字無し。皆是れ其の明證なり。

段王裁曰く「攷説文血部卽憂也心部恤憂也二字音義皆同然古書不容徑改潘岳
田賦欽欽欽欽惟穀之卽李注尚書曰欽欽欽惟利之卽段氏據所本也説文引書無
比于卽字皆從口」釋義二下と。陳氏經說双今本釋文に據りて古文尚書に據る所の説を立て之高氏李注并
勸櫛以足百姓所以固本也

注尚書曰民惟邦本本固邦寧第十葉表第六行

今本尚書五子之歌篇第五葉裏 文同じ。

念茲在茲注初行第十一葉表

注尚書禹曰念茲在茲第十一葉表

一人有慶兆民賴之第十一葉表

注尚書王曰一人有慶兆民賴之第十一葉表

今本尚書呂刑篇王曰隔司一人有慶兆民賴之第十一葉表

卷第八

司馬長卿 上林賦

罪未琬琰

注尚書曰弘璧琬琰在西序左より第四行

今本尚書顧命篇第十一葉表 文同じ。

案ずるに李善此の經文を引くこと凡そ四回皆此の注と同じ。

注尚書曰惟彼陶唐第七葉裏 今本尚書五子之歌篇惟彼陶唐有此冀方第七葉表

楊子雲 羽獵賦

昔者禹仕益虞而上下和草木茂

注尚書帝曰鳴若予上下草木茂益哉帝曰汝作朕虞左より第三行

今本尚書益之四字に作る。六葉本

足利本益哉帝の四字無し。四部本注對本益哉帝の四字無し。

卷第九

楊子雲 長楊賦

幽都先加
注尚書曰宅朝方曰幽都第四葉表

案するに既に第一、四頁に出づ。

茂德所不終

注尚書曰有夏先后第五葉表

四部本注野本

今本尚書伊訓篇嗚呼古有夏先后第五葉表

案するに卷廿陸士衡皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩注亦尚書此の文を引いて各本皆「德」に作る。然れども卷四十五楊子雲解嘲注「尚書曰禹汝平水土惟是德」を引いて敦煌殘卷正に「楮」に作れば李善見の所の尚書「楮」の字を用ひて「德」の字を用ひざりしがと疑はる。

今本尚書を攷ふるに「楮」の字有りて「德」の字無し。然るに尚典「惟時德」敦煌本得文「楮」の字を出し北堂書鈔卷五十九引いて本「楮」に作り大島謙「予德乃德」仲尼之語「德」德官功德德貴「畢命」惟公德德「九堂書鈔」大島謙は卷五十九敦煌本六十二引

て皆「楮」に作る。又盤庚下「德」の字二見して皆同本敦煌本尚書皆「楮」に作り畢命、圓命各「楮」の字一見して皆同本皆「楮」に作る。此れに據りて之を推せば唐初本尚書「楮」の字を用ひたる者有ること明かなり。説文に據れば「楮」は勉也第十篇「楮」は木盛也第二篇上二字其の義異なる。然れども「楮」は「楮」の聲なれば互に相通するを得るなり。汗簡卷中之一林部「楮」を出して「德」と注す。續四部書刊

反五帝之虞

注尚書帝曰益汝作朕虞第五葉表

今本尚書舜典篇帝曰俞咨益汝作朕虞第五葉表

案するに此注「益」字に作るべきかと疑ふ。又「益」は「益」に作るべし。

潘安仁 射雉賦

潤降丘以駭敵
注尚書曰是降丘宅土第八葉表

案するに既に第一、四頁に出づ。

班叔皮 北征賦

墓公劉之遺德

注尚書曰公劉克篤前第十葉表

今本尚書武成篇卷十一文同し。

案するに卷四十九晉紀總論注尚書を引いて此の注と同じ。

注尚書曰蠻夷猾第十葉表

今本尚書舜典篇卷十二蠻夷猾第十葉表

案するに卷五十七潘安仁馬汧督誅注此の經文を引いて「猾」を「滑」に作れば此の注

亦本同じかりしなるべし。攷彼の條に見ゆ。

注從聖文之充讓第十一葉表

今本尚書堯典篇卷十一允恭克讓第十一葉表

案するに吳都賦注及び求通親親表注引く所に據れば李善見る所の尚書は「恭」を「興」に作り「讓」を「讓」に作れるに似たり。攷弟ミ六九頁に詳なり。

注惟太宗之蕩蕩第十一葉表

今本尚書洪範篇卷十二文同し。

案するに李善此の經を引くこと凡そ二回文皆同じ。

曹大家 東征賦

敬禮無怠

注尚書曰無怠無荒第十一葉表
今本尚書大禹謨篇無怠無荒第十一葉表

卷第十

潘安仁 西征賦

注諸庶績於帝室

今本尚書皋陶謨篇卷四庶績於帝室第十一葉表 文同し。

案するに卷四十八楊子雲劇秦美新注尚書を引いて此の注と同じ。

注武皇忽其升遐第十一葉表

今本尚書舜典篇卷十二三載四海過第十一葉表

案するに卷廿三謝靈運廬陵王墓下作詩注亦此の經文を引いて、正に「祖」に作りて、
 祖に作らず。李善の尚書自ら然りしことを知るべし。
 敦煌本釋文錄卷五攷ふるに、「放勳」「過祖」を大書し、「過祖」下の注に曰く「馬鄭
 本同方輿本作帝乃祖落」と。此れ方輿李唐初尚「祖」に作れるの明證たり
 說文夕部に曰く「祖往死也从夕且聲」又足部に曰く「祖往也从足且聲祖齊
 語祖迫或从尸」下篇と、乃ち「祖」は祖落の正字にして「祖」は其の假借字なるを
 知る。

此の注引く所「帝乃祖落」に作りて「放勳」に作らず釋文注引く所の方輿本と正
 に合す。此れ李善據る所の經典は方輿本なるの一證。
 見名則并改此文爲帝」然れども、檢本釋文は李善之王莽本免其より未小る、
 釋文に據れば是處の所「帝乃祖落」に作りて未だ帝に作らず、
 のを爲すして而も釋文に於ては放勳乃祖落に作る、是則放勳
 王改めて帝に作れるは決して傳記に非ざるを知るなり。

百官職於家宰

注 尚書曰百官職已以聽於家宰 第二表

今本尚書伊訓篇百官職已以聽家宰 卷八

案するに尚書此の文今に从ふの「聽」に作る者證無し。

但玉篇糸部「總」を出して糸部讀た「總」を出し、
 「總」兩字を並せは「總」の字說文に無しと雖も其の由未久し。是を
 以て今本經典篇は聞「總」の字を用ふ。尚書大禹謨「總」
 左氏傳公七年「總」若取世、
 毛詩衛風「總」
 左氏傳公七年「總」若取世、

毛詩衛風「總」
 左氏傳公七年「總」若取世、

左氏傳公七年「總」若取世、
 毛詩衛風「總」

則ち唐初本尚書伊訓或は「總」に作る者其を保存せず。但此の偏經の新本

尚書此の文「聽」下「於」の字有る者亦他書に於て證を得ず。但此の偏經の新本
 たる論語篇「聽」に「於」の字有り又蔡仲之命「惟卿公位家宰正百工」の傳「百官
 總已以聽家宰」は伊訓に傳れるなるべきに足利古本傳文「聽」下「於」の字有り。
 此れに據れば伊訓偏經本「於」の字有りたるやも亦未だ知るべからざるなり。

旋牧野而歷茲

注 尚書曰武王與受戰于牧野 第三表

今本尚書牧野篇武王與受戰于牧野 卷八

案するに卷四十四陳孔璋徵吳將校部曲文注尚書此の序を引いて「于」を「於」に

作る。故彼の條に從ひ。

望南巢以投命

注 尚書曰成湯放桀於南巢 第三表

今本尚書仲虺之誥「成湯放桀于南巢」

案するに卷廿六任齊昇天監三年策秀才文注此の經又を引いて「南巢」に作る「于」の故

考土中于斯邑成遷都而遷樂

注 尚書曰成王欲宅洛邑思公曰王來紹上帝自復于土中

今本尚書召誥篇序成王五豐欲宅洛邑

又經大保乃以庀邦家君出取幣乃復入錫公曰王來紹上帝自服于土中

案するに卷廿三謝靈運廢陵王墓下作詩注亦此の經文を引いて正に「祖」に作りて、
 祖に作らず。李善の尚書自ら然りしことを知るべし。
 敦煌本釋文殘卷を攷ふるに「放勛」「過祖」を大書し、「過祖」下の注に曰く「馬鄭
 本同方輿本作帝月祖落」と。此れ方輿本唐初尚「祖」に作れるの明證たり
 說文夕部に曰く「祖往死也夕日聲」又足部に曰く「祖往也从夕且聲祖音
 語祖追或从夕」下篇と、乃ち「祖」は祖落の正字にして「祖」は其の假借字なるま
 知る。

此の注引く所「帝乃祖落」に作りて「放勛」に作らず釋文注引く所の方輿本と正
 に合す。此れ李善據る所の傳本は方輿本なるの一證。
 見名則此此文爲等と然れども、楊本釋文は本之王注本矣其より朱れること、
 釋文に據る所は、
 王改めて帝に作れるは決して楊氏に非るを知るなり。

百官記於家宰
 注 尚書曰百官總已以聽於家宰 第二卷表

今本尚書伊訓篇百官總已以聽家宰 卷八

案するに尚書此の文午に从ふの「總」に作る者證無し。

但玉篇糸部「總」を出して手部「提」を出し、
 「提」兩字を出せば、
 以て今本經典篇に聞く「提」の字を用ふ。尚書大禹謨「提朕師」
 左氏傳公七年傳「若敗其衆人以聽之」

毛詩衛風「總角之儀」
 敦煌本寫本皆作「提」
 王に從ふ。若し「提」を「總」と改むれば、
 又

則ち唐初本尚書伊訓或は「總」に作る者證を保存す。

尚書此の文「提」下「於」の字有る者並他書に於て證を得ず。但此の編經の新本
 たる論語論語「既に於」の字有り又蔡仲之命「惟周公位掌宰正百工」の傳「百官
 總已以聽家宰」は伊訓に據れるなるべきに足利古本傳文「提」下「於」の字有り。
 此れに據れば伊訓篇經本「於」の字有りたるやも亦未だ知るべからざるなり。

旋牧野而歷茲
 注 尚書曰武王受命于牧野 第三卷表

今本尚書牧誓篇序武王受命于牧野 卷十一

案するに卷四十四陳孔璋檄吳將校部曲文注尚書此の序を引いて「于」を「於」に
 作る。又彼の條に從ゆ。

望南巢以投命
 注 尚書曰成湯放桀於南巢 第三卷表

今本尚書仲虺之誥篇成湯放桀于南巢 卷八

案するに卷廿六任亮昇天監三年第方才文注此の經文を引いて各本皆亦「於」に作る。
 考工中于則色成遷都而營築
 注 尚書曰成王欲宅洛陽公曰王來紹上帝自復于土中 第三卷表

今本尚書召誥篇序成王在豐欲宅洛邑
 又經大保乃以庶邦冢君出取幣乃僕入錫卿公曰王來紹上帝自服于土中 卷十五

今本尚書武成篇改牛于桃林之野示天下弗服卷十一
案するに尚書「於」に作る者其の譌無し。「于」「於」の攷既に第 九 七 頁に見ゆ。

溫韓馬之大款卷八
注尚書曰元亞大款卷八

今本尚書康誥篇卷十四
案するに卷五十宿著傳説注尚書を引いて此の注と同じ。

阻顧谷以稱亂卷八
注尚書曰敢行稱亂卷八

今本尚書湯誓篇卷八
案するに卷廿大將軍誡會被命作詩注尚書を引いて此の注と同じ。皆節に从へるな

奉養辭以伐叛卷八
注尚書曰奉養伐叛卷八

今本尚書太甲卷八
案するに攷既に第一七六 頁に見ゆ。

黃帝千里卷八
注尚書曰雍州殷王卷八

今本尚書禹謨篇卷八
案するに攷既に第一七六 頁に見ゆ。

今本尚書禹謨篇卷八
案するに攷既に第一七六 頁に見ゆ。

端股肱於嚳主卷八
注尚書曰臣作股肱卷八

今本尚書益稷篇卷八
案するに卷廿五湯元武無總王女卷八

此の注益し節に从へるなり。
又案するに後漢書郎範傳注「尚書曰君爲元首臣作股肱」列傳廿下

本尚書有る無し。或は唐初尚書別に「臣作股肱」の文有りたるか。

注又曰臣卷八
今本尚書仲虺之誥篇卷八

故社卷八
注尚書曰故社卷八

今本尚書夏社序卷八
文同じ。

沛陽路而來王卷八
注尚書曰四夷來王卷八

案するに既に第一三九 頁に出つ。

何泰苗之難離而余思之卷八
注尚書曰予思卷八

今本尚書益稷篇卷八
案するに攷既に第一七六 頁に見ゆ。

案するに卷十六潘安仁懷舊賦「望彼微笑感于予思」の注、及び卷廿三王仲宣贈蔡子篤詩「雖則追慕予思周宣」の注に亦尚書此の文を引く。而して、此の賦及び彼の賦詩の正文皆「余（予）思」二字を以て體詞と爲す。李善正文の體詞に於いて、尚書「予思」を引けば或は益稷此の經を讀みて「予思體詞曰音思致致」と爲し「予思體詞曰入實致致」とは爲さざりしかと疑はる。

蓋し尚書既に「予思」を以て體詞と爲せる有り而して文選正文の用法偶々之と合す故に李善尚書を引いて其の證とせしなり。否らずんば「予思」の二字何ぞ特に注するを附ひむや。

俞樾曰く「按上文韋陶云思曰思讀爲同此語與韋陶之語相承則其字亦當作曰因韋陶言思曰思讀爲同言予思曰致致也曰者語詞思曰讀聲者思讀爲世思曰致致者思致致也」

其の說以予べし。唐初想はくは「予思曰」の「曰」を言曰の字として讀む者有りしなるべし。古本「思」の二字を「予」の字と合せず。是れ本より然りしか抑々本相合せしを後人其の一を改めしが今明かならず。胡昭詳此の注に據りて僅に正文「余」を改めて「予」に作らむとする。是れ違ひに於ては予べからざるなり。

教數而釋倫敘
 注尚書曰釋倫敘初行
 今本尚書洪範篇釋倫敘初行
 卷十二葉表
 足利本四部本持野本「事」
 卷十二葉表
 今本尚書洪範篇釋倫敘初行

案するに李善注引く所の尚書「思」「思」の二形前後互に出で、又諸本互に異なる。是れ惟文選寫手便に从ひて或は「思」に作り或は「思」に作りしのみなるべし。以て李見る所の尚書の字體を放すべからず。同字異體此に類する者は概ね論せず。

蔡伯喈陳太丘碑文注尚書此の文を引いて、集注本は「思」を「思」に作り、李善の舊を好するに似たりは此の注亦本「思」に作りしなるべし。「思」「思」同異の致第三三三頁に見ゆ。

軒矢言而不納
 注尚書曰率爾來感出天言
 今本尚書盤庚篇上率爾來感出天言
 今本尚書盤庚篇上率爾來感出天言
 案するに此の注「思」當に「思」に作り「思」當に「思」に作るべきかと疑はる。致既に第一二。頁に見ゆ。

應天位其若誌
 注尚書曰伊尹曰天位報哉初行
 今本尚書太甲篇下伊尹申誥于王曰
 應句天位報哉初行
 存感格乎天區
 注尚書周公曰時則有若伊尹格于皇天
 今本尚書君奭篇周公若曰
 公曰君奭昔聞在昔成湯既受命時則有若伊尹格于皇天
 十六葉表

案するに李善此の經文を引くこと凡そ五回各條節略してむすしも互に同じからず。

勳望統之孕育

注尚書曰天用勳絕其命第十七葉表

今本尚書甘誓篇天用勳絕其命第二葉表

案するに卷五十四傳傳誦注引く所定利本六家本は則ち「勳」に作りて李善の舊を採するに似たれば疑ふらくは此の注亦當に「勳」に作るべし。攷第百二十一頁に詳なり。

焚詩書而面牆

注尚書曰不學牆面左より第二行

今本尚書周官篇第十七葉表文同じ。

雖靡卒於舊典

注尚書曰舊典時式第十八葉表

今本尚書君牙篇乃惟由先正舊典時式民之治亂第十三葉表

案するに卷五十四陸士衡五等論注亦此の文を引いて此の注と同じ。

今君牙此の經の傳に曰く「汝惟舊學用先正此の六字は上文を承けて下文を起す。而て「要而用之」正云々と。」之臣所行故事舊典文籍是法民之治亂在此而已用之則民治廢之則民亂」と。而して正義此の經を釋して曰く汝爲大司徒惟舊學用先正正官之法此の六字は上文を承けて下文を起す。而て「要而用之」正云々と。諸臣所行故事舊典此の六字は上文を承けて下文を起す。而て「要而用之」正云々と。於是法則之民之治亂在此而已汝必學而用之此の六字は上文を承けて下文を起す。而て「要而用之」正云々と。正義に傳れば孔氏等は此の經を讀ん

で「由」の字を「先正舊典」の四字に聚らしめ、随つて傳を讀んでは「奉用」の二字を「文籍」迄管到せしめしに似たり。然るに李善此の注及び五等論注引く所皆「舊典時式」を以て一句と爲せば是れ傳を讀んで「奉用」の二字を「先正之臣所行故事」の八字のみに聚らしめ「舊典文籍是法」の六字を一連と爲せるもの如し。此の傳文を攷するに李善の讀傳れるを知る。

水物推錯

注尚書曰水物推錯第十八葉表

今本尚書禹貢篇第九葉表文同じ。

案するに卷廿八陸士衡樂府注

注尚書曰有亂臣十人第十九葉表

今本尚書皋陶謨中第十一葉表文同じ。

案するに卷廿八任彦昇尚書注尚書謨吏部封侯第一表注卷五十六陸佐公石闕銘注並に尚書此の文を引いて皆亦「亂臣」に作ること此の注と同じ。

情農好利不習作勞

注尚書曰情農自安不第十九葉表

今本尚書盤庚篇上第十葉表情農自安不第十九葉表

案するに此の注「不」の字當に「弗」に作るべきかと疑ふ。攷第百二十一頁に見え

又弟 頁に見ゆ。

卷第十一

王仲宣登樓賦

惟日月之遡邁兮

注尚書云日月遡邁若弗云來 第廿三葉表

今本尚書卷之十一 文同じ。

冀王道之一平兮

注尚書曰王道正直 第廿三葉表

今本尚書卷之十一 文同じ。

案するに李善此の題を引くこと凡そ二回文皆同じ。

孫興公遊天台山賦

任緩步之從容

注尚書曰從容以和 第廿五葉表

案するに既に第一一六頁に出づ。

肆觀天宗

注尚書曰肆觀羣后 第廿七葉表

今本尚書卷之十一 文同じ。

案するに既に第一一五頁に見ゆ。

鮑明遠蕪城賦

圖脩世以休命

注尚書曰俟天休命 第廿七葉表

今本尚書卷之十一 文同じ。

王文考魯靈光殿賦

粵若稽古帝漢祖宗漢哲欽明

注書曰粵若稽古帝堯 第廿九葉表

今本尚書卷之十一 文同じ。

案するに李善見所の尚書「粵若」に作りて「曰若」に作らざりしに似たり。

攷既に第一〇二頁に見ゆ。
皮錫瑞曰く「王文考靈光賦曰粵若稽古帝嚳祖宗叔師注楚辭用今文說其子太考所引亦必今文」と。又曰く「稽古之義今文家皆以爲考古」師伏堂刊本今文尚書攷疏と。
然らば則ち此の賦當に「粵若稽古」四字を以て句として「發端の習と爲すべく、
堯典舊孔傳釋して「能順考古道而行之者帝嚳」と爲して「楚」の下句を斷つと相同
じからざるなり。

注又曰潘哲文明

今本尚書舜典篇初葉三 文同じ。

案するに陸德明尚書釋文に據れば舜典の此の文は姚方碑本の一本有る所に屬す。
閻若璩謂ふ姚本偽文此の賦を襲うて「敦」を「文」に易へしのみと。尚書古文疏證
卷五上第三葉

於是百姓昭明九族敦序

注尚書曰百姓昭明第九葉

今本尚書堯典篇初葉二

文同じ。

注又曰敦叙九族

今本尚書皋陶謨篇初葉九族第九十六葉

案するに卷卅鮑明遠數詩注卷卅五潘元茂冊隸公九錫文法並に尚書此の文を引き「敦」
に作ることに此の注と同じきに卷四十八班孟堅典引注引く所は「敦」を「惇」に作りて
今本尚書と合す。孔氏本尚書此の「敦」に作る者未だ他に其の例證を得ずと雖も舜

典「惇德允元」聖書治要引く所卷二葉「敦」に作りて今本尚書「惇」の字唐初本或
は「敦」に作る者有りたるか。果して然らば今本文逆「敦」に作る者李善の舊を行す
と謂はざるべからず。

説文に據れば「敦」は「怒也誅也一日誰何也从攴壽聲」第三編下「惇」は「厚也从心壽聲」
第十編 其の義各別なれども二字共に「壽」の聲なれば義亦互に通すべし。玄應衆經
下心部 其の義各別なれども二字共に「壽」の聲なれば義亦互に通すべし。玄應衆經
音義「惇」の字を出して「蒼頡解詁云古文敦」を引く。西京書局大治本 第一編第十四葉 是れ郭璞以
前兩字同用せられざるの語となすべければ唐初尚書「敦」の字を用ふる者有るを妨
げざるなり。今本尚書厚と訓するの「惇」舊「惇」に作りて「敦」に作りざるは是れ本
より古字を存せしには非ずして恐らく後人釋詁（敦勅也惇厚也）説文等によりて
之を齊整せしなるべし。

何平叔 景福殿賦

注庶事既康

尚書公。發曰庶事康哉第十四葉

今本尚書益稷篇初葉 乃書載歌曰 爾句庶事康哉 第十七葉表

案するに李善尚書を引いて「景福」多く「景福」に作る。

卷四十一陳孔璋爲曹洪與魏文帝書注卷五十六潘安仁楊州州詠注「發。發。靈光殿賦」

を引き卷卅六王元長永明九年第秀才文注、卷四十五班孟堅谷密載注、「啓錄」矢殿譯」を引き卷十五張平子思玄賦注、卷四十吳李奎昌韓太子將注、卷四十七陸士衡潘高祖功臣頌注、「啓錄」邁種德」を引き卷卅五潘元戎冊建公九錫文注、卷卅八任彦昇異苑尚書諱吏部封侯弟一表注、卷五十四陸士衡五等論注、「啓錄」曰在知人」を引き卷五十八蔡伯昭陳太丘碑文注、「啓錄」曰都亦行有九德」及び「啓錄」曰寬而栗」を引き卷卅六王元長永明十一年策秀才文注、「啓錄」曰操于五辰」及び「啓錄」曰庶績其最」を引き卷廿一謝宣遠張子房詩注、「啓錄」曰無暗庶官」を引き卷四十七夏侯若東方朔書蘭注、「啓錄」曰天秩有序」を引き卷廿四潘正叔臨侍御史王元凱詩注、「啓錄」乃散曰」を引き卷四十七裴茂伯三國名臣序贊注、「啓錄」敢曰」を引いて、皆「啓錄」に作る是れなり。其の聞く「皐陶」に作る者は蓋し淺入の改むる所たるのみ。段玉裁曰く「攷自來古文尚書有作皐陶者有作啓發者是以前注漢書引尚書皆作啓發李注文選則皆作皐陶」古文尚書
爾雅卷一下と。段氏李引皆「皐陶」に作ると謂へるは是れ智者の一失。
今聖書治要引く所の尚書を攷ふるに皆「啓發」に作りて「皐陶」を作りず、四葉初裏第八葉表裏、後漢書李賢注引く所亦多く「啓發」に作る、
并傳第五、卷四、古唐初義、第六葉表裏、
本尚書「啓發」に作れるの明證たり。
王成監(後宋孝武)王王樹(梁代中書郎字之修)晉人(啓發)を改めて「皐陶」に作ることを其の説作るべし。
承造元説文引經譚例に曰く「啓發今從皐陶如古從庚南今從契之類也」説文詁林引と。

天秩孔明

注又曰天秩有禮第十四葉重第五行

今本尚書皋陶謨篇卷四
弟廿二葉表文同也。

歲三月東巡狩至于許昌。

尚書曰歲二月東巡狩至岱京紫

今本尚書典義卷二 東巡守 至于岱宗 祭

案するに卷廿二續延年車駕奉京口三月三日侍游曲阿後湖詩注卷四十八楊子雲勅奏
美新注並に亦此の經を引いて皆「巡狩」に作る。自ら是れ李善の尚書此の如かり
しなり。

辭典釋文「守」の字を出し、「本或作付」と注す。此れ唐初「付」に作る本有りたるの證。**内野本**は「守」に作り而も「或下付」と旁記す。

劉昭祭祀志中注「虞書歲二月東巡狩至于岱宗柴范甯曰巡狩者巡行諸侯所守」
引く。范注本亦「狩」に作りしに似たり。五經要義二月仲春第二引く所の舜典孔安國注此
の范注に同じ。惟「狩」を「守」に作るのみ。醫典
據る所の尚書或は范注舜典を
補へる爲孔氏本なりしか。

神へる直は「木なりしか」
 段玉裁曰く「釋文字或作符玉裁按彼孟子白虎通訓詁作狩爲長」（續齊書一 下第七葉）と。然れども古人の訓詁多く音を本とし、必ずしも字義を本とせざれば、古人の訓詁に依りて直に其の字形の傳劣を定むべからざるに似たり。

越六月既望

注尚書曰惟五月既望第十四卷書左下月第四行

今本尚書召誥篇推二月既望初望卷十五
 字するに卷十三阮嗣宗詠懷詩注此の經文を引いて正に「二月」に作る。此の注下
 引孔傳「十五日」に涉りて誤れるなるべし。

桑梓堂

注尚書曰庶章第廿四葉表

今本尚書洪範篇庶章第廿四葉表定利本・西野本・六家本・正文及此の注の「庶」の字皆「無」に作る。

字するに李善此の經を引くこと凡そ四回此の注のみ六家本皆「庶」を「無」に作りて
 佗篇注引く所と異なる。

説文を攷ふるに費誓也從林吏吏或說規模字從大卅如數之體也林者木之多也費與庶
 同意尚書曰庶仲蘇衷第廿六葉表又釋詁下に曰く「荷蕢茂豐也」と。而して釋文に曰
 く「無古本作蕢」此の字本蕢に作る今庶と。乃ち知る「蘇蕢」の字本「蕢」に作り許
 氏見る所の尚書正に然りしと。

段玉裁謂ふ「蘇蕢」を變じて蕢に作り以て荷蕢の字と爲してより遂に洪範の蕢蕢
 を改めて蘇蕢の蕢に作り余正の蕢を改めて蕢蕢の蕢に作るに至る」第廿九葉表

然れども余正の「蕢」既に「蕢」に作りば洪範の「蕢」亦「蕢」に作る者有る可し。今諸
 書を檢して其の二例を得たり。即ち陳前本北堂書鈔卷十五至治五十二洪範此の文
 を引いて「蕢」に作り孔氏校語後漢書班固傳注列傳第四十四引く所亦「蕢」に作る是れなり。

然らば則ち此の注「蕢」に作る者書鈔後漢書注と正に合す。或は李善の尚書自らは是
 れ「蕢」に作りしかと疑はる。

惟眠越之不靜

注尚書曰西土人亦不靜也第廿五葉表六家本「下」に「不」に作る。定利本此の注無し。

今本尚書大誥篇西土人亦不靜第廿七葉表

字するに卷十五冊建公九錫文注本尚書此の經を引いて「土」の下「之」の字有り「靜」
 を「靖」に作る。攷彼の靖に見ゆ。

内野本尚書「無」に作り六家本文選と同じ。此の注「無」に作る者定なり。

乃昌言

注尚書曰躬梓昌言第廿五葉表

今本尚書大誥篇躬梓昌言曰第廿七葉表

帝曰俞哉

注尚書帝曰俞第廿七葉表

字するに「帝曰俞」の語尚書内に十二見卷二見帝曰俞卷二見大誥すれども此の注「俞」の下「孔
 安國曰俞然也」を併せ引いて而も此の傳は是典に在れば此の注引く所は是典に據
 れるを知るなり。

聖璋琰之文瑞

注尚書曰弘璧琬琰在西序第廿七葉表

家するに第一六七頁に出づ。

欽先王之允塞悅重華之無負

注 尚書曰重華濬哲文明溫恭允塞 卷三

今本尚書僉典篇曰重華協于帝濬哲文明溫恭允塞初葉

案するに僉典傳文に據れば僉典の曰若稽古より重華協于帝までの十二字は本姚本

にのみ有り且つ濬哲文明より乃命以位までの十六字は姚本の或本にのみ有りたる

ことを知る。

命共工使作鑄明五色之影施

注 尚書帝曰命汝作共工 卷三

今本尚書典篇曰命汝作共工 卷三

案するに典篇註謂ふ此の注「作」の字當に有るべからずと。尚書卷三 非なり。李

善養所の尚書と今本との同異既に第一六七頁に於て詳に之を攷せり。

此の正文「共工」の二字一語蓋し何平叔以て官名と論せるなり。王先謙尚書孔傳

卷正に曰く「尚紀云禹共工漢書地理志云作共工以共工爲官名今文說也應劭注亦用

今文說」と。馬融傳文有之。鄭玄尚書注亦「共工」を以て官名と爲す。惟僉孔傳「共

謂供其職事」と釋すれば是れ「工」一字を以て官名と爲せるを知る。今李善此の正

文に注して禹典を引き而も其の注を擧げされは是れ僉孔本に據れるなり。然らば

注引尚書と正文とは其の證相協はず。蓋し李善孔傳に拘せざりしなるべし。

注又曰予欲觀古人之象作會宗彝以五采影施于五色作服汝明

今本尚書益稷篇予欲觀古人之象日月星辰山龍華蟲作會宗彝藻火粉米黼黻絺繡以五

采影施于五色作服汝明 卷五

案するに尚書此の經鄭注所に據るに據れば當に「日月星辰山龍華蟲作會」の十字

以て句し「宗彝」の二字下句に屬すべし。

今李善尚書を引くの下又鄭玄曰を并せ引けば其の經は當に鄭に从ひて讀むべきに

而も「作會宗彝」の四字を連并して鄭讀と爲る。或は李善此の經孔傳に从ひて讀

めるか。

然るに僉孔傳に據れば此の經亦當に「日月星辰山龍華蟲作會」の十字一句と爲す

べきを以て李善此の經孔傳に據りて此の經亦「作會宗彝」の四字を連并すべきに非ず

李善此の注引く所既に鄭讀と爲り亦僉孔本と同じからず。疑ふらくは今本文選此

の注傳寫の誤有らむ。

朱珣曰く「此四字を移す 連并非無不辭書疏誤解孔傳經字法同當是唐人句讀如此

文選傳寫之誤。果して然るや否やを知らず。

此の注引く所の尚書「會」の字當に「禮」に作るべし。「會」に作る者は後人今の尚書

に據りて改めしのみ。正文「禮」に作り注引尚書は「禮」に作りて兩者相合せず。應

を以て李善尚書を引くの下又「鄭玄曰繪諱曰禮」の文に據りて訂す。段說は古文尚書

今本尚書益稷傳「會五采也以五采成此章」の十二字經文「宗彝」の下に在れども疑はるべきは當に本經文「作會」の下

に在るべし。鄭本五采を移すは應承經傳誤寫第七葉表に引く所段說文「作禮」の下此の傳文を連并す。

昭烈帝第十六葉裏に見ゆ、神皇正統記の引經は、神皇正統記二年刊本第三第二葉を引いて「續」と「續」と相通することと、續せしなり。鄭注既に「續、續曰續」と云へは其の上引く所の尚書「續」に作りて「會」に作らざることを明かりなり。
李善の所引の孔傳本尚書亦正に「會」に作る、詳に第五七七頁に見ゆ。

兆民報止

注尚書曰一人有慶兆民報之第十九葉裏

案するに既に第一六六頁に出づ。

澤水湛湛

注尚書曰湛湛滔天第十九葉裏

今本尚書典義篇第十九葉裏文同じ。

觀衆人之耘耔亮穡穡之艱難惟當年之豐實思無遠之所敷

注尚書無遠周公曰嗚呼君子所其無遠先知穡穡之艱難乃遠第十九葉裏

六家本下の「無遠」に作る足利本の

注を下注に遷りて五臣に系く。

今本尚書無遠周公曰嗚呼君子所其無遠先知穡穡之艱難乃遠則知小人之依第十九葉裏

案するに此の注「則知小人之依」の六字を節去して之を引けるなり。

江文通雜體詩注此の經を引いて「無遠」を「遠」に作り、「嗚呼」を「鳥呼」に作る。此の注當に是れ本相同じかるべし。（附説の條）

注又曰我聞在昔殷王中宗享國七十有五年高宗之享國五十有九年自是殷後立王生則遠

或五六十年或四三年六家本在昔の二字互に倒し五五の立字無し足利本の注を上注に遷りて五五の立字を省く

在の二字に作り五五の立字無く是則遠

の下の字有り五五の二字互に倒す

今本尚書無遠周公曰嗚呼君子所其無遠先知穡穡之艱難乃遠則知小人之依第十九葉裏

國五十有九年四十四字を略す自時殷後立王生則遠七字を略す或五六十年或四三年

案するに此の注或は「昔在」に作りて今本尚書と合し或は此の二字互に倒して今

本尚書と異なる。李善の舊定むべからず。

今人撰詩如曰「昔在中宗作在昔」（附説の條）

曰在昔殷先哲王迪畏天顯小民詩而自古在昔（附説の條）

九葉と。然れども「昔在」の文亦古書之れ無きに非ず。典義篇序「昔在帝堯」（附説の條）

命「昔在文武聰明賢聖」毛詩商頌長發「昔在中葉」禮記禮衣君衣曰「昔在上帝」（附説の條）

高宗「其在祖甲」に相應すれば「昔在」に作るを以て長と爲すべく唐初本或

は正に然りしかと疑ける。果して然らば此の注亦本「昔在」に作られしに非るか

此の注「自是」足利本及び六家本注引く所の無遠篇と合す。但此書に於ては微

無し。「是」の「時」の改第三〇七頁に見ゆ。

此の注「立王」の「立」字無き者は益し轉寫奪せしのみ。

足利本注引く所「三十四年」に作りて今本尚書と互に倒する者は内野本尚書と

正に合す。内野本武王の作りて四三正本と論説す。甚だ是なり。三十四年に作る

引く所亦本「三十四年」に作りしに非ざるかと疑はる。

陳高樞曰く「中論引或三。四年。宜するに段王新撰不徐按習子所は古文尚書年例之則作三。四年者見也」十六葉表に見ゆ。以上文或七八年或五六今本尚書「四。三年」に作るは蓋し後人此の經の傳文「高者十年下者三年」に據りて經の「三」の字を下に置けるか若しくは「三三」の一畫相混じて誤れるなり。

惟天德之不易

注尚書曰爾亦弗知天命不易也第廿一葉表

今本尚書大誥篇爾亦不知天命不易第廿三葉表

案するに卷五十六張孟陽劄記注尚書此の經を引いて本或は「不易」を「弗易」に作る。蓋し李善據る所の尚書「不知」「不易」竝に「弗」に作りしなるべし。「不」内野本尚書正に「弗知」「弗易」に作り雪竄叢刻本尚書亦「弗易」に作る。「不」弗の改註に第廿七葉に見ゆ。

九有雍熙

注尚書曰穆民於變時雍第廿二葉表

案するに既に第一四〇頁に出づ。

注又曰庶幾威熙

案するに既に第一四一頁に出づ。

家懷克讓之風人詠唐詩之詩

注尚書曰允恭克讓第廿二葉表

今本尚書堯典篇允恭克讓

案するに李善據る所の尚書は「恭」を「敬」に作り「讓」を「讓」に作りしに似たり。攷第三七〇頁に詳なり。

注又召繇乃敢曰元首明哉股肱良哉庶事康哉

今本尚書益稷篇皋陶謠曰乃唐載歌曰元首明哉股肱良哉庶事康哉第廿七葉表

案するに「召繇」「皋陶」同異の攷既に第一八七頁に見ゆ。

卷四十七張孟伯三國名臣序譜注此の經を引き「敬」を「不」に作り李善の舊を採するに似たりは此の注「敬」の字亦本「不」に作りしなるべし「敬」の攷第廿七葉に見ゆ。

絶流連之聲禮

注尚書曰禮煩即亂第廿三葉表

今本尚書說命篇中禮煩則亂第廿六葉表

案するに尚書「即」に作る者微無し。又此の正文は「敬」に作り注引尚書は「煩」に作りて二者相合せず而も注中「敬」「煩」異同の文無し。此れ本より然りしか今本文選李の舊を失せるが皆明かにし難し。

卷第十二

木玄虚 海賦

昔在帝德巨唐之代

注尚書序曰昔在帝堯初葉表注より平四行

今本尚書堯典篇序卷二第四葉表 文同じ。

注尚書曰堯降二文于嬭河

今本尚書堯典篇卷二第四葉表 文同じ。

天綱涉通魚湖為庫

注尚書曰淵淵洪水方割初葉表案するに既に第九ノ頁に出づ。

羣山既昭

注尚書曰嶠夷既昭初葉表第六行

今本尚書禹貢篇卷六第九葉表 文同じ。

江河既導

注尚書曰岷山導江初葉表第八行

今本尚書禹貢篇卷六第九葉表 文同じ。

注又曰導河積石

案するに此の注「積」の上疑ふらくは當に「自」の字有るべし。攷既に第九四頁に見ゆ。

蠲涸九州

注尚書序曰蠲別九州初葉表第九行

案するに既に第一ノ五頁に出づ。

襄陵廣甸

注尚書曰懷山襄陵第二葉表第五行

今本尚書堯典篇卷二第五葉表

又益稷篇洪水滔天浩浩懷山襄陵初葉表

注又曰海濱廣斥

今本尚書禹貢篇卷六第九葉表 文同じ。

案するに卷卅一江文通雅體詩注尚書を引いて此の注と同じ。

若其負械臨深

注尚書曰負罪引懸第三葉表第七行

今本尚書大禹謨篇卷四第十四葉表 文同じ。

西薄青徐

注 尚書曰海岱惟青州 第三葉裏

今本尚書禹貢篇 卷六 第九葉裏 文同じ。

注 又曰海岱及淮惟徐州

今本尚書禹貢篇 卷六 第十葉裏 文同じ。

其琅則有天琛水怪數人之室

注 尚書曰天琛在東序 第四葉裏

今本尚書顧命篇大王夷王天球河圖在東序 卷十八 第十葉裏

注 尚書曰鉛松怪石

今本尚書禹貢篇 卷六 第九葉裏 文同じ。

弘往納來以宗以都

注 尚書曰江漢朝宗于海 第五葉裏

今本尚書禹貢篇 卷六 第十四葉裏 文同じ。

宰するに李善尚書此の經を引くこと凡そ五回文皆同じ。

惟岷山之導江

注 岷山導江東別為沱 第六葉裏 足利本此の八字無し。四部本「岷」の上「尚書曰」の三字有り。澤野本「尚書」に作る某段本提出文と同じく誤る。今本尚書禹貢篇岷山導江東別為沱 卷六 第十六葉裏

今本尚書禹貢篇岷山導江東別為沱 卷六 第十六葉裏

郭景純 江賦

猗滔天以嶽冠

注 尚書曰浩浩滔天 第六葉裏

案するに既に第一九四 頁に出づ。

流九派乎潯陽

注 尚書曰荊州九江孔殷 第六葉裏

今本尚書禹貢篇荊州及衡陽惟荊州 隔向九江孔殷 卷六 第十四葉裏

案するに李善尚書此の經文を引くこと凡て三回文相同じ。

滄餘波乎榮桑

注 尚書曰餘波入于流沙 第六葉裏

今本尚書禹貢篇 卷六 第十四葉裏 文同じ。

混流宗而東會

注 尚書曰東會于泗沂 第六葉裏

今本尚書禹貢篇 卷六 第十六葉裏 文同じ。

灌三江而漸沛

注 尚書曰三江既入震澤底定 第六葉裏

に據りて制れるなるべし。

復之無數

注尚書曰我有周無數第十葉裏

四部本漢野本「我」の上「傳」の字有り。足利本六家本は胡刻本に同じ。

今本尚書微子之命篇傳我有周無數第十葉裏

足利本六家本は胡刻本に同じ。

案するに此の注「傳」の字無き者は轉寫者誤りて奪せるなるか抑李の舊本より此の字無かりしなるか今之を定むる能はず。

賈誼 鵬鳥賦

傳說青麤兮

注尚書曰高宗夢得說使百工營求諸野得諸傳第十一葉裏

又說命篇上爰立作相

今本尚書說命篇序高宗夢得說使百工營求諸野得諸傳第十一葉裏

又說命篇上爰立作相

案するに李善尚書此の序を引くこと凡そ三回文皆同じ。節引せる者は此の數内に在らず

補正平 鸛鳴賦

命虞人於虞也詔伯益於流沙

注尚書帝曰益汝作朕虞第十三葉裏

案するに既に第一一頁に出づ

注尚書曰導弱水餘波入于流沙

今本尚書禹貢篇導弱水隔句餘波入于流沙第六葉裏

案するに梁韋詵曰「桂氏謬曰李善注鸛鳴賦引書餘波。入於流沙或以被晉波之謫校

李引經書與今本不同校讀如柳孟雅之被宜於此說按各本無作被者恐皆後人所改桂言

如此此有所見之善本也第十葉裏

を引くこと凡そ四回にして其文皆同じく而も卷十二江賦卷五十七陶徵士誄に於て

は皆正文明に「餘波」の語有るに注して尚書此の經文を引けば其の據る所の尚書

恐らくは「餘波」に作りて「餘波」に作らざりしならむ。

張茂先 鷦鷯賦

羽毛入骨

注尚書曰厥翼如毛第十五葉裏

今本尚書禹貢篇厥翼隔句苗年羽毛惟木卷六

靜守約而不務

注尚書曰汝惟不矜第十六葉裏

今本尚書大禹謨篇汝惟不矜天下莫與汝爭能卷四

未若瞻昔之從容

注尚書曰從容以和第十六葉裏
安するに既に第一一六頁に出づ。

卷十四

顏延年 赭白馬賦

四隣入貢
注尚書曰四隣既宅初葉裏
第六行

今本尚書書篇四隣既宅卷六
案するに李善尚書を引くの下又曰く「四隣四方之隣處也」と。是れ此の正文及び注引
尚書本「四鄰」に作りしか爲に釋して隣處となせるなり。（説文曰鄰宛也室之西
南隅又釋宮曰西南隅謂之鄰郭注曰室中隱卿之處）若し隣（説文曰隣水隈崖也）に
作らば何ぞ直に釋して隣處と謂はむや。是に由て之を推すに此の正文及び注の「隣」
の字疑ふべくは當に「與」に作るべし。卷四十六顏延年曲水詩序注引く所正に「與」に作る。效第四三〇
頁に見ゆ
秘寶盈於王府
注尚書曰王府則有初葉裏
第八行

今本尚書五子之歌篇歸石和鈞王府則有卷七
案するに李善尚書の上又「同禮曰王府掌王之金玉玕好」を引きて正文「王府」を

注し王府主府並に出ず。此れ甚だ疑ふべし。是を以て胡氏攷異に曰く「陳云王互
互異必有誤今案各本皆同無以訂也」と。又胡氏攷異に曰く「注王互引此亦如魏
都賦注庶士庶士之例」と。魏都賦庶士庶士之例注尚書曰庶士庶士有揚胡和猷は「庶士」
胡克家釋に是非を決せず胡和猷以て兩存すべしと爲す。

今李注の例に據つて之を推すに正文に異同有ることを注せずして而も直に相異る
二語を並引すること之れ有るべからず。此れ恐らくは轉寫誤て正文「王府」に作
ると「王府」に作るとの二種生じ後人其の誤れる正文に从ひて別に一語を増注せ
しのみ。此の文「秘寶盈於王府」「文題列乎華廡」の二句を攷ふるに下句「華廡」
に對しては上句「王府」に作る者は是なるに似たり。然らば則ち此の注尚書曰の七
字疑ふべくは本當に有るべからざるなり。魏都賦注尚書の庶士も詩の庶士を互引するが
字疑ふべくは本當に有るべからざるなり。若きも餘本皆毛詩を引かざれば是れ胡和猷人
の増注有るを知るなり。
發異議に此の説有り

文教迄已優洽

注尚書曰優武備文第二葉裏
第七行

今本尚書武成篇乃優武備文卷十一
案するに神田本尚書「備文」に作る。「備」は即ち「備」の字なり。彼に从ふの字體書多
く故に作る。羅豫王
云「彼」の字周金文遺稿「彼」に作る有り「故」に从ふの字亦同じと
（説文諸葛氏序下引諸葛小等）然らば「故」は是れ「故」の體變なるべし。

「脩」「脩」均しく「攸」の聲なれば相通用す。是を以て「修德」の脩の字、隸古定尚書
開「脩」に作る。說命下「爾文修予」羅氏敦煌本「脩」に作り、泰誓下「郊社不脩」及
武成此の文、神田本皆「脩」に作るが如き是れなり。

昔帝軒陟位

注尚書曰汝陟帝位第二葉表 左より第四行

今本尚書僉典篇第三葉表 文同じ

精曜協從靈物咸注利本四部本々野本六家本「協」

注尚書曰靈協協從第二葉表 第五行

今本尚書大禹謨篇靈協協從卷四 第十一葉表

案するに卷五十六陸佐公石關銘注尚書此の文を引いて「協」を「叶」に作り、李善の舊
を存するに似たり、此の注亦本「叶」に作りしならむ。

注又曰咸株無文第二葉表 第六行

今本尚書洛誥篇紀于新邑咸株無文卷十五 第十一葉表

又惛宗將禮稱統元祀咸株無文 第十一葉表

然而般于遊畋注尚書曰文王不散盤于遊畋第四葉表 第五行

今本尚書無逸篇文王不散盤于遊畋

案するに、此の注「弗」に作る者はなり。又「盤」當に「般」に作るべく、「畋」當に「田」に作

るべし。攸、既に第一一六頁に見ゆ。

胡克家云、正文「般」の字、原本本葉隱本は「盤」に作る。兩本是なりと。蓋し此の正文

「盤」に作る者は注「盤」の字と相合するを以てなり。然れども李注の舊「般」に作り

て「盤」に作りざれば、正文當に原本を以て是と爲すべし。胡說の苦きは權を賣うて

殊を違へず者と謂ふべし。

惟德動天

注尚書益贊于畋曰惟德動天第五葉表 第九行

今本尚書大禹謨篇卷四 第十四葉表 文同じ

鮑明遠 舞鶴賦

始連軒以鳳踰

注尚書曰鳥獸踰第六葉表 第四行

今本尚書益稷篇第十四葉表 文同じ

班孟堅 幽通賦

巨滔天而浪夏兮

注 象恭 治天 第七葉裏 胡氏改書曰平陽本上有尚書曰三字其本有善曰二字其本有善曰尚書曰五

今本尚書典範 第十九葉裏 文同じ。

審樂謀而相訓 注 尚書曰天威 樂悅 初行 第二葉裏

今本尚書典範 諸篇 天威 樂悅 初行 第五葉裏

案するに陳喬樞「風俗通十反篇書曰天威樂謀言天德輔訓也」及び此の字善注引く

所を擧げ且つ曰く「字郭廣雅注引尚書亦作天威樂悅」是和作悅者古文尚書也

作謹者今文尚書也威字古文今文並同偏孔傳以天德可畏釋天威二字後人遂改釋天威

作天威非是 今文尚書經說 文。

虞詡美而傳鳳台 注 尚書曰節詔九成鳳皇不儀 第十二葉裏

案するに既に第一五九頁に出づ。

卷第十五

張平子 思玄賦

幽獨守此 仄陋兮

注 尚書帝曰明明揚仄陋 初葉裏 六臣注諸本「帝」の字無し。

今本尚書典範 諸篇 帝曰又曰明明揚側 隨 第二葉裏

案するに李善此の經を引くこと四回 東京賦注を除くの外皆「仄」に作りて「側」

に作らず。恐らくは李の尚書「仄」の字を用ひたるなるべし。敦煌本典範 經文亦「仄」

の字を出し「字又作仄古側字」と注せり。 第三二八

卷五十沈休文思傳傳注亦此の經文を引いて「揚」を「散」に作る。此の注亦本「散」

に作りしなるべし。 政詳に第四七

嘉傳說生般

注 尚書曰高宗時得說使白工營求諸野得諸傳 初葉裏

案するに既に第一〇六頁に出づ。

旦傳諸子 羣弟台敗金勝而後信

注 尚書曰武王既喪管叔乃流言於國曰公將弗利於孺子秋大熟未穫天大雷電以風王故金

鐸之書乃得周公代武王之說王敕書以泣曰其勿穆卜乃信 周公 初行 第二葉裏

今本尚書金縢篇武王既喪管叔及其羣弟乃流言於國曰公將不利於殯子陽句秋大孰未獲天大雷電以風陽句王與大夫盡弁以飲金縢之書乃得周公所以薦功代武王之說陽句王執書以泣曰其勿穆卜昔公勤勞王家惟予沖人弗及知今天動威以彰周公之德惟朕小子其新逆我國家禮亦空之卷十三

案するに此の注「弗」に作り内野本尚書と合す。此の注「乃信周公」位謬無し。或は李善尚書を約取して此の四字に作り以て賦の正文「而後信」に應せしめしか。中論知行篇金縢に據りて然後成王寤に作る。

監家民之多僻兮

注尚書曰監民乃拉第二卷

案するに「監」「拉」の攷第五。七頁に見ゆ。

疾防風之言言

注尚書曰朕不第四卷

今本尚書湯誓篇第二卷 文同じ。

存皇至于南都

注尚書曰皇華協于帝第四卷

案するに尚書傳文に據れば尚書此の文殊方與上る所の孔傳本に有りしを知る。

彼天監之孔明兮用樂忱而祐仁

注尚書曰天監厥德第七卷

今本尚書太甲篇上第十八卷 文同じ。

注又曰周公若天威第七卷

今本尚書康誥篇王曰第九卷

又君奭篇周公若曰第十六卷

案するに采章詁曰く「周公若天威樂忱此引尚書君奭篇若天樂忱而多一威字蓋以康誥天威樂忱語誤合篇一」卷十二

べからざれば誤説なるに似たり。蓋し本「周公若天樂忱」に作りしを「日」を

替し「威」を添へて「周公若天威樂忱」に作るに至りしなり。但君奭此の經の傳「順

刪りて「天威樂忱」に作るに至りしなるべし。足利本以下野本但君奭此の經の傳「順

天樂忱」と謂へば賦の正文「彼天監之孔明兮用樂忱而祐仁」の應と甚だしくは協

はす。此の賦の注康誥を引くを以て較長と爲す。

監録道而德第六卷

注尚書曰監第六卷

今本尚書大禹謨篇曰第六卷

案するに李善據る所の尚書「監録」に作りて「單陶」に作らず。攷録に希し八七

頁に見ゆ。

申厥好以玄黃

注尚書曰厥。玄黃。第九卷表

今本尚書武成篇。註。厥。玄黃。第十卷表

案。するに武成篇「厥。玄黃」に作る者。微。無。し。卷五十六陸佐公石闕銘注。尚書を引いて「玄黃」に作り今本尚書と合す。此の注。或は轉寫者。微。黃。「玄黃」の句に涉りて誤り倒せるか。

又案。するに。僖。武。成。「肆。予。東。征。綏。厥。土。女。惟。其。士。女。篚。厥。玄。黃。昭。我。周。王。云。々」は孟子滕文公下引く所の逸書の「有攸不惟臣東征綏其士女篚厥玄黃昭我周王見休云々」と製へる者と謂はるゝか。王。雋。監。尚。書。後。神。鄭。玄。尚。書。注。に。注。して。亦。「胤。征。云。厥。篚。玄。黃。昭。我。周。王」を引きて正に「厥」の字上に在り。是。篚。厥。玄。黃。下。の。正。義。引。文。を。詩。小。雅。鹿。鳴。等。引。今。本。を。詩。經。に。作。り。て。尚。書。正。孟。子。引。く。所。の。書。と。鄭。玄。引。く。所。の。書。と。は。是。れ。本。同。一。送。文。な。る。べ。け。れ。ば。偏。孔。氏。篚。厥。所。或。は。本。「篚。篚」に。作。る。こ。と。此。の。注。引。く。所。の。知。が。り。し。こ。と。差。を。保。し。難。し。姑。く。蓋。闕。に。从。ひ。て。諸。を。明。者。に。違。す。

茲令傳於正中兮

注尚書曰惟爾。今本。第九卷表

今本尚書君陳篇。第十卷表。文同じ。

太容吟曰念哉

注尚書曰念哉。第十卷表

今本尚書大禹謨篇於帝念哉。第四卷表
又帝念哉。第六卷表

張平子 歸田賦

極船遊之至樂

注尚書曰般。遊。樂。度。第十卷表

今本尚書五子之歌篇。乃。般。遊。樂。度。第十卷表

案。するに。原。本。王。雋。監。尚。書。後。神。鄭。玄。尚。書。注。に。注。して。亦。「胤。征。云。厥。篚。玄。黃。昭。我。周。王」を引きて正に「般」に作る。此の注の「般」の字

遊。無。度。を。引。き。九。條。家。本。尚。書。維。氏。景。印。敦。煌。本。尚。書。亦。正。に。般。に。作。る。此。の。注。の。般。の。字。其。の。語。有。り。と。謂。ふ。べ。し。

切韻を攷ふるに。上。平。廿。四。聲。「般」の字を訓じて。樂。と。爲。し。王。雋。監。尚。書。後。神。鄭。玄。尚。書。注。に。注。して。亦。「胤。征。云。厥。篚。玄。黃。昭。我。周。王」を引きて正に「般」に作る。此の注の「般」の字

切韻を攷ふるに。上。平。廿。四。聲。「般」の字を訓じて。樂。と。爲。し。王。雋。監。尚。書。後。神。鄭。玄。尚。書。注。に。注。して。亦。「胤。征。云。厥。篚。玄。黃。昭。我。周。王」を引きて正に「般」に作る。此の注の「般」の字

切韻を攷ふるに。上。平。廿。四。聲。「般」の字を訓じて。樂。と。爲。し。王。雋。監。尚。書。後。神。鄭。玄。尚。書。注。に。注。して。亦。「胤。征。云。厥。篚。玄。黃。昭。我。周。王」を引きて正に「般」に作る。此の注の「般」の字

切韻を攷ふるに。上。平。廿。四。聲。「般」の字を訓じて。樂。と。爲。し。王。雋。監。尚。書。後。神。鄭。玄。尚。書。注。に。注。して。亦。「胤。征。云。厥。篚。玄。黃。昭。我。周。王」を引きて正に「般」に作る。此の注の「般」の字

切韻を攷ふるに。上。平。廿。四。聲。「般」の字を訓じて。樂。と。爲。し。王。雋。監。尚。書。後。神。鄭。玄。尚。書。注。に。注。して。亦。「胤。征。云。厥。篚。玄。黃。昭。我。周。王」を引きて正に「般」に作る。此の注の「般」の字

卷第十六

潘安仁閑居賦

方今俊乂仕官百工惟時
注 尚書曰俊乂仕官 第二卷表

今本尚書皋陶謨篇 卷四 葉裏 文同じ。

案するに卷廿四潘安仁爲曹鑑作贈陸機詩注卷廿四曹子建七敘注卷四十三孫子荆爲石仲容與孫皓書注俱に尚書を引いて皆此の注と同じきも卷廿曹子建責躬詩注引く所「俊」を「德」に作り卷五十六曹子建王仲宣誄注引く所亦「德」に作る者有り。
第二卷表

二四九頁
に見ゆ。
 注 又曰百工惟時

今本尚書皋陶謨篇 卷四 葉裏 文同じ。

案するに卷五十五陸士衡廣絕交論注尚書を引いて此の注と同じ。

國語拙於用多

注 尚書周公曰予多才多藝 第二卷表
左より第三行

今本尚書金縢篇 史乃冊祝曰 賜予仁右考能多材多藝 卷十三 葉裏
第八卷表
 案するに李善註に上に「莊子謂惠子曰夫子固拙於用大」を引けるを以て此の正文

の注乃ち足る。而も尚書「多才」の語「正文」「用多」と甚しくは相渉らず。疑ふ此の注尚書以下の十字後人の加ふる所かと。胡氏攷異に曰く「袁本茶陵本無此八字」云々

注尚書曰頌厚有桓桓第三葉表

今本尚書五子之歌篇第三行 文同じ。

宗文考以配天

注尚書曰惟予文考第三葉表

案するに今本尚書此の文無し。此の注疑ふらくは、泰誓下「惟我文考若日月之照臨」或は「惟朕文考無罪」を節引して「我」「予」若しくは「朕」「予」互に異れるなるべし。泰誓此の文「予」に作る者證無し。

石廷國書左納良逸

注尚書曰養教胥子第四葉表

今本尚書尚典篇曰養命汝典樂教胥子第六葉表

案するに李善上注明に「國學教胥子太學招賢良」と言ひ其下尚書を引いて正文「國胥」の語を證す。是れ李善尚書を讀んで「胥子」二字を以て一語と爲し「教胥」二字を以て一語と爲せりしこと當に疑ふべからず。

卷廿頌延年皇太子釋奠會詩「安先國胥」注卷四十六王元長三月三日曲水詩序「入

虎蘭崗胥子」注卷六十仕彦昇齊竟陵文宣王行狀「儀形國胥」注俱に尚書此の經文を引けは其の尚書の讀當此の注引く所と同じきを知る。

馬注 胥長也教長天子之子弟教長本傳文長教長也。今本「胥文」字。

鄭注 胥子國子也王國子也。傳文長也。

王注 胥子國子也。傳文長也。乃ち馬融は經「教胥子」を讀んで「教胥」二字一語「子」一字一語と爲し鄭王は「教」

一字一語「胥子」二字一語と爲せしなり。此の字王引之の說。謂元「足利本」に作り内野本以下至御

偏孔傳は則ち曰く「胥長也子」に據りて之を補ひ「國」訓元足利本「子」に作り内野本以下至御

大夫子弟以教誨之典之教長國子中和穆肅孝友」と。

王引之此の傳文を附して曰く「故長國子謂教長此國子猶馬注言教長天下之子弟也

此是訓教胥爲教長訓子爲國子非胥子二字連讀而訓爲長子也且兼弟言之則非獨長子

明矣」經義述聞錄神山房と。王引之に當る。

魏のて李善引く所の尚書を見るに其の讀鄭王と爲して偏孔と合せず。然らば則ち

李善或は鄭王本に據りて之を引けるかと疑はれざるに非ず。然れども李善の尚書を

引くや偏孔氏本を王とし偏孔傳の解文選正文の用例と其の證協はざる者有りて乃

ち鄭王本に據り且つ其の注を連引するを常とす。然るに今屢々尚書此の經を引いて而

も一も鄭王の注を并舉する者無ければ其の引く所皆偏孔氏本に據れること明かなり。

幸善既に偏孔氏本に據りて而も「胃子」二字を以て連續し、「教胃」二字を以て連續せざりしの説尙ほ一有り。
 卷十一左本中詠史の首「世高臨高位英俊就下傳」其の「世高」の語是れ胃子を謂へること當に疑ふべからず。而して幸善之に注して「孔安國尚書傳曰胃長子也謂鄭大夫子弟也」を引く。此れ幸善姚傳に據りて而も經文「教胃子」を讀んで「胃子」一語と爲せるの明證に非ずや。
 尚書正義を攷ふるに此の經を釋して「當以詩樂教訓也。通長子使此長子正直而溫和寛弘而莊栗剛毅而不可虐簡易而不傲慢」と曰ひ傳を釋して「説文云胃鳳也釋詁云鳳繼也繼父也者惟長子耳故以胃爲長也……是今漢以教詩詠之舞之教此通長國子也」今漢書に據る。と曰へば是れ孔氏等亦經内「胃子」の二字を連續せしを知る。孔氏等の此の論は本傳「胃長也」の「長」を誤り解して「長子」と爲し傳「教長國子」を誤り解して「教通長國子」と爲せるに因りて生ず。豈に據る國と雖も傳を讀んで斯くの如く解するは獨り孔氏等のみの謬には非ずして必ずや承くる所有りしなるべし。
 今幸善の據れる偏傳文孔氏等據る所と全く同じかりしや否や明かならざれども其の經の句讀は則ち孔氏等と正に合す。然らば則ち唐初の人姚本此の經を讀んで鄭王の讀と同じくせしを知るなり。

〔四〕王引之今本尚書傳孔傳「胃長也謂元子以下至鄭大夫子弟」の「也」を訂して「子」に作り且つ曰く「今本子作也乃後人所改王制正義引孔傳胃長也世字亦後人

所改史記正義曰孔云胃長子謂元子以下至鄭大夫子弟也山井鼎尚書考文曰謂元子以下古本讀上有子字」經義述聞卷三。案するに今本は「子」字を改めて「也」字に作れるに非ず。惟「也」の下「子」字を奪せしのみなるべし。足利古本内野本並に「胃長也子」と記すは即ち鄭本と謂ふ云に作る。是れ其の證なり。是を以て今王説に从ふと雖も敢て「也」字を刪去せず。

又案するに禮記王制注「樂正樂官之長掌國子之教虞書曰虞命汝典樂教胃子」孔引又案正義に曰く「引虞書命汝典樂教胃子者證以樂官教胃子之義孔注尚書云胃長也謂王子公卿大夫元士之子」第五卷と。鄭虞書を引く。固より「胃子」二字連續。今孔疏鄭注引く所の虞書を釋するに孔注を以てするは是に非ずと雖も而も孔氏等之を引く者は其の見る所の孔注正に「胃長也」に作り且つ孔氏等此の孔注を解して「胃は長子なり」の意と爲せるを以てなり。
 假に王説の如く此の正義引く所の孔注「胃長也子謂王子云云」に作らしめは是れ鄭注引く所の「胃子」と合せ且つ孔疏上文「教胃子之義」と相承く。然らば則ち王制正義は本より「孔注尚書云胃長也」に作りて「胃長子謂云云」に作りしは非ず。王引之今の王制正義を以て後人の改むる所と爲すは恐らくは誤。

〔五〕偏孔傳「胃長也子謂云云」は本馬注「胃長也教長天子之子弟」左傳へるに似たり。而して鄭注本傳文に據るは馬注正に「教長天子」に此の如く作る。然らば則ち此の偏孔傳も「天子以下」に作る者は是なるかと疑はる。

尚書正義「説文云胃胤也釋詁云胤繼也繼父世者惟長子耳故以胃爲長也謂元子已下至卿大夫子弟者王制云樂正崇四術立四教云云」を敬するに其の據る所の偽孔傳明かに「胃長也謂元子以下至卿大夫子弟」に作りしを知る。王制正義孔注尚書正義云「胃長也謂王子公卿大夫云々」を引くも亦其の據る所を傳文既に此の如く作れば「謂元子以下云云」を以て「胃」字を釋せる者と解せざるを得ず。孔氏等既に傳「胃長也」の「長」を以て「長子」の意と爲す。是を以て傳下文「敬長國子」を曲解して「敬此遠長國子」と爲さざるを得ざりしなり。然れども孔氏等の如く解する時は傳「長國子」の語甚だ不置。是れ決して偽傳の本義を得たる者に非ず。

敬無常師道は則是

注尚書曰德無常師主善爲師 第四葉裏 左より第四行

今本尚書咸有一德篇 第七葉裏 文同じ。

司馬長卿 長門賦

歩從容於深宮 注尚書曰從容以和 第六葉裏 左より第四行

案するに既に第一一六頁に出づ。

象補石之將將

注尚書曰象河補石 第六葉裏 左より第三行
案するに此の注「補」の上疑ふべくは當に「補」の字有るべし。致既に第九四頁に見ゆ。

奎楚組之連綱

注尚書曰荊州厥篚玄纁綱 第七葉裏 左より第一行

今本尚書禹貢篇荊及衡陽惟荊州屬の厥篚玄纁綱。祖案するに此の注「綱」の字各本皆同じ。然れども禹貢の傳明に「璫珠綱」と曰ふ字書亦「綱」の字無ければ文選注系に从へる者上下の字に涉りて誤れるのみ。

陸士衡 歎逝賦

悼堂構之隅庑

注尚書曰取子乃弗肖堂引肖構 第九葉裏 左より第一行
今本尚書大誥篇 第十三葉裏 文同じ。

潘安仁 懷舊賦

感于予思

注 尚書曰予思曰孜孜第十一葉裏 卷七行
 今本尚書益稷篇于思曰孜孜卷五 第一葉裏
 案するに 此の注「日」の字本「日」に作りしかと疑はる。 孜孜に弟
 なり。

潘安仁 寓婦賦

茶毒之極哀也
 注 尚書曰不忍茶毒第十一葉裏 卷二行
 今本尚書湯誥篇曰惟且凶害弗忍茶毒卷八 第十葉裏
 案するに 今本尚書「不」の字本善引く所多く「弗」に作る。致註に弟 卷廿 此の注及び
 關中詩注引く所の尚書「得」に「不」に作りて「弗」に作らず。或は李善の尚書自ら然りしか。
 愛幸囿於高族第十二葉裏 卷二行
 注 尚書曰囿于虞第十一葉裏 卷二行
 今本尚書堯典篇卷二 第四行 文同じ。

卷弟十七

陸士衡 文賦

蓋非知之難能之難也
 注 尚書曰非知之艱行之惟艱初葉裏 卷四行
 今本尚書說命篇中非知之艱行之惟艱卷十 第十葉裏
 案するに 足利古本、慶應義塾刻本尚書並に兩「艱」の字皆「難」に作る。「難」に作る者、文
 賦正文と合す。王鳴鳳云、小字傳昭十年、子皮曰非知之、當難能任行之、則馬注曰非知、李善引く所の尚
 書「本より「艱」に作りしか即本「難」に作りて正文と合せして後人改めて「艱」に作り
 しか疑うて明かにする能はず。
 固應絕其必當
 注 尚書曰惟木從繩則正第四葉裏 卷四行
 今本尚書說命篇上卷三 第十葉裏 文同じ。

昔辭條與文律

注 尚書帝曰律和聲第五葉裏 卷四行
 今本尚書堯典篇帝曰「律和聲」卷二 第十葉裏

病冒言之難屬

注 尚書帝曰亦言 第五卷表

今本尚書益稷篇帝曰來禹汝亦昌言 卷五 第一卷表

帝則於末葉仰觀象于古人

注 尚書曰于思來世 第六卷表

今本尚書仲虺之誥篇于思來世以台爲口實 卷八 第六卷表

案するに卷五十八蔡伯喈鄭有通碑文注尚書を引いて亦此の注と同じ。蓋し冒節に

从へるなり。

注 又曰于欲觀古人之象

今本尚書益稷篇 卷五 文同し。

宣風暫於不泯

注 尚書畢命曰彰善癉惡樹之風 卷七 卷表

今本尚書畢命篇彰善癉惡樹之風 卷七 卷表

案するに卷十六王元長永明十一年策秀才文注尚書此の文を引いて各本皆「章」に作

り岩崎本尚書と合す。

結語讀ふ禮記緯衣「有國者章善癉惡以示民厚」此れ僞孔氏の難表ふ所なりと。尚書

而して禮記緯衣「章善」を出し「尚書作善」と注して「章」字の異同を注せざれば

是れ陸思翁所の畢命亦「章」に作りて「シ」に从はざりしなり。

孫志祖謂ふ古「彰」の字皆「章」に作りて「シ」を加へすと。陸氏尚書注疏校勘記卷十九第三

而して「彰」は表彰の義なれば此の注本「彰」に作れるを書寫者特に改めて「章」に作

ること有るべからず。是れに據りて之を觀れば此の注「章」に作る者本書の善をな

すと謂はざるべからず。

此の注「尚書」の下「畢命」の二字有る者非なり。蓋し是れ本後人句記の語。

李善引書の例正文と關する有るに非されは篇名正記です。卷八

王子淵 洞簫賦

覆記准法

注 尚書帝曰養命汝典樂教寡子 第七卷表

案するに既に第二二。頁に出つ。

故有贊者隨之而康陽令

注 尚書曰叨懌 第九卷表

今本尚書多方篇亦惟有夏之民叨懌 卷九 卷表

案するに此の注尚書を引くの下又「孔安國曰倉賡倉急」の語を引く。今本尚書傳

作る。然れども正善を引くに其の據る所の 若し李善の意傳文「倉賡倉急」の語を以て文選正文

傳文正に録しに作るに似たり。

今傳文「貪瞋忌憚」と其の經「明憚」とを併せ致ふるに、舊孔氏經「明」の上に「貪」を添へて「貪瞋貪」と爲し、又經「憚」の上に「貪」を添へて「貪瞋憚」と爲せるに似たり。考す引く所の傳文に作して「明」に作るは、或は其の授も亦未だ確證を得ず、數文五下全部「貪」を以て「明」に作るは、或は其の授も亦未だ確證を得ず、然らば則ち此の注尚書を引いて「貪憚」に作れる者は本「貪瞋憚」に作りて誦せしか否らずんば、正文「貪」の字に涉りて誤れるのみ、李の蓋然りしには非なるなり。萬希槐十三經證異此の注「尚書曰貪憚日欽」に作れる者を擧げ且「說文貪部貪貪云貪也、貪瞋瞋瞋或从口刀聲、作叨叨即瞋貪之重文、訓貪貪故遂注引書作貪」三葉表と謂へるは恐らくは非なるべし。

今の尚書此の字の傳に曰く「梁洪舒於民故亦惟有夏之民會切念愼而逆命於是梁民
「民」は「民」の誤なり、四部書刊本尚書同刊注本正之 尊敬其能劓劉晏色者謂莽賊臣
氏按勅詔記古云
此に作る正字を疑ふに正字に因る 尊敬其能劓劉晏色者謂莽賊臣
氏按勅詔記古云
此れに傳れば經傳に「叨懣」下に句して「日欽」の二字下屬すべし。
説文下之字
後漢書下之字
夏之民の民字を引く 亦今李善「叨懣曰欽」の四字を引く。是れ其の讀今の傳と合せ
下之字に可するに似たり
北堂書鈔 卷中「懣懣」劓劉晏色」を引く。虞世南亦「日欽」を上句に屬せ
しむること本善と同じかりしかと疑はる
李善既に尚書を引き又孔傳を引ければ其の讀値孔氏に従へること當に疑ふべからず
然るに李の讀今の傳と合せざる者は豈に其の傳文今本と大に異りしに因るか 抑
他に故有るか 今證左文しくして之を決する能はず。

傳武仲舞賦

臣聞歌以詠言。注尚書曰歌詠言不行。第丁葉表。足利孝四郎本。淺野本。誤在「詠」作「言」。

今李尚書舜卿編永言新考卷六表案するに此の注「永言」に作る者はなり。李善此の注尚書を引くの下又「孔安國曰歌詠其義以長其言」を引く。是れ正文は「詠言」に作り注引尚書は「永言」に作りて相合せざるが爲に、又孔傳「歌詠其義」を引いて「永詠同義なることを明かにせしなり。此れ猶ほ卷四十六元長三月三日曲水詩序「同律克和」の注「尚書曰八音克諧」を引き、其下又「孔安國曰諧和也」を引けるがごときなり。然らば此の注「詠言」に作る者は正文に涉りて誤れるなり。魏代六宮德皇后令「屈延於無文之正」注「永言」「明劉本正文」漢書に涉りて注「詠言」に作る者は此の例。卷廿九何敬祖撰詩「永言寫情慮」注引「所正」に作る。

所以陳清齋協神人也

注 尚書曰八音克諧神人以和 第十卷表
今本尚書舜典篇八音克諧無相奪倫神人以和 卷三

卷第十八

馬李長 長笛賦

獨聆風於極危

注 尚書曰惟箇輅格 初葉表

今本尚書尚書篇 卷六 文同し。

案するに李善尚書を引くの下又「鄭玄曰箇輅聆風也」 此の鄭注、胡刻本、衍文有り今、を引

慢襲比律

注 尚書帝曰發命汝典樂教胥子 第三葉表

案するに既に第二二〇頁に出つ。

無相奪倫

注 尚書曰八音克諧無相奪倫 第四葉表

案するに既に右に出つ。

溫直獲穀孔孟之方也

注 尚書曰卑陶曰獲而穀直而溫 第五葉表

今本尚書卑陶誤篇卑陶曰 餘本此の

案するに此の注「卑陶」の二字當に「各縣」に作るべし。攷既に第一八七頁に見

率作卿事

注 尚書各縣曰率作卿事 第七葉表

今本尚書益授篇卑陶拜手稽首題言曰念哉率作卿事 此本、益授篇の五字無し。

案するに李善據る所の尚書「各縣」に作りて「卑陶」に作らず攷既に第一八七

頁に見ゆ。

華脫切錯

注 尚書曰錫爵駟錯 第七葉表

今本尚書尚書篇 卷八 文同し。

有庶士丘仲

注 尚書曰庶邦庶士 第六葉表

今本尚書酒誥篇厥詔庶邦庶士 卷十四

嵇叔夜 琴賦

吟詠以肆志

注尚書曰詩言志 第八卷表

今本尚書與典篇 第七行

文同じ

珍怪琅玕

注尚書曰琅玕琅玕 第九卷表

今本尚書與典篇 第三行

潘安仁 笙賦

望鳳儀以擢形

注尚書曰鳳皇來儀 第十四卷表

宋するに既に第一五九 頁に出つ

取義包以授甘

注尚書曰厥包橘柚 第十六卷表

今本尚書與典篇 第四行

宋するに胡代攷證に據れば袁本・茶陵本此の正文及び注の「苞」の字皆「苞」に作ると

卷三 足利本四部藏刊本・澤野本・六家本・真に袁本・茶陵本に同じ。蓋し「苞」に作る者は李善の舊を存するなり。今岩崎本尚書を檢するに正に「苞」に作る。此れ偏孔氏本本「苞」に作るの明證なり。段玉裁古本尚書皆「苞」に作れることを攷へ偏孔氏本亦當に然るべきことを推定すと雖も 第十卷表 宋石偏孔氏本の明證を示さず。此の注以て段説を補ふべし。「苞」「苞」兩字同異の攷詳に第二九六頁に見ゆ。

成公子安 嘯賦

百獸率舞而抃足鳳皇來儀而拍翼

注尚書曰於千擊石拊石百獸率舞 第九卷表

今本尚書與典篇 第十行

益樓篇 第十行

又案曰於千擊石拊石百獸率舞

案するに此の注サ字本より連引せしか或は本「舞」の下「又曰」の二字有りて後人刪れるが疑うて明かにする能はず。

其の所、是れ後引に非ざるなり。
 裴既に五者以下の十字を以て經文「庶徵」の解なりとして之を史記「日風」の下に引く。然らば則ち裴見る所の孔氏本經文本より「日時」の二字無かりしなり。
 若し史記「日時」の二字無く尚書は則ち「日時」の二字有り且つ傳之を釋して「五者各以時云」と曰はば裴何の尋有つて傳「五者」以下の十字を引かむや。
 此れに據つて之を推すに裴見る所の尚書亦「日時」の二字無きこと對照見る所と相同じかりしに似たり。

又尚書正義「鄭云雨。木氣也。春始施生。故木氣爲雨。晴。金氣也。秋物成而堅。故金氣爲晴。燠。火氣也。寒。水氣也。風。土氣也。凡氣非風不行。猶金木水火非土不處。故土氣爲風」を引く。
 注「日時」を釋せざるに似たり。然らば鄭本亦此の二字無かりしかと疑はる。
 小雅新之曰正義鄭本尚書に據りて説を爲し且庶徵曰庶徵曰庶徵曰庶徵の二字無し。
 既に對引く所の尚書正に「日時」の二字無く裴見る所亦然るに似たれば李善據る所亦「日時」無きこと胡克家の説の如かりしなるべし。
 石の如く致へ来れは東晉古文本「庶徵曰雨曰晴曰燠曰寒曰風五是」或傳「來備」に作りて今文尚書尚書也と陳皮陸氏の説也。と相異らざりしを後人傳文「五者各以其時云」と誤り解し據て以て經中に「日時」の二字を増多せしかと疑はる。
 傳之を下に引くに「日時五者來備」と讀まへざる。傳之を誤り解し據て以て經中に「日時」の二字を増多せしかと疑はる。
 又案するに此の注「燠」の下轉寫惟「日寒」の二字を奪せしのみなるやも亦未だ知

るべからず。何俾神聖を授する所亦理無きに非ざるなり。然らば李見る所の本既に「日時」の二字有りて今本と略同しかりしこととなる。但李善尚書此の經を引くこと惟此の注一條而も各李皆大同以て李の舊を明かにし難し。乃ち姑く胡氏校訂する所に从ひて肌度の書を記すること右の如し。

此の注「五是」六臣本は「是」に作る。李善本正文明に「是」に作り而も注中「是」
 「吉」同異の語無きを以てすれば其の注亦本より「是」に作りて正文と相合せしなるべし。
 今偽孔氏尚書諸本を攷ふるに

正義經を釋して曰く「五者於是一是」云云と

正義據る所の本 五者是來備

此れ正義本也。此の下「是」の字有りとの説。

足利古本 五者是來備

此れ正義本也。此の下「是」の字有りとの説。

雲窗叢刊本(即ち萬理)五者是來備

此れ正義本也。此の下「是」の字有りとの説。

内野本 五者是來備

此れ正義本也。此の下「是」の字有りとの説。

皆「五者是」に作る。而して雲窗本内野本並記する所の校語に據れば皆本乃ち「五者」に作りて「是」の字無きに似たり。
 李善引く所の「五是」正義本以下四本の「五者是」唐石經以下の「五者」を比較するに洪範本「五者」に作りとせば後人々に「是」の字を増すの理有るべからず。是を以て洪範原文は「五是」若しくは「五者是」ならざるべからず。

勸進表注引く所「予后」を「我后」に作りて李善の舊をなするに似たれば疑ふらくは此の注亦「我后」に作るべし。

韋孟 諷諫詩

非登王室 注尚書曰以藩王室 第十四卷表 調次分置曰韋孟字季 世此也。足利

今本尚書微子之命 卷十三 文同し 本四部本海野中六家本亦此の字無し

又蔡仲之命 卷十七 亦同し 案するに卷廿三王仲宣贈士孫文始詩注尚書を引いて此の注と同じ。

庶尹羣后 注尚書曰庶尹允諝 第十四卷表 左より第四行

今本尚書益稷篇 卷五 文同し 注又曰肆觀羣后

今本尚書費典篇肆觀東后 案するに攷既に第一五五 有に尼や

蟬彼顯祖 注尚書曰昭乃顯祖初行 第十五卷表

今本尚書文庫之命篇父義和世克紹乃顯祖 卷廿三 案するに阮氏尚書校勘記に曰く「紹唐石經古岳宋板蔡傳俱作昭石經考文提要云孔安國傳汝能明汝顯祖唐叔之追明訓昭也」 卷廿三 今、又條李内野本並に正に「昭」に作り、陳鱣見る所の本亦「昭」に作る。 唐石經唐叔文 正義本亦「昭」に作れるに似たり。

漢之睦親 注尚書曰九族既睦 第十五卷表 今本尚書克典篇 卷八 文同し

以休令聞 注尚書曰舊有今聞 第十五卷表 今本尚書微子之命 卷十三 文同し

追思黃髮 注尚書曰追思黃髮則罔所行 第十五卷表 注尚書堯典曰詢茲黃髮則罔所行 第十九行 足利本四部本海野中六家本亦此の字無し

又經公曰傳尚 賦詢茲黃髮則罔所行 卷十三 案するに此の注「茲」の字を「于」に作る者佗の證無し。 卷廿四魯子建贈白馬王彪詩

注引く所各本俱に「茲」に作る。 此の注「思」の字を「傳」に作る者李善の舊をなするに似たり。 段玉裁謂ふ漢書李

尋傳師古注李善則員然尚猶詢茲黃髮則罔所行を引いて「思」を「傳」に作る。 唐初

本篇文に従へるなり。附異卷四と。第三葉裏。九條本、武内博士本、内野本、尚書均しく正に「保言」に作る。

張茂先 勵志

如彼梓材弗勤丹漆雖勞朴斲終質索質
注尚書曰若梓材既勤模斲惟其塗丹第十五葉裏
今本尚書梓材篇卷十四第廿六葉裏文同じ。
案するに、卷廿六顏延年初謝靈運詩注尚書を引いて亦「惟其塗丹」に作る。

卷第二十

曹子建 上責躬應詔詩表

恩隆父母
注尚書曰天子作民父母第二葉裏
今本尚書洪範篇卷十一第廿四葉裏文同じ。
案するに李善此の經を引くこと凡そ二回文皆同じ。
不圖聖詔猥垂臨召
注尚書曰降霍叔于庶人三年不齒第二葉裏
今本尚書蔡仲之命篇卷十七初葉裏文同じ。

責躬詩

荒服來王
注尚書曰四夷來王第三葉裏
案するに既に第一三九頁に出づ。
文則時雍

内に於ては其の證無し。足利三平及の北堂鈔引
く所正に「詩」に作る。

國有典刑

注 尚書曰象以典刑第三葉表
第九行

今本尚書典刑篇第三葉表
第十五葉表 文同じ。

改封克邑

注 尚書曰濟河惟克州第四葉表
初行

今本尚書禹貢篇第六葉表 文同じ。

于彼蕢方

注 尚書五子之說曰惟彼陶唐有此蕢方第四葉表
第五行

案するに既に第一六七頁に出づ。

恐承悚惕

注 尚書曰恐承于帝第四葉表
第十一行

今本尚書舜典篇第二葉表 文同じ。

注 又曰悚惕惟厲

案するに既に第一四〇頁に出づ。

潘安仁 關中詩

荆關枉錯

注 尚書曰五辭簡孚正于五刑第五葉表
第七行

今本尚書呂刑篇第十九葉表 文同じ。

岳牧廢殊

注 尚書曰內有百揆四岳外有州牧侯伯第五葉表
第十一行

今本尚書周官篇第二葉表 文同じ。

桓桓梁征

注 尚書曰勛詩夫子尚桓桓第六葉表
第四行

今本尚書牧誓篇第十一葉表

案するに卷四十七題充國頌注引く所「故」を「才」に作れば此の注亦當に「才」に作るべきに似たり。

顯戮亦從

注 尚書王曰不迪有顯戮第七葉表
末行

今本尚書秦誓篇下王曰顯可不迪有顯戮第十一葉表

案するに此の注「不」の字當に「弗」に作るべし。攷既に第一七七頁に見ゆ。

荼毒于秦

注尚書曰不忍荼毒第八葉表

今本尚書湯誥篇釋其凶害弗忍荼毒第十葉表

案するに放既に第二九二頁に見ゆ。

申命書司

注尚書曰申命第八葉表

今本尚書堯典篇第十葉表 胡氏攷異に云く、書中、堯本此の注無し。無き者は脱せしめ、是則本、四部本、後野本、六家本亦無し。

劉公幹 公謠詩

永日行遊

注尚書曰永第九葉表

今本尚書堯典篇第十葉表 文同じ。

應德璉 侍五官中郎將建章臺集詩

將就衛陽樓

注尚書曰衛陽第九葉表

案するに既に第九八頁に出づ。

陸士衡 皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩

自昔哲王

注尚書曰昔第十葉表

今本尚書通鑑篇第十葉表 文同じ。

詐之宅土

注尚書曰降第十葉表

案するに既に第一四六頁に出づ。

世武王承

注尚書伊尹曰肆嗣王第十葉表

今本尚書太甲篇上伊尹作書曰第九葉表 肆嗣王不承第十葉表

自彼河汾奄有七政

注尚書曰第十葉表

今本尚書舜典篇第十葉表

案するに此の注引く所「琯璜」の上「在」の字無し。卷五十三李贄遠運命論注引く所亦「在」の字無し。蓋李贄據る所の尚書本より此の字無かりしか、抑、節引せしか。

史記律書・天官書・漢書天文志・後漢書孝安皇帝紀俱に「琯璜」王衡以第七葉表の文有りて皆「在」の字無し。

此の注「我」の字李善の「機」に作りしかと疑はる。攷第四八。頁に詳なり。

世篤其型

注尚書曰世篤忠貞第十葉表 足利本西御本淳野本六家

本也の上巻の字有り

今本尚書君牙詰王若曰嗚呼君牙惟乃祖乃父世篤忠貞第十葉表

案するに「世」の上「君」の字有る者許慎し。或は本「君牙」に作りて後「君」を奪せしか。

欽翼昊天

注尚書曰欽翼昊天第十一葉表

今本尚書堯典篇第十一葉表 初行

謏敢以詠

注尚書曰謏敢以詠第十一葉表 詠祖考來格第十一葉表

今本尚書益稷篇第十一葉表 詠祖考來格第十一葉表 詠祖考來格第十一葉表

附聲庶幾

注尚書曰允釐百工庶幾第十二葉表

今本尚書堯典篇第十二葉表 文同

體輝重光承規景敷

注尚書曰昔先君文王武王宣重光第十一葉表

今本尚書顧命篇第十一葉表 君文王武王宣重光第十一葉表

案するに皮錫瑞曰「李善注文選陸士衡宣志園詩作昔先君注鍾士李微蜀文作昔狀

君今本作昔君文善未便疑脫一字然李善注亦差不一未敢意也第四葉表 王元龜
正史記曰曰康王之誥亦云昔君文善未便疑脫一字然李善注亦差不一未敢意也第四葉表 王元龜
り李善注文選陸士衡宣志園詩作昔先君注鍾士李微蜀文作昔狀第四葉表 及氏の
説是なり。

今本尚書を攷ふるに「昔君」の語顧命と康王之誥とに各一見するのみにて而も李
善の引く所皆「昔君」に作りざれば今本顧命康王之誥疑ふらくは誤奪あるべし。
但卷四十三簡石仲容與孫緒書注卷四十四簡蜀文注卷四十八典引注並に尚書此の經
を引いて皆「昔我君」に作り第十葉表 是れ李善注と異なり此の注引く所と合せず。未だ
知らず何に由つて前後不齊是くの如くなるや。

今本尚書を攷ふるに「昔我先王」の語三見第十一葉表 「古我先王」
語各一見第十一葉表 すれば顧命此の經或は本「昔我先王」に作りしや亦未だ知る
べからず。

注尚書周公曰王嗣燕第十一葉表

今本尚書大誥篇序周公相成王將黜殷作大誥第十一葉表 弗弔天降割于我家不少後第十一葉表 延洪惟我幼沖人第十一葉表 嗣齊第十一葉表 畢造哲迪民康第十一葉表

案するに大誥「王若曰」の傳に曰く「周公稱成王命云々」と。是れ此の經は周公
の言なり。佗篇傳以て周公王命を稱すと稱す者は其の經多く先づ周公言の語有り
て而して後に「王若曰」有り。康誥「周公咸勤乃洪大誥治王若曰」多士「周公初

今本尚書洪範篇洪範曰洪範言曰洪範視曰明洪範聽曰聰洪範言洪範を後にし今本尚書と其の文次異なる。
下注引く所の尚書注亦同じ。蓋し李善文選正文に順ひて序を爲せるならむ。
又案するに蜀志卷八秦宓傳宓至權に報じて曰く「共統記災發於言貌」と。此れ固
より彙輯の要なりと雖も亦「言」を先にす。或は古本尚書「言」を先にし「貌」を後に
せる者有りたるか。

登庸以德明試以功

注尚書帝曰若時登庸第十三葉表

今本尚書堯典篇帝曰時登庸第十三葉表

注又曰明試以功車服以庸第十三葉表

今本尚書舜典篇第十三葉表文同じ。

言去其辟

注尚書曰君無以辯言亂舊政第十三葉表

今本尚書太甲篇下君罔以辯言亂舊政第十三葉表

案するに尚書「無」に作る者諸無し。

六府孔修

注尚書曰四海會同六府孔修第十三葉表

今本尚書禹貢篇第十三葉表文同じ。

暨敷南暨西漸流沙

注尚書曰東漸于海西被于流沙第十三葉表

案するに既に第一。四頁に出づ。又此の注「暨」の字疑ふらくは當に「暨」に作る

べし。攷證に第三三七頁に見ゆ。

内和五品外戚四客

注尚書帝曰五品不遷第十三葉表

今本尚書舜典篇帝曰知百姓不親五品不遷第十三葉表

注又曰四夷咸賓第十三葉表

今本尚書旅獒篇第十三葉表文同じ。

范蔚宗 樂遊應詔詩

隨山上岵嶽

注尚書曰隨山瀟川第十五葉表

今本尚書禹貢篇序第十五葉表文同じ。

謝靈運 九日從宋公戲馬臺集送孔令詩

歸宮建海嶠謝靈運集

注 尚書曰至于海隅蒼生 第十五葉表 左より第三行
 今本尚書益稷篇 第十五葉表 文同じ。
 案するに卷十一張昇陽詠史詩注尚書を引いて此の注と同じ。

顏延年 應詔譙曲水作詩

後漢書 卷八
 注 尚書曰黃高山大川 第十七葉表 第八行

今本尚書禹貢篇 第二葉表 文同じ。

案するに卷十七顏延年始安郡還都鄧張湘州登巴陵城樓作詩尚書を引いて此の注と同じ。

寧極和鈞

注 尚書曰關石和鈞 第十七葉表 第八行

今本尚書五子之歌篇 第七葉表 文同じ。

顏延年 皇太子釋奠會作詩

汝明夷謠

注 尚書曰夙夜汝明有家 第十八葉表 第三行

今本尚書皋陶謠篇 第二葉表 文同じ。

案するに此の注尚書を引くの下に「馬融曰汝大也」を引けば此の尚書馬融本に據れるならむ。李善特に馬注に从へる者は偏孔傳「汝明」の解此の正文と其の證合せざるを以て与り。

顧惟後昆

注 尚書曰聖裕後昆 第十八葉表 第五行

今本尚書仲唐之謠 第九葉表 文同じ。

案するに李善尚書此の文を引くこと此の注を共にして凡そ六回文皆同じ。

傳聞武衛關揚文令

注 尚書曰王來自商至于豐 第十八葉表 第八行

今本尚書武成篇 第十一葉表 文同じ。

庶士傾風

注 尚書曰庶邦庶事 第十八葉表 第九行

今本尚書酒誥篇 第五葉表 庶邦庶士 第十五葉表

案するに此の注「庶事」位微無し。卷十八長笛賦注此の經を引いて「庶士」に作る。「士」事。聲相近くして此の注稱寫者誤れるか抑々「士」事相通するを以て。穀子傳「六卿典士相師爲法度」正義「鄭氏本云爲本也」云「事」に作り成傳「居位理事以任」李善見る「庶事」足利古本下の「事」を「士」に作る俞樾見古錄に曰く「士事聲近古相通用」。

所の尚書本より「庶事」に作りしか。單文化證無く今之を明かにする能はず。

王載有述

注 尚書曰熙帝之載 第十八葉裏
左より第三行

今本尚書典範曰四岳有能三當庸熙帝之載弟十一葉表

案するに李善尚書を引くの下又「王肅曰載事也」を并舉す。豈是れ王注本に據れるか。

今本尚書此句經の傳本「載事也」の文有り李引く所の王注と相同じ。凡そ李善尚書を引くや多く孔傳に从ひ惟正文の用例孔傳と合せざる者有りて乃ち佗注に从ふを常とす。然るに今孔傳本「載事也」の訓有るに之を采らずして特に王注を引き而も李引く所の王注は尚書正義引く所の王注「載成也」と相同じからず。尚書此の二句「載事也」孔傳王注並に載未だ其の何の故なるかを知らざるなり。傳の正統

祖實非。誓。

尚書成王曰黍稷非馨明德惟馨

第二行

今本尚書君陳篇王若曰陸句麥稷非馨卷十八明德惟馨第十一葉表

案するに「成主」に作る者證無し。豈李善君陳序に據りて「成」の字を加へたるか抑、其の尙害本より「成」の字有りたるか。

9 傳

獻終靈吉

注
尚書曰乃卜三龜一襲吉
第十九葉表
第三行

第三行。

今本尚書金縢篇乃卜三龜一習吉

案するに卷五十六楊仲武誅注尚書此の經を引いて「習」に作り又卷六十齊竟陵大宰王行狀「專謀難吉」注尚書此の經を引いて亦「習」に作り且つ「襲與習通」と曰へば李善の尚書本より「習」に作れるを知る。此の注楊氏「難」に作る者は蓋し轉寫の誤ならむ。雲笈本内野本尚書並に亦「習」に作りて今本と合す。此の經「習」の字恐らくは、本より習文棄きならむ。

安先國齊側聞邦教

尚書曰命汝與樂牧胄子

案するに攷既に第ニニ〇

尚書曰司徒掌邦教

今本尚書周官篇卷十
第四葉表文同

應詔樂遊苑餞呂僧珍詩

揚旆九河陰

尚書曰九河既道新刊華東
左子川第四行

今本尚書典義篇卷六第七葉表 文同

戎車出細柳

注 尚書曰武王戎車三百兩 第廿二葉表

今本尚書牧誓篇序 卷十一 第十三葉裏 文同じ。

伐罪區山曲

注 尚書曰奉辭伐罪 第廿二葉裏

今本尚書大禹謨篇序 卷十一 第十三葉裏

案するに攷既に第一七六頁に異ゆ。

將陪告成禮

注 尚書曰紫望大告武成也 第廿二葉裏

今本尚書武成篇紫望大告武成 卷十一 第十九葉裏

案するに此の注同末の「也」の字是れ後人の加ふる所にして尚書の異文には非ず。引文句末助字を加ふるは古人の常。蓋し以て餘白を填せしのみ。

潘安仁 金谷集作詩

石子嶺海沂

注 尚書曰海岱惟青州 第廿二葉表

案するに既に第二〇〇頁に出づ。

注 又曰徐州淮沂其乂

今本尚書禹謨篇海岱及淮惟徐州淮沂其乂 卷六 第十葉表

謝玄暉 新亭渚別范零陵詩

水還江漢流

注 尚書曰江漢朝宗于海 第廿三葉裏

案するに既に第二〇〇頁に出づ。

卷第二十一

左太冲 詠史

雖非甲冑士

注 尚書曰善教乃甲冑 第三葉裏

今本尚書費誓篇 卷廿 第六葉裏 文同じ。

注
尚書曰予朝至于洛師ト惟洛邑第七葉表
第七行
案するに既に第一二五頁に出づ。

胡氏致書曰「素本ト下有瀾水瀾水四字茶陵本有瀾水
東瀾水西六字案茶陵本爲是」四部本茶陵本に同じ。

伊人感代工

伊人感代工

尚書曰無曠庶官。天工人其代之。第一行

今本尚書寧陶謨篇寧陶曰陳台無瞻庶官天工人其代之卷四葉裏

案するに李善撰る所の尚書「卷録」に作りて「孟陶」に作らす。攷既に弟頁に見ゆ。

神武睦三成

尚書益曰帝德廣運乃聖乃神乃武乃文

今本尚書大禹謨篇益曰部帝德廣運乃聖乃神乃武乃文

四達雖平直

尚書曰王道正直
初行

案するに既に第一八四頁に出つ。

顏延年 秋胡詩

影聲並不懷

尚書曰惠迪吉從逆凶惟影鑒

左より第二行

今本尚書典篇卷四
第三葉裏文同。

案するに李善尚書此の文を引くこと凡そ「臣等」に依りて「言」を作し

顏延年 五君詠

醃糟日沈飲

尚書曰蕝和次通于酒

今本尚書胤征篇惟時羲和降次亂于西第十華夷

案するに「次通」に作る者他盤に於て尙無し、再弥を故の「次通於通」の文見ゆ

雲應不入官

尚書曰學古入官

今本尚書店官篇
第七篇
文同

何敬宗遊仙詩

吉士懷貞心

尚書曰庶常吉士

今本尚書立政篇第十卷表 文同七

郭景純 遊仙詩

臨川哀年選

注尚書曰日月遡還第二十六卷

案するに既に第一八四頁に出づ

月盈已見魄

注尚書曰惟三月哉生魄第三十三卷

今本尚書康誥篇初四 文同じ。

卷第二十二

殷仲文 南州桓公九井作

續首阿衡朝

注尚書曰惟嗣王不惠于阿衡第五卷表

今本尚書太甲篇上第十八卷表 文同じ。

謝靈運 遊南亭

又臨晉賦

注尚書曰洪水滔天第二十七卷

今本尚書益稷篇禹曰洪水滔天初行

案するに益稷「洪水滔天」活潑山稷陵の文當に讀んで洪水滔天「滔天」

の文「浩浩滔天」四字を一句と爲す大石 以て讀すべし。益稷即ち稷 惟「浩浩」

「滔天」の二語を互に倒せしめ。益稷正義此の經を釋して「洪水滔天」浩浩然盛

大包山上滔天と謂へる者之を得也。

今此の注引く所「洪水滔天」の四字を以て句と爲す。益稷善「浩浩」の二字を下

句に屬せしめしか。天の下に句を屬つ。

當心惟良知

注尚書曰時惟良第七卷

今本尚書君陳篇嗚呼臣人第九行

案するに此の詩「良知」二字是れ一語にして「惟良知」是れ語を爲すに非ず。此の詩

の解豹

「良知」連ね讀むべく此の詩「惟良知」と其の證同じからざるなり。

梅賾謂「臣人咸若時」は之を魯陶謨の「咸若時」より採り、「惟良顯哉」は坊記引く所の君陳の文を襲ふと。坊記を襲ふと謂ふは是なり。魯陶謨に據ると謂ふは則ち非なり。

今坊記引く所の君陳と偽君陳の文とを較するに、坊記「君陳曰爾有嘉謀嘉猷……此謀此猷惟我君之德也。……惟良顯哉。……」偽君陳「爾有嘉謀嘉猷……斯謀斯猷惟我后之德也。……臣人咸若。……時惟良顯哉。……」乃ち偽君陳は「臣人咸若」の四字を増し坊記の「是」を改めて「時」に作れるにて、「臣人咸若時」五字を以て句と爲せるに非ず。偽傳亦「臣於人者皆順此道」の語を承く「是惟良顯則君顯明於世」と謂ひて「是惟」の二字を以て經の「時惟」を訓すれば、「臣人咸若」四字一句を屬し「時」の字下に屬すること益々明かなり。「咸若」傳を以て句を斷てる例亦偽伊訓篇に見ゆ。然らば梅氏魯陶謨の「咸若時」を襲ふと謂へるの非なること知るべきなり。

坊刻孔傳本尙書君陳篇亦多く「咸若時」の下に於て句するは皆偽傳と相知る。李善此の注及び卷廿四潘安仁爲賈逵作贈陸機詩注並に「時惟良顯哉」を引けば、唐人尙「臣人咸若」四字を以て句と爲し「時」の字を下句に屬せしめしこと明かなり。

顏延年 應詔觀北湖田收

要載歷山川

尙書禹曰予乘四載隨山臬木初行

今本尙書益傳篇禹曰隨山臬木初行

案するに段玉裁曰く「臬唐石經已下作刊衛包改也」

木林嗣夏書曰隨山臬木論若刊臬字文从刊此云臬文從刊則臬與古文出於刊壁可

知矣李斯改篆爲隸則孔安國以今文讀古文早爲臬爲臬史記夏本紀述魯陶謨行山臬木

然則今文尙書本作臬可證詩云隨山刊者讀音與刊同非臬刊同字也假今臬刊同字則當

刊傳本部云樣謬也者樣家研也哀新本使其白多以爲道路高下表謬如孫子研樹白書之

類故云樣謬夏本紀述金匱曰行山表木以表訓臬是樣謬尙書古訓可知衛包誤以臬刊

尙古今字乃改臬爲刊刊則也字不從木非讀研木二第十二卷

段說甚正端但未刊臬本「臬」に作る者有るの例證を擧げざれば此の注引く所以て

其の補遺と爲すべし。内郎本尙書足利本々尙書俱に「臬」に作りて本を考引く所合す

段氏「臬」を改めて「刊」に作る者は衛包なりと謂ふ蓋し是れ漢魏の言の、顏師古漢書地理志に注して曰く

「臬古刊字其本也」と「刊」古の字と爲す由て來る所又し何ぞ知らむや尙書詩書各目「臬」を正改

めて「刊」に作れるに非ざるを改字の罪と爲すは之を衛包一人に歸すべきなるなり又李善詩注「臬」を正改

（臬の刊字の下）に刊の字其は梅賾の改むる所と謂ふも其の誤亦非なること本篇の三引く所證して之を證すべし。

額延年 車駕幸京口侍遊赫山作

嶽清有和會

注尚書曰新作。大邑于東國洛四方人大和會第十一條書左より第四行

今本尚書康誥篇作。新大邑于東國洛四方民大和會第二條書左より第四行

案するに卷三東京賦注此の經を引いて「作新大邑」に作りて今本尚書と合するに、此の法は則ち「作新」の二字互に倒す。

今本尚書此の經の傳「建作王城大邑於東國洛内」に據りて推せば經「大邑」の上「新」の字無きに似たり。文義を攷ふるに亦「新作」に作る者を以て長と爲す。但「新作」に作る者它證無きを以て疑うて未だ據にする能はざるなり。

額延年 車駕幸京口三月三日侍遊曲阿後湖作

虞風獻帝侍

注尚書虞書曰歲二月東巡狩第十二條書第五行

今本尚書典範篇歲二月東巡守

案するに攷、既に弟頁に見ゆ。

德禮既普洽

注尚書曰道洽政治澤被生民第十二條書第五行
今本尚書畢命篇第九條書文同。

謝玄暉 遊東田

隨山望函閣

注尚書曰隨山刊木第十三條書末行

今本尚書益稷篇隨山刊木初條書

又益稷篇益敷土隨山刊木第二條書

案するに卷廿二額延年應詔觀北湖田收詩注尚書（益稷）を引いて「刊」を「採」に作り卷廿八謝靈運樂府注尚書（益稷）を引いては「刊」に作ることを此れと同じ。此の注亦本「採」に作りしを後人改めしが抑本より「刊」に作りしか明かならず。第三條書

沈休文 鍾山詩應西陽王敎

參差互相望

注尚書曰終南博物至于鳥鼠第十四條書第二行

案するに既に弟頁に出づ。

徐敬業 古意訓到長史激登琅邪城詩

金澤朝瀨

注尚書曰江漢朝宗于海第十六葉表
案するに既に第一〇〇頁に出づ。

卷第二十三

阮嗣宗 詠懷詩

日月正相望

注尚書曰惟二月既望第五葉表
案するに既に第一九〇頁に出づ。

歐陽堅石 臨終詩

所狂可遊盤

注尚書曰乃盤遊無度第七葉表

今本尚書曰盤篇乃盤遊無度第四葉表
案するに卷十五歸田賦注尚書此文を引いて「盤」を「船」に作れば此の注亦當に「船」に作るべきに似たり。攷彼の條に詳なり。

嵇叔夜 幽憤詩

奉時恭默

注尚書曰恭默思道第九葉表
今本尚書說命篇上第二葉表 文同じ。

潘安仁 悼亡詩

賦詩欲言志

注尚書曰詩言志第十二葉表
案するに既に第二三四頁に出づ。

謝靈運 廬陵王墓下作

祖謝易永久

注 尚書曰帝乃祖。第十三葉書 左より第三行
 今本尚書典範篇帝乃祖。左より第三行
 安するに李善傳る所の尚書「祖」に作りしに似たり。攷既に第一七三頁に見ゆ。

頽延年 拜陵廟作

建事休命始。注 尚書曰降于商郊侯天休命。第十四葉書 四部本・宋野本「祖」を「祖」に作る。
 今本尚書降于商郊侯天休命。第十三葉書
 案するに武内博士本神田本尚書「教」に作る。王篇車部第二に曰く「教古文陳字」と。
 李善の舊定むべからず。

王仲宣 贈蔡子篤詩

予思同宣。注 尚書曰予思日攷攷。第十七葉書 初行
 今本尚書益穆予思日攷攷。初行
 案するに此の注「日」の字本「日」に作りしかと疑はる。攷既に第一七九頁に詳なり。

王仲宣 贈士孫文始

無偏厥緒。注 尚書曰荒陲厥緒。第十七葉書 第四行
 今本尚書五子之戲篇。第十七葉書 文同じ。
 歸仰王堂。注 尚書曰以王堂。第十七葉書 左より第三行
 案するに既に第二四四頁に出づ。

誰佐天官。注 尚書曰天工人其代之。第十七葉書 左より第三行
 今本尚書卑陶謨篇。第十七葉書 文同じ。
 案するに李善尚書を引くの下又「孔安國曰天理官不以天官私非其材」を引く。然れども此の詩「天官」の語天子を指し稱孔傳の意と合せざるに似たり。傳孔より王仲宣の陳案曰く「漢儒說此詩其代之を指す皆以王者代天官人爲義此今文家説也」今本尚書經說攷と。蓋し王は今文家の説に依へるなり。或は李善此の注孔傳を採ると雖も是れ唯傳文の「不以天官云々」を以て詩の「天官」の語を證せしのみにて、其の語義は必ずしも問ふ所に非ざりしか。

リしか。

作式下國

注 尚書曰世世享德萬邦作式第十七葉末行
今本尚書微子之命篇卷十三 第十六葉末 文同じ。

王仲宣 贈文叔良

來世之矩

注 尚書曰予恐來世以台爲口實第十八葉末 第四行
今本尚書仲虺之誥篇卷八 第六葉末 文同じ。

成功有受

注 尚書帝曰成允成功惟汝第十九葉末 第三行
今本尚書大禹謨篇帝曰 臨句 成允成功惟汝卷四 第八葉末

成功有受

注 又曰有偏有受

今本尚書呂刑篇卷十九 第十葉末 大同じ。
注 尚書曰華陽累水惟平州第十九葉末 第五行

麗彼累水

案するに既に第 九八 頁に出づ。

劉公幹 贈五官中郎將

昔我從元伯

注 尚書曰求非元伯何哉第十九葉末
今本尚書大禹謨篇卷四 第九葉末 文同じ。

常恐遊宦京不復見故人

注 尚書曰至于岱宗第十九葉末 第四行
案するに既に第一六四 頁に出づ。

劉公幹 贈徐幹

物類無疎偏

注 尚書曰無偏無陂第二十葉末 第三行
今本尚書洪範篇無偏無陂第二十葉末 第三行

案するに宋氏疏曰く「李注例凡釋字必釋明此詩物類無疎偏正文作隨若注作陂亦當有隨與陂通之語而今無之知李引書作隨殆後人依今書改爲陂耳至謂之作義則唐詔及

注 尚書曰萬邦黎獻其惟帝臣 第九葉表 第二行

今本尚書益稷篇 卷五 第十葉裏 文同じ。

哲問允迪

注 尚書曰允迪厥德 明 第五行 第九葉表

今本尚書皋陶謨篇 卷四 第十六葉裏 文同じ。

案するに卷五十八王仲雍褚淵碑文注引く所、「謀を「藝」に作りて李善の舊とするに似たりは疑ふらくは此の注亦當に「藝」に作るべし。攷第五五頁に見ゆ。

會曰爾諮

注 尚書曰會稽帝曰汝諮 第九葉裏

今本尚書舜典篇 會曰汝諮 第四行 帝曰朕往汝諮 卷三 第十四葉裏

陸士衡 荅賈長淵

俾又斯民

注 尚書帝曰下民其咨有能俾又 第十葉裏

今本尚書堯典篇 帝曰 陽句 下民其咨有能俾又 卷二 第十九葉裏

教士雖難

注 尚書曰建邦設士 第十葉裏 第六行

案するに既に第一二五頁に出づ。

允茲有體即宮天色

注 尚書曰罔公曰肆予敢求爾于天色 商 第七行 第十葉裏

今本尚書多士篇 罔公初于新邑洛用生商王士王若曰 陽句 肆予敢求爾于天色 商 卷十六 第六葉裏

三江改歎

注 尚書三江既入 第十一葉裏 第二行

案するに既に第一五二頁に出づ。

穆承聖命出納無違

注 尚書穆承于帝 初行 第十一葉裏 文同じ。

今本尚書大禹謨篇 卷四 第二葉裏

案するに案注本 卷四十八 第十葉裏 此の注を「尚書曰出納穆承于帝又曰朕命惟允」の十五

字に作る。疑ふらくは本當に「尚書曰穆承于帝又曰出納朕命惟允」の十五字に作

るべし。「出納朕命惟允」は「舜典」の文なり。

仰肅明威

注 尚書曰我有周佑命將天明威 第十一葉裏 第四行 案注本「佑」に「祐」に作る。

今本尚書多士篇 我有周佑命將天明威 第二葉裏

案するに卷廿七勸進表注亦此の經を引いて本或は「佑」に作り或は「祐」に作る。「祐」に作る者は内膳博士本尚書と合し、「佑」に作る者は内野本尚書及び今本と合す。

李善の舊果して敷れなりしやを知らず。

又案するに今本尚書「佑」の字を用ひて「祐」の字を用ひず。試みに岩崎本羅氏本神田本要園本尚書殘存する所の篇内に於て之を摘出すれば説命下「佑我烈祖格于皇天」泰誓上「天佑下民」泰誓中「天乃佑命成湯」微子之命「皇天眷佑」君牙「欽佑我後人」の五字有り。而して韓古定本此の五字を皆「右」に作りて「佑」に作らず。又「祐」に作りて「人」に从はす亦「示」に从はざりしに似たり。李富孫曰く「古左右字他ナ又而相助字佐左右易詩爾雅猶不加人旁」説文釋字正俗と。李説の如んは尚書本「右」に作ることを容に之れ有るべし。果して然らば李善引く所の此の經疑ふらくは本「右」に作りしならむ。内野本尚書此の經「佑」の字に「右」に作るを注記す。而して今本文選或は「佑」に作り或は「祐」に作るは蓋し轉寫者各見る所の尚書に隨ひて之を改めしなるべし。

狂狷屬聖

注尚書曰惟聖罔念作狂惟狂克念作聖

今本尚書多方篇卷十七葉九葉文同じ。

陸士衡 贈尚書郎顧彦先

大火自朱光

注尚書曰曰永聖火以正仲夏

今本尚書堯典篇卷二葉二葉文同じ。

陸士衡 贈顧交趾公真

顧氏體明德

注尚書曰先王既勤用明德

今本尚書梓材篇卷十四葉五葉文同じ。

案するに李善此の經文を引くこと凡そ三回文皆相同じ。

陸士衡 答張士然

嘉穀金龜

注尚書曰履勉嘉穀

今本尚書呂刑篇卷十九葉九葉文同じ。

陸士衡 贈馮文熊

發軔清洛濱

注尚書曰東至于洛汭第十四葉裏

今本尚書卷八行東至于大伾卷六

案するに卷四十三丘希範與陳伯之書注乃卷六卷六十陸士衡書魏武帝文注引所並に

此の注と同じく

今本尚書と異る。攷既に第一二六頁に見ゆ。

夫子茂遠賦

注尚書曰遠今賦第十四葉裏大案本「今」と「乃」に作る。

今本尚書卷八行遠乃賦賦第十三葉裏

案するに段玉裁古文尚書撰異大略「越而御事」の下に曰く「詩思齊鄭字書又曰越乃御事正義云大略文下曲禮長曰能御矣幼曰未能御世注御猶主也書曰越乃御事謂主事者正義曰所引書者大略文也卷十五乃乃今の大略「而」の字を鄭見所は正に

「乃」に作りしを知るべく剛正義其の異同を謂はざれば孔氏等の尚書亦鄭本と同じかりしかと疑はる。此れに據れば「今」「乃」の兩字古今本相反する者有りしこと

明かりなり。然らば則ち此の注「今」に作る者恐らくは李善見所の尚書自ら然りしに因るなるべし。大案本乃に作るは蓋し今本尚書に據りて改めしなり。

今此の詩「夫子茂遠賦誠寄惠旨の句を脱するに「賦」の字當に「道」と訓すべし。

王引之謂小序語此の「賦」當に訓するに「道」を以てすべし。偽孔氏訓するに「諱」を以てするは誤れりと。說詩經義疏皮錫瑞王說是なりと爲し且今文の義當に

是くの如かるべしと謂へり。今文尚書卷八行樂して然らば陸機此の詩の用例正に今文の

義と合す。然るに李善偽孔氏本に據りて之に注すれば其の義未だ安からざるなり。

潘安仁 爲賁謐作贈陸機

潘安仁 爲賁謐作贈陸機

注尚書曰至于海隅第十六葉裏

今本尚書益稷篇帝光天之下至于海隅卷五案するに此の注引く所蓋し節に从へるなり。

案簡惟良

注尚書曰時惟良第十六葉裏

案するに既に第一二七三頁に出づ。

俊又見延

注尚書曰俊又第十六葉裏

案するに既に第一一九頁に出づ。

光謙納言

注尚書帝曰龍命汝作納言第十六葉裏

案するに既に第一五八頁に出づ。

神神異記

注尚書曰蕭韶乃成第十四葉裏
案するに既に第一九頁に出づ。

潘正叔 贈陸機出爲吳王郎中令

帝曰爾諸惟王卿士
注尚書帝曰爾諸第十七葉裏
案するに既に第二四八頁に出づ。

潘正叔 贈侍御史王元貺

協心毗聖世
注尚書曰三后協心第二行
今本尚書畢命篇第十九葉裏 文同じ。
畢力諷康哉
注尚書各終乃歌曰元首明哉股肱良哉庶事康哉第二行
案するに既に第一九七頁に出づ。

卷第二十五

傅長虞 贈何劭王濟

並以明德見重於世
注尚書曰先王既勤用明德初葉裏
案するに既に第二八九頁に出づ。
歷試無效
注尚書曰歷試諸難初葉裏
今本尚書典範篇序第三行 文同じ。

劉越石 答盧諶詩

火燒神州
注尚書曰若火之燒于原第五葉裏
今本尚書盤庚篇上第七葉裏 文同じ。
案するに李善尚書此の經文を引くこと此の注に共にして凡そ三回、文皆同じ。
獨注莫驗稱善則虛

注尚書曰天道福善禍淫第五葉裏末行
今本尚書湯誥篇卷八葉裏文同じ。

盧子諒 贈劉琨

譯明之効不著

注尚書曰允迪厥德譯明昭昭第八葉裏第三行

案するに既に第ニ八六頁に出づ。又此の注「譯」の字當に「譯」に作るべきに似たり。致第五二五頁に見ゆ。

四岳増岐

注尚書帝曰咨四岳第九葉裏四部本・支野本

今本尚書堯典篇帝曰咨四岳湯湯洪水方割第五行帝曰四岳朕在位七十載第六行爾時第七行有兇第八行朕惟用第九行罪第十行爾第十一行今本尚書堯典篇帝曰咨四岳湯湯洪水方割第五行帝曰四岳朕在位七十載第六行爾時第七行有兇第八行朕惟用第九行罪第十行爾第十一行

伊陟佐商

注尚書曰杜太戊時則有若伊陟格于上帝第九葉裏第五行

今本尚書君奭篇杜太戊時則有若伊陟臣扈格于上帝卷十六葉裏

弘濟艱難

注尚書王曰用敬保元子劉弘濟于艱難第九葉裏第六行

今本尚書顧命篇王曰傳句用敬保元子劉弘濟于艱難卷十八葉裏第十六行

昭昭靡成

注尚書曰譯明昭昭第十葉裏第三行

案するに既に第ニ八六頁に出づ。又此の注「譯」の字當に「譯」に作るべきに似たり。致第五二五頁に見ゆ。

桓桓撫軍

注尚書曰勗哉夫子尚桓桓初行

今本尚書牧誓篇勗哉夫子尚桓桓卷十一葉裏

案するに卷四十七趙充國傳注引く所の尚書に豫れは此の注「哉」の字當に「才」に作るべきに似たり。

濟厥塗炭

注尚書曰有復冒虐民墜塗炭第十一葉裏第二行

今本尚書仲虺之誥有復冒虐民墜塗炭卷八葉裏

案するに未だ尚書「冒虐」に作るの證を得ず。李注中尚尚書此の文を四引して皆「冒虐」に作れは此の注或は轉寫の誤か、再致を按つ。

謝宣遠 於安城答靈運

之子紹前胤

注 尚書曰傳克紹前烈第十四卷表
 今本尚書曰命篇傳克紹先烈第十四卷表
 案するに「前烈」證無し。此の注或は正文に誤りて誤れるか。

謝靈運 酬從弟惠連

野殿漸紫苞

注 尚書曰草木漸苞第十八卷表
 今本尚書曰草木漸苞第十八卷表
 案するに尚書正義出此の經の傳正釋して曰く「易漸卦彖云漸進也釋言云苞捕也」
 孫炎曰物蕃生曰苞齊人名曰捕郭璞曰今人呼最微者爲捕漸苞謂長進難生言其美也」
 又文選鈔卷八孔安國書及通典引く所卷八亦同。今正釋下疏引く所卷八又文選鈔卷八孔安國注尚書曰漸進長苞義を引けば其の據る所の經亦「漸苞」に作りしなり。
 段玉裁云尚書本「漸苞」に作る卷八。今正釋下疏引く所卷八又文選鈔卷八孔安國注尚書曰漸進長苞義を引けば其の據る所の經亦「漸苞」に作りしなり。
 古本「漸苞」より今本「新苞」に至る中間過程に於ける者と謂ふを得べし。
 段玉裁云尚書本「漸苞」に作る卷八。今正釋下疏引く所卷八又文選鈔卷八孔安國注尚書曰漸進長苞義を引けば其の據る所の經亦「漸苞」に作りしなり。
 段玉裁云尚書本「漸苞」に作る卷八。今正釋下疏引く所卷八又文選鈔卷八孔安國注尚書曰漸進長苞義を引けば其の據る所の經亦「漸苞」に作りしなり。

李善尚書此の經文を引いて「苞」に作るの外又「苞苞捕」を引いて「苞」に作り第十八卷表
 「苞苞捕」を引いて亦「苞」に作れば第十八卷表今本尚書「苞」の字李善據る所の
 尚書は皆「苞」に作りしに似たり。
 說文を攷ふるに苞捕也第十八卷表「苞」に作る外又「苞苞捕」を引いて「苞」に作り第十八卷表
 ち難生の字當に「苞」を以て正と爲すべく「苞」の字當に「」を以て正と爲すべし。
 然るに漸苞義生「苞」に作る外又「苞苞捕」を引いて「苞」に作り第十八卷表
 相通すればなり。「苞」を以て苞捕の意と爲すは亦其の意の但今は多く「苞」の字を用ひ古は
 多く「苞」の字を用ひたるに似たり。「苞」に作る外又「苞苞捕」を引いて「苞」に作り第十八卷表
 に作るに本玉篇文選集注後漢書本論語卷八後漢書傳下文選注疏本論語「苞」
 の字傳文「苞」に作り第十八卷表毛詩「野有死麕」の「苞」の字傳文正義「苞」に作り第十八卷表
 詳包傳文選卷廿六注第十八卷表引いて「苞」に作り第十八卷表左氏傳公四年「爾貢包茅不入」阮氏校勘
 記に據れば詩代本正義後漢書公孫瓚傳注李善注韓田賦冊公九錫文引いて皆「苞」
 に作るが如き是れ其の證なり。

幽居臨鬱陶

注 尚書曰鬱陶第十八卷表有怛怛第十八卷表
 今本尚書五子之教篇第十八卷表文同じ。

卷第二十六

顏延年 贈王太常

敷言遠朝列
注尚書曰凡厥衆人極之敷言 第二筆裏
今本尚書洪範篇凡厥庶民之敷言是訓是行以近天子之光 第二筆裏
案するに此の注「人」の字應讀を避けれなり。「衆」に作る者微無し再放を疑つ。
此の經の「敷言」傳傳は解して「所陳言」と爲し馬融王肅は「其の言を敷陳する」の意と爲す。馬注「敷陳其言於上王注見納詩正文「舒文廣國華敷言遠朝列」を説するに「敷言」の解馬王に从ふを長と爲す。今李善尚書を引いて讀と爲すと雖も其の解は馬王に从へるには非ざるべし。

顏延年 直東宮荅鄭尚書

設險秘天工
注尚書曰天工人其代之 第三筆裏
今本尚書皋陶謨篇 卷四 第二筆裏 文同じ。

顏延年 和謝監靈運

雖慙丹矐施
注尚書曰惟其塗丹矐 第三筆裏
案するに既に第二四六頁に出づ。

王僧達 荅顏延年

長卿冠華陽
注尚書曰華陽黑水惟涼州 第四筆裏
案するに既に第九八頁に出づ。
精理亦道心
注尚書曰道心惟微 第四筆裏
今本尚書大禹謨篇 卷四 第八筆裏 文同じ。

謝玄暉 在郡臥病呈沈尚書

夙昔夢佳期
注尚書曰夙夜浚明有家 第五筆裏
今本尚書皋陶謨篇 卷四 第二筆裏 文同じ。

注 尚書曰海岱及淮惟徐州第八葉裏末行

案するに既に第二〇〇頁に見ゆ

注 又曰淮沂其乂

案するに既に第二〇七頁に出づ

今寧河朝臣 潘安仁 河陽縣作

注 尚書曰王次于河朔第十葉裏末行

今本尚書泰誓篇中第七葉裏末行 文同じ

逐物送推遷

注 尚書王曰惟民生厚因物有遷第五行

今本尚書君陳篇王曰惟民生厚因物有遷卷十八第十葉裏末行

謝靈運 入彭蠡湖口

三江事多往九派理空存

注 尚書曰三江既入第二行

案するに既に第一五二頁に出づ

卷第二十七

顏延年 始安郡還都與張湘州登巴陵城樓作

衡巫篇南服

注 尚書曰衡高山大川第三葉裏末行

案するに既に第二六二頁に出づ

注 尚書曰荆州雲土夢作第三葉裏末行

案するに卷四十二魯子建與吳李重書注亦此の經を引いて今本尚書と同じ。

謝玄暉 京路夜發

肅肅戒徂兩

注尚書曰戒車三百兩第五卷

今本尚書牧誓篇序武王戎車三百兩虎賁三百人與受戰于牧野第十三卷

江文通 望荆山

南關繞桐柏

注尚書曰導淮自桐柏第六卷

今本尚書禹貢篇導淮自桐柏第六卷

案するに此の注「柏」の字「栢」に作る者は九條家本尚書と合す。「栢」の差以て

尚書の異文と爲すには足らざれども李善の舊或は「栢」に作りしかと疑はる。

今王篇卷中切韻王氏第三種唐韻地端戊申を攷ふるに皆「栢」の字有りて「柏」の字無し。

干祿字書乃ち云ふ「栢」は俗「栢」は正と見るべし古多く「栢」を用ひしことを。邵

瑛說文解字羣經正字栢の字下に曰く「此字經典多不誤然往往有作栢者故五經文字

云栢經與相承本作栢廣韻亦云栢亦作栢漢書二字並用桐栢顯碑立顯栢栢作栢桑廟碑
列種栢栢作栢故經典混用不可不據說文以定之卷十一と栢の字由來久しきを知る
へし。

王仲宣 從軍詩

司典告詳刑

注尚書王曰有邦有土告爾詳刑第七卷

今本尚書呂刑篇王曰吁來有邦有土告爾詳刑卷十九

案するに段玉裁周禮大宰注大司寇注漢書穀傳師古注後漢書劉祐傳卓懷注文選此の

注引く所等を考へ且曰く「合數條觀之知古文今文鄭本孔本皆作從言之詳顏籀李善

之注可證也古詳詳多通用蓋爲孔本亦作詳而讀爲詳後徑改作詳如鳥讀爲鳥後徑改作

鳥非也卷十三と段説小へし。

顏延年 宋郊祀歌

黃威寶命嚴恭帝祖

注尚書周公曰嚴恭實畏第九卷

足利本・四部本・舊本・六家
本皆「嚴」に作る。

又案するに、注尚書以下十一字は當に「杜子春周禮注曰云々」の下に次すべきに化たり。

曹子建 美女篇

霽佩翠琅玕

注 尚書曰厥貢惟球琳琅玕 第十三葉裏
左より第二行
今本尚書出貢篇 卷六
第廿二葉表 文同じ。

卷第二十八

陸士衡從軍行

振連涉流沙

注 尚書曰導弱水入于流沙 第二葉裏末行
案するに既に第二。七頁に出づ。

苦寒行

北遊幽朔

注
尚書曰宅朔方曰幽都
案するに既に第一。兩頁に出づ

齊謳行

海物錯萬類

海物鑑第五葉裏
注尚書曰海岱惟青州禹貢海物惟錯第五葉裏
今本尚書禹貢篇海岱惟青州陽句海物惟錯第九葉裏
御筆鈔書に云ふ、尚書の二字衍文と云ふ者皆行す非なり

長安有狹邪行

馮軾皆俊民。

注
尚書曰俊民用康第六十一卷表
今本尚書洪範篇俊民用章家用平康卷六十二
案するに、攷既に第三〇〇頁に詳なり。第六十三卷表

案するに、尙書此の經の訓解諸家必ずしも相同じからず。即ち(1)馬融主肅、肅孔氏は「載」を訓じて「載於書」と爲し、(2)鄭玄、章昭は「載」を訓じて「事」と爲し、(3)顏師古は「載」を訓じて「姑」と爲す。而して右諸家皆「蘇州既載」を以て句を絶つに似たり。然るに胡渭曰く「先儒以既載連上蘇州讀謂賊功屬役載於書、經實無此意、且以既載連上讀則壺口二字不成辭、當從蘇氏以既載壺口爲句」。經解本義書之。
 今此の樂府「敘續壺口」を讀するに此の句果して尙書に本づけりとせば、謝靈運既に尙書の「載」を訓じて始と爲し、且つ「既載壺口」を以て句を絶ちしに非ざるかと疑はる。但未だ謝氏承くる所の尙書誰氏の學なるやを詳にせず。又謝氏の時既に此の説有りしや否やを知らず。姑く記して再致に資す。
 謝氏尙書を讀むこと右の如しとせば、李善之に注して引く所の尙書、亦謝氏の讀と合せしか。抑惟謝氏の本づく所を證するのみにて、其の讀の同異は必ずしも問ふ所に非ざりしか。今發明かにし難し。
 此の注「岐」の字、今尙書と異るも必ずしも以て尙書の異文と爲すべからず。尙書に「岐」の字、今尙書と異るも必ずしも以て尙書の異文と爲すべからず。尙書に「岐」の字、今尙書と異るも必ずしも以て尙書の異文と爲すべからず。尙書に「岐」の字、今尙書と異るも必ずしも以て尙書の異文と爲すべからず。
 又曰「岐山導江」
 今本尙書尙書篇 卷六 文同じ。

絶明遠 白頭吟

尙書各易通
 注 尙書曰 絶明遠 卷十四 葉裏
 今本尙書洪範篇 卷七 葉裏 文同じ。

什天行

九篇隱丹經
 注 尙書曰 尙書見書 卷十五 葉裏
 今本尙書金縢篇 卷九 葉裏 文同じ。

陸士衡 挽歌詩

周親咸蒼凌
 注 尙書王曰 雖有周親不如人 卷十七 葉裏
 今本尙書祭義篇中王乃徇師而加書曰 雖有周親不如人 卷十一
 案するに此の注「若」に作る香神田本尙書及び北堂書鈔 卷六 葉裏 引く所と正に合す。

内野本尚書に作リ蓋し李善の舊をなするならむ。
て「中」の字を兼記す。

卷第二十九

李少卿 與蘇武

努力崇明德

注尚書曰先王既勤用明德 第六葉表
案するに既に第三八九 頁に出づ。

張平子 四愁詩

美人贈我金琅玕

注尚書禹貢曰厥貢惟球琳琅玕 第八葉表
案するに、禹貢の二
案するに既に第三八九 頁に出づ。

王仲宣 雜詩

人欲天不違

注尚書王曰人之所欲天不違之 第八葉表
案するに、禹貢の二
案するに既に第三八九 頁に出づ。

今本尚書禹貢上王曰 禹 民之所欲天不違之 第七葉表

劉公幹 雜詩

聖朝未暇食日晏不知憂
注尚書曰自朝至于日昃不遑暇食 第八葉表
案するに、禹貢の二
案するに既に第三八九 頁に出づ。

今本尚書無遑篇自朝至于日中晏不遑暇食 第十三葉表

案するに、此の注「日」下「中」の字無き者は轉寫一字を奪せるに似たり。佗篇注引く
所皆「中」の字有り。但無遑篇傳文を攷ふるに「從朝至日。既不暇食」と言ひて、經文
「中」の字を釋せず正義の「自朝旦至于日中及晏」に至りて乃ち「中」の字有るのみ。
又皮氏攷證引く所の「晏子曰文王至日晏不暇食漢書董仲舒傳晝日周文王至于日
晏不暇食風俗通過譽篇曰文王日晏不暇食」皆「中」の字無し。然らば偏孔氏本亦「中」
の字無き者有りたるか。
此の注「不遑」當に「弗皇」に作るべし。攷第三五二頁に詳なり。

何敬祖 雜詩

永言寫情處

注 尚書曰歌永言 第十四葉表 第十卷本
案するに既に第二三頁に出づ。

張景陽 雜詩

雖無箕畢期膚寸自成霖 注 尚書曰月之從星則以風雨 第十八葉裏
今本尚書洪範篇月之從星則以風雨 卷十二 第廿三葉裏
案するに此の注「風」の下當に「以」の字有るべきに似たり。攷既に第二。五頁に詳なり。
洪濤浩方割人懷恩整情 注 尚書曰湯湯洪水方割 第十九葉表
案するに既に第九七頁に出づ。
今本尚書曰洪水滔天浩浩懷山襄陵下民民望 第十九葉裏
案するに此の正文及び注の「望」の字四部叢刊本は「望」に作る。
に第一一三頁に見ゆ。

卷弟三十

鮑明遠 數詩

九族共瞻邊 注 尚書曰敷敘九族 第七葉表
今本尚書皐陶謨篇敷敘九族 左より第五行
案するに攷既に第一八六頁に見ゆ。

謝玄暉 始出尚書省

習風淪繼體 注 尚書曰遠者德比稱童時謂亂風 第八葉表
今本尚書伊訓篇敢有侮聖言逆心違遠者德比稱童謂時亂風 卷八 第十五葉裏

謝玄暉 直中書省

朋情以鬱陶

注 尚書曰鬱陶予心第九葉表 鬱有怛怛左より第四行
案するに既に第二九七 頁に出づ。

謝玄暉 和伏武昌登孫權故城

西倉龍組練

注 尚書序曰西伯散初第十葉裏 散初集注本序曰の二字無し、是なり、各本皆行す、蓋し此の注を善篇名と誤りしからん、すべし、按て之を引く者なり、序を引くべしに非ず。
今本尚書西伯散初第十葉裏 西伯散初第十葉裏 案するに段玉裁曰く「文選謝靈運述祖德詩李注引孔安國尚書傳曰金龍勝也疑李所據尚書作金龍然攷謝玄暉詩西倉龍組練李注云尚書序曰西伯散初孔安國曰散勝也散與金龍音義同據此則述祖德詩注不若此之分明唐初尚書本固皆作散也」初葉裏十と。段說是なり。述祖德詩注引く所の「孔安國尚書傳曰金龍勝也」の十字は足利本四部本、袁本、茶陵本、茂野本、六家本皆之れ無し。有る者は恐らくは李善の舊に非ず。以て李善見所の尚書「金龍」に作るの證と爲すべからざるなり。

陶淵明 擬古詩

達曙酣旦歌

注 尚書曰酣歌于室第十葉裏
今本尚書伊訓篇卷八 第十五葉裏 文同し。

卷第三十一

鮑明遠 擬古

卷裏奉盧弓

注 尚書曰平王錫晉文侯盧弓第十葉裏 案注本(卷六十一)上第十葉裏(足利本「十」)と、
今本尚書文侯之命篇序平王錫晉文侯拒也主環作文侯之命此の下す
又經王曰父義和其歸視爾師寧爾邦用費此の下す盧弓一盧矢百卷十
案するに此の注或は「盧弓十」に作り或は「盧弓」に作りて李善の舊邊に定むべからず。
但北堂書鈔卷百廿五第五 及前篇第十二 並に「尚書文侯之命云平王錫晉文侯形矢百盧弓矢十孔安國傳前篇は注形亦也盧更也」を引く。矢十ならは弓は則ち「十」なり。又禮記王制「諸侯賜弓矢然後征」の疏「尚書形弓一形矢百盧弓十盧矢十」阮孝思十阮孝思十を引く。此の二條を合せて之を觀れば此の注亦「盧弓十」に作る者或は是なるかと疑はる。

に外ならず。果して然らば李善何の要有りて「玄」の字の證を尚書に求めしぞ。
 此れ解すべからざるの一なり。此の注尚書曰云々の下文「玄猶聖世」の文有り。若
 し尚書を引いて正文「玄」の字を證せりとせば「玄」の字の解當に尚書注に从ふべし。
 然るに今尚書の注を引かすして惟意を以て「玄猶聖世」と注す。此れ解すべからざ
 るの二なり。疑ふらくは此の注「尚書曰云々」より「玄猶聖世」までの十一字盡く
 は李善の舊に非じ。

衛忠至海濱

注尚書曰海濱廣序 第十八葉表

案するに既に第一九九 頁に出づ。

文軒薄柱海

注尚書曰外傳四海 第十八葉表

今本尚書益校篇 第五十二葉表 文同じ。

聲教燭冰天

注尚書曰朔南暨聲教 第十八葉表

今本尚書周書篇 朔南暨聲教 第十八葉表

案するに卷四四書子建亡故注引く所集注本に在りては「暨」を「泉」に作りて李善の

舊を在するに似たり。此の注「暨」の字亦當に「泉」に作るべし。致第三三七 頁

に詳なり。

卷第三十四

枚叔 七發

楊惲傳

注尚書曰惲惲惟隔中夜以興 初葉裏

案するに既に第一四〇 頁に出づ。

純梓全機

注尚書曰師曰乃獲穠神祇之靈 全 第十八葉表

今本尚書微子篇 父師若曰 今般民乃獲穠神祇之靈 穠 莊用以容將會無災 第十八葉表

案するに采華鉅は此の注「父師」の二字去るべしと言へる 及初葉裏も 此れ 李善尚書

前文を隱括せしのみなれば之れ有るを妨げざるなり。

此の注「全」の字今本尚書と異りて 岩崎本・小島博士本・羅氏本尚書と合す。説文を攷

ふるに第五篇下入部に曰く「全完也从入从工全象文全从玉純玉曰全」 段玉裁云「全」は

薛善は此の處當に「全完也从入从玉純玉曰全」に作るべしと謂ふ。段玉裁云「全」は

是なるを知らず。其説は與李善尚書説文全字書（説文諸林引）に見ゆ。段玉裁云「全」の字「玉」

に从へば 純玉を以て本義と爲し、之を引伸して完物皆全と稱するを得べし。然らば

案ずるに、此の江「せ」に作る者はなり。陳孔璋檄吳將校部曲文注引く所亦正に「せ」に作る。

凡そ今本尚書爾汝の字皆「世」に作るに李善引く所往「女」に作り神典「龍命詔注納書引て」女に作り大南嶺「推託」石開通注引て「女」作り益稷「無岩崎本尚書雍氏敦堧本尚書皆「女」に作る。此れに據りて之を推すに偏孔氏本尚書本「女」の字を用ひて「汝」の字を用ひざりしに似たり。李善引所亦本皆「世」に作りしを後段玉裁曰く「女者對己之習假借之字本如字讀後人分別讀同汝水非也因改爲汝字則更非也女乃爾雙聲爾古音近爾今俗用徐字見玉篇即古之爾字也若本對己之習古音益亦與女乃雙聲其汝若爲雙聲爾亦讀氏爲雙聲者此又一音也楚籍中絕不用汝字自天靈開寶兩朝流陋尚書全用汝字與君羣經乖異」四庫集と。

是以俊乂來仕

注
尚書曰俊乂在官
初行

案するに既に第二一九頁に出つ

講文德於明堂

注
尚書曰帝乃誕敷文德
第十五葉裏
第三行。
樂治本(第六十六葉裏)此の注無し

今本尚書大禹謨篇帝乃誕敷文德

案するに、此の注「敷」の字、當に「敷」に作るべきに似たり。攷第四一五頁に見ゆ。又案するに、此の注又「毛詩曰矢其文德洽此四國」を引いて正文の「文德」を讀す

れは尚書以下九字有る者は、或は後人の増添する所か

神應心休臻

注
尚書曰休徵
第十五
第六行

案するに既に第一。四頁に出つ。

懽聲教之未厲

尚書曰朔南暨。暨教第十五葉裏左より第三行

今本尚書禹貢篇朔南暨聲教

案するに此の注「監」の字集注本監ナハに杜りては「監」に作る監ナハに作りて内野

李九條家本作・敦煌本尚書と合す。是なり、卷四十二檀子雲解嘲注後典

「機軸」を引いて「盤」亦「魚」に作る。是れ李の古書「魚」の誤字所を「魚」に改むなり。

凡そ今本尙書「誓」の字諫古定寫本は皆「𣎵」に作る。説文を攷ふるに第八篇上山

部に曰く「衆衆因詞也」此原本に从二有聲字の二字に例す

許見る所の尚書「泉」の字を用ひたるを「𩺰」の字に至りては「𩺰」共ニ古音弟

[illegible]

十五部に屬するを以て古栢通借せしむるべし。是を以て「泉」にして「泉」の
主聲經音義繫類を引いて云ふ「泉は鑿の古文なり」と音義遂に尚書「泉」の

古文と爲すに至り
第三輯第四節裏、四編六十五葉表、六十六葉表等に見ゆ

今本尚書說命篇下、若作知善、爾惟鹽梅、卷十
 案するに、卷卅六王元長永明九年采秀才文注、
 向書此の文を引いて、諸本多く「介」に
 作る。此の注亦「介」に作る者はなり。致成の條
 「美」の字「鹽」の字、諸本其の字體同じからざるは、書寫者各、便に隨ひしのみ。以て
 李善の舊を定むべからず。

配天光宅

注 尚書序曰昔在帝堯光宅天下第十葉表

今本尚書堯典篇序昔在帝堯聰明文思光宅天下卷二 第四葉表

其垂仁也富平有殷之社稷

注 尚書仲虺曰惟王克寬克仁彰信兆民第十葉表

今本尚書仲虺之誥篇仲虺乃作誥曰惟王 應命 克寬克仁 彰信兆民 卷八 第七葉表

案するに「于」於「同異の攷既に第九七頁に見ゆ」

南箕之風不能暢其化難單之雲無以豐其澤

注 尚書曰星有好風星有好雨第十葉表

今本尚書洪範篇卷三 第二葉表

帝載輯熙

注 尚書序曰有能奮庸熙帝之載第十葉表

今本尚書舜典篇舜曰咨四岳有能奮庸熙帝之載卷三 第二葉表

注 尚書曰湯既黜桀命復歸於殷第十葉表
 今本尚書湯誥篇序湯既黜桀命復歸于殷卷八 第九葉表

六合時邑

注 尚書曰黎民於變時雍第十葉表

今本尚書堯典篇黎民於變時雍卷三 第八葉表

案するに、此の正文「時邑」に作りて注引尚書は「時雍」に作り而も「邑」推同異の

注記無し。或は李注引く所亦本「邑」に作りて正文と合せしに非るか疑はる。

古本尚書は正に「邑」に作る。

流荒之額

注 尚書曰五百里荒服又曰二百里流第十葉表

今本尚書禹貢篇卷六 文同

皆象刻於百工

注 尚書曰高宗夢得說使百工營求諸野乃審象旁求於天下第十葉表

又說命篇上乃審厥象俾以形旁求于天下第十葉表

案するに、卷五十沈休文思傳傳注尚書此の文を引いて各本皆亦「旁求於天下」に

作る。「于」にの攷既に第九七頁に見ゆ。

時聖道醇

注 尚書曰政事惟醇第十葉表

今本尚書說命篇卷六 文同

漢武帝 賢良詔

若涉淵水未知所濟注尚書曰予惟小子若涉淵水予惟往求朕攸濟第十二葉裏
 今本尚書大誥篇已予惟小子若涉淵水予惟往求朕攸濟第十三葉裏
 案此の注「唯」に作る者必ずしも轉寫の誤とのみ斷すべからず。攷証に第
 一に見ゆ。

潘元茂 冊魏公九錫文

越社西土注尚書曰越矣西土之人第十三葉表
 今本尚書牧誓篇越矣西土之人第十五葉表
 案此の注「越」武内博士本神田本内野本尚書及び後漢書西域傳賢注引く均
 皆正に「越」に作りて李善引く所と合す。
 段玉裁曰く「爾雅釋詁越遠也郭注書曰越矣西土之人北齊書文苑傳顏之推觀我生賦

曰越西土之有象文選李善注兩案引書皆作過是唐初本尚作過衛包轉說文
 遊爲今字通爲古字改之第二葉裏「過」を改めて「遊」に作れるは衛包の罪なり
 や否やは姑く之を措くも唐初已前尚書「過」に作るとの段説甚だ矯易ふ可からざる
 なり。

惟祖惟父股肱先正其貌惟朕躬注尚書曰臣作朕股肱耳目第十三葉表

今本尚書益稷篇第十三葉裏文同し。
 注又曰亦惟先正克左右昭事厥時第十三葉表

今本尚書文侯之命篇第二葉裏文同し。
 注又曰惟祖惟父其伊恤朕躬第十三葉裏

今本尚書文侯之命篇第三葉裏文同し。
 案此の引文の下段に「鄭玄曰先正先臣爲公卿大夫也」を引く。右二條

或は鄭注本尚書に據れるか。
 保又我皇家弘濟于艱難注尚書周公曰天壽平格保乂有殷第十三葉裏

今本尚書君奭篇周公若曰又公曰君奭天壽平格保乂有殷第十三葉裏
 案此の「保」に作る者證無し。或は「壽」受音相近くして誤れるか。

注又曰用敬保元子釗弘濟于艱難第十三葉裏
 足利本四部本漢書「保」字下
 鄭の字あり。

昔在周室畢公毛公入爲卿佐

注尚書曰乃召畢公毛公第十六卷

今本尚書顧命篇乃同召大保奭黃伯彤伯畢公衛侯毛公第十四卷

周部師保出爲二伯

注尚書曰召公爲保周公爲師第十六卷

今本尚書君奭篇序召公爲保周公爲師第十六卷

案するに此の注「邵公」に作る者は是なり。「召」に作る者は蓋し後人今の尚書に據りて改めしなり。慧琳一切經音義卷八十五第五「旦」の二字を大書して注に曰く「上單幹反孔注尚書云思公名世下聖亦反尚書云思注の二字あるべし」

又文選卷四十六陸士衡學士賦序「是以君齊秋歎不悅公旦之舉」の齊注に曰く「邵公爲保周公爲師相成王邵公不悅」

に據りて尚書古本此の篇正に「邵公」に作る者有ることを證すべし。此の二例凡そ「召公」の字古多く「邵」に作りて「召」に作らざりしに似たり。邵侯曰く

「今經典左襄二十三年傳晉邑郭邵作邵其地召南召公伯奭作召然傳文多載異本作邵如書武成傳邵召之徒傳文召召本又作邵詩序繫之召公傳文召召本又作邵公劉序召康公

釋文召召本又作邵漢序召公傳文召召本又作邵禮記曲禮注召公主之釋文召召又作邵魯子問召公曰公謂之曰に作る

釋文召召本又作邵禮記曲禮注召公主之釋文召召又作邵魯子問召公曰公謂之曰に作る

亦作邵左襄二十九年傳爲之歌周南召南釋文召召本又作邵又公羊隱五年傳召公主之釋

文本作邵莊十九年傳注召忽死之釋文本作邵此のやうの二字當に「召」の一字に作るべし。定

四年經于召陵釋文本作邵又書召公處周書和厲解作邵公則古本多作邵也說文凡地名

之字多从邑則凡地名之邵亦當从邑五經文字本以邵列爲正字云邵地名召公字經典多

作召則張參之意亦以召非正字也說文解字經正字音韻卷十一年原刊本と。邵說是なり。

更に數體を擧げて其の說の疑らざるを證せし。

毛詩召南甘棠序「甘棠美召伯也召伯之教明於南國」七經及文補遺に云く「古本召

作邵注及下皆同」と。甘棠「召伯所友」與本玉篇廣部廣字下引及び文選集注卷九十九

一王元長曲水詩序李注引皆「邵」に作る。文選集注卷五十九謝玄暉和

伏武昌登孫權故城詩「卜揅崇離殿」の註「尚書曰邵伯卜洛」を引いて正に「邵」に

作る。藝文類聚卷八十七「晉孫楚林杜賦曰昔杜邵伯體說述職」を引いて亦「邵」

に作る。廣韻去聲卅五大邵字下に曰く「邑名又姓出魏郡周文王子邵公與之後」と。

皆古「邵」に作るの明證なり。

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

「召公」に作るは猶古本「葉」に作るに似たり。「邵」に作り「邵」に作り「邵」に作り

肅將朕命以允華夏

注尚書曰肅將天威初行

今本尚書泰誓篇上初行文同じ

注又曰厥夜出納朕命惟允初行

今本尚書尚典篇第八卷表 文同じ

尚氏啓作

注尚書曰情震自安弗啓第十六卷表 啓本「啓」に作る。

今本尚書盤庚篇上情震自安不啓第十六卷表 啓本「啓」に作る。

案するに、此の注「弗」の字岩崎本委實誤刻本尚書と合す。

尚書正義「此情震自安不啓」云々は、對上服田九極乃亦有此」と言へば、

此の注「啓」の字餘本は啓に作りて釋文引く所の或本と合す。而も餘本、正文は「啓」に作りて注の「啓」の字と相合せず。餘本本或は正文注均しく「啓」に作りて相合せじか、抑々正文は「啓」注は「啓」に作りて注中又啓啓同の語ありしに、今完からざるか。此之を明かにする能はず。餘本「啓」に作るの理既に明かならざれば、此

の注「啓」の是非亦遽に定むべからず。當に是れ開疑に从ふべし。

又案するに、裴松之、冊魏公九錫文に注して、他の書を引くこと凡そ九條、建武帝紀而して其の八條亦李善注中になり。然らば李善此の注引く所の尚書本、裴注を襲へるに非るか。裴氏彼の注引く所は鄭本鄭注にして、鄭「啓」を讀みて「啓」と爲せば、

正書魏志注引く所の尚書或は徑に「啓」に作る看有りたるならむ。

上下咸和卷十六卷表 尚書曰用咸和卷十六卷表 今本尚書無逸篇用咸和卷十六卷表

注尚書曰平欽左右有民汝翼予欽宣力四方第十六卷表 今本尚書益稷篇予欽左右有民汝翼予欽宣力四方第十六卷表 案するに、卷四十四陸士衡漢高祖功臣頌注尚書此の文を引いて「予」を「余」に作る。攷弟四十四頌に見ゆ。

君研其明哲思帝所難第十六卷表 注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

注尚書曰知人第十六卷表 今本尚書皋陶謬篇知人第十六卷表 案するに、卷十八陸士衡表

に作らざりしならむ。然らば此の注胡刻本「オ」に作るは非なるを知る。

中興府志

注 尚書王曰正色率下 第十七葉表
第五行

今本尚書畢命篇王若曰傳句正色率下卷十九
第六葉動

軍敗有罪

注
尚書曰降災于夏以章厥罪
第十七葉表
第七行

今本尚書湯誥篇降災于夏以彰厥非

今本尚書漢詁解附以子繫以義屬罪義

樂するに卷五十四孝標義命論注 尚書此の文を引いて各本皆「孝」に作る 尚

書此の文章に作る者、佗書に於て徴無し。岩崎本尚書と攷ふるに、船隻上一用徳

「影善」は「影」に作り、偽罪命。「影善瘡悪」は「章」に作り、前後既に一ならず。然れ

影の義は此の本「影」に作れるを尤表すに改めて「章」

水と「華」に筆跡の差な水に止の注本「華」に作れるを木表符に記して、意一

に作ることに有るべからず。且「善儉畢命」を引いて亦正に「善」に作れ

李善據る所の尚書本より「章」の字を用ひて「彰」の字を用ひざりしかと疑はる

顯恒顯聚時亮庶功用終顯德對揚我高祖之休命

注尚書王曰簡編。命用成爾顯德。宋葉襄足利本。四部本。兩「簡」

今本前書文義之命篇王曰陽而面而下月戎而通德卷廿

今本尚書文侯之命篇王曰爾罔愆爾都用成爾德第五十五表

案するに此の注「企」に作る者はなり。攷既に弟
頁に見ゆ。

此の注「命」の字、微無し。此の經の傳「夏治汝都鄙之人」に據れば、孔氏本經「命」

山
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

1

卷第三十六

任彦昇 宣德皇后令

青聖廣淵

注 尚書曰乃祖成湯齊聖廣淵初葉表 左より第三行

今本尚書微子之命篇乃祖成湯齊聖廣淵 卷十三 第二十五葉表案するに卷五十七變侯常侍誄注尚書此の文を引いて「湯」の下「克」の字有り。

既而鞠旅初葉表

注 尚書曰王明宣聖 初行

今本尚書泰誓篇下王乃大巡六師明宣聖 卷十一 葉表

萬無匹定

注 尚書曰震澤底定第三葉表 集中本 是初本 四部叢刊本 漫野本 六家本 正文及此の注の底 呂氏に作る

案するに既に第一五二頁に出つ

傅季友 爲宋公修梵元王墓敕

作範後魏

注 尚書曰空裕後魏第四葉表 左より第五行案するに既に第一

頁に出つ

王元長 永明九年策秀才文

神靈文思之君聰明聖德之右

注 尚書序曰昔在帝堯聰明文思第五葉表 左より第四行

今本尚書堯典篇序卷二 第四葉表文同じ

朕當奉天命恭惟永圖

注 尚書曰茲率厥典奉若天命第五葉表 左より第七行

今本尚書仲虺之誥篇卷八 第五葉表 文同じ

又曰慎乃儉德惟懷永圖第五葉表 左より第七行

今本尚書太甲篇上慎乃儉德惟懷永圖卷十八 葉表案するに「圖」に作る者尚書の異文には非れども應初尚書或は此の字に作れる者之

れ無きを保し難し。内野本尚書「圖」に作りて「圖」の字を旁記せり。

說文に據れば「圖」は畫計也第五葉表 左より第七行「圖」は畫也第五葉表 左より第七行二字書義皆互に殊

る。然れども漢碑既に「圖」を以て「圖」と爲して第五葉表 左より第七行勅慎乃儉後碑古文官書は明に「圖」

圖二形同」と言ひ第五葉表 左より第七行の類本に據る。切斷亦「圖」を收めて思度と注す第五葉表 左より第七行王元長三本其の

此の經足利本六家本「側」に作り卷四十九音記總論注引く所は胡刻本足利本六家本俱に「側」に作る。

今の尚書は「側」に作りて「側」に作らざるに選注尚「側」に作る者有るは是れ決して後人の爲す所に非じ。疑ふらくは李善の尚書自ら「側」に作りしなるべし。

説文に攷ふるに吳曰西也從日从大亦聲臣鑑按易曰日昃之離作此字會意齊食反顧部本説文解詁卷十天部原本從大日從日從大亦聲臣鑑按易曰日昃之離作此字會意齊食反顧部本説文解詁卷十天部原本從大日從日從大亦聲臣鑑按易曰日昃之離作此字會意齊食反顧部

此れに據れば「日」は日象の本字なり。然れども古「側」を段りて「日」と爲せる例有

余足得宮東北隅謂之宮の孫父注曰側之明。明注は曲禮正義(原古)に引く。

儀禮既夕禮賓出主人送于門外有司讀祖期曰日側。鄭注曰側既也。謂將過中之時。記に曰く厥

尚書中候尚至于下授榮光休至。鄭注曰禮。禮曰側下側日西之時。鄭氏佚書。御覽卷五

此れ孫鄭皆「側」を讀んで「日」と爲せるなり。古正に「側」を以て「日」と爲す例あれ

此の注「不違」は集注本「弗皇」に作り卷四十六王元長曲水詩序注及び卷四十九晉

紀總論注引く所は胡刻本足利本四部本漢野本六家本俱に「弗皇」に作る。是れ李善

の尚書「弗皇」に作りて「不違」に作らざりしなり。内藤博士本内野本尚書亦正に「弗皇」

に作れり。

段玉裁曰く「皇今本作度俗字疑衛包所改也下文則皇自敬德鄭注皇謂假借寬假自敬可以證此之不以是矣。傳疏と訓して此皇に非ず。皇昭靈文同并爾雅釋言皇昭也」。

又「李善引く所は段説の明證と爲すべし。」

注尚書呂刑曰穆王訓曼轉剛聖辟殺教其罰百鎰。第七葉裏

今本尚書呂刑篇序呂命穆王訓曼轉剛聖辟殺教其罰百鎰。第四行

又經聖辟殺教其罰百鎰。第六葉裏

案するに「鎰」に作る者微無し。再攷を竣つ。

注尚書曰禹拜昌言初行。第七葉裏

案するに既に第一九一頁に出つ。

注尚書曰財次政曰貨。第七葉裏

今本尚書洪範篇三八政一曰食二曰貨。第九葉裏

黃連通其有無。案するに「政」既に第一〇九頁に見ゆ。

注尚書帝曰曷。還有無化居。第七葉裏

今本尚書益稷篇曰曷。還有無化居。初葉裏

案するに此の注「帝」の字疑ふらくは當に「世」に作るべし。

此の注「世」に作り、今本尚書と合せして、今文尚書と合す。是正以て孫星衍乃ち之を疑うて李善今文に據るとす。尚書今文注疏然れども李善引く所は多く偏孔本なれば、此の引本偏孔本に據りしなるべし。

今音書食貨志を攷ふるに曰く、「昔者先王周尊禮有無各得其所初集」と。晉志其の發端を漢志に仿へるに「漢志」に作るを疑はざりし者は、是れ當時の尚書に作りしが偏に非るか。尚書五刑志尚書と引くこと漢志に同じくして而も偏孔本尚書に依りて改果して然らば、晉志と李注引く所とは共に以て唐初古文尚書舊に作る者有りたるの證と爲すを得む。

予既に此の條を草せりと雖も、未だ偏孔本舊に作る者有るの明證を得ず。意猶ほ慊懣たり。乃ち爰に聲書を檢し、又金澤文庫、東洋文庫、足利學校圖書館を訪ふこと前後各二回詳に其の藏する所の集注、殘卷、宋板六選を校せしも、復た得る所無し。甚だ以て慊みとなせり。然るに昭和十一年十一月京都帝國大學文學部より景印文選集注、殘卷廿四本を惠與せらる。即ち之を閱讀するに、卷六十一葉裏吳都賦「文質相體」の鈔に「尚書曰：尊禮有無各得其所」云々、遷徙也、徒有之、王文易其所居、猶也」と有るを見、豁然として蒙を發けるが如く思はす。蒙を指つて快を叫びぬ。是に於てが餘に鈔連引する所の注を以て、今本偏孔傳と較するに、今本「化易也、居謂所宜、居情者勉勸天下、徒有之無、猶遷徙山林、木徒川澤、交易其所居、猶」に作るを盡

くは合せずと雖も、王注「居居者下得宜去當處而去當處而來也」尚書正義に作るに比しては寧ろ今本に近し。尚書正義爰に悉く鈔引く所の尚書を檢するに、其の傳る所皆偏孔本なるに似たり。

乃ち李善引く所と鈔引く所とは均しく偏孔本の異本なること「各に疑ふべからざるなり」。

果して然らば、李善反ひ鈔引く所は「舊」に作りて易と訓すること、今文と同じく、今文尚書改定今本尚書の「世」に作りて勸勸と訓するが若きは、尚書正義韓師古、漢書食貨志「世有無」に注して「世與茂同勸也、言勸勸天下遷易有無使之交足」初集と言へると相合す。韓師古其の解中「世」を「茂」と訓し、世と訓孔本にして、而も其の差斯くの如き者有るなり。漢書正義其の說尚書大傳に據ると雖も、偏孔本に作る所と合す。昭和二年十二月九夜追記

分命顯於唐官

注 尚書曰分命義仲宅嵯峨曰昭谷分命義仲宅嵯峨曰昭谷

注 又曰分命和仲宅西曰昧谷又曰分命和仲宅西曰昧谷

注 今本尚書堯典篇今本尚書堯典篇文同じ

注 庶今日月休徵、風雨王燭庶今日月休徵、風雨王燭

又日月之行則有冬有夏第廿三卷
案するに此の注「後」の下當に「又曰」の二字有るべきに似たり。
克明之旨弗遠欽若之義復還
注尚書曰克明俊德第五行

今本尚書典範篇克明俊德卷二第廿三卷
案するに卷五十六陸佐公石闕銘注尚書を引いて此の注と同じ。然れども卷卅七曹子建求通親親表「其傳曰克明俊德」今本尚書典範篇に據りて改む。德以親九族九族既睦平章百姓の字注惟「尚書典範文也」此の六中今本尚書典範篇に據りて改む。德以親九族九族既睦平章百姓の字注惟「尚書典範文也」と謂へるのみにて其の尚書との異同を記せざれば恐らくは李善を見る所の尚書「俊德」に作りて「俊德」に作りたりしなるべし。敦煌本尚書典範篇「俊」の字を出し内野本尚書典範篇に「俊」に作る。李善洪範「俊民用章」を引いて亦「俊」に作る。此の注及び石闕銘注「俊」の字疑ふらくは後人の改作ならむ。
注又曰欽若昊天
案するに既に第 二五 頁に出づ。

王元長 永明十一年策秀才文

五辰空極九序未歌

注尚書各錄曰撫于五辰庶績其凝第八卷

今本尚書典範篇曰撫于五辰庶績其凝卷四

案するに李善據る所の尚書「阜陶」を「各錄」に作る。攷既に第 一八七 頁に見ゆ。

注又曰德惟善政政在養民水火金土穀惟修正德利用厚生惟和九功惟敘第八卷

今本尚書典範篇曰德惟善政政在養民水火金土穀惟修正德利用厚生惟和九功惟敘卷四

案するに卷一五聖聖東都賦注尚書「九功惟敘九敘惟歌」を引いて下の「敘」の字

を「序」に作る。李善據る所の尚書多く「序」の字を用ひたるに似たり。攷既に第

二五 頁に見ゆ。

胡克家「此本注二字作序乃尤疑之以正文改未見也」卷六と謂ひ胡紹虞亦

此の注「敘」に作るを以て是と爲す。卷六二氏の説皆从ふべからず。

又梁草鉅此の注上に「尚書各錄曰」の文有りて其の下「又曰」に作れるを以て

此一則は今本大尚書非各錄之言」と謂へるは非なり。注「又曰」は上注「尚書」

を承けて言ふ。「各錄曰」を承けて言へるに非るなり。

若聖之樹在勤

注尚書曰民望在勤第三行

案するに既に第 一七九 頁に出づ。

幸四境無虞

注 尚書曰四方無虐予一人以寧 第廿三葉

今本尚書畢命篇 第廿三葉 文同じ

注 尚書曰罔不同心以匡乃辟 第廿三葉

今本尚書說命篇上 第廿三葉 文同じ

注 惟王建國惟典命官 第廿三葉

今本尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

注 尚書堯典曰乃命羲和 第廿三葉

案するに、攷既に第ニ二八頁に見ゆ。

爾無面從

注 尚書曰予違汝弼汝無面從 第廿七葉

今本尚書益稷篇予違汝弼汝無面從退有後言 第廿七葉

案するに此の注引く外「退有後言」の四字五道せしなり。

此の注下の「汝」の字足利本、四部叢刊本、六家李昌「汝」に作る。「汝」の攷既に第ニ二八頁に見ゆ。

關河蕩析

注 尚書盤庚曰今我民用蕩析離居 第廿九葉

今本尚書盤庚篇下盤庚既遷 第廿九葉

注 尚書曰予惟小子若涉淵水予惟往求朕攸濟 第廿九葉

案するに、卷卅五漢武帝賢良詔注亦此の經を引き、本或は二「惟」の字皆「唯」に作る。

以次朕心

注 尚書曰故乃比次朕心 第卅一葉

今本尚書說命篇上 第卅一葉 文同じ。

訓代及改曰く「此十一字、原本、余、陽、本、無、也、と、足利本、四部叢刊本、六家、李、昌、無、し、」

又、三百里納結服傳曰結象世年廿一葉表
案するに尚書「葉」に作る若未だ其の證を得ず、疑ふらくは、此の注「葉」の字、本「統」

に作りしを轉寫正文及び注上引葉舊儀の「葉」の字に涉りて誤れるならむ。

又案するに魏志卷廿五楊潛の上疏に曰く「都圻之内盡屬司服當供葉結銓葉之調」

（高堂隆傳に附す）と、此れ正に鳥糞「五百里甸服云云」に據りて文を爲す。而し

て「結」銓「葉」皆今の鳥糞と合して唯「葉」のみ合せず。或は鳥糞本「葉」の字を

用ひたること、此の字注引く所の如き者有りたるか。

如橘赤子
注 尚書曰若保赤子惟民其康又左より第三行
今本尚書傳註篇第六葉表 文同じ。

雖一日萬幾早朝早罷
注 尚書曰就兢業業一日二日萬幾。第十二葉表
今本尚書傳註篇第六葉表 文同じ。

案するに李善據る所の尚書「機」に作りて今本と異なるなり。攷説既に第一三二頁

に見ゆ。

集注本卷八十五上統叙夜與山巨源絕交書注尚書此の文を引いて「萬」を「万」に作

り李善の舊を採するに似たれば疑ふらくは此の注の「萬」亦本「万」に作りしならむ。

鳴鳥茂聞

注 尚書周公曰攷用勛弗及苟。通德弗降我則鳴鳥不聞。第十三葉表左より第二行。鄭氏攷周曰「最本葉。周本
此に各費本に同じ。

今本尚書周公若曰又曰。降我則鳴鳥不聞。第十三葉表左より第二行。鄭氏攷周曰「最本葉。周本
案するに「不」「弗」の攷既に第一一・八頁に見ゆ。

卷第三十七

表上
注 尚書云敷奏以言。初葉表
今本尚書敷奏以言。初葉表 文同じ。

孔文舉 薦禰衡表

臣聞洪水橫流帝思辟乂

注 尚書曰湯湯洪水方割有能俾乂。初葉表

今本尚書湯湯洪水方割有能俾乂。初葉表

旁求四方
注 尚書曰旁求天下。初葉表

今本尚書說命篇上傳以形旁求于天下。第二葉表

案するに卷廿五七命注卷五十恩澤傳論注並に尚書此の文を引いて皆「求」の下「於」

の字有り。此の注此の字を脱す本是れ異文に非るなり。

晴窓照載

注尚書云帝曰晴窓若時登廟初葉表

今本尚書免與前篇二葉表文同し。

注又曰有能昭帝之獻

案するに既に第三三三。頁に出づ。

勞謙曰仄

注尚書曰文王自朝至于日中受弗初葉表

今本尚書無逸篇文王傳自朝至于日中受弗初葉表

案するに此の注「側」字に作る者はなるに似たり。

「還」當に「皇」に作るべし。

致弟三五。頁に詳なり

増四門之穆穆

注尚書曰賓于四門四門穆穆第二葉表

今本尚書舜典篇三葉表文同し。

案するに尚書此の經文に對する諸注下の如し。

馬融 四門四方之門諸侯羣臣朝者皆賓迎之臨有美德也此五葉表

鄭玄 尚書正義に曰く「鄭玄以賓爲賓請爵上禮以迎諸侯」と。

王肅 敦煌本釋文王注の「朝者」の二字をせば王注蓋し馬注と相近かりしなるべし。

し。

尚書 穆穆美也四門四方之門舜流四方諸侯來朝者皆賓迎之皆有美德無凶人

乃ち馬王傳傳は「賓」を賓迎と解し鄭は則ち「上禮」と爲すの差は有れども

傳の說を以てしと謂へるは誤なり。案馬融 其の諸侯を迎ふるの意と爲すは皆相同し。

今此の表の「足以昭近者之多士増四門之穆穆」を攷ふるに是れ明に上文「旁求四

方以招賢俊」晴窓照載羣士書證下文「帝室聖居必當非常之賓」と相呼應すれば

其の意正に衆賢を招降することを謂へるにて尚書諸注の意と相同じからざるなり。

但左氏文公十八年傳「舜田歷客于四門流四方族」故虞書教舜之功傳曰賓于四門四

門穆穆無凶人也」の文有り杜預「賓于四門」に注して曰く「關四門達四聰以賓禮

衆賢也」と。

是れ杜預は 左傳此の文を以て 舜典下文「關四門明四目達四聰」と同じく衆賢

を賓禮するの意なりと爲せるなり。 案五葉表此の文に據りて其の杜預必ず承くる所

有るべし。

然らば此の表の文例正に杜預解する所の意と相同しきを知る。

然るに李善此の正文に注して尚書此の經を引き又卷五十八蔡伯喈陳太丘碑文「四

門備禮此れ本門備禮以て賢 閑心靜居」に注して亦尚書此の經を引く。各李善尚書を解

すること杜預左傳の注の如かりしか。抑惟正文據る所を證せしめは其の解の同

異は確く同ふ所に非ざりしか。

必書非常之篇

尚書曰所實推賢則述人安第二卷
今本尚書旅獒篇所實推賢則述人安第四行
案此卷四十四陳孔璋檄吳將校部曲文注亦尚書此の文を引いて各本「述」に作れども書四十四野平尚書正に「述」に作れば此の注「述」に作る者を以て是と爲す「述」の攷既に第二十五頁に見ゆ。

曹子建 求自試表

故散淑有能而夏功昭

注尚書「昭」曰昭與有能戰于甘之野第五卷表
昭代散淑曰昭本字昭本曰上有序字此初有補去之

今本尚書甘之野篇序故與有能戰于甘之野卷七
案此卷四十一陳孔璋檄吳將校部曲文注亦尚書注亦尚書を引いて胡刻本の此の注と同じ。但此の注「于」の字集注本第五卷表に於ては「於」に作る。集注本必すしも誤寫とのみ定むべからず。「于」於異同の攷既に第九七頁に見ゆ。

成克商而周建著
注尚書曰武王崩三監及淮夷叛周公相成王將黜殷命第五卷表

今本尚書大誥篇序武王崩三監及淮夷叛周公相成王將黜殷命第十四卷表
案此に段玉裁曰く「版本無命字唐石經初刻有後唐改正義云黜殷命武庚之命又云獨言黜殷命者又云故得言黜殷命也然則正義本本有命字明矣此云將黜殷命下文云既黜殷命官序と指す。正相銜接」第五卷表と。此に據れば李善見る所の尚書は正義本及び石經初刻と合するを知るなり。尚書序を攷ふるに「殷」の字有る者を以て長と爲す。

曹子建 求通親親表

伏惟陛下咨帝唐欽明之德

注尚書曰放勳欽明第八卷表

今本尚書堯典篇曰放勳欽明文思安安卷二
案此に卷廿九江文通建平王上書注卷四十三孫子荆爲石仲容與孫皓書注卷四十四鍾士季檄蜀文注卷五十四劉季才檄命論注俱に「尚書曰放勳欽明」を引いて「勳」皆「勳」に作る。是れ李善據る所の尚書「勳」に作りて「勳」に作りしなり。然らば此の注亦當に李是れ「勳」に作るべし。
今堯典此の經の傳を攷ふるに曰く「堯放上世之功化而以敬明文思之四德安天下之當安者」と。此れに據れば「欽明文思」の四字一讀。當に「欽明」の下句すべからず。得文引く所の馬注孔注引く所の鄭注に據れば「欽明文思」の四字を以て「堯」の字と爲すに疑たり。

を引く。且正文「章明」と注引尚書の「昭明」と其の意相協はず。疑うらくは此の注後人の増添せる所。案注本「章明」の注無し。是なり。

僅發天聰而至神聰也

注尚書曰天聰明第十葉表

今本尚書皇極經世篇天聰明自我民聰明卷四第廿三葉表

又說命篇中惟天聰明惟聖惟憲卷四第廿三葉表
案するに案注本第廿三下足利本此の注無し。有る者は或は後人の増す所なるか。

羊叔子 諫開府表

假令有遺德於板築之下

注尚書序曰高宗夢得說築傅巖之野卷十二第廿八行

今本尚書說命篇序高宗夢得說

又說命篇上說築傅巖之野卷十二第廿八行

注尚書曰正色平下卷十一第廿九行

今本尚書皇極經世篇第六葉表 文同じ。

案するに卷五十七曼侯常侍誅注尚書を引いて此の注と同じ。

陸士衡 謝平原內史表

世無先臣宣力之效

注尚書序曰予欲宣力四方汝為卷十三第廿三葉表

今本尚書益稷篇帝曰予欲宣力四方汝為卷五第廿五葉表

案するに「解」に作る者未だ例證を得ず。或は李善意を以て改めたるか。改第

卷四十七陸士衡漢高祖功臣誥注尚書此の文を引いて「予」を「余」に作る。改第

頁に見ゆ。

不愜日月之明遂垂曲照

注尚書武王曰惟我文考若日月之照臨卷十四第廿四葉表

今本尚書泰誓篇序惟十有一年武王伐殷

又泰誓篇下王曰嗚呼我文考若日月之照臨卷十一第廿三葉表

得夷平民

注尚書曰延及平民卷十四第廿四葉表

案するに既の第 三三四頁に出づ。

劉越石 勸進表

高祖宣皇帝肇基景命
注尚書武王曰至于大王肇基王迹第二十五葉裏

足利本、四部本、澤野本、六家本、延定本に作る。

今本尚書武成篇序武王伐殷往伐歸獸

又經王右曰陽司至于大王肇基王迹第二十一葉裏

案するに「跡」に作る者微無し。

世祖武皇帝遂造區夏

注書曰惟王顯考文王用肇造我區夏第二十五葉裏

今本尚書康誥篇惟乃丕顯考文王第三十三葉表

三禁重光

注書曰昔我文王武王宣重光第二十五葉裏

今本尚書顧命篇昔君文王武王宣重光第二十五葉裏

案するに此の注「我」の下「君」の字を奪せるに似たり。

攸既に第二五四頁に詳なり。

家宰攝其細巨辟輔其治

注尚書曰家宰掌邦治統百官第二十二葉裏

今李尚書楊官篇第二十八葉裏 文同じ。

羣生懷來蘇之望

注尚書曰僕我后末其蘇初行

今本尚書仲虺之誥篇後予后末其蘇

案するに足利古本尚書正に「我后」に作りて此の注と合す。

今本尚書を攷ふるに「我后」三見易定大甲

見するのみ。而して獨太甲篇中に見ゆる「後我后末其蘇」は

仲虺之誥の此の句と其の形尤も近くして彼は正に「我后」に作る。

又仲虺之誥此の句は孟子引く所の書を襲へる者なりと謂はるるが

尚書古文選解卷四

在りては亦正に「我后」に作る。然らば則ち仲虺之誥の此の文も當に本是れ「我后」に作りて「予后」には作らざるべきかと疑はる。

「後」同聲の攷既に第二五四頁に見ゆ。

敢歸犬羊遠處天邑

注尚書曰肆予敢求爾于天邑商第二十六葉表

今本尚書多士篇第二十六葉表 文同じ。

案するに卷四十八典引注卷五十四五等論注並に尚書を引いて此の注と同じ。

天命未改歷數有歸

注書曰天之歷數在爾躬第二十六葉裏

案するに既に第二五六頁に出づ。

案するに既に第一三一頁に出づ。此の注「世」字尚書の文に非ず。古人引書文

不以克讓爲事

注書曰允恭克讓 第廿八葉表

今本尚書堯典篇允恭克讓

案するに字善據る所の尚書は「恭」を「敬」に作り「讓」を「讓」に作りしに似たり。攷

既に第一四七頁に詳なり。

神人獲安

注尚書帝曰湯受命汝典樂神人以和 第十八葉表

今本尚書堯典篇帝曰湯受命汝典樂 神人以和 卷三

卷第三十八

張士然 爲吳令謝詢求爲諸孫置守家人表

成湯革夏而封杞

注尚書曰乃爾先祖成湯革夏 初葉表

今本尚書多士篇王若曰 乃命爾先祖成湯革夏 攷氏司四方 第三葉表

案するに「革夏」命「微無」。然れども今本尚書に攷ふるに「革夏」の二字惟三見

して而も威有一德「後革夏正」多士下文「般革夏命」の若きは皆「革夏」二字を以

て一語と爲されば此の經亦李善引く所を以て長と爲すべきに似たり。梁韋鉅曰

「後與駿通民命音同如此注所引以駁命二字屬上讀似較孔傳所釋語意爲順但正義

釋文兩本相合不知李氏所見何以獨有此異也」初葉表

本と今本と大に異なること猶益稷「賢遠有無化居」に於けるか如かりしが

西戎有即序之人 注書曰痛皮岷嶠析支渠搜西戎即敘 第三葉表

今本尚書禹謨篇痛皮岷嶠析支渠搜西戎即敘 卷六葉裏

案するに正文「序」に作り注は「敘」に作りて相合せす。又「序」「敘」異同の注無し。

卷六魏都賦注尚書此の經文を引いて各本「序」に作れば此の注亦本「序」に作りしか

庾元規 讀中書令表

而使內處訖齊外總兵權

注尚書穆王曰今命汝作朕股肱心膂 第四葉表

今本尚書君牙篇序穆王命君牙爲周大司徒作君牙

又、經王若曰命。今命爾子製作。股肱心膂卷十九。案するに、梁韋鉅曰く、「今書作今予命爾子製作」の字當に「命」の字に誤るべし。作股肱心膂注蓋約舉其詞故尚書下無曰字亦必有異本也卷十九。此の注尚書の文を約舉せりと謂ふは是なり。但約引せるが故に尚書の下「曰」の字無しと謂ふは甚だ非なり。卷廿類延年皇太子禮樂會詩注「尚書成王曰泰稷非魯明德惟馨」を引き卷廿六附靈運過始寧墅詩注「尚書王曰惟民生厚因物有遷」を引き皆其の詞を節せざるに而も尚書の下「曰」の字無し。又卷三東京賦注「尚書曰予朝至千洛師卜瀾水東瀟水西惟洛食」を引き卷四十七出師頌注「尚書曰武王伐殷師度孟津」を引き皆其の詞を約舉せるに而も尚書の下「曰」の字有り。李注此の類甚だ多く枚舉すべからず。凡そ李注某書を引いて書名の下「曰」の字無き者は其の直下必ず「某人曰」の語有り。然らば則ち「某書某人曰」に作りて書名下「曰」を書せざるは惟餘を避けしのみ。佗意有るに非るなり。梁氏既に此の謬見有り故に卷廿六永明十一年第秀才文注に於て亦曲説を爲せしなり。

此の注「汝」は李の舊説に依るに作りて今本尚書の「爾」と異なるは蓋し李の見たる尚書自ら然りしなり。卷五十三韓公論注尚書此の文を引いて亦「汝」に作れり。

此の注「股肱」の上「朕」の字多き者微無し。蓋此の注益稷「臣作朕股肱耳目」に涉りて衍せしか抑。倘君牙本益稷即五年を襲ひて亦「朕」の字有りしか。疑うて明かにする能はず。

歸嚴私門以待刑書

注 尚書曰京矜折獄明敎刑書卷十九。今本尚書曰京矜折獄明敎刑書卷十九。案するに、段王叔曰く、「文選段元規讀中書今表李注引尚書京矜折獄明敎刑書孔叢子雖尚書而作京矜折獄明敎刑書」云々。惟段氏は本文を改めて漢に作りて今表李注を改めたるなり。折獄明敎刑書孔叢子雖尚書而作京矜折獄明敎刑書。疑偽孔本固作矜傳傳矜尚敎而衛包因依傳改經耳卷十九。今諸書を攷ふるに、花朴子卷十四刑制篇花朴子答曰易倫明罰教法書有京矜折獄明敎刑書五の文有り尚書を引いて正に「矜」に作り又梁書武帝紀天監二年春正月甲寅朔詔曰三訊五聽著自聖典京矜折獄義重前詔百濟本三亦正に「矜」に作れり。此の二文據る所の尚書何本なるやを知らずと雖も亦以て段説是なるの尙證と爲すを得む。

但、皇書治等及、岩崎本尚書「京敬」に作り北堂書鈔卷四初學記卷廿引く所亦「京敬」に作れば、衛包以前或は既に「京敬」に作れる本有りたるかと疑はる。

臧庸拜經日記卷十一第二葉亦李善引く所を以て是と爲すの説有れども、其の論證未だ安からざる者有れば今采らず。

般仲文 解尚書表

臣亦胡賴之厚

第六葉書

尚書曰予心賴厚有忸怩第三行
今本尚書五子之歌篇影陶平子心賴厚有忸怩第七葉書
案するに此の注引く所「予心」の二字下に屬して句を爲すに似たり。然れども卷十
六開居賦注「賴厚有忸怩」を引けば此の注想らしくは誤有らむ。

傅季友 爲宋公求加贈劉前軍表

急功簡勞

第七葉書

尚書曰惟帝急功左より第三行
今本尚書大禹謨篇尚曰簡句惟帝急功第六葉書

內閣謨猷外勳庶政

第七葉書

尚書曰爾有嘉謀嘉猷則入告爾后于內第六葉書
今本尚書君陳篇王若曰簡句爾有嘉謀嘉猷則入告爾后于內第六葉書
案するに此の注「爾當に」に作るべきに似たり。致既に弟三葉裏に出づ。

注 又曰庶政惟和萬邦咸寧

今本尚書周官篇庶政惟和萬國咸寧第七葉書

案するに此の注引く所「萬邦」に作りて今本尚書と異る。然れども尚書正義此の偽
經を據して「萬邦」所以言安世」と曰へば正義據る所の本亦「萬邦」に作りしに似たり。
若し「萬國」に作りては正義據る所の本亦「萬國」に作りしに似たり。
今本尚書を檢するに大禹謨「萬邦咸寧」洛誥「萬邦咸休」因命「萬邦咸休」の文
有り。其餘「萬邦」の語十三見太甲下「說命」上「周官」して而も「萬國」の語

は惟周官此の文に一見するのみ。
此れに據りて之を推すに周官「萬國咸寧」も亦本「萬邦咸寧」に作りて尙大禹謨

と相同じかりしかと疑はる。蓋し此の文偽孔氏洛誥「萬邦咸休」の文を本とし且
周易乾象傳「萬國咸寧」に據りて「休」の字を「寧」に作るべし。
一人以寧」は康誥「予一人以憚」を襲うて「憚」を「寧」に易へる「作股肱心膺」
は韋陶謨（伯益）「臣作股肱耳目」を本として且「心膺」の語を周語に採りしかこ
とを云なり。

然らば則ち今の周官「萬國咸寧」は是れ後人の改易を經しこと立政「其惟吉士用
勳相我國家」王肅乃勳勳字下引據に作る。に於けると同じきなり。
惠棟古文尚書王鳴鳳古文尚書等今本周官に據りて此の文直に周易を襲へりと謂へるは未
だ是ならざるなり。

今本文選卷四蜀都賦注「尚書曰萬國咸寧」を引ける者は周易の誤なり。集注本正に周易を引く。致既に彼の條に詳なり。

及登庸朝石
注尚書曰若時登庸第三行

案するに既に第二六頁に出つ。

教讀百揆
注尚書曰納于百揆第三行 足利本「食本」六家本「百揆」に作る。

今本尚書典範篇第三行 文同じ。
案するに、尙典傳此の「百揆」を解して官名と爲す。然るに此の正文用ふる所は官名の意に非ず。今文家多く此の「百揆」を以て官名と爲さざるの致、皮氏今文尚書致證卷一第六に詳なり。但偽傳も「百揆時敘」を釋しては則ち「百事時敘無廢業」と謂ひて「百揆」を以て官名と爲さされば、此の注「百揆時敘」を引いて乃ち可なるのみ。

班同三事
注尚書曰三事大夫敬爾有官第七行

今本尚書周官篇三事註大夫敬爾有官第十行 案するに、閔若第四十七行 太田元（寫本）皆謂ふ、周官此の文、毛詩雨無正「三事大夫」に據りて「三事」の字を増すと。今幸善引く所「三事」の字無く雨無正と合す。

此れ本「三」の字無かりしか抑。李節去せるが。單文證無く疑うて決する能はず。

任彦昇 爲齊明帝讓宣城郡公第一表

武皇大漸
注尚書王曰嗚呼疾大漸惟幾第八行

今本尚書顧命篇第十五行 文同じ。

嘗不忍自固於綴衣之辰
注尚書顧命曰出綴衣於庭起翼曰王崩第八行

今本尚書顧命篇出綴衣于庭起翼曰乙丑王崩第七行 案するに卷五十八王仲寶補周禮文注此の經を引いて亦「於」に作る。李の舊目ら然りしならむ。「于」の致既に第九頁に見ゆ。

格淵碑文注引く所「翼」を「立」に作る。是なり。此の注亦當に是れ「立」に作るべきかと疑はる。

遂荷顧託楊末命

注又曰。右憑王几導楊末命第八行 胡氏致證曰、寫本茶陵本又字作尚書顧命四字。足利本四部本漢野本六家本亦寫本に同じ。足利本四部本漢野本六家本亦寫本に同じ。今本尚書顧命篇皇右憑王几導楊末命第八行 案するに、卷五十八諸淵碑文注此の經文を引いて「右」の上「皇」の字有り。此の注疑

案するに既に第三四五頁に出づ。

至於斯名稱爲國爲身

注 尚書伊尹曰臣爲上爲德爲下爲民第二葉表

今本尚書咸有一德篇伊尹既獲政厥辟將告歸乃陳戒于德曰隔句臣爲上爲德爲下爲民

非

任彦昇 爲蕭揚州薦士表

七葉重光 注 尚書曰宣重光第十四葉表

案するに既に第二五四頁に出づ。

允迪中和

注 尚書曰允迪厥德第十四葉表

今本皇陶謙篇第二十一葉裏文同じ。

案するに卷五十八類延年宋文皇帝元皇后哀策文注尚書を引いて此の注と同じ。

任彦昇 爲范始興作求立太宰碑表

并樹風猷

注 尚書曰彰善癉惡樹之風聲第十六葉表

今本尚書畢命篇彰善癉惡樹之風聲第十八葉表

案するに此の注「彰」の字疑ふらくは當に「章」に作るべし。致既に第

頁に見

ゆ。

進思必告之道

注 尚書曰爾有嘉謀嘉猷則入告爾后于內第十六葉裏

案するに既に第三五五頁に出づ。

五教以備百揆時序

注 尚書帝曰契汝作司徒敬敷五教第十六葉裏

今本尚書舜典篇帝曰契爾作司徒敬敷五教在寬

案するに胡克家攷異に曰く「表本重有五教二字案有者是也般本紀重有孔穎達尚頌

正義引尚書重有案するに尚頌正義引く所重字表本後監去下五教二字茶陵本無與此同皆

非」と。胡說是なり。足利本文證正に「五教」の二字を重ぬ。是れ李善據る所の尚

書自ら此の二字を重ねしなり。

段玉裁曰く「唐石經五放之下疊五放二字字形隱隱可辨後乃摩去重刻然則唐時本作敬敷五放五放狂寤者與般本紀合」（昭興一下并）
 注又曰納于百揆百揆時序（第八十六葉） 足利本卷本六家本
 今本尚書舜典篇納于百揆百揆時敘
 案するに攷既に羊三て六頁に見ゆ。

卷第三十九

鄒陽 獄中上書自明

昔者司馬遷臨脚於宋

注尚書呂刑曰臈者脫去人之臈也（第六葉）

案するに今の尚書此の文無し。梁章鉅此の注引く所を以て呂刑の古注なりと謂ひ、
 胡紹煥は則ち古微書引く所の書刑德放の文（古微書卷四） 此の注と同一
 じき者有るに據つて此れ當に尚書緯の文なるべしと謂ふ。（第七葉） 梁章鉅にして胡
 說微有り。
 李善卷十西征賦（第四）に注して「尚書刑德放曰臈者脫去人之臈也」を引き其の文此
 の注と正に合す。胡說是なるの明證と爲すべし。

但胡氏此の注引く尚書緯の文なるを以て「尚書呂刑曰」の五字當に「尚書傳曰」
 の四字に作るべしと謂ふは乃ち非なり。蓋し此の注亦本「尚書刑德放曰」に作り

しを轉寫誤つて「德放」の二字を奪し後人又「刑」の上段に「呂」の字を加へて「尚
 書呂刑曰」に作りしのみ。

不合則骨肉爲醢（敵朱象管蔡是矣）

注尚書曰周公位冢宰羣叔流言乃致管叔于商囚蔡叔于郭鄰（第七葉）

今本尚書蔡仲之命篇惟周公位冢宰正百工羣叔流言乃致辟（管叔于商囚蔡叔于郭鄰）

初葉

江文通 詣建平王上書

方今聖曆欽明

注尚書曰放勳（第十五葉）

今本尚書典範篇曰放勳（欽明文思安安）

案するに卷四十三孫子荆爲石仲容與孫皓書注卷四十四鍾士季檄蜀文注卷五十四劉
 孝標轉命論注俱に此の經文を引いて皆亦「勳」に作る。是れ李善據る所の尚書固よ
 り「勳」に作りて「勳」に作らざりしなり。

今羣書治要を檢するに正に「放勛」に作り又釋文「勛」の字の下「一云放勛堯字」と注して堯本正に「勛」の字を存すれば其の標出する所の「勛」亦本「勛」に作りしこと疑ふべからず。此れ皆唐初「放勛」に作れる本有りたるの明證と爲すべし。

大禹謨「其克有勛」北堂書鈔卷九引いて「勛」を「勛」に作り武成「我文考文王克成厥勛」神田本「勛」を「勛」に作れば堯本引いて「勛」を「勛」に作りしに似たり。

說文下力部に據れば「勛」は即ち古文の「勛」なり。段玉裁曰く「以說文祖字下引勛乃祖證之則壁中故書作放勛孔安國肅生乃易爲勛」初葉と。然れども唐初堯本孔氏本尚「放勛」に作る者必ず承くる所有るべければ「勛」を易へて「勛」に作るは安國に非るべし。

李注「放勛欽明」四字節引の攷既に第三六八頁に見ゆ。

任彦昇 啟蕭太傅固辭奪禮

泣血待旦
 注尚書曰坐以待旦第十七葉表
 案するに既に第三八七頁に出づ。
 明公功格區宇
 注尚書曰時則有若伊尹格于皇天第十七葉裏

案するに既に第一八一頁に出づ。

卷第四十

任彦昇 奏彈曹景宗

是以淮徐獻捷
 注尚書曰海岱及淮惟徐州第二葉表
 案するに既に第二〇頁に出づ。
 河克凱歸
 注尚書曰濟河惟兗州第二葉表
 案するに既に第二五頁に出づ。
 涉安故土而已哉
 注尚書曰建邦啟土第二葉裏
 案するに既に第一〇五頁に出づ。

沈休文 奏彈王源

升降露隆

注尚書曰道有升降政辭俗革第廿九葉
 今本尚書畢命篇道有升降政由俗革第廿九葉
 案するに此の注「辭」の字岩崎本（俗）に作るに作る。内野本尚書と合す。
 凡そ今本尚書「由」の字唐初本尚書（俗）に作るに作る。盤庚篇下「由」由「豐」與本王篇終下引
 く所及び岩崎本（俗）に作る羅氏本雲麓本尚書並に「辭」に作り畢命「政由俗革」世祿之家鮮克
 由禮「驢淫於傳將由惡終」不由古訓、君牙「乃惟由先正舊典」呂刑「今爾罔不由
 惡日勅」岩崎本皆「辭」に作る。是れ其の證なり。
 說文を攷ふるに「辭」有りて「辭」無し。徐鉉は「辭」を以て「辭」の俗字なりと爲す。
 說文校讀（俗林引）に曰く「辭」は「辭」の俗字なりと爲す。而して鄭君「辭」
 以「辭」爲「辭」と今畢命（尚書四）を案するに正に「辭」を以て「辭」と爲す二説同しかり。
 に注して「隨從世」と曰へば「辭」は乃ち今の「由」の本字なるを知るなり。
 「由」の字說文に見えず。古來小學家其の字原を説いて聚訟決せず。王國維乃ち
 定めて「由」は即ち說文載する所の「出」の字なりと爲せり。王氏取證極博其の說
 甚だ是詳に觀堂集林卷六に見ゆ。而して「出」の字は鄭君注して「東楚名缶曰出」
 第二篇と曰へば此れ隨從を以て本義と爲さざるなり。
 下部部

「由」「辭」二字本其の義各異れども「由」「出」二字同音同義にして王國維「出」「辭」
 「肉」の聲なれば、又三上「由」と「辭」とは亦同音を以て相通し（俗）に作る。是に於て尚書隨從の義の「辭」
 又「辭」を以て「由」の古字と爲す説有り。今本畢命「由」是に於て尚書隨從の義の「辭」
 の字を傳多く同の字悉く改めて皆「由」に作れる者今本是れなるべし。
 不相尊倫

注尚書曰八音克諧無相奪倫第廿九葉
 案するに既に第廿二頁に出づ。

雖除舊布新而斯風未殄第廿九葉
 注尚書曰商俗靡靡利口惟賢餘風未殄公其念哉第廿九葉

今本尚書畢命篇第廿九葉 文同し。

思清粹俗

注尚書曰齊化著麗萬世同流第廿九葉
 案するに李善此の注尚書を引く者は正文「粹俗」の語を證せむが爲なり。設し李善
 見る所の尚書「齊化」に作りは、何の要有つて此の文を引かむや。知るべし李見る所
 の尚書正に「齊俗」に作りて「粹化」に作りたりしを。胡刻本「化」に作るは後人の改
 改を經たるなり。

尚攷第一二二頁に詳なり。

案するに尚書此文無し。胡克家文選攷異に曰く「袁本無尚字茶陵本有案無者疑脫字。字耳作尚非也。亦通親親表注引亦誤」と。胡說甚是是なり。集注本（卷七十三下第卅一葉裏）求通親親表李注正に「字書曰博々謹敬也」に作る。

吳李重 在元城與魏太子牋

若乃過德權恩
注尚書各條通德 第十三葉裏 第六行

案するに既に第二一五頁に出づ。

下無威福之吏

注尚書曰臣無有作福作威 第十三葉裏 第九行

今本尚書洪範篇臣無有作福作威王食 第十三葉裏 第五段を擧げて今文尚書は「威」を先にし「福」を

案するに段王裁古文尚書攷異 第十三葉裏 第五段を擧げて今文尚書は「威」を先にし「福」を

後にせしことを攷定す。陳氏皮氏亦引。

段氏又曰く「漢書武五子傳應陵王宮賜策曰書云臣不作福臣不作威此先福後威而

師古注曰周書洪範云臣無有作威作福似唐初所據古文尚書亦有先威後福者」と。隋

唐の古文尚書一本「作威作福」に作りしかと疑ふべきの徵尚二有り。北堂書鈔 卷

第十 作福作威孔廣陶曰陳俞本先威後福非也。孔校恐らくは非陳本蓋し其の舊を存

するなり。又梁書武帝紀史臣曰然朱異之徒作威作福校尉樹棠政以弱成服冕乘軒由
其掌理 卷三 此れに據れば虞世南姚思廉見る所亦「威」を先にし「福」を後にせしに似
たり。

今此の牋「威福之吏」の語に注す。先威後福の證を引くを以て允當と爲す。然る
に李善此の注及び卷五十四五等論注並に尚書を引いて皆「作福作威」に作る。是
れ李善見る所の本自ら然りしなり。

阮嗣宗 爲鄭冲勸晉王牋

光宅曲阜

注尚書曰光宅天下 第十三葉裏 初行

今本尚書堯典篇序 第十四葉裏 文同じ。

注又曰魯侯伯禽宅曲阜 第十四葉裏 文同じ。

今本尚書書經篇序 第十六葉裏 文同じ。

世有明德
注尚書曰明德惟馨 第十四葉裏 第二行

案するに既に第一六四頁に出づ。
宇内康寧

注 尚書曰五福三曰康寧 第十五葉表 第三行

今本尚書洪範篇九五福隔句 三曰康寧 第十二葉表 第十四葉表

案するに攷既に第一〇九頁に見ゆ。

謝玄暉 拜中軍記室辭隋王牋

願朝宗而每竭

注 尚書曰江漢朝宗于海 第十五葉表 第三行
案するに既に第一〇〇頁に出づ。

案采一介 第十六葉表 第三行

注 尚書秦穆公曰如有一介臣 第十六葉表 第三行
今本尚書秦晉篇序秦穆公伐鄭隔句 還歸作秦晉

又經公曰隔句 如有一介臣 第十三葉表 第三行

東配三江 足利本四部本茂野本未見本
六部本底と處に作る。

注 尚書曰三江既入震澤底定 第十六葉表 第六行
案するに既に第一〇五頁に出づ。

任彦昇 百辟勸進今上牋

荆河是依 注 尚書禹貢曰荆河惟豫州 第十八葉表 第三行

今本尚書禹貢篇 第十八葉表 第三行 文同し。

班師振旅 注 尚書曰班師振旅 第十八葉表 第三行

今本尚書大禹謨篇 第十四葉表 文同し。

伐罪弔民 注 尚書曰奉辭伐罪 第十九葉表 第五行

今本尚書大禹謨篇奉辭伐罪 第十九葉表 第五行
案するに攷既に第一〇六頁に見ゆ。

阮嗣宗 詣嵇公

明公以含一之德據上台之位 注 尚書曰伊尹作咸有一德 第十九葉表 第五行

今本尚書咸有一德篇序 第十八葉表 文同し。

卷第四十一

司馬子長 報任少卿書

及狂僞奔之中

注 尚書曰杜乃獲敵乃罪 第九葉表

今本尚書書誓篇 卷八葉表 文同し。

陳孔璋 爲曹洪與魏文帝書

故唐虞之世 繼君猾夏

注 尚書僉典曰各發繼君猾夏 寇賊姦宄 第十七葉表

今本尚書僉典篇 帝曰皐陶繼君猾夏 寇賊姦宄 卷三

案するに此の注「各發」に作りて「皐陶」に作りさるは李善の尚書自ら然りしなり。

致既に第一八七頁に見ゆ。
卷五十七潘安仁馬汧督誅注尚書此の經文を引いて「猾を」猾に作れば此の注亦本
相同じかりしならむ。

是夏殷所以喪苗胤所以斃

注 尚書帝曰咨禹惟時有苗不率汝但征 第十七葉表

今本尚書大禹謨篇帝曰咨禹惟時有苗不率汝但征

案するに此の注「汝」當に「女」に作るべきに似たり。

注 又曰敘與有扈戰于甘之野

案するに既に第三六六頁に出づ。

盟津有再駕之役

注 尚書曰惟十有一年武王克殷 第十七葉表

今本尚書泰誓篇序惟十有一年武王伐殷

案するに僞孔氏本尚書「克」殷に作る若其の微を得ず。卷四十四陳孔璋檄吳將校部
曲文注卷四十七史孝山出師頌注並に此の序を引いて皆「伐」殷に作れば此の注の「克」

の字或は「伐」の誤かと疑はる。

注 又曰一月戊午師渡孟津

今本尚書泰誓篇序一月戊午師渡孟津

案するに卷四十七出師頌注此の序を引いて「度孟津」に作る。「度」の字是なるに

似たり。致彼の條に見ゆ。

此の正文は「盟津」に作り注は則ち「孟津」に作り兩者相合せずして而も「盟」孟同

異の注無し。卷三東京賦注角貢の文を引いて「盟津」に作れば此の注亦本「盟津」に

作りしかと疑はる。羣書治要及び神田本尚書泰誓正に「盟」に作り内野本尚書孟の右旁に「盟」と記す。

注 尚書曰天乃大命文王 堯舜殷周受命 第十七葉裏
今本尚書康誥篇 第十四葉裏 文同じ。

卷第四十二

魏文帝 與吳質書

類不謹細行

注 尚書曰不矜細行 終累大德 第六葉裏
今本尚書旅獒篇 第十三葉裏 文同じ。

曹子建 與楊德祖書

建永世之業

注 尚書王曰與國戚休永世无 第九葉裏
今本尚書微子之命篇王若曰與國戚休永世 足利本四部本 澤野本
六家本元は無しに作る。
無窮 第十三葉裏

曹子建 與吳季重書

代雲夢之竹以爲笛 斬四瀆之梓以爲琴
注 尚書曰雲士夢作 第十葉裏
案するに既に第三〇三頁に出づ。

案するに既に第三〇三頁に出づ。

注 尚書曰酒清浮醴 第十葉裏

案するに既に第二〇三頁に出づ。

吳季重 荅東阿王書

伏念五六日至于旬時

注 尚書曰要囚服念五六日至于旬時 第十二葉裏
今本尚書康誥篇 第十四葉裏 文同じ。

申之再三

注 尚書曰至于再至于三 第十二葉裏
今本尚書多方篇 第十一葉裏 文同じ。

應休璉 與廣川長岑文瑜書

善否之應甚於影響

注 尚書曰惠迪吉從逆凶 惟影響 第十五葉裏
案するに既に第二二〇頁に出づ。

應休璉 與從弟君苗君胄書

齊燕人於塗炭注尚書曰民墜塗炭第十四葉東

案するに既に弟頁に出づ。

徒有飢寒駭奔之勢注尚書曰駭奔走第十四葉東

今本尚書武成篇邦甸侯衛駿奔走執豆遷卷十一第十九葉東

卷第四十三

嵇叔夜 與山巨源絕交書

提務總其心注尚書曰一日二日萬機第三葉東

今本尚書皋陶謨篇一日二日萬機卷四第十九葉東
案するに李善據る所の尚書は「機」に作りて「機」に作らず。攷既に弟頁に詳

なり。

集注本卷八十五上此の注「萬」を「万」に作る。蓋し李善の舊を存するなり。攷既に弟

集注本此の正文「提務」を「萬機」に作り校語に曰く「五家本万機爲機務」と。李注
明かに「万機」を引けは其の正文亦當に「万機」に作る者を以て是となすべし。今本
「機務」に作るは蓋し五臣本に案されしなり。

孫子荆 爲石仲容與孫皓書

曆數將終集注本(卷八十五下)第三葉

注尚書曰天之曆數在爾躬第五葉東集注本「爾」を「應」に作る。攷既に弟

案するに既に第一五六頁に出づ。

生人陷荼炭之艱

注尚書曰憂有眚德民墜塗炭第五葉東集注本「憂」を「有」に倒す。攷既に弟

今本尚書仲虺之誥篇有憂眚德民墜塗炭第六葉東

案するに卷五十六陸佐公石闕銘注尚書を引いて本或は亦「憂有」に作る。尚書「憂

有」に作る者未だ其の例を見ず。「有憂」「有般」「有聞」は是れ本尚書の常語なれば

此の注「憂有」に作る者疑ふらくは轉寫の誤ならむ。第二九五頁參照

注 尚書曰用簠造我區夏第五葉裏末行
案するに既に第三七四頁に出づ。

重光相襲

注 尚書王曰昔我君文王武王宣重光第六葉裏末行

今本尚書顧命篇王曰曠第三行昔君文王武王宣重光第六葉裏末行

案するに既に第三七四頁に見ゆ。

固知四隣之攸同

注 尚書曰九州攸同四隣既宅第六葉裏末行

今本尚書禹貢篇九州攸同四隣既宅第六葉裏末行

案するに此の注「曠」の字疑ふらくは當に「闕」に作るべし。攷第四三〇頁に詳なり。

民庶悅服

注 尚書曰萬姓悅服第六葉裏末行

今本尚書武成篇大賁于四海萬姓悅服第六葉裏末行

案するに此の注「万」に作る者李善の舊なるに似たり。唐初尚書「萬」を「万」に作る。

主上欽明

注 尚書曰放勳欽明第七葉裏末行

今本尚書堯典篇曰放勳欽明文思安安

案するに既に第三三七頁に見ゆ。

方今百僚濟濟第五葉裏末行

注 尚書曰百僚師師第七葉裏末行

今本尚書皋陶謬篇百僚師師

案するに足利本四部書刊本澤野本此の注「僚」を「寮」に作り李善の舊を採するに似たり。攷既に第九六頁に見ゆ。

注 又曰俊乂杜官

今本尚書皋陶謬篇文同

案するに既に第二一九頁に出づ。

胡昭據曰く「依注引尚書俊乂杜官則正文當作俊」文選李善注ハ俊ハ第五葉裏末行然れども李善注の舊未だ定むべからざるを以て(第二四九頁参照)正文安に改むべからざるなり。

士平奔邁其會如林

注 尚書曰受率其旅若林第八葉裏末行

今本尚書武成篇受率其旅若林會于牧野第七葉裏末行

案するに正文既に「其會」の字有れば注當に「會于牧野」の句を連引すべきに似たり。

又案するに此の注詩大雅大明「殷商之旅其會如林」文選李善注ハ會ハ第五葉裏末行を援に作る又陸心源讀史記卷十六經異

傳文跋に「毛傳亦會を讀んで會」と爲せしことを攷し其の説甚だ理有りを引くを以て長と爲す。

禮記檀弓文選正文を讀味するに其會の字禮記の訓に似しを是と爲す。

丘布範 與陳伯之書

外受流言

注尚書曰管叔乃流言於國第一卷表
案するに既に第三〇七頁に出つ。

宋鮑洸血於友于

注尚書曰孝平惟孝友于兄弟第十一卷表

今本尚書君陳篇惟孝友于兄弟第十一卷表

案するに中原家本尚書京都府立所蔵足利古本尚書足利學校蔵書内野本尚書並に「惟

孝于孝」に作る。内野本孝于孝に作る。

山井鼎曰く「惟孝友于兄弟惟孝下有孝二字作惟孝于孝友于兄弟謹按論語引之足

利所藏古本論語及皇侃義疏本作惟孝于孝足利本論語作孝于惟孝浦田閑居賦作孝于

惟孝于于通用固無意義世所引之文少有異耳據斯數者今本尚書脫孝平二字明矣至宋

嘉祐論語云孝平爲句則妄之甚也放文也。攷文の説尤に是なり。此の注引く所以

て其の明證と爲すべし。「惟孝于孝」に作る者は蓋し轉寫誤りて倒せしのみ例引

之に對し其の原二有るに非ず。尚書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

國志據一傳伯孔代論語を割裂せりとの説を爲してより尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

（論語）王鳴盛尚書等尙古文を改むる者多く其の妄を掲げて復た今本尚書奪文有るを

知らず。乃ち乃ちのて尙古文を辨すの徒可は卻つて論語引く所の書烟多錯句有らむ

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

と疑ひ尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證 尙書本文證

裏引いて皆「余」に作る。後漢書注引く所の尚書集解今本尚書と文に異なり所略しとす。此れに據りて之を推すに古或は「余」の字のみを用ふるが若しくは「予」「余」互に用ふるの尚書有りたるかと疑はる。
左傳多く余の字を用ひ亦同「予」の字ともあり。若し余らは此の注「余」の字亦本より「予」に作らざりしなり。

民怨顯重

注 孔安國尚書傳曰民怨_{左より第四行}齊怨_{初葉表}

今本尚書盤庚篇序民_{初葉表}齊怨_{初葉表}案するに此の注「孔安國尚書傳」の六字當に「尚書」の二字に作るべし。各本皆誤る。

青州涉濟漂

注 尚書曰浮于濟漂_{初葉表}達于河_{第五行}

今本尚書禹貢篇_{初葉表}文同し。

人為讎敵

注 尚書曰父師曰_{初葉表}敵讎_{初葉表}弗_{初葉表}忘_{初葉表}

今本尚書微子篇父師若曰_{初葉表}讎_{初葉表}不_{初葉表}忘_{初葉表}

案するに此の注「弗」の字岩崎本小島博士本羅氏敦煌本雲窗叢刻本足利本内野本尚書と合す。「弗」「不」の攷既に第一・二頁に見ゆ。

梁韋鉅曰く案注云上以讐而敵下則下必為敵以讐上_{案するに據是敵讐與讐敵解較異}梁韋鉅曰く案注云上以讐而敵下則下必為敵以讐上_{案するに據是敵讐與讐敵解較異}梁韋鉅曰く案注云上以讐而敵下則下必為敵以讐上_{案するに據是敵讐與讐敵解較異}

孔傳に曰く「又聖行暴虐自己敵讎不解忌」と。李善偽孔氏に據るが故に此の引有るなり。但文選正文「人為讎敵」の「為」字を説するに此の注微子「小民方輿相為讎讎」を引くを以て較長と爲す。

聖朝無一介之輔

注 尚書秦穆公曰如有一介臣_{初葉表}

案するに既に第四〇〇頁に出づ。

不可助哉

注 尚書曰_{初葉表}助哉_{初葉表}夫子_{初葉表}

今本尚書秦穆公篇中助哉_{初葉表}夫子_{初葉表}

又牧誓篇助哉_{初葉表}夫子_{初葉表}

案するに卷四十七趙充國傳注引く所の尚書に據れば此の注「哉」の字當に「才」に作るべきに似たり。

陳孔璋 檄吳將校部曲文

洞庭無三苗之墟

注 尚書帝曰召禹惟時有苗弗率汝祖征三句苗民逆命帝乃誕敷文德七句有苗格_{初七葉表}

案注云(卷八十八第四葉表)足利本(四部平家野本)「是」の字に作り傳注本「是」を「是」に作る。

今本尚書大禹謨篇帝曰咨禹惟時有苗弗率汝但征又三句苗民逆命又帝乃誕敷文德備
 七句有苗格卷四
 案するに此の注「サ」に作る者是なり。攷既に第三三三頁に見ゆ。
 集注本此の注「禹」に作るは李善の舊を採するなり。
 西京賦注禹「篠簜既敷」を引いて「敷」亦「禹」に作る。「敷」「禹」の攷既に第一一五
 頁に詳なり。

雲散原燎

注尚書曰若火之燎于原第八葉表
 案するに既に第二九三頁に出づ。

牧野之戰孟津之退也

注尚書序曰武王與受戰於牧野第九葉表

今本尚書牧誓篇序武王附句與受戰于牧野卷十一

案するに初學記卷九王附句此の經を引いて「於」に作り此の注と合す。「于」「於」の攷既に
 第九七頁に見ゆ。

注又曰惟十有一年武王伐殷第六行

案するに既に第四〇三頁に出づ。

元亞大寇咄咄第九葉表

注尚書成王曰元亞大寇第三行

今本尚書康誥篇序成王既伐管叔蔡叔附句作康誥

又經王曰封元亞大寇卷十四

莫不翹足引領望風響應

注尚書曰惟影響第十葉表

案するに既に第二七〇頁に出づ。

是故伊尹去夏不為德

注尚書曰伊尹去亳適夏既醜有夏復歸于亳第十一葉表

今本尚書汝鳩汝方卷七文同じ。

皆宜膺受多福保第十葉表

注尚書曰永膺多福第十一葉表

案するに既に第一八八頁に出づ。

注又曰保第十葉表

今本尚書帝王之誥篇卷十九文同じ。

案するに君受篇「正威又王家」卷五十六楊仲武誥注引いて「保」に作る。是れ李

見る所の尚書君受篇亦「保又王家」の文有るなり。此の注引く所何篇に據れるか

名昭堂構

注尚書曰若考作室既底法厥子乃弗肯堂矧肯構第一葉

是利本四部本「底」
 と「底」に作る。

今本尚書大誥篇若考作室既底。法厥子乃弗尚室則肯構。卷十三 第廿二葉

案するに「底」「底」の致既に第 頁に見ゆ。

皆我國家良寶利器

注尚書曰所寶惟賢則通人安。第十二葉 第三行

案するに既に第一三九頁に出づ。

王石俱碎

注尚書曰火災崑岡王石俱焚。第十二葉 第五行

今本尚書胤征篇火災崑岡王石俱焚。第十二葉 第七行

案するに説文「崑」「崑」皆無し。與本王篇卷十二 第廿二葉

を引き王氏三傳本切謂上平慧琳音義卷八十六 第五頁は「孔注尚書云崑山出玉也」を引いて「崑」

に作る。段王叔禹稱釋文に據りて説を立て崑嶠の崑本山に从はす云云綴

王亦企足釋丘無釋山に作るは蓋の崑崙本山に从はざることを證す。説文新附 然らば則

ち胤征偽古文なりと雖も本古に从ひて「崑」に作りしを後人山を加へて或は上形下

置の「崑」に作り或は左形右聲の「崑」に作りしかと疑はる。後人蓋は人山に或は示に从ふ。

卷四十七三國名臣序贊注尚書此の文を引いて本或は「岡」を「崗」に作る。致彼の條

に見ゆ。

鍾士李 檄蜀文

造我區夏

注尚書曰文王用筆造我區夏。第十三葉 第三行

案するに既に第三十四頁に出づ。

奕世重光

注尚書曰昔我君文王武王宣重光。第十二葉 第五行

今本尚書顧命篇昔君文王武王宣重光。第十二葉 第五行

案するに致既に第二及四頁に見ゆ。

今主上聖德欽明

注尚書曰放勳欽明。第十二葉 第八行

今本尚書堯典篇曰放勳欽明文思安安

案するに致既に第三九一頁に出づ。

萬邦協和

注尚書曰百姓昭明協和萬邦。第十二葉 第八行

今本尚書堯典篇百姓昭明協和萬邦

案するに卷卅七曹子建求通親親表注此の經文を引いて「協」を「叶」に作り「萬」を「万」

に作る。李善の舊を存するに似たり。攷既に彼の條に見ゆ。

隸行天罰

注 尚書曰予惟行天之罰。行天之罰予惟。

今本尚書曰予惟。行天之罰予惟。

又攷舊篇予惟。行天之罰予惟。

案するに此の注恐らくは甘藷篇に據りたるなり。

此の注「隸」の字九條家本内野本敦煌本尚書と合す。皮錫瑞此の注引く所を以て蓋

し三家の異文なりと爲せる今攷證卷の非なること以て知るべし。

卷五十宦者傳論注亦尚書此の經を引いて「恭」に作れるは蓋し漢人の校改を經た

る者なり。

故虞舜舞干戚而服有苗

注 尚書曰帝乃誕敷文德舜干羽于兩階七旬有苗格。

今本尚書大禹謨篇帝乃誕敷文德舜干羽于兩階七旬有苗格。

案するに此の注「敷」に作るべきに似たり。攷既に第四十五頁に見ゆ。

周武有敢財發廢表閭之義

注 尚書曰武成篇式商容閭散鹿臺之財發鉅橋之粟。

今本尚書武成篇式商容閭散鹿臺之財發鉅橋之粟武成篇。

案するに此の注集注本武成篇に在りては「容」の下「之」の字無く今本尚書と合す。

尚書大傳(大戴)史記(周本紀)淮南子(主術訓)通雅訓
卷九訓(通雅書)皆表商容之閭に作りて之の字有り。

尚書の文を攷ぶるに「式商容閭」と其の上句「封比干墓」とは其の文例本より同

じかりしならむ。然るに馬注註「封比干之墓」を引いて集注本及び今の板本

皆「之」の字有り。然らば此の注引く所の「式商容之閭」當に亦「之」の字有るべき

に似たり。集注本此の注恐らくは「之」の字を奪せるならむ。此の注「巨喬」に作る若是なり。

武内博士本尚書内野本尚書正に「巨喬」に作る武内博士。

及北史儒林傳傳並に「發巨橋之粟」に作り三國志魏書亦「巨橋之粟」の

文有れば尚書容に本是れ「巨喬」に作りしなるべし。

今攷西華解衛命

注 尚書曰奉辭代罪。

今本尚書大禹謨篇禹乃會稽石室師曰屬司。

案するに攷既に第一七六頁に出づ。

司馬長卿 難蜀父老

黎民懼焉

注 尚書曰黎民於變時雍。

案するに既に第一四〇頁に出づ。

召渠闢味

注 尚書曰甲子昧爽。第廿六葉表
 今本尚書牧誓篇時。甲子昧爽。王朝至于商郊。牧野乃誓。第廿四葉裏
 又武成篇甲子昧爽。受率其旅若林。魯于牧野。第廿三葉裏
 案するに此の注尚書を引くの下又孔安國傳を引き其の傳又今本尚書牧誓の傳と相近きを以て此の尚書亦牧誓の文を節引せるならむ。
 武内博士本・神田本尚書「爽」に作りて此の注と同じ。説文に據れば爽明也。从収从大。齊篆文爽。第廿三葉裏
 切韻は則ち「爽」を出して「爽」を出さず。王氏第三傳本 古「爽」の字の用ひられたるを知るべし。

卷第四十五

東方曼倩 荅客難

無求備於一人之善也。
 注 尚書曰與人弗求備檢身若不及。第廿三葉裏
 今本尚書伊訓篇與人弗求備檢身若不及。第廿三葉裏
 案するに足利古本・内野本尚書並に二「不」の字皆「弗」に作る。此の注敦煌殘篇「弗求」

「弗」及「不」に作る者李善の舊を存するに似たり。「弗」「不」の攷既に第一。七頁に見ゆ。

楊子雲 解嘲

上世之士人編人紀。
 注 尚書曰先王肇修人紀。第廿四葉裏
 今本尚書伊訓篇先王肇修人紀。第廿四葉裏
 案するに正文「人紀人紀」の語と注引尚書「人紀」の語とは其意小異。
 案家自以爲稷契人人自以爲皐陶。敦煌殘卷
 注 尚書帝曰兪咨禹汝平水土惟時懋哉。禹讓于稷契。皐陶。第廿五葉裏
 今本尚書舜典篇帝曰兪咨禹汝平水土惟時懋哉。禹持稽首讓于稷契。皐陶。第廿五葉裏
 案するに此の注「稽」に作る者是なり。敦煌本釋文亦「稽才」を出し其堂書鈔第廿五葉裏
 「惟時懋哉」を引いて亦正に「稽」に作る。
 卷九楊子雲長楊賦注伊訓「有夏先后方懋厥德」を引いて「懋」亦「稽」に作れば李善見る所の尚書本より「稽」の字を用ひたるに似たり。「懋」「稽」の攷既に第一。七頁に見ゆ。
 此の注「皐各錄」に作る者是なり。「皐」「皐」の攷既に第一。七頁に見え「各錄」「皐陶」の攷は既に第一。八七頁に見ゆ。

王鳴盛今本尚書「暨皋陶」に作れるに何して是れ晉人の改むる所なりと謂ひ尚書後漢書「段王叔は蕭漢書音義「泉尚書音巨並反」と云へるに據りて六朝の尚書「泉」に作れることを證せしと雖も段王叔は蕭漢書音義未だ唐初本尚「泉」に作るの塙證を據ずして已めり。若し先儒を九原に起して此の注引く所を視すを得ば其の歡果して何如ぞや。

呂刑罪狀注尚書呂命序曰穆王訓夏贖刑第七葉表（作呂刑）

今本尚書呂刑篇序呂命穆王訓夏贖刑第十九葉表案するに北堂書鈔呂刑を引いて多く呂命に作る。禮記五等に見ゆ孔廣國曰「本鈔呂刑每作呂命」禮記五等に見ゆ隋唐の時の尚書呂命に作る本有りたるに似たり。此の注本より「呂命序」に作りしか抑々本「尚書序曰呂命穆王云々」に作れるを轉寫誤り例せるか。疑うて決する能はず。

班孟堅 荅賓戲

況吉士而是暫半

注尚書曰其惟吉士第九葉表今本尚書曰命簡第十五葉表文同し。

厥宗亦既上

注尚書曰弗德罔大陟厥宗第九葉表今本尚書曰弗德罔大陟厥宗第九葉表案するに足利古本内野本尚書正に「弗德」に作る。此の注「弗」に作る者定なり。「不」

「弗」の攷既に第一。七頁に見ゆ。
沐浴玄德
注尚書曰玄德升聞第十葉表案するに既に第一。七頁に出づ。

昔者咎繇謫虞其子訪周

注尚書曰咎繇矢厥謫第五行足利本四部本内野本六部本謫を諫に作る。

今本尚書大禹謫篇序皇陶矢厥謫

案するに攷既に第一。五頁に見ゆ。
注又曰武王勝殷以箕子歸第十二葉表今本尚書洪範篇序武王勝殷以箕子歸第十二葉表注又曰王訪于箕子

今本尚書洪範篇第十二葉表文同し。

殷說夢發於傅巖

注尚書曰高宗夢得說使百工營求諸傅巖第十葉表

今本尚書說命篇序高宗夢得說使百工營求諸野得諸傅巖初葉表

卷第四十六

陸士衡 豪士賦序

是以君藥難歟不悅公旦之舉

注尚書序曰召公爲保周公爲師相成王爲左右召公不悅初時

今本尚書君奭篇序召公爲保周公爲師相成王爲左右召公不悅

案するに此の注兩「召」の字疑示らくは當に「邵」に作るべし。卷卅五冊魏公九錫文

注引く所正に「邵」に作る。致彼の條に見ゆ。

此の注「悦」の字證無し。

今本尚書を攷ふるに悦懌の字「悦」に作る者三見し

に一見するのみ。

「悦」の字說文に見えず。

王篇

小學重訂本正解

切韻本十五

乃ち此の字を收む。

鄭說

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

悦

以前の經典正に「悦」の字を用ひたる者有るを知るなり。徐鉉新修字義に悦經典只作悅と讀へるは余所本説文卷末に附す大體の論のみ然らば則ち此の序亦唐初本尚書「悦」に作ることに此の注の如き者有りたるやも未だ知るべからず。

而咸王不遺嫌各於懷

注尚書曰武王既喪管叔及羣弟。流言於國曰公將不利於孺子。第二篇表

今本尚書金縢篇武王既喪管叔及其羣弟乃流言於國曰公將不利於孺子。卷十三

案するに此の注「羣」の上「其」の字無く「未」の下「乃」の字無きは蓋し節去せしならむ。但史記宋微子世家「乃」の字無し。或は唐初尚書尚此の字無かりしか。

「不利」卷十五思玄賦注は「弗利」に作りて李の舊を好す。此の注本當に同じかるべし。

婁乎光于四表

注尚書曰光被四表。第二篇表

案するに既に第三六九頁に出づ。

登帝大位。卷八。注尚書伊尹曰天位艱哉。第二篇表

案するに既に第一八一頁に出づ。

伊尹抱明允以豐敦

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐。第二篇表

顏延年 三月三日曲水詩序

皇上以觀文承歷

注尚書曰觀哲文明。第四篇表

今本尚書舜典篇觀哲文明。初篇表

案するに胡克家攷異に曰く「注觀哲文明茶陵本作觀與此同案依茶陵本似善正文作清高靈光殿賦觀哲文明王元懷序曾哲在射東京賦曾哲在覽善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

善注皆引當作聖明作哲然則曾與曾較有區別也足五臣改清爲觀也註注云觀聖」と。

既に第 三〇 頁に詳なり。
 足利本李注引く所の此の經或は「康」に作り或は「章」に作り、又「彰」に作る、疑ふ
 らくは本皆「康」に作りしを後人改むる有りて此の不齊を致せるなりむ。
 六莖九成之曲
 注 尚書龍詔九成圖皇來儀 第六卷表 第八行表
 案するに既に第一五九頁に出づ。

王元長 三月三日 曲水詩序

是以得一幸蒙
 注 尚書曰惟辟奉天 第六卷表 末行
 今本尚書泰誓篇中 卷十一 文同じ。
 誕命建家
 注 尚書曰我文考文王誕膺天命 第七卷表 末行
 今本尚書武成篇我文考文王克成厥勳誕膺天命 卷十二表 末行
 注 又曰永建乃家
 案するに既に第一二四頁に出づ。
 雷雨通變

注 尚書曰納于大麓烈風雷雨不迷 第七卷表 末行
 今本尚書舜典篇納于大麓烈風雷雨弗迷 卷三 第二表
 案するに卷五十六封燕然山銘注卷五十九齊故安陸昭王碑文注並に尚書此の經を引
 いて「弗迷」に作れば此の注「不」の字轉寫者等に改めしなるべし。
 數文化以柔遠
 注 尚書曰帝乃誕敷文德 第七卷表 末行
 今本尚書大禹謨篇帝乃誕敷文德 卷四 第二表
 案するに此の注「敷」の字當に「敷」に作るべきに似たり。攷、既に第一四一頁に見ゆ。

注 尚書曰柔遠能通 第七卷表 末行
 今本尚書舜典篇柔遠能通 卷三 第二表
 案するに此の注板本は皆尚書を引く、集注本は則ち毛詩篇に引く、又案するに集注本此の
 正文下の鈔乃ち尚書の「柔遠能通」を引けば李善は本毛詩を引いて尚書を引かざりしかと疑はる。
 吳蜀心營
 注 尚書曰文王自朝至于日中吳不與
 今本尚書無逸篇文王自朝至于日中吳不與 第八卷表 末行
 案するに攷既に第一五九頁に詳なり。
 今本尚書於春冰 第九卷表 末行
 注 尚書曰若蹈虎尾涉於春冰 第三行
 案注本足利本四部本、養野本「冰」を「氷」に作る。

今本尚書君牙篇若鉅虎尾涉于啓氷卷十九
案するに「于」「於」の攷、既に第十一頁に出づ。

「氷」の字李善の善惡らくは「水」若時本尚書此の字に作る、説文に作る、後人轉寫の際僅に隨ひて、或は「氷」に作り或は「水」に作りしなるべし、王氏三種本切韻、刊謬補闕切韻並に「氷」有りて「氷」無く廣韻は則ち「氷」を收めて「氷」を收めず。

礎后當哲在躬

注尚書曰當作聖明作哲第八卷表

今本尚書洪範論明作哲應作謀當作聖卷十二

案するに攷既に第九頁に見ゆ。

入虎闥而誦青

注尚書曰受典榮敬肅子第八卷表

案するに攷既に第九頁に詳なり。

又案するに、集注本卷九下此の注「善」を「善録」に作り、敦煌本釋文殘卷「善」に作れると相逆し。説文に據れば此の字當に「善」に作るべし、「善録」「善」皆「善」の轉變なるべし、干祿字書「善録」「善」を出し、「上俗中通下正」と注す、唐初本尚書恐らくは正體を用ひざりしならむ。

來は允克施之聖

注尚書曰君陳克施有政第八卷表
集注本卷九下第十一頁表「日」の字「君陳」の下に在り。

今本尚書君陳篇君陳若克施有政第十卷表
稽古之政如彼

注尚書曰若稽古帝堯第八卷表

案するに、胡克家攷異に曰く「若」上當有「帝」字各本皆誤」と、胡說是なり、李善據る所の尚書「堯若」に作りて「曰若」に作るに似たり、攷既に第九頁に見ゆ。

日夕于中甸

注尚書曰五百里甸服第九卷表
集注本卷九下第十四卷表此の八字を「中甸服」に引く。

案するに既に第九頁に出づ。

撫事掩抱

注尚書曰無或擾第九卷表
集注本卷九下第七卷表「撫效」を「冠撫」に作り、四部本淺野本「或擾」を「股冠撫」に作る。

今本尚書費誓篇無敢冠撫垣撫結撫者

案するに、今の尚書「無或擾效」の文無し、梁皇詔謂示此れ當に即ち費誓「無敢冠撫」の訛なるべしと、前卷第八梁說是なり、集注本「無或冠撫」に作り、四部本淺野本「無

敢冠撫」に作る者以て證すべし。

胡刻本「足利本」「無或擾效」に作る者は蓋し注本「無或冠撫」に作りて、或は呂刑「攷攷矯虔」今の尚書「費誓」に作れども唐初本は「攷」に作りしことを前記せし、轉寫者誤りて相混淆せしなるべし、「尚書」云々「費誓」に引く、
今本尚書は「無敢冠撫」に作れるに、文選集注本引く所は正に「無或冠撫」に作り、又胡

又用易繫辭「剝木爲楫」の釋文、楫本又作櫂^[第廿九]と言ひ、北堂書鈔卷百十七舟部上及び應永寧錄女
又作と。毛詩衛風竹竿、檣楫松舟^[第卅一]の釋文、楫本又作櫂^[第卅一]と言ひ、北堂書鈔卷百十七舟部上詩經篇、孟徒
合す。楫之を引き、俱に亦「櫂」に作る、皆是れ唐已前經典「櫂」に作る者有るの明徴なり。

玩好絕於耳目。

櫛之を引き、俱に亦「櫛」に作る。皆是れ唐已前經典「櫛」に作る者有るの明徴なり。

注
尚書曰弗役

注
尚書曰弗役耳目則百度惟貞
第十八章表
第八行

今本尚書旅獒篇不役耳目百度惟貞

案するに、茲既に第一。七頁に見ゆ

又案するに「目」下「則」の字、微無し

鄭璞踰於周寧

尚書曰弘璧琬琰杜西序兼二行

果するに既に第一六七頁に出つ

卷第四十七

王子淵 聖主得賢臣頌

明明在朝

尚書曰厥后惟明注。第三葉表
左。成。弟。四。

今本尚書胤征篇

櫻繡列布

注又曰則以穆穆在乃位

今本尚書多方篇亦則以穆穆在乃位

雍容垂拱

尚書曰垂拱而天下治

案するに、既に第一五九頁に出つ

楊子雲 趙充國頌

鬼方賓服罔有不庭

注 尚書曰 惟周王四征弗庭 第四葉表 左より第三行

今本尚書周官篇惟周王撫萬邦巡侯甸四征弗庭綏厥兆民 卷二十八 葉裏
案するに、此の正文を散するに、其意鬼方賓服して來庭せざる無きを謂ふ。文選鈔(集注)葉表及び呂向の注、而して周官の「弗庭」は傳釋して「四面征討諸侯之不庭者」と謂へは其の解文選正文の用例と相合せず。然らば李善此の注周官を引くは誤に於て、未だ安からず。左氏隱公十年傳「以王命討不庭」在注下文上を引くの較、長爲るに如かざるなり。

趙起桓桓

注 尚書曰 武王曰 勗哉 夫子尚桓桓 第四葉 集注本「武」を「才」に作る。

今本尚書牧誓篇序武王戎車三百兩云云、又經王曰 勗哉 夫子尚桓桓 卷十一 葉表

案するに「武王」の攷既に弟 頁に見ゆ。 内野本尚書 此の注集注本 卷九十三 葉表 になりては「武」に作り、神田本尚書と合す。「才」故の攷既に弟 四十八 頁に見ゆ。

史孝山 出師頌

憲章百揆

注 尚書曰 納于百揆 第五葉表 第二行

案するに正文用ふる所の「百揆」は百度の意にして官名に非ず。攷既に弟 三八四 頁に見ゆ。

昔は孟津 惟師尚父

注 尚書曰 武王伐殷 師渡孟津 第五葉表 集注本「尚書」の下「度」の字有り、「渡」を「度」に作る。足利本・四部本・足利本・安本亦「度」に作る。

今本尚書泰誓篇序惟十有一年武王伐殷一月戊午師渡孟津 卷十一 葉表

案するに、此の注引く所集注本以下の五本皆「度」に作れば、たゞらくは李善の舊余りしならむ。偏孔氏本泰誓序「度」に作る者、他に證無しと雖も、漢書律曆志下(第廿一葉表)書序を引いて正に「度」に作れば、偏孔氏亦其の序は本古に从ひて「度」に作りしなるべし。

方言過度謂之涉 注猶今云過度 四部篇刊本 漢書當說傳是猶度江河亡維福 列傳 以上二條集解說文假借義 卷六既に引いて文少し異なる。 呂氏春秋大人度之絶江 卷十異言 此れ皆古「度」を以て清渡の字と爲せる證なり。

幸旄一麾

注 尚書曰 王右秉白旄以麾 第五葉表 第四行

今本尚書牧誓篇序王右杖黃鉞石秉白旄 卷十一 葉表

蒼生更始

注 尚書曰 至于海隅蒼生 第五葉表 第五行

今本尚書益稷篇 第五 文同。

案するに皮錫瑞曰く「文選史岑出師頌曰蒼生更始李善注云蒼生黔首也是以民爲蒼生見於東漢今文家說不始於蒼人也」今文攷證卷二。李善上に「蒼生猶黔首也」と注し其の下尚書を引ける者は須用ふる所の蒼生の語は民を以て蒼蒼然たる草木に譬へたることを明かにせしのみ。又すしも史岑尚書の「蒼生を解して黔首と爲せりと謂ふには非ざるなり。

然らば則ち李善此の頌に注して尚書の蒼生を引けるの故を以て即ち東漢今文家の説是くの如しとは斷すべからざるに似たり。

故土上郡

注尚書曰建邦啟土也 第五 葉裏 案するに既に第一二五頁に出づ。

陸士衡 漢高祖功臣頌

肇獻天祿

注尚書曰天祿永終 第六 葉裏 案するに既に第一六一頁に出づ。

萬邦宅心駸民效足

注尚書曰宅心知訓 第六 葉裏 案するに既に第二五九頁に出づ。

注又曰俊民用章 第六 葉裏 案するに既に第二五九頁に出づ。案するに此の注「駿」に作り「康」に作る者李善の舊なるに似たり。攷既に第三〇頁に詳なり。

胡克家曰く「尚書本作駿善屬引爲俊者駿與俊同己且奉答内兄希叔詩無妨其引作俊世凡善引書有如此者不能以畫一求之」攷異表八。今本文選に據りて之を攷ふれば胡說理有るに似たるも古鈔本に照らせし其の説すしも是ならざるを知る。賴延年曲水詩序注及び此の注集注本皆正に「駿」に作りて而も奉答内兄希叔詩の後に

なる是れ其の證なり。

通德振民

注尚書曰外綏通德 第七 葉裏 案するに既に第二二五頁に出づ。

格人乃謝

注尚書曰格人元龜罔敢知吉 第八 葉裏 今本尚書西伯戡黎篇 第十二 葉裏 文同。

念功推德

注 尚書曰惟帝念功 第九葉表 四部本本野本

案するに既に第 三八二 頁に出づ。

宣力王室

注 尚書帝曰余欲宣力 第十葉裏

今本尚書益稷篇帝曰予欲宣力四方

案するに此の注「力」の下集注本 第九十三 第五葉裏 に在りては「四方」の二字有り是なり。各

本皆奪す。
凡そ吾子の「予」今本尚書皆「子」に作りて「余」に作らず。然るに李善此の注及び卷
四十四陳孔璋爲袁紹徵豫州文注卷五十八王仲寶褚淵碑文注尚書を引いて「余」に作
り後漢書崔寔傳注楷更傳注亦尚書を引いて「余」に作り又嵇嶠本尚書靈寶經刻本尚
書開余の字を用ふ。詳に見ゆ。然らば則ち唐初本尚書或は「余」の字を用ふる者有
りしかと疑はる。

進謁嘉謀

注 尚書曰爾有嘉謀嘉猷 第十一葉裏 集注本尚書

案するに既に第 二五五 頁に出づ。

審法後昆

注 尚書曰垂裕後昆 第十一葉裏

案するに既に第 二六三 頁に出づ。

朕同師錫

注 尚書師錫帝曰有勳在下曰虞 第十二葉表 集注本(卷九十三)第十廿三葉裏(虞)に作る。

今本尚書堯典篇師錫帝曰勳在下曰虞 卷二四葉表 足利本、四部本、澤野本此の注を五段に割く。

案するに集注本「虞」を「允」に作る是なり。「允」は即ち「允」の字の讀。敦煌本堯典

釋文曰允(允)を出し内野本尚書亦「允」に作る。比自尚書古本「允」に作るの明證なり。

凡そ今本尚書の「虞」の字古多く「允」に作りしに似たり。西伯歌黎「不虞天性」嵇嶠

本羅氏敦煌本雲窗本俱に「虞」を「允」に作り畢命「四方無虞」嵇嶠本「允」に作る。

又「虞書足利古本尚書」延「允」に作り思らく尚書中の「虞」の字元亨利本多く允即ち

「允」の字説文に見えず。然れども左氏隱公元年先經傳正義 卷廿二葉表 に「石經

古文虞作允」と言へば石經當に據る所有るべし。章炳麟「允」は古文の「目」故に「允」

を釋りて「虞」と爲すの説有り。詳に其の著小學答問 章氏書 及び文始 五葉裏 に

見ゆ。章說从ふべきに似たり。

文武四充

注 尚書曰光被四表 第十二葉裏 左より第三行

案するに既に第 二六九 頁に出づ。

夏侯孝若 東方朔畫贊

高明克柔

尚書曰沈潛剛克高明柔克集注本則克の

今本尚書洪範篇沈潛剛克高明柔克卷十三

案するに段玉裁曰く「後漢書鄭康成注則克之政重意洪範之法注引尚書洪範曰

高明柔克」集注本卷十三と。集注本「則」の字段玉裁下段注に據れば則は初め

が李賢引く所と合す。集注本「則」の字段玉裁下段注に據れば則は初め

中釋文云「本作則」集注本卷十三と。集注本「則」の字段玉裁下段注に據れば則は初め

洪範此の經の沈潛高明傳は解して地と天と爲し漢今文家は則ち人の資性と解す。

皮氏校語云「杜預左氏傳注文公五年顏師古漢書注述記並に今文家の説に从へるに似た

り。今此の贊の正文を攷ふるに其の意亦今文の義と合す。而して李善之に注して

此の經を引く固より惟贊の據る所を證せしめにて其の尚書を解するに今文説を

以てせしには非ざるべし。

聊以從容

尚書曰寬而有制從容以和集注本則寬の

今本尚書君陳篇卷十一葉表文同し

天秩有禮神監孔明

注尚書各篇曰天秩有禮自我五禮五庸集注本則天の

今本尚書皋陶謨篇卷四葉表天秩有禮自我五禮有庸哉

案するに李善據る所の尚書「各」に作りて「皋陶」に作らず。致既に第

頁に見ゆ。

此の注「五庸」に作り集注本、足利本、四部書刊本、茶陵本皆同し。惟景本、今本尚書と異なる。阮元

尚書校勘記に曰く「古本有作五段疏云上言五禮此言五庸疑孔氏所見本亦作五庸與

馬本同」集注本卷四と。然らば李善據る所の孔氏本足利本と合す。内野本尚書亦正に

「五庸」に作る。此れ皆偽孔氏本本「五庸」に作れるの明證と爲すべし。乃ち知る江聲

尚書集注音疏「五庸偽孔本本作有庸」集注本卷四と謂へるの非なることを。

胡克家文選攷異に曰く「袁本下五作有茶陵本作五與此本同案釋文云有庸馬本作五

庸袁依東晉古文誤有所改」集注本卷四と。即ち胡氏は東晉の古文「有庸」に作りて「五

庸」に作らざれば李善此の注馬本に據れりと爲すに似たり。胡說亦謬る。从ふべ

からざるなり。

原本尚書「五庸」に作りしか抑「有庸」に作りしか今之を知るに由無しと雖も後「五

有」の差生せる所以は古寫本「五」を「又」に作り「有」を「又」に作り兩字形相似て其の一

誤れるに因るなるべし。

此の注「故」の字集注本集注本卷四上に在りては「才」に作る。蓋し李善の舊をばする

十四「尚書」十「唐」並に「尚」を以て俗字と爲すは
是れ字と義文に據りて意雖正に在るなり。
但李善引く所の尚書卷四十四卷五十四に在りては皆「尚」に作り此の注に在りては
各本「尚」「岡」相同じからざるを以て其の舊據に定むべからざるなり。

思獻元首擬伊同恥

注尚書曰昔先正保衡作我先王乃曰予弗克俾厥后惟克念其心愧恥若撻于市弟十九葉裏

集注本「予」を「思」に作る（尚書注疏本傳に説る）

足利本「四部本」等野本「六家本」恥を「恥」に作る。

今本尚書說命篇下昔先正保衡作我先王乃曰予弗克俾厥后惟克念其心愧恥若撻于市

卷十

案するに、攷既に弟三十八頁に見ゆ。

嘉謀辭庭

注尚書曰爾有嘉謀弟十又葉裏

案するに既に弟三十九頁に出づ。
集注本「爾」を「余」に作り「謀」
の下「嘉謀」の二字有り。

卷第四十八

司馬長卿 封禪文

競競翼翼

注尚書曰競競翼翼第四葉裏

今本尚書畢陶諱篇弟廿二葉裏 文同じ。

楊子雲 劇秦美新

作民父母爲天下主

注尚書曰天子作民父母第四葉裏

案するに既に弟二四七頁に出づ。

注又曰爲天下君

今本尚書大禹謨篇卷四 文同じ。

競競乎不可黜己

注尚書曰競競翼翼第五葉裏

今本尚書畢陶諱篇左より第二行 文同じ。

故若古者稱堯舜

注 尚書曰若稽古帝堯 第六表

案するに此の注「若」の上當に「堯」の字有るべきに似たり。李善補る所の尚書「堯」に作りて「若」に作らず。致既に第一。二。三。頁に見ゆ。

注 又云若稽古帝舜

今本尚書舜典篇曰若稽古帝舜 初葉裏

案するに此の注「若」の上當に「堯」若しくは「舜」の字有るべきに似たり。

陸德明尚書曲禮文「曰若此古帝舜曰重華叶帝」の十二字を標出し、注に曰く「此十二字是姚方典所上孔傳本」と。致既に今李善「曰若稽古帝舜」を引け、其の尚書舜典

は此の十二字有りし本なるを知るなり。

注 威侮者陷桀紂

尚書曰威侮五行 第六表

案するに卷五十六石闕銘「威侮五行」の注亦此の經を引いて文此の注と同じ。

於是乃奉若天命

尚書曰明王奉若天命 第六表 案するに尚書「明王奉若天命」に作る者微無し。胡克家云ふ尤本此の注「命」の字

は「道」の誤なりと。致既に八。果して然らば此の注「說命」の「明王奉若天道」を引くも

より「仲虺之誥」の「奉若天命」を引いて正文と合せしむるの安なるに若かず。其れ

胡刻本「命」の字誤れるが將た李善見る所の說命は本より「命」に作りて此の正文と

合せしか。遽かに定むべからざるなり。

注 尚書曰勤施於四方

案するに此の注「於」の字微無し。然れども必ずしも轉寫改むる所と爲すべからず。

致既に前に見ゆ。

此の注引く所「修攬」の下に句す。是れ李善此の經を讀んで「道衡」の二字を下句に

屬せしめしか。致既に今尚書經說及に曰く「大傳引此經以句作攬攬爲同義攬字引作衡不却

惟節引せしのみなるか今明かにする能はず。卷廿五無體公九錫文注引く所は則ち

「弗述文武勤敬」まで句と爲せるに似たり。

段玉裁謂へらく凡そ今文尚書は「苟」の字を用ひ凡そ古文尚書は「方」の字を用ひ。

今尚書此の經「苟」に作るは衡包の改むる所。此の經の傳亦當に「方」方末爲敬敬

之通」と言ふべきに淺人一「四」の字を増し又下の「方」の字を改めて「苟」と爲し以

て「四方苟來」に作る皆非なり。李善劇秦美新に注して此の經を引き、既に「苟」に作

るは安んぞ淺人の改むる所に非ざるを知らむやと。致既に前に見ゆ。

今楊雄の正文正に「菊」作「稷」に作るは是れ今文尚書に讀めるなり。此の經今文は菊に作りて方に作る
 ること段熲皮而して李善此の文に注して引く所の尚書若し本「方」に作りて、正文と異ら
 は李善當に「菊」方の異同を注すべし。然るに今其の引く所は「菊」に作りて、正文と異ら
 記せず、又、無魏公九錫文注引く所亦「菊」に作る。是れ李善見る所の尚書本より「菊」
 に作りて「方」に作りたりなり。内藤博士本内野本尚書亦「菊」に作りて李引く所
 と正に合す。

凡そ今本尚書の段氏以て衛包の改作と爲す者盡くは倍すべからず。「菊」の字既に
 李注引く所に見ゆるのみならず、又岩崎本尚書、說命上「卑呂形菊求于天下」及
 び說命下「菊招駸々」に見ゆ。說命上の傳菊を釋して、四方菊と爲し洛陽菊の傳と正に合す。段今
 古文尚書本「菊」の字を用ひたりしや否やは姑く之を措くも「菊」の字衛包より始ま
 るに非ざることを當に疑ふべからざるなり。段氏已說を就すに急に於て罪を衛包に歸
 するに非ざることを當に免がれる能はざるなり。皮錫瑞今文尚書攷證卷十八段氏の古文信「方」を用ひ
 夫不動動則前人不當

注尚書曰篤前人成烈第七葉表

今本尚書洛語篇卷十五 文同じ

注尚書曰辭敵紂第七葉表

今本尚書益稷篇卷五 文同じ

欽修百祀威枝也

注尚書石語曰紀于新色威枝無文第七葉裏

今本尚書洛語篇卷十五 紀于新色威枝無文第七葉裏

案するに此の注「石語」の二字疑ふらくは誤有るべし。

注尚書曰列斷惟五分土惟三第七葉裏

今本尚書武成篇卷十一 文同じ

方南刑

注尚書曰穆王作呂刑第七葉裏

案するに既に第 四二四 頁に出づ

羣公先正罔不秉儀

注尚書曰羣公既曰聽命第七葉裏

今本尚書康王之誥篇卷十五 文同じ

注又曰亦惟先正

案するに既に第 三三三 頁に出づ

義完寇賊

注尚書曰蠻夷猾夏寇賊姦宄第八葉表

班孟堅 典引

樓契照載

注尚書曰昭帝之載第廿葉裏 足利李昭帝之載元首

案するに既に第廿三頁に出づ。

昂倫數而舊章缺

注尚書曰帝乃震怒弗俾洪範九疇 昂倫數第廿三葉裏

今本尚書洪範篇帝乃震怒不界洪範九疇 昂倫數第廿三葉裏

案するに此の注「界」の字足利古本要密最刻本内野本尚書と合す。

此の注「俾」の字は「界」の誤か將本より此くの如く作りしか皆明かならず。郭懿

行爾雅郭注義疏上之一界予世の下に曰く「界通作俾逸周書祭公篇云付俾于四方孔

罪注付與四方也」と。又史記宋世家「不從馮範九等」に作りて而も釋詁に曰く「俾

從也」と。此の數將を合せて之を觀れば洪範此の經亦本より「俾」に作る者有りしか

と疑はる。要當「界」に作るも直に定めて「界」

有千德不台淵穆之讓

注尚書曰免讓于德不嗣第廿葉裏

今本尚書典範篇免讓于德弗嗣第廿三葉裏

案するに段玉裁古文尚書瑤異此の注「不」に作る者を與けて異文と爲す

段氏又曰く「陳氏三國志所載書章多僻古文者即如魏公卿上尊號奏注先被四夜讓德

不嗣不言橫被不台是今文尚書將凶之漸也原注裴松之引甲子魏王上書尚書瑤異一と魏の二

文古文尚書に據りて正に「不嗣」に作れば或は魏の時の異古文本より「不」に作りしや

も亦未だ知るべからず。果して然らば李善見る所の僞孔本亦本より「不」に作りて「弗

」に作りたりしかと疑はる。王氏孔傳卷正に「今古文並作不惟僞孔傳

此の正文は今文尚書に據りて「不台」に作り注引く所の尚書は則ち「不嗣」に作りて

正文と合せず。是を以て李善又「漢書高帝紀昭曰古文台爲嗣」を引いて正文「不

台」と注の「不嗣」との關係を明かにす。然るに江聲「李善注文選注典引篇引尚書曰

免讓于德不台然則古尚書當作不台尚書注言詁と讀へるは其の詁甚だ疏なり

蓋以廣當天之正統免克讓之歸運

注尚書曰誕膺天命第廿葉裏

案するに既に第廿三頁に出づ。

注又曰允恭克讓

今本尚書堯典篇允恭克讓

案するに李善據る所の尚書は「恭」を「讓」に作り「讓」を「讓」に作りしに似たり

攷既に第廿六頁に詳なり。

蓄炎上之烈精

注尚書曰火曰炎上第廿三葉裏

今本尚書洪範篇第廿三葉裏 文同じ。

京邊錦卷

注尚書湯誥曰王歸自夏至于亳第廿三葉裏 胡代牧臣傳三亳に

今本尚書湯誥篇王歸自克夏至于亳

草滅天邑

案するに、既に第三七五頁に出づ。

然後宣二祖之重光

尚書王曰昔。君文王武王宣重光。第十一葉表左行第三行

今本尚書顧命篇王曰陽句昔君文王武王宣聖光卷五十八第十五葉裏長

今本尚書顧命篇王曰昔君文王武王宣重光
第十五葉重光

此の經を引いて「昔」の下皆「我」の字有るは此の注亦「我」の字有る者是なり。攷

に第五四頁に詳なり

尚書曰方行

尚書曰方行天下至于海表末行

今本尚書立政篇方行天下至于海表罔有不服

尚書曰兢兢業業一日二日萬幾。

尚書曰兢兢業業一日二日萬幾若若
山此本不注尚書曰勤天之命一條之除くの外皆同じ
李善注と爲す今胡說に从ふ下注尚書曰勤天之命一條之除くの外皆同じ

案するに、李善據る所の尚書は「撮」に作りて「裁」に作らず。攷既に第一三二卷に

見中

此の注「萬」の字疑らくは本「万」に作りしならむ。致散に弟、西の六頁に見ゆ。

傳體辨章之化 洽

尚書曰惇敘九族九族既睦平章百姓

今本尚書章句。漢篇章句九族。

堯典篇九族既睦平章百姓

案するに此の注「九族既睦」の上當に「又曰」の二字有るべし。各本皆脱す。又此の

懷保鯨寬之惠也

尚書周公曰懷保小民惠鮮寡第十三集卷第四行

今本尚書並逸周書公曰
愷作小民無疆
第十三卷

尚書曰鳳皇來儀

案するに於て第一、九頁に出る

注
尚書曰嚴恭寅畏
初行
十三
胡氏致果曰
足利本六

今本尚書無逸篇韋玄成又賈本意作作しかと疑ふ
案ずるに此の主編其二作る者是なり。攷攷二第三九五頁に

貽燕後昆

注 尚書曰 垂裕後昆 第二十三葉裏

案するに既に第二六三頁に出づ。

豈哉清廟憚初天命也

注 尚書曰 初天之命 第二十三葉裏

今本尚書益稷篇 第十七葉裏 文同じ。

今其如台而獨闕也

注 尚書曰 夏罪其如台 第二十三葉裏

今本尚書湯誓篇 今汝其曰 夏罪其如台 第二十三葉裏

案するに 李善尚書を引くの下又「孔安國傳曰 台我世」を引けは是れ明に正文の「台」

を訓じて 吾と爲すなり。其の解殊に謬る。正文「其如台」は「其如何」と言ふが如し。

此の正文に本づける 蔡伯喈 鄭有遺碑文「今其如何而闕斯禮」の句證すべし。説既に主りて

台の字下に詳なり。李氏文選 後漢書 班固傳 李賢注 文選 五臣注 亦此の正文の「台」を以て我と訓す。蓋し唐人皆爲

孔傳に泥せしなり。

卷第四十九

班孟堅 公孫弘傳贊

斯亦曩時版筆 飯牛之明已 明氏注 卷に三

注 尚書序曰 高宗夢得說 使百工習 乖諸野得 諸傳 初漢書

案するに既に第二〇六頁に出づ。

于令升 晉紀論 晉武帝革命

心侯天命

注 尚書曰 侯天命 第二十三葉裏

案するに既に第一八五頁に出づ。

古者敬其事 則命以始

注 尚書曰 月正元日 納格于文祖 第三十三葉裏

今本尚書典範篇 卷三 文同じ。

于令升 晉紀總論

行任數以御物而知人善采拔

注尚書禹曰知人則哲能官人

第三葉裏

今本尚書皋陶謬篇禹曰知人則哲能官人

卷四第十八葉裏

故賢愚咸懷小大畢力

注尚書穆王曰小大之臣咸懷忠良

第三葉裏

今本尚書周命篇序穆王命伯冏爲周太僕正作冏命

又經王若曰冏小大之臣咸懷忠良

卷十九第十三葉裏

甲融前烈

注尚書王曰公劉克篤前烈

第四葉裏

今本尚書武成篇王若曰公劉克篤前烈

卷二十一第一葉裏

長驅廣囂

注尚書曰及庸蜀人

第四葉裏

案するに既に第一六一頁に出づ

庶官失才

注尚書曰推賢讓能庶官乃和

第五葉裏

今本尚書周官篇

卷十八葉裏

文同じ

若燭水于防境火於庫

注尚書曰若火之燭于原

第六葉裏

案するに既に第二九三頁に出づ

以三 equal 智伐獨夫之對

注尚書武王曰獨夫受洪惟作威

第八葉裏

今本尚書泰誓篇序推十有一年武王伐殷

又泰誓篇下王曰獨夫受洪惟作威

卷十一第十二葉裏

案するに卷五十六陸佐公石闢銘注亦尚書此の文を引いて「作威」に作ることに此の注と同じ

故齊王不明不獲思庸於亳

注尚書曰太甲既立弗明伊尹放諸桐宮三年復歸于亳思庸也

第九葉裏

今本尚書太甲序太甲既立不明伊尹放諸桐宮三年復歸于亳思庸

卷八第十七葉裏

案するに足利古本内野本尚書及び北堂書鈔

卷七十一

羣書治要引く所皆「弗」に作り

て此の注と合す

此の注引く所今本尚書に較して「桐」の下「宮」の字多し

唐初已削古文尚書自ら此

の字有りたるに似たり

後漢書董卓傳注尚書曰太甲既立不明伊尹放諸桐宮也

別傳第六十二正に

「宮」の字有り

太甲序正義に曰く「太甲既立爲君不明居喪之禮伊尹放諸桐宮」と

又曰く「案經上篇是放桐宮之事」と

卷八第十五葉裏

此れに據れば正義本尚書亦「宮」の

字有りたるかと疑ける。

又左氏襄公廿一年傳の正義に「書序云大は甲既立不明伊尹放諸桐宮」（書序正義）又五等義を引く。其の據る所何本なるやを詳にせずと雖も唐初正に「宮」の字多き尚書にせるの明證と爲すべし。殷本紀「於是伊尹乃放之於桐宮」の集解「鄭玄曰地名世有王離宮焉」（此處に足れ太甲序の注なるべし。高山寺本注引く所を）を引けば鄭本亦「宮」の字有りたるを知るなり。

高貴沖人不得復子明辟注 尚書曰惟予沖人弗及知 第九葉表 足利本、四部本、澤野本、沖之字に作る。

今本尚書金縢篇惟予沖人弗及知第十三葉裏 案するに「沖」は俗の沖の字、玉篇百六十六に見ゆ。

又周公曰朕復子明辟第九葉表 注 今本尚書洛誥篇周公拜手稽首曰朕復子明辟 第十四葉裏

鄉之不二之老注 尚書曰昔君文武則有不二心之臣 第九葉表

今本尚書康王之誥篇昔君文武則亦有無疆之志不二心之臣第十九葉裏

案するに卷五十九龍淵碑文注此の經を引いて「昔」を「先」に作る。「先」に作る者足なるに似たり。致弟五十四頁に見ゆ。

若も文王曰皇不暇食

注

尚書曰文王自朝至于日中側弗暇食第九葉裏 四部本、澤野本、今本尚書無逸篇文王自朝至于日中不遑暇食 例としてここに作る。

有黜亂上下

尚書說命曰黜于祭祀時謂弗欽第十葉裏 今本尚書說命篇中 第六葉表 文同じ。

懷帝以豫章王登天位第十一葉裏 注 尚書曰天佑賴哉 左より第二行

案するに既に第一二八頁に出づ。

范村尉宗 後漢書皇后紀論

詩書所載注 尚書曰古人有言。北維之晨惟家之索 第五行 今本尚書取摺篇古人有言。曰北維無晨北維之晨惟家之索 第十一葉裏

案するに武内博士本神田本尚書及び羣書治要第十一葉表 後漢書楊震傳注 第三葉裏く所皆「言」下「日」の字無く此の注引く所と正に合す同本記亦「是れ唐初本尚書」曰「の字無き者有りたるを知るなり。

卷第五十

范蔚宗 宦者傳論

終除大魁

注 尚書曰元惡大魁 第四葉表 左より第三行

案するに既に第一八八頁に出づ。

故其徒有繁

注 尚書曰簡賢附勢實繁有徒

今本尚書仲虺之誥簡賢附勢實繁有徒 第七葉表

案するに致既に第一一三頁に見ゆ。

又案するに李注中「是繁有徒」を引くこと凡そ三回にして此の注のみ「實」を「實」

に作る。「實」「實」二字音義俱に異りて而も多く通用す。 詳に説文解字正俗と雖も西京賦注引く所唐寫本明かに「實」に作れば此の注「實」の字恐らくは後人の改むる所な

るべし。

旋見罕數

注 尚書予則罕數汝 第五葉裏 第七行

今本尚書甘誓篇予則罕數汝 第二葉表

又湯誓篇予則罕數汝 第二葉裏

案するに卷四十四陳孔璋爲袁紹檄豫州文注尚書此の經文を引いて「予」を「余」に作

り李善の舊を存するかと疑はる。致第四一三頁に詳なり。

雖袁紹襲行其除無餘

注 尚書曰今予恭行天之罰 第六葉表 初行

今本尚書甘誓篇今予惟恭行天之罰 第七葉表

案するに卷四十四檄蜀文注尚書此の經を引いて「襲行」に作れば疑ふらくは此の注

本當に同じかるべし。致既に彼の條に見ゆ。

遂遷龜鼎

注 尚書曰寧王遷玆大寶龜紹天明 第六葉表 命第四行 足利本四節本注野本六葉本節の字無し

今本尚書大誥篇寧王遷玆大寶龜紹天明 命第六葉表 卷十三

案するに大誥傳「疑則ト之以繼天明就其命而行之」に據れば「明」下當に「即」字有

るべきに似たり。此の注「即」無き否は轉寫奪せるか。

沈休文 宋書謝靈運傳論

曹氏基命

注 尚書曰王如不取及天基命定命第八葉表 第五行

今本尚書名詰篇王如弗敢及天基命定命卷十五 第十四葉裏

案するに卷五十五漢建珠注尚書を引いて此の注と同じ。足利古本尚書「不」に作りて李善引く所と正に合す。段玉裁曰く「按下文不敢不敬天之休予不敢宿留作不似此亦不敢爲長」初葉裏と。

注 尚書曰垂裕後昆第九葉表 第五行

案するに既に第二六三頁に出づ。

多歷年代

注 尚書周公曰殷禮陟配天多歷年所第九葉裏 第九行

案するに卷二張平子西京賦注引く所は「陟」の字無く卷四十三丘布範與陳伯之書注引く所は「禮」の字無し。攷既に第一二八頁に見ゆ。

沈休文 恩倖傳論

板築殿役也傳説去鳥殿相

注 尚書曰高宗夢得説乃高祖象碑以形旁求於天下説築傳巖之野惟肖爰立作相第十葉表 第五行

今本尚書説命篇序高宗夢得説

マ説命篇上乃高祖象碑以形旁求于天下説築傳巖之野惟肖爰立作相卷十 第二葉

明教幽仄

注 尚書曰明明敷仄第十葉表 第六行

今本尚書堯典篇明明揚側陋卷二 第二十四葉表

案するに此の注引く所「敷」に作りて今の尚書と異るは唐初の尚書自ら此の字に作る本有りたるなり。敦煌本堯典釋文「敷」を出して「古揚字聲也」と注せる其の明證なり。北堂書鈔卷十五賢聖傳明揚側陋と引いて陳本堯典作「敷」に作り利切切揚側陋と注せる其の明證なり。敦煌本堯典作「敷」に作り利切切揚側陋と注せる其の明證なり。

説命下「敢對揚天子之休命」岩崎本權氏敦煌本尚書並に「揚」を「敷」に作り顧命「用

答揚文武之光訓」羅氏敦煌殘葉「敷」に作り君牙「對揚文武之光命」岩崎本「敷」に

作る。而して岩崎本羅氏本俱に「揚」の字無し。然らば東晉本尚書揚學の「揚」の字

本皆「敷」に作りしか。説文第十二上干部に曰く「揚飛舉也从手易聲古文」と。

此の注「人」の字亦李善據る所の尚書自ら此の字に作りしなり。攷既に第三二八頁

に見ゆ。

魏武始基

注 尚書曰太王肇基王迹第十葉裏 第五行

今本尚書武成篇至于大王肇基王迹卷十一 第二葉裏

案するに神田本尚書「太王」に作る。

相繼屠勤

注 尚書曰天用勗絶其命第十一葉裏 第四行

今本尚書甘誓篇天用勅。絶其命。第二葉表
 案宋するに此の正文注引尚書の「勅」の字及び下注引く所の孔傳の「勅」の字足利本は則ち皆正に「勅」に作る。六家本亦足利本に同じ。但下注引く是なり。四部書刊本惟五臣注のみ「勅」に作る。彼の本に在りては則ち「勅」に作る。所の孔傳は既に「勅」に作る。李善五臣本亦不刊殊るに非ず。馬本亦「勅」に作る。今本釋文誤る。今盧氏段氏に从ふ。敦煌本尚書明かに「勅」に作りて李の引く所と合す。所に據れば
 説文を攷ふるに第四篇下刀部に曰く「勅絶世以刀榮賢周書曰勅之説。天用勅絶其命」と。而して今本王篇百六十六「勅」を以て「勅」に同じとし敦煌本刊謬補缺切韻五亦「勅」に作る。を以て「勅」に同じとすれば「勅」「勅」皆「勅」の異體文字なること明かなり。古「勑」に从ふ字と「勑」に从ふ字と互に相出入せし。
 段王叔天寶已前の尚書本「勑」に作りて「勑」に作ることを攷す。段王叔天寶已前の尚書本「勑」に作りて「勑」に作ることを攷す。其の説甚
 是此の注引く所亦以て段説謬らざるの證と爲すべし。但段「勑」を改めて「勑」に作るの罪を以て衛包一人に歸するは衛包の條の説亦同じ。遽に从ふべからず。蓋し「勑」の字轉寫訛して力に从ひ遂に勢と訓ぜらるゝ「勑」の字と相混するに至りしのみ。はすし世衛包勑今勑古と爲して之を改めしには非ざるべし。王氏三傳本切韻勑勑。絶の字既に力に从ふ。

西土宅心

班孟堅 史述贊

注尚書曰遇。笑西土之人。第十二葉表

今本尚書牧誓篇遇。笑西土之人。第十一葉表

案するに攷既に第三十三頁に見ゆ。

注又曰惟克厥宅心。第十二葉表

今本尚書立政篇文王惟克厥宅心。第十二葉表

范蔚宗 後漢書光武紀贊

世祖誕命

注尚書曰伐文考諱膺天命。第十三葉表

案するに既に第四十三頁に出づ。

卷第五十一

王子淵 四子講德論

文舉曰書云迪一人使四方若卜筮

注尚書曰故一人有事四方若卜筮無不足乎。第八葉表

胡氏汝異曰。袁本茶陵本故作迪是也。足利本。四部本澤野本。六家本亦說迪。迪にける。案注本。

（「世」上「事」字「下」の「世」）

今本尚書君奭篇故一人有事于四方若ト並同下早字^{（世）}表

案するに此の注引く所諸家の見各異リ。

段王裁は曰く「文選王褒四子講徳論曰書云世一人使四方若ト並此蓋今文尚書之文與古文尚書異也事使二字篆體相似而李善注引尚書曰世一人有事四方若ト並無不與字孔安國曰世也世信也今孔本經文世作故事下有于無作同傳文無世也世信也六字侶今本與李善所據不同」^{（世）}と。

梁章鉅乃ち段説を讀して曰く「按段氏謂京所引君奭之文爲今文尚書是也至世字二字之訓乃李注別引他篇孔傳以釋其義世道也見大禹謨世信也見湯誥序非此節之傳否則今書本無世字何從闕入乎段氏以爲所據本不同殆未然惟李注既不言書有異字而引孔傳連綴於下文未分晰致混淆耳」^{（世）}と。

又陳高棅は則ち曰く「李善時馬鄭本尚書是并善所引尚書疑是馬鄭之本其世道也六字疑即馬鄭之注漢人少見馬鄭本尚書遂改爲孔安國耳」^{（世）}と。

今此の三説を熟讀するに陳説是れ全く馬胤之言を無し。梁氏李引く所の孔傳「世道也」の六字を以て他篇の傳を引くと爲す或は然るべし。李注自ら其の例無きに非ず（第八頁の「世」）

然れども梁氏惟此の注尤本の「故一人」に作れるをのみ是れ信じて袁本・茶陵本等「世一人」に作れるを顧みず。直に李引く所今本尚書と同じと謂ひ以て段説を駁せ

むとするは尤も謬る。夫の李善尚書を引くの下又「孔安國曰世道^{（世）}也世信也」を引ける者は是れ以て直に正文に注せしに非ずして其の所く所の尚書に注せしなり。若し直に正文に注せりとせむか正文本より「世」の字無し。何ぞ以て「世信也」を引かむや。既に「世信也」の三字上引尚書の注なりとせば「世信也」の上になる「世道也」の三字亦上引尚書の注なること固より疑ふべからず。李善既に尚書注「世道也」を引く。是れ其の尚書本より「世」の字無かるべからざるなり。

然らば則ち李據る所の尚書は固より孔氏本なりと雖も而も正に「世一人」に作りて今本尚書と同じからざるを知るべく段氏異本の説竟に屬ふべからざるなり。

但此の注足利本四部本袁本茶陵本等は「世一人」に作れるに集注本は則ち「故世一人」に作りて「故」の一字多し。二古孰れか李の舊なるかは今之を明かにするに由無きなり。

板本文選此の注「事」の下「于」の字無きは蓋し轉寫誤りて奪せしのみ。本今本尚書と異有るには非ざるなり。集注本正に「于」の字有る證すべし。

楊筠如「有事于四方」を攷して曰く「按三體石經無有字與王莽所引今文同古使事一字古金文使事不分有字疑衍文」^{（世）}と。

と。楊氏説甚だ是なり。蓋し僞孔氏本本「有」の字有りしに非ず。經文惟「事于四使」若しくは「使于四方」に作りて傳は則ち「事」若しくは「使」を釋するに「有事」の二字を以てせしなり。然るに後人傳文に據りて經に「有」

の字を加へしのみ。内野本尚書正に「故式人事方」に作りて「有」の字無く、
惟「有オナ」と有記せる以て證とすべし。

鳳皇來儀 注 尚書曰鳳皇來儀 第十二卷表 左より第三行

案するに既に第一「九」頁に出づ。

威則三壤 注 尚書曰威則三壤成賦中邦 第二十一卷表 左より第四行

今本尚書禹貢篇 第二十六卷表 文同じ。

卷第五十二

班叔皮 王命論

昔莊帝堯之禪曰咨爾舜天之曆數在爾躬舜亦以命禹 注 尚書帝曰來禹予懋乃德嘉乃王禎天之曆數在爾躬 汝汝終陟元后 初葉表 左より第四行

今本尚書大禹謨篇帝曰來禹 注 予懋乃德嘉乃王禎天之曆數在爾躬 汝汝終陟元后 初葉表
案するに佗篇注尚書此の文を引いて「汝」を「尔」に作る。「汝」「尔」「曆」「歷」異同の
攷既に第 頁に見ゆ。

流澤加於生民

注 尚書周公曰道洽政治澤潤生民 初葉表 第九行

今本尚書畢命篇王曰嗚呼道洽政治澤潤生民 第九卷表

案するに今本畢命に據れば此れ周公の言に非ず。今本文選卷五五部賦注畢命の文
を引いて 注 注本畢命篇 亦「周公曰」に作る。何に由つて此の異同有るかを知らず。

天祥其永終

注 尚書曰四海困窮天祥永終 第四卷表 左より第四行

今本尚書大禹謨篇傳乃有位敬修其可願四海困窮天祥永終 第九卷表
案するに今本尚書禹貢傳「勤此三者則天之祥緒長終汝身」に據れば「慎乃有位 至
四海困窮」の十三字皆「天祥永終」に案するに似たり。然るに尚書正義を釋して「嘗
彼四海困窮之民使皆得存立則天之祥緒長終汝身矣」と曰ひて惟「四海困窮」の四字
のみを「天祥永終」に案らしの李善此の引と合す。豈唐初此の可讀有りて李善之に
从へるか抑、文多きを以て節引せしか今明かにし難し。

曹元首 六代論

乃定天位

注 尚書曰天位艱哉 第六卷表 第三行

案するに既に第一二八頁に出づ。
事不師古而能長久者非所聞也

注 尚書曰事不師古以克永代。匪說攸聞。第七行 餘本代を
今本尚書說命篇下事不師古以克永世。匪說攸聞。第七行 世に作る
案するに此の注「代」に作る者は唐時諱を避けしのみ。

注 遂乃郡國離心
尚書曰安有德非夷人離心離德。第五行 第五行

雅鑿之以黑墳曉之以春日
注 尚書曰厥土惟黑墳。第十行 左より第三行

今本尚書禹貢篇厥土黑墳。第六行 第六行

案するに此の注「惟」の字足利本四部叢刊本洋野本は俱に之れ無く六家本は「唯」に作る。未だ孰れか李善の舊なるを知らず。
但禹貢の句法を取ふるに上の「厥」の字下多く「惟」の字を以て承くれば「厥土黑墳」も亦本或は「惟」の字有りたるかと疑はるれども未だ其の明證を得ず。

韋弘嗣 博亦論

猶有日晏待旦之勞

注 尚書周曰文王自朝至於日中昃不遑暇食用飭和萬民。第十行 足利本不遑暇食用飭和萬民

今本尚書無逸篇周曰陽文王自朝至於日中昃不遑暇食用飭和萬民。第十行 陽に作る

案するに此の注「昃」當に「側」に作るべく「不遑」當に「弗遑」に作るべきに似たり。文獻に第三五

勇略之士則受熊虎之任
注 尚書曰如虎如貔如熊如羆于百郊。第十一行 第十一行

今本尚書牧誓篇。第十一行 第十一行
案するに卷五十四辨命論注尚書を引いて「武王曰」の三字多く其の餘は此の注と同じ。

卷弟五十三

嵇叔夜 養生論

或益之以厭怠

注 尚書曰有猷有為有終始。第三行 第三行

今本尚書益稷篇。第五行 第五行
文同じ。

觀前本第九葉に施班通稱の體と致へること詳なり。然らば古「頌」に作れる尚書有りたるやも亦未だ知るべからず。

但未だ其の明證を得ざるを以て今關疑に从ふ。

庶尹盡規於上

注尚書曰庶尹允諧

案するに既に第(四)頁に出づ。

茲同肆虐

注尚書曰崇信茲同

案するに既に第(五)頁に出づ。

典刑未滅

注尚書曰尚有典刑

案するに尚書此の文無し。胡克家曰く「何校改尚書作毛詩下文毛詩改又陳同是也

各本皆誤」と是なり。毛詩大雅蕩篇に見ゆ。

則可以長世永年

注尚書曰罔年有永有不永

案するに本善尚書此の經文を引くこと凡そ四回文皆同じ。

卷第五十四

陸士衡 五等論

並建五長

注尚書曰外薄四海咸建五長

今本尚書益授篇

心膺獲又

注尚書穆王曰作股肱心膺

案するに既に第(三)九頁に出づ。

公曰目涉商人之戒

注尚書曰爾唯舊人爾丕克遠省爾知寧王若勤哉

今本尚書大誥篇爾惟舊人爾丕克遠省爾知寧王若勤哉

案するに「唯」「惟」の攷既に第(七)九頁に見ゆ。

不遵舊典

注尚書曰舊典時式

案するに既に第(八)頁に出づ。

是以五侯作貳不忌赫邦

注 尚書曰臣。作福作威。害于而家。凶于而國。第四卷表 第七行

今本尚書洪範篇臣之。有作福作威王食其害于而家凶于而國。第五卷表 第七行
案するに王先謙云ふ。今文「臣」の下「之」の字無しと。第五卷表 第七行又段王欲曰く「其字漢人三引皆無此今文尚書也」。第五卷表 第七行と。今此の注「之」の字無く「其」の字無し。是れ唐初古文尚書亦斯くの若く作りし者有りたるか抑。李善約舉せしか郭文謙無く以て決すべからず。

養喪家之宿疾

注 尚書曰卿士有一於身家必喪。第四卷表 第七行

今本尚書伊訓篇惟茲三風十愆卿士有一于身家必喪。第五卷表 第七行
案するに「于」の致既に第九七頁に見ゆ。

嘉軌克序

注 尚書曰冠賦采芻。第四卷表 第九行

今本尚書舜典篇。第三卷表 文同じ。

凶族據其天邑

注 尚書曰肆予敢求爾于天邑商。第五卷表 第七行

案するに既に第三三五頁に出つ。

黜陟日用

注 尚書曰三載考績三考黜陟幽明。第六卷表 第四行

今本尚書舜典篇。第三卷表 文同じ。

百度自忤

注 尚書曰不役耳目百度惟貞。第六卷表 第八行

今本尚書旅獒篇不役耳目百度惟貞。第三卷表 第七行

案するに致既に第一一七頁に見ゆ。

脩己安民

注 尚書咎繇曰在安民。第六卷表 第七行

今本尚書皋陶謨篇皋陶曰吁。知人任安民。第六卷表 第七行

案するに李善尚書を引いて「皋陶」皆「咎繇」に作る。致既に第一一七頁に見ゆ。

後嗣思其堂構

注 尚書曰若考作室子乃弗肯堂州肯構。第六卷表 第五行

案するに既に第一一四頁に出つ。此の注「子」の上「厥」の字無きは李善節去せしか否らすんは轉寫誤り奪せしなるべし。

劉孝標 辨命論

是以放勛之世浩浩。舉陵。

注 尚書曰放勛欽明。第六卷表 第三行

今本尚書堯典篇曰放勳。欽明文思安安。案するに攷既に第三九一頁に出づ。

又案するに正文此の句下句「天乙之時焦金流石」と相對すれば劉孝標は「放勳」を以て堯の名釋文馬云放勳若しくは字釋文三と爲し堯の勳業を謂へるの語鄭王と爲さざりしなり。然るに李善此の注惟尚書經文を引いて注を引かざれば其の解は是れ偽孔傳に以へるなり。李注恐らくは非。此れ當に放勳名字の注を并せ擧ぐべきなり。
注又帝曰湯湯洪水方割蕩蕩懷山襄陵浩浩天足利本六部本澤野本
今本尚書堯典篇帝曰咨四岳湯湯洪水方割蕩蕩懷山襄陵浩浩天左より第四行

相次祖落

注尚書曰帝乃祖落第十葉表

案するに李善の舊「祖」を「祖」に作りしに似たり。攷既に第一七五頁に見ゆ。

注則宰衡之與阜縣第十葉表

案するに既に第三二四頁に出づ。

若謂驪鏡虎奮尺劍

注尚書武王曰如虎如龍如熊如羆于商郊第十葉表
案するに既に第三四九頁に出づ。又「武王」の攷は既に第三二六頁に見ゆ。

火災崑崙磬石與琬琰俱焚

注尚書曰火災崑崙王石俱焚第十葉表

今本尚書胤征篇火災崑崙王石俱焚第十葉表

案するに既に第三四一八頁に出づ。

注又曰弘璧琬琰在西序第十葉表

案するに既に第一六七頁に出づ。

辛受生而飛廉進

注尚書曰祖伊恐奔告于受第十葉表

今本尚書西伯戡黎序祖伊恐奔告于受第十葉表

注尚書曰四夷左社罔弗第十葉表

今本尚書畢命篇四夷左社罔不第十葉表

案するに此の注「弗」の字岩崎本内野本尚書と合す。

嗚呼福善禍淫徒虛語耳

注尚書湯曰天道福善禍淫第十葉表
今本尚書湯詰序湯既黜夏命第十葉表
案するに此の注「湯曰」に作る者は李善序文に據りて偽經の王の字を改めしに因るか抑、李の據る所の偽經本より「湯」に作りしが今明かにする能はず。(弟
參照)
此の注「湯」の字當に本是れ「湯」に作るべし。攷既に第三四六頁に見ゆ。

盛業光於後嗣

注 尚書曰 狂今後嗣王初行 第十四葉表

今本尚書酒誥篇狂今後嗣王酣身 第十四葉表

又多士篇狂今後嗣王誕罔顯于天 第十四葉表

皇天輔德

注 尚書曰 皇天無親惟德是輔 第十四葉表

今本尚書蔡仲之命篇 第十四葉表

故善人爲善焉有息哉 文同じ。

注 尚書曰 古人爲善惟日不足 第十五葉表

今本尚書泰誓篇中 第十四葉表

文同じ。

卷弟五十五

劉孝標 廣絕交論

朱益州汨羅敘粵誤訓又曉人靈於豺虎

注 尚書曰 彝倫攸敘 第二葉表

今本尚書洪範篇彝倫攸敘 第二葉表

案ずるに卷五十八陳太丘碑文注此の經文を引いて「攸を」適に作れば此の注當に同じかるべし。

注 又曰聖有誤訓 第二葉表

今本尚書胤征篇 第九葉表

文同じ。

注 尚書曰 惟人萬物之靈 初行

今本尚書泰誓篇上 第十四葉表

文同じ。

齊九丘之妙曲

注 尚書曰 蕭韶九成鳳皇來儀 第三葉表

案ずるに既に第一五八頁に出づ。

離刻百工

注 尚書曰 百工惟時 第九葉表

今本尚書皋陶謨篇 第十一葉表

文同じ。

不操權衡秉鐵繩

注 尚書曰 厥維罔緒 第五葉表

今本尚書禹謨篇 第六葉表

胡氏攷異に「く」何校撫改

敗德殄義

注 尚書曰 侮慢自賢反道敗德 第七葉表

今本尚書大禹謨篇 第二葉表

文同じ。

陸士衡 演連珠

以要克諧之會

注 尚書曰八音克諧第九卷表

案するに既に第(二)(三)頁に出つ。

是以大人基命

注 尚書曰王如不取及天基命定命第九卷表

案するに既に第(四)頁に出つ。

動神之化已滅

注 尚書益曰至誠感神第十三卷表

今本尚書大禹謨篇益贊于禹曰隨至誠感神第十四卷表

是以四族放而唐功

注 尚書舜流共工于幽州放驩兜于崇山竄三苗於三危殛鯀于羽山四罪而天下咸服第十三卷表

今本尚書舜典篇流共工于幽州放驩兜于崇山竄三苗于三危殛鯀于羽山四罪而天下咸服第十三卷表

服第十三卷表

案するに今本尚書「幽洲」に作れるの非なること盧文弨王鳴盛段玉裁孫星衍等の諸家既に説有り。訪家引證多く互に異なり。而も

是未だ正義を引かず。

今正義を攷ふるに孔氏等據る所の本尚「州」に作りて「洲」に作らず。乃ち正義に曰

釋地云燕曰幽州。知北極也水中可居者曰洲。釋水文李巡曰四方有水中央高獨可居故曰

洲。天地之勢四邊有水郡行書說九州之外有瀛海環之是九州居水內故以州爲名共在一

洲之上分爲九耳州取水內爲名故引爾雅解州也投之四裔裔訓遠也當在九州之外而

言於幽州者在此州境之北邊也第十九卷表

と。此れに據れば孔氏等は「水中可居者」には「洲」の字を用ひ一洲の上に在りて

分てる者には「州」の字を用ひ「洲」兩字を截然分用せり。是れ其の據る所の尚

書經文は「幽州」に作り傳文は則ち「水中可居者曰洲」に作りしなり。

段玉裁張詠十三卷注疏等「幽州」を改めて「幽洲」に作れるは衛包なりと謂へども悉ら

くは然らじ。衛「幽州」のみを改めて上文「十二州」を改めざるの理無し。蓋し轉寫

者傳の「水中可居者曰洲」に據りて徑に其の經「幽州」を改めしのみ。既尚書攷物記に

是州此蓋其州字之異體不從水從土有土則轉之於此亦不可解也案するに此の傳

本尚書十有三州の下に在りしなるべし。澤書地理志稱注正十二州の下に於て釋せり。

此の條編成りて後釋志祖讀書莊孫氏に「正義仍作幽州良由文多不能盡改余」と

言へるを知れり。但孫氏の見處説と盡くは同じからず。故に舊稿を存して敢て

改めず。(昭和十二年六月廿九日識)

是以蒲密之黎邇時雍之世

注 尚書堯典曰黎民於變時雍第十四卷表

此の注「三苗」の下「於」に作りて「于」に作らず。卷五十九頭陀寺碑文注引く所亦同じ。

禹貢正義「舜典云竄三苗於三危」第二卷表を引いて亦正に「於」に作る。九卷表に引く

案するに既に第一四〇頁に出づ。

漂鹵之賦不能降西山之節

注 尚書序曰武王伐殷 第十七葉裏

今本尚書泰誓篇序惟十有一年武王伐殷 卷十一

又武成篇序武王伐殷往伐歸獸 第十八葉裏

注 尚書曰前徒倒戈攻于後以北血流漂杵

今本尚書武成篇 第十四葉裏 文同じ。

卷弟五十六

張茂先 女史箴

克念作聖

注 尚書曰惟狂克念作聖 第二葉裏

案するに既に第二八八頁に出づ。

班孟堅 封燕山銘

注 尚書曰三孤黃亮天地弼予一人 第三葉裏

今本尚書周官篇少師少傅少保曰三孤貳公弘化黃亮天地弼予一人 第三葉裏

案するに集注本卷百十六王仲賢補注文注尚書此の文を引いて「實」を「實」に作る。

「實」に作る者李の舊なるに似たり。此の注當に是れ本相同じかるべしと疑はる。

致彼の條に見ゆ。

又集注本彼の注「予」を「余」に作りて六家本此の注と正に合す。「余」に作る者或は

李善の舊なるべし。「予」「余」の攷既に第四一三頁に見ゆ。

納于大麓

注 尚書曰納于大麓烈風雷雨弗迷 第三葉裏

案するに既に第四三三頁に出づ。

照帝軌

注 尚書曰有能奮庸熙帝之軌 第四葉裏

案するに既に第三三〇頁に出づ。

張孟陽 劍閣銘

注 尚書曰荆及衡陽惟荆州 第四葉裏

案するに既に第九八頁に出づ。

道衡荆衡近紹岷嶓

注 尚書曰荆及衡陽惟荆州 第四葉裏

案するに既に第九八頁に出づ。

張孟陽 劍閣銘

注 尚書曰荆及衡陽惟荆州 第四葉裏

案するに既に第九八頁に出づ。

道衡荆衡近紹岷嶓

注 尚書曰荆及衡陽惟荆州 第四葉裏

案するに既に第九八頁に出づ。

注尚書曰岷嶓既藝第四葉裏
今本尚書禹貢篇左より第三行文同じ。

天命匪易

注尚書曰爾亦邦知天命不易第五葉裏
今本尚書大誥篇左より第三行爾亦不知天命不易足利本、四部不、澤野亭、香亭、大寺等「不易」に作る。
案するに攷、既に第一九六頁に見ゆ。

陸佐公 石闕銘

昔在舜格文祖禹至神宗周變商俗湯黜夏政

注尚書帝曰舜汝陟帝位正月上帝受終于文祖第五葉裏

今本尚書舜典篇左より第三行帝曰格汝舜第六葉裏汝陟帝位第七行正月上帝受終于文祖第八葉裏

注又帝曰禹惟汝第六葉裏詒正月朝旦受命于神宗第六葉裏

今本尚書大禹謨篇禹拜稽首固辭帝曰第六葉裏惟汝第七葉裏詒正月朝旦受命于神宗第八葉裏

案するに今本尚書「母」に作り此の注引く所「禹」に作る。或は李善上注引く所の「帝」

白舜汝陟帝位」の句法に仿ひ意を以て改めたるか。

六家本此の注「女」に作る者はなり。足利古本尚書正に「女」に作る。「女」は「汝」同音の攷既に

注尚書曰湯既黜夏命復歸于亳第五葉裏

案するに攷既に第三三〇頁に見ゆ。

克明俊德

注尚書曰克明俊德以親九族第五葉裏

今本尚書堯典篇左より第三行克明俊德以親九族

案するに此の注「俊」の字本「駿」に作りしかと疑はる。攷既に第

威侮五行第三葉正

注書曰有虞氏威侮五行第六葉裏忌讎第七葉裏比第八葉裏周第九葉裏比第十葉裏三第十一葉裏正第十二葉裏

今本尚書甘誓篇左より第三行文同じ。

案するに胡克家此の注袁本茶陵本之れ無きの故を以て尤表の校添せる所と爲す。

然れども此の正文尚書に據れること明かなるに李善之に注すること無かりしとは

思はれされば今胡刻本に以ふ。蓋し李善注尚書を引く處を以て二冊

龍飛黑水虎歩西河第六葉裏

注尚書曰黑水西河惟雍州第六葉裏

今本尚書禹貢篇左より第三行文同じ。

竊望協從第六葉裏

注尚書曰詢謀僉同鬼神其依第六葉裏

今本尚書大禹謨篇左より第三行詢謀僉同鬼神其依第六葉裏

案するに卷卅七曹子建通親親表注堯典「協和萬邦」を引いて「協」を「叶」に作る。

李善據る所の尚書「叶」の字を用ひたるに似たり。攷第三七〇頁に詳なり。

協彼離心抗茲同德

注 尚書曰受有億兆人難心難德予有亂臣十人同心同德第六葉表 第八行

案するに既に弟 頁に出づ。

兄渠泥首

注 尚書曰猷厥渠魁第六葉表 第八行

今本尚書胤征篇第七葉表 文同じ。

案するに李善尚書此の文を引くこと凡そ四回文皆同じ。

樊鄧威懷巴黔底定

注 尚書曰大邦畏其力小邦懷其德第七葉表 第八行

今本尚書武成篇第十一葉表 文同じ。

注 尚書曰麗澤底定第七葉表 第四行

案するに既に弟 頁に出づ。

師營商牧

注 尚書曰王至于商郊牧野第七葉表 第八行

案するに攷既に弟 頁に見ゆ。

華夷士女

注 尚書曰惟其士女第十一葉表 第八行

今本尚書武成篇第十一葉表 文同じ。

伐罪弔民

注 尚書曰奉鬯代非 第七葉表 末行

今本尚書大禹謨篇奉鬯 第四行

案するに攷既に第一七五頁に出づ。

四 陳奉圖

注 尚書曰四陳既宅第七葉表 第二行

今本尚書禹貢篇四陳既宅 第六葉表 第八行

案するに此の注「陳」の字疑ふらくは當に「陳」に作るべし。攷第四三・頁に詳なり。

一日二日非止萬機

注 尚書曰兢競業業一日二日萬機第七葉表 第三行

今本尚書皋陶謨篇兢競業業 第一二日萬機 第四葉表

案するに李善釋の所の尚書は「機」に作りて「機」に作らず。攷既に第一三三頁に見

ゆ。

此の注「萬」の字疑ふらくは本「万」に作りしならむ。攷既に第一四六頁に見ゆ。

獨夫授首

注 尚書曰獨夫受洪惟作威第七葉表 第八行

案するに既に第一四六頁に出づ。

下車而天下大定又極茲遠矣

注 尚書曰一戎衣天下大定第八葉表 初行

出し又其の下に經の「執手」を標出す。是れ王本に在りては注、「執手」云々附屬與諸經適子公之孤云云。王鳴鳳補注を以て經「三帛」の下「執手」の上に夾みたるなり。王本雖本其の經注書式今く殊るべきに非ざるなり。

吳士鑑唐寫本經典釋文校語下に「今本魯字在禮字之上蓋以智靈上文一元可故先釋魯字後釋注中總字元朗原本則以智靈下文如五器可故寫本莊傳疏吳氏謂て請る所の過は之を孔疏より採るに故に此の語有るなり。吳氏釋文條例の魯字經本末字誤注と讀ます。又陸氏二氏の年代を攷へず。續與適子之下此可攷見句讀之不同者」第十三葉と謂ひ又其の序文に於て陸氏の句讀今と異なることを大書せるは謬甚だしと謂ふべし。吳氏校語上下卷謬誤甚多し。吳士鑑寫本尚書句讀釋文等多く之を駁正す。而も未だ此の條に及はず。

證四

王燭齊典二月仲春弟二此の經注を引くこと左の如し。
脩五禮吉の宣軍 五王五等諸侯 三帛三建書也三所 二牲羔鴈也 一死雉也

竇典庶る所の尚書疑ふらくは脩孔傳異本か。

右の四證に據りて之を推すに典經注本當に左の如く書すべきに似たり。

修五禮修五等諸侯 五王五等諸侯 三帛三建書也三所 二牲羔鴈也 一死雉也 執手 王本元所以

一介之才以記無文之典疏

注尚書秦穆公曰如有一介臣第一葉末

案するに既に第四の頁に出づ。

注又曰攝扶元祀疏 扶無文左より第二行

今本尚書洛誥第五十五葉 文同じ。

允執厥中

注尚書帝曰允執厥中第九葉表

今本尚書大禹謨第八葉裏 文同じ。

可以表正王居

注尚書王曰表正萬邦第九葉裏

今本尚書仲虺之誥仲虺乃作誥曰 天乃錫王明哲 表正萬邦獨禹 謨服第六葉裏

案するに此の注引く所は是れ仲虺湯王に誥ぐるの詞是れ王の言に非ず。此の注「王」の字疑ふらくは當に「曰」の下に在るべし。各本皆誤り刪す。

周書洛誥

注尚書序曰周公既相宅周公往營成周第十葉表

今本尚書洛誥序 召公既相宅周公往營成周第十四葉表

陸佐公 新刻漏銘

禮變尚俗

注尚書曰尚俗靡靡利口惟賢第十二葉表

案するに既に第三の頁に出づ。

天工千代

注 尚書曰無曠庶官天工人其代之第十三卷末

今本尚書卑陶謨篇卷四 文同し。

案するに漢書律曆志上「書曰天功人其代之」顏師古注して曰く「虞書曰録蕃世言

聖人稟天造化之功代而行之」第七卷と。顏師古「天工」の解陸佐公用ふる所の意と合

す。師古恐らくは承くる所あるべし。

惟獨性一

注 尚書曰惟精惟一允執厥中第十三卷末

今本尚書大禹謨篇卷四 文同し。

至極影響

注 尚書曰惠迪吉從逆凶惟影響第十四卷末

案するに既に第二十二頁に出づ。

曹子建 王仲宣誄

爰建時雍

注 尚書曰黎民於變時雍第十四卷末

案するに既に第一四〇頁に出づ。

百揆時敘五典克從

注 尚書曰納于百揆百揆時敘第十四卷末

案するに攷既に第三二六頁に出づ。

注 又曰懋敬五典五典克從

今本尚書舜典篇卷三 文同し。

庶績咸熙

注 尚書曰庶績咸熙第十五卷末

案するに既に第一四一頁に出づ。

百司典乂

注 尚書曰俊乂在官第十五卷末

今本尚書卑陶謨篇文同し。

案するに足利本六家本四部叢刊本此の注「俊」の字を「德」に作る。孰れが李善の舊

なるを知らず。第二九卷

胡紹煥注「俊」の字に依りて正文「德」富に「俊」に改むべしと爲せども文選卷三 李

善注の舊未だ定むべからざるを以て爰に正文を改むべからざるなり。

將疾爾曹

注 尚書王曰病曰踣既爾曹第十六卷末

今本尚書顧命篇王曰爾病曰踣既爾曹第十六卷末

潘安仁 楊荊州誄

茂績惟嘉

注 尚書曰子想乃德嘉乃丕緒 第十六卷 第三行

今本尚書大禹謨篇 卷四 第八卷裏 文同し。

降年下永

注 尚書曰降年有永有不永 第十六卷 第三行

案するに既に第四八四頁に出つ。

奔世丕顯

注 尚書曰公稱丕顯德 第十六卷 第三行

案するに既に第三三九頁に出つ。

克構堂基

注 尚書曰若考作室子弗肯堂則肯構 第十六卷 第三行

案するに既に第四一七頁に出つ。此の注「子」の上「屋」の字無く「子」の下「乃」の字

無きは李善節去せしが否らずんは轉寫するなるべし。

孝實蒸蒸

注 尚書曰克諧以孝 第十六卷 第三行

今本尚書堯典篇克諧以孝 第十六卷 第三行

注 尚書曰克諧以孝 第十六卷 第三行

案するに此の正文「孝實蒸蒸」は下句「友亦怡怡」と相對して應を爲せば、其の「蒸蒸」の語は以て孝を形容せるなり。然らば潘安仁堯典此の經を讀んで「克諧以孝蒸蒸」の六字を以て一句と爲し、偽孔傳の「以孝」の下に可せると同じからざるを知らる。今李善尚書を引いて其の注を示すと雖も其の據る所偽孔傳本なること明かなれば其の讀は則ち正文と相合せざるなり。或は李善惟正文の本づく所を證せしめ、に其の句讀の異同はすしも問ふ所に非ざりしが、又疑ふ卷三東京賦「蒸蒸之心」の注「尚書曰虞舜蒸蒸」を引けば或は李善本より此の經を讀みて「蒸蒸」の下に可せしか。但「若し此くの如くんば李善の讀今本偽孔傳と合せざるなり。」に作りしと同一ならず、或は唐初本偽孔傳今本と異りしか。
此の注「蒸蒸」今本尚書と異りて後漢書李雲傳注 第十六卷 第三行 引く所の尚書と合す。凡そ今本尚書蒸蒸・蒸民皆「蒸」に作りて「蒸」に作るすの字無し。李善引く所は則ち皆「蒸」に作る。但即ち此の注の「蒸」に作る。或は李善據る所の尚書自ら「蒸」に作りて「蒸」に作りたりしか。抑、文選書寫者惟其の習用の文字に从ひて「蒸」に作りしのみなるか。疑うて明かにする能はず。
此の注「弗」の字李善據る所自ら然りしなり。攷既に第一一七頁に見ゆ。

多才豐藝
注 尚書周公曰不若曰多才 第十七卷 第三行

内野本尚書正に「弗」に作る。「不」非の

今李尚書金縢篇中乃無祝曰隨司不若旦多材多藝卷十三 第八篇表
案ずるに敦煌本堯典傳文「才」を大書し注に曰く「古說字作才若才能之字則從木他
皆放此」と。李善據る所の尚書「才」を「才」に作ることに既に徵有り。然らば則ち「多
才」當に「材」に作るべし。此の注「才」に作るは恐らくは轉寫の誤。

庶獄明慎
尚書周公曰庶獄庶慎

今本尚書立政篇周公曰文王罔攸兼于庶言庶獄庶慎卷七弟三葉表又庶獄庶慎文王罔敢知于庶言卷七弟三葉表又和我庶獄庶慎卷七弟三葉表其勿誤于庶獄庶慎卷七弟三葉表

尚書帝曰咎繇。蠻夷猾夏。寇賊姦宄。汝作士。惟明克允。

今本尚書舜典篇帝曰皐陶嚳禹稷夏寇既誅兗汝作士馬可惟明克允卷三
案するに李善據る所の尚書「咎繇」に作りて「皐陶」に作らず。弟三華裏攷既に第一八七頁に見ゆ。

此の注引く所の尚書「滑」の字、辛善の舊は「滑」に作りしに似たり。攷第五三頁に見ゆ。

又序曰呂命穆王訓夏贖刑作呂刑
案するに既に第四二四頁に出づ

聖皇受終

注
尚書曰正月上日受終于文祖
第十八葉表
第四行

案するに既に第四九六頁に出づ。

酒酒江漢

尚書曰江漢朝宗于海第五行
案するに既に第二の頁に出づ

潘安仁 楊仲武誅

以保×夫家
尚書周公

尚書周公曰巫咸保乂王家第十九葉裏初行
今本尚書君奭爾周公若曰又公曰屬司巫咸乂王家足利本四部下澤野本保の字無し
第廿葉裏

案するに此の文正に「保」に作れば注引く所亦固より當に「保」の語有るべし是れ李善據る所の尚書今本に較して一「保」の字多かりしなり。唐王之詰篇亦「則亦有熊羆之士不二心之臣保」王家の文有り。若し李善見る所の君頌篇此の文「保」の字無かりしとせば此の注當に唐王之詰の文を引くべきなり。然るに今君頌篇を引く者は是れ其の君頌篇本より「保」に作りて正文と合せしを以てなり。

李善引く所と正に合す。且つ「保×某某」の文尚書に屡見ゆ。多ク保×有殷。君師保×有殷。三見。唐王之詔保×某某等。

然らば、今本君龍此の經卷一「保」の字を奪せるか。

如何短折

注 尚書曰六極一曰凶短折 第八行

今本尚書洪範篇 卷十二 第二十四葉裏 文同じ。

龜筮既襲

注 尚書曰乃ト三龜一習吉 第二十四葉裏 第四行

案するに既に第二十六頁に出づ。

又曰ト不襲吉

今本尚書大禹謨篇ト不習吉 卷四 第二十一葉裏

案するに此の注「襲」の字今本尚書と異なる。然れども李善又「孔安國尚書傳曰襲因

世」を引くこと凡そ七回。 文選注卷四 賦注 皆亦「襲」に作りて「習」に作らず。引く所

恐らくは大禹謨の傳なれば、李善見る所の大禹謨自ら「襲」に作りしなり。

尚大禹謨此の文は春秋左氏哀公十年傳「趙孟曰ト不襲吉」を襲へる者なれば、 應神古 東晉の書或は本より「襲」に作りて「習」に作らざりしならむ。尚泰誓中「朕夢協朕ト

襲于休祥」も亦昭公七年左氏傳周語單襄公の語を援拾して之を爲せしか故に、其の

舊に从ひて尚「襲」に作り金縢「習」の字を用ふると其の例を異にせり。 段王叔金縢 第五葉

今本尚書大禹謨金縢俱に「習」の字に作りて其の傳皆「習因世」の文有り。泰誓中は

則ち「襲」に作りて傳其の字を破せず。是れ東晉の原本尚大禹謨尚泰誓並に「襲」に

作りしが故に偽傳先づ大禹謨の「襲」を訓じて泰誓に於て之を略し金縢は則ち「習」
に作りて其の字異なるを以て其の傳假に「習因世」と注せしかと疑はる。

卷弟五十七

潘安仁 夏侯常侍誄

尚書玄註實曰文命

注 尚書曰禹錫玄圭 告厥成功 初葉裏 卷七行

今本尚書禹貢篇禹錫玄圭 告厥成功 卷六 第三十三葉裏

案するに胡刻本此の正文は「圭」に作るに注は則ち「圭」に作りて兩者相合せず。是

れ本より余りしか。抑注亦「圭」に作ること淺野本六家本の如かりしを後人之を改め

て「圭」に作れるか皆明かにし難し。

今古本尚書を攷ふるに九條家本内野本敦煌本は皆正に「玄圭」に作る。而して玄應

衆經音義 卷第二 第三葉 「錫圭」を大書し其の小注に曰く「尚書禹錫玄圭是也」と。然ら

は唐初本或は「玄圭」に作り或は「玄圭」に作れるか。 今本尚書「書」圭 同字互に出づ。

説文を攷ふるに「圭」は即ち「圭」の古文なるを知る 第十三篇 下土部

注 又曰文命敷于四海

案するに既に第三一。頁に出づ。

又案するに尚書傳「文命」を訓じて「文德敎命」と爲し正文の用例と合せず。故に李善尚書を引くの下又「史記曰夏禹名曰文命」を引く。

克明克聖

注尚書曰居上克明初葉裏第八行

今本尚書伊訓篇卷八初葉裏文同じ。

注又曰克齊聖初葉裏第八行

案するに既に第三四八頁に出づ。

用取喉舌

注尚書帝曰龍命汝作納言第三葉裏

案するに既に第一五八頁に出づ。

予獨正色

注尚書曰正色率下第二葉裏

案するに既に第三七二頁に出づ。

先朝末命

注尚書曰道揚末命第三葉裏

今本尚書顧命篇皇極王凡道揚末命卷十八初葉裏

案するに既に第三八五頁に詳なり。

長保天秩

注尚書曰天秩有禮自其五禮有庸第三葉裏

今本尚書皇極篇天秩有禮自其五禮有庸卷四初葉裏

案するに此の注本「有庸」を「五庸」に作り「武」を「才」に作りしなるべし。攷既に第三頁に詳なり。

潘安仁 馬汧督誅

俾百姓流亡類於塗炭

注尚書曰有夏昏德民墜塗炭第四葉裏

案するに既に第四。七頁に出づ。

肇更爲魁

注尚書曰厥厥初葉裏第八行

案するに既に第四九八頁に出づ。

西戎猾夏

注尚書曰蠻夷猾夏第五葉裏

今本尚書舜典篇蠻夷猾夏卷三

案するに李善尚書を引くの下又「孔安國曰猾。亂也」を引き、而も集注本卷百十三下は

顏延年 陶徵士誄

登所以昭末景汎餘波

注尚書曰餘波入于流沙 第十卷表 第八行

案するに既に第三七七頁に出づ。

居備勤儉

注尚書曰克勤于邦克儉于家 第七卷表 第九行

今本尚書大禹謨篇 第八卷表 文同し。

年壯中身

注尚書曰文王受命惟中身 第十二卷表 第四行

今本尚書無短篇 第十六卷表 文同し。

案するに卷五十九踰陀手碑文注此の經を引いて「惟」を「唯」に作る。

謝布達 宋孝武宣貴妃誄

崇徽章而出震司

注尚書曰五百里甸服 第十五卷表 第七行

案するに既に第一一四頁に出づ。

卷第五十八

顏延年 宋文皇帝元皇后哀策文

昌輝在陰

注尚書曰邦乃其昌 第二卷表 第八行

案するに既に第一二四頁に出づ。

俾我王風始基懿德

注尚書曰釐降二女于嬀嬀嬀于虞初行 第三卷表 第三行

今本尚書堯典篇 第十四卷表 文同し。

用集寶命

注尚書曰用集大命 第二卷表 第五行

今本尚書太甲篇上 第十六卷表 文同し。

注又曰無疆天之降寶命 第二卷表 第五行

案するに既に第三三六頁に出づ。

欽若皇姑允迪前徽

注尚書曰欽若昊天 第二卷表 第八行

案するに既に第二五四頁に出づ。

注尚書曰允迪厥德

案するに既に第三八頁に出づ。

德之所屆

注尚書曰惟德動天無遠弗届初行

今本尚書大禹謨篇卷四 文同じ。

謝玄暉 齊敬皇后哀策文

万年冲貌

注尚書曰肆予冲人弗及知第五卷表

今本尚書金縢篇卷三 惟予冲人弗及知第六行

案するに「肆予冲人」佗證無し。此の注述らくは轉寫盤庚下及び大誥の「肆予冲人」に涉りて誤れるなるべし。卷四十九晉紀總論注引く所正に「惟」に作る。

末命是將

注尚書曰道揚末命第五卷表

今本尚書顧命篇卷三 命衛皇后憑王几道揚末命汝嗣訓第七卷表

案するに致既に第三八五頁に詳なり。

蔡伯喈 郭有道碑文

降年不永

注尚書祖乙曰降年有永有不永第七卷表

今本尚書高宗彤日篇卷八 祖乙曰胡代注乃訓于王曰作已各字皆誤降年有永有不永第十卷表

嗟爾來世

注尚書曰予恐來世第七卷表

案するに既に第二二八頁に出づ。

蔡伯喈 陳太丘碑文

兼資九德純備百行

注尚書皋陶曰都亦行有九德第一卷表 禹曰何皋陶曰寬而栗柔而立應而敬授而教直而溫簡而廉剛而塞強而義第二行

今本尚書皋陶謨篇卷二 皋陶曰都亦行有九德第二行 禹曰何皋陶曰寬而栗柔而立應而敬授而教直而溫簡而廉剛而塞強而義第二行

案するに此の注二「皋陶」の字集注本卷四十六 皆「皋繇」に作る。是より「皋繇」の致

既に第一八七頁に見ゆ。

此の注「簡」の字、東注本「束」(重なる)と變體に作る。蓋し李善の舊を存するなり。何を以て之を知る。曰く、安典「簡而無傲」の「簡」、敦堉本釋文「束」束は束の聲類なり。に作り、盤庚下「予其憫爾相爾」敦堉宮本「束」に作り、四命「錫萬乃保」、呂刑「五紱蘭辛」、「五刑不簡」「簡半有衆」「無簡不聽」、岩崎本皆「束」に作る。是れ今本尚書「簡」の字古本「束」に作る者有るの明證に非ずや。晉灼漢書高帝高后陸德明傳文「束」は古の「簡」の字なりと。
此の注「強」の字、後漢書注楊俊傳方術傳引く所の尚書と合す。然れども四部叢刊李六家本は「彊」に作りて今本尚書と合す。
孰れが李善の舊なるを知らず。

此の注「義」の字集注本は「詛」の俗字なるべし、五經文字上
漢書楊震傳注引く所の尚書列傳第三表と合す。蓋し李善の舊を存するなり。
許注注詛王義を引く今據古定尚書を檢するに詛の字、石嶺本に四見、高宗形日一畢命、二教煌
にてさす、亦「詛」に作る。一、雲窗舊刻本に二見、高宗形日一、し神田本に一見、素書して而かき「義」
本に一見、義字形日一、し雲窗舊刻本に二見、高宗形日一、し神田本に一見、素書して而かき「義」
の字各本皆見えず。王引之云ふ、應初本尚書「義」皆「詛」に作る、經義述聞卷二と。乃ち
王説の是なるを知る。
説文を攷ふるに言の部「詛人所宜也、从言、宜亦聲」
从我羊、篇下、而して段王莊曰く、周禮肆師注故書僞爲義、郭司農云、義讀爲儀、古者書
儀但爲義、今時所謂義爲詛、按此則詛義古今字、同時作詛、漢時作義、皆今之仁義字也、
説文の注

と、又玄應衆經音義「字詁古文誼今作義同互音反」を引く。第三册第
七二葉裏 字詁は當に印
是れ知る漢魏の時既に「義」を段りて「詒」と爲せるを。然らば則ち古文尙書「詒」
の字に作るは古法を存する者と謂ふべし。

四門備禮閑心靜居

尚書曰賓于四門四門穆穆

今本尚書典義篇文同じ

案ずるに此の正文は四門禮を備へて賢俊を求むるを謂ひ注引く所の尚書は則ち諺
 矣來朝する者を賓迎するを謂ふ。二文其の意相同しからず。攷既に第 頁に
 詳なり。

書曰洪範九疇彝倫攸敘

尚書箕子謂武王曰天乃錫喪尹韜九疇韜彝倫攸叙第五行

今本尚書洪範序武王勝殷以箕子歸作洪範

又經筵子乃言曰「天乃錫禹洪範九德率作九」

「道」に作る。蓋し李晃る所の尚書「攸皆道」

注尚書曰武王有疾弗豫第十二葉表

今本尚書全勝篇序武王有疾釋文曰馬本

又經王有疾弗豫第十二葉表

案するに卷六十陸士衡弔魏武帝文注此の經を引き足利本文選「豫」を「余」に作りて李善の舊を存するに似たれば此の注亦當に「余」に作るべきかと疑はる。

屈己弘化

注尚書曰三孤貳公弘化第十三葉表

案注本(卷百十六第三葉裏)「貳」を「三」に作り

今本尚書周官篇少師少傅少保曰三孤貳公弘化第十三葉表

案するに此の注「三」に作る者は後漢書當道傳注列傳十三引く所と合す。但李善の舊案にし難し。

元渠時珍

注尚書曰獯厥渠魁第十三葉裏

案するに既に第九八頁に出づ。

不貳心之臣

注尚書曰先君文武則亦有熊羆之士不貳心之臣第十三葉裏

足利本四部本淺野本

今本尚書康王之誥篇昔君文武陽句則亦有熊羆之士不二心之臣第十三葉裏

案するに今本尚書「昔君」の語顧命と康王之誥とに各一見するのみにして而も其の語甚だ不習。然るに顧命の「昔君」は李注引いて「昔先君」に作れば第五頁康王之

諸事此の注引く所の「先君」を以て是と爲すべきに似たり。
卷四十九晉紀總論注此の經を引いて「昔君」に作るは恐らくは後人の改むる所なるべし。

嗣王荒怠於天位

注尚書曰商王受荒怠弗敬第十四葉表

今本尚書泰誓篇下今商王受桀侮五常荒怠弗敬第十四葉裏

案するに神田本内野本尚書「商王」の上「今」の字無し。内野本尚の字の初に今ナリと記す。

注又伊尹曰天位艱哉第十四葉表

案するに既に第一八一頁に出づ。

新語允正

注尚書曰允迪厥德第二十四葉裏

今本尚書皋陶謨篇允迪厥德第二十四葉裏

案するに此の注「謨」の字集注本卷百十六に在りては「謨」に作る。

説文第十部上を攷ふるに「謨」謨謀也「謨」謨也有りて「謨」無し。今本玉篇乃ち「謨」

の字を収めて「謨」に同じと注す。第十部上蓋し「謨」は「謨」若しくは「謨」の或體なるべし。集韻一切經音義卷四十九第八頁

然るに胤征「聖有謨訓」敦煌本「謨」に作り君牙「顯哉文王謨」岩崎本「謨」に作り

岩崎の字に「讀」
 讀の字を以てす
 大尚書序釋文「讀」の字を出て「字又作讀」と注し、魏師古漢書注「皇
 陶謨」皆「各辭讀」に作れば、皇帝紀元元年詔の注正「讀」を用ひ
 て「讀」の字を用ひざる者有りたるかと疑はる。魏元上注正書序注等
 今李善此の注正に「讀」に作る者有り、又卷五十七、潘安仁馬并智誅注「孔安國尚書傳
 曰讀譯也」讀大馬を引きて亦「讀」に作れば、疑ふらくは李善據る所の尚書「讀」の字を
 用ひたらむか。

孰能光輔五君侯亮二代者哉此注本及六臣注諸本無し。注本に作て而も名校語無し。
 注尙書曰三孫。衛亮天地所余一人。此注諸本及六臣注諸本無し。此注諸本及六臣注諸本無し。此注諸本及六臣注諸本無し。
 之字の諸部本及野本全と云に作る。

今本尚書周官蕭少師少輔少保曰三孤貳公弘化寅亮天地弼予一人第三十三葉裏
案するに此の注「寅」の字今本尚書と異なる。堯典「寅賓出日」の下の段氏猶異に曰
く「説文寅辰名寅敬惕也尚書古本多作寅字故唐人引書多作寅李仲璇孔子廟碑作寅
賓案韵引義淺納曰凡堯典答錫譔寅字似皆當作寅」卷一と。然らば此の經亦李善本
尚書に於ては自ら「寅」に作りしならむ。

此の注「余」の字李善の舊自ら此の字に作りしかと疑はる。卷五十六封燕然山銘注引く所亦本正に「余」に作る。「予」「余」の攷既に第一三頁に見ゆ。

尚書顧命曰皇右憑王几第十五葉車第二行道揚末命

「湯」に作る。

今本尚書顧命篇皇右憑卷十八王几道揚朱命卷十七
案するに集注本卷五十八「憑」干孫字書に云ふに作る者是なり。
中原家本尚書京都府立総合資料館蔵皇照本に據る

正に「鴻」に作る。段王載曰く「鴻今本作憑此は衛包所改也經典凡鴻河鴻依字皆作鴻皮冰反未有作憑者衛包改尚書之鴻爲憑而開寶中又改釋文之鴻爲憑」附錄第六、第三葉末と。此の

注引く所以て段説の塙證と爲すべし。
主又曰出綴本于庭咫翼日王弱集注本・足利本・四部本・津野本・「主」と於に作る。集注本翼を「主」に作る。

今本尚書顧命篇出綴衣于庭起翼曰乙丑王崩卷八案此の經を引いて「於」に作れば此の

注亦「於」の字是なり。蓋し李善の舊自ら然りしのみ。

注亦「於」の字是なり。蓋し李善の舊自ら然りしのみ。

注亦「於」の字是なり。蓋し李善の舊自ら然りしのみ。

集注本此の注「立」に作る者从ふべし。中原家本内野本尚書並に正に「立」に作る。然し陸氏衛弔魏武帝文注全條「王翼日乃寢」を引いて亦「翌日」に作る、見るべし。李善疏る所の尚書「立日皆「翌」に作りて「翼」に作るざりしを。段玉裁曰く「翌今本作翼衛弔之誤也。事韵一屋聖音余六切明也。書翌曰乙丑劉昌宗讀王氣按此本周禮司几筵音義據劉此讀可證翌爲翌之假借不容改爲翼也」（第五葉裏）と。

景命不永大漸彌留

尚書曰降年有永有不永

案するに既に第四八四頁に出つ

又曰疾大漸惟并病日臻既彌留

今本尚書顧命篇疾大新惟我病日臻既彌留卷十八 第十五葉表

案するに李注引く所「爾」通「爾」を「全」途に作りて隸古定尚書と合する者多ければ「彌」亦「弥」に作る者恐らくは李の舊に近かるべし。内野本尚書正に「弥」に作る。

天璽璫曜胡代寶貝に云々璫曜

注尚書曰在璫璫王衛以齊七政第十六葉表 互より第四行

今本尚書舜典篇在璫璫王衛以齊七政

案するに此の注「璫」の字當に「璫」に作るべきに似たり。攷既に第四八頁に詳なり。(此の正文「璫」に作り注は「璫」に作るが故に李善又「璫與璫同」と注せり)

欽若元輔

注尚書曰欽若昊天第十六葉表 互より第三行
案するに既に第三五頁に出づ。

卷第五十九

王簡棲 頭陀寺碑文

然語彙備者必非宗於九疇

注尚書武王訪于箕子曰我不知義倫攷攷初葉表 互より第三行

今本尚書洪範篇序武王勝殷賜司以箕子歸作洪範

又經王訪于箕子王乃言曰賜司我不知其義倫攷攷
案するに此の注「攷」の字當に「適」に作るべきに似たり。攷既に第三頁に見ゆ。

遂欲格百齡於中身

注尚書曰文王受命唯第五葉表 第六行

今本尚書無逸篇文王受命惟第五葉表 第六行
案するに卷五十七陶徵士誄注此の經を引いて「唯」を「性」に作る。然れども此の注「唯」の字必ずしも轉寫改むる所に非ず。攷既に第一三九頁に見ゆ。

祖武宗文之德昭升嚴配

注尚書曰至顯文武昭升于上第六葉表 互より第三行

今本尚書文侯之命篇王若曰義和至顯文武克憚明德昭升于上敷聞在下
案するに「不顯文武克憚明德」の傳に曰く「大明乎文王武王之德能詳憚顯用有德」

と。又「昭升于上云々」の傳に曰く「更述文王所以王世文王聖德明升于天而布聞在下居」
而して王鳴盛此の傳を講すること左の如し。曰く

上文王顯與至顯武文王諱の義同謂大明之文武也傳謂文侯大明乎文王武王之道

而克憚明德若亦謂指文侯則德孔亦知其不可解為能詳憚顯用有德諱甚矣至昭升于上云云則斷不能以爲說文侯乃始云更述文王所以王夫至顯云云若使果稱文侯非謂文武

則昭升之上當別以文王起文登平王豫知後世有為其言作傳者必將表明吾意而姑省之乎且昭升于上數聞在下者即此明德也既解明德為文侯顯用有德則此昭升數聞者謂何皆非也後漢書注
 と。即ち王氏は傳が經の「丕顯文武」を解して文侯大明於文王武王之德と為し經「昭升于上」を解して文王のことと為せるは前後乖離す。此の經「丕顯」以下皆平王が文王武王を説ける者と解すべしと謂ふなり。
 若し此の傳文の意王氏解する所の如しとせば李善此の注「丕顯文武」と「昭升于上」とを連引せる者明に偽孔氏の解と相合せずして偶王氏の解と暗合するに似たり。然らば則ち李善此の經を讀んで孔傳に从はざりしか抑李善見る所の孔傳今の孔傳と異りしか。
 竊に謂へらく李善引く所是れ孔傳と相求れるに非ず。王氏偶誤りて傳文を解せるのみ。傳謂ふ所の「大明乎文王武王之德」とは猶是れ「大明哉文王武王之德」と謂はんがこときのみ。文侯大明乎文王武王之德の謂には非ざるなり。「大明乎文王武王之德」の文卒然之を讀まば王氏の如く解せられざるに非ず。然れども是れ傳文の本義には非ざるなり。
 今尚書一書に就いて其の傳文を攷ふるに所讀轉訛止詞の上に位する助字は皆「於」若しくは「于」を用ひて「乎」を用ふる者一も有る無く「乎」の字惟疑問反語詠歎の句末に用ひらるのみ。是を以て「大明乎」の「乎」は衆語落語等の傳「已乎」の「乎」

と同一の用法なるを知るなり。

唐初已前の人尚此の傳「大明乎文王武王之德」を解して「大明哉文王武王之德」の意と為し「文侯大明乎文王武王之德」の意と為さざりしこと晉世家「丕顯文武能慎明德」の傳解孔傳を約舉して「文王武王能詳慎顯用明德」の二字を節去す。と為せること李善此の注引く所とに據りて之を知るべし。
 王氏自ら聲書を設けて自ら之を撃つは謬れりと謂ふべし。

格天光表之功

注尚書曰成湯時則有若伊尹格于皇天第六卷表

案するに既に第一八一頁に出づ。

注又曰光被四表格于上下

今本尚書堯典篇卷二 文同じ。

康濟多難

注尚書曰康濟小民第六卷表

今本尚書蔡仲之命篇卷三 文同じ。

沙場一候

注尚書曰西被于流沙第六卷表

今本尚書禹貢篇卷六 文同じ。

觀政蒞蒲維樹風江漢

注 尚書曰以爾友邦冢君觀政于尚第六葉表

今本尚書泰誓篇上卷十一 文同じ。

注 又曰影善擯惡樹之風第六葉裏

今本尚書畢命篇影善擯惡樹之風第六葉裏

案するに此の注「影」の字疑ふらくは當に「善」に作るべし。攷既に第二二八頁に見ゆ。

安歩三危

注 尚書曰亂三苗於三危第八葉裏 足利本四部本淺野本「於」を「子」に作る。

今本尚書舜典篇亂三苗于三危卷三 第十四葉裏

香山廣運

注 尚書曰帝德廣運第八葉裏

案するに既に第一六一頁に出づ。

金粟來儀

注 尚書曰鳳凰來儀第八葉裏 餘本也に鳳「儀」に作る。

案するに既に第一五九頁に出づ。

沈休文 齊故安陸昭王碑文

靈源與積石爭流

注 尚書曰導河積石至于龍門第九葉裏

今本尚書禹貢篇導河積石至于龍門卷六

案するに此の注「積」の上疑ふらくは當に「目」の字有るべし。攷既に第九四頁に見ゆ。

一德無喪

注 尚書曰德惟一動罔不吉第十葉表

今本尚書咸有一德篇卷八 文同じ。

登庸位事之年足利本四部本淺野本「登」を「位」に作る。

注 尚書帝曰疇咨若時登庸初行

案するに既に第二二四頁に出づ。

注 尚書曰位事惟能第十葉裏

今本尚書武成篇位事惟能卷十一

案するに其堂書鈔第五九 尚書を引いて「位事惟能」に作り此の注引く所と合す。事端六五に位を以て謂の位字と爲す。謂は即ち位の正字。を主徳經書に「位」を出して曰く由無此字民文作「位」云。

是れ知る唐初尚書尚「位事」に作りたる者有るを。蓋し偽經本「位」(位事)に作り傳

は則ち訓じて「位」と爲せしを「位」を以て位と爲すの證未だ明文通訓を改めて「位」に作りしなるべし。武内博士本註に位に改めらる。後人傳に據りて徑に經

孔廣陶書鈔此の文の校注に曰く「今家書周官能作煩」と。是れ此の「蒞事惟能」

を以て周官「蒞事惟煩」の異文なりと爲すなり。陶說殊に祖國にふべからず。

又案するに僞孔傳「蒞事」を釋して「居位理事」と爲せは是れ「位」を以て「位」を訓

せしなり。今文選の正文を攷ふるに「登庸蒞事」は上句「濯冠出仕」と相偶して

意を爲すを以て「位」の字當に「位」と訓すべからず。疑ふらくは當に訓するに「視」

釋語通視 若しくは「臨」を以てすべし。

帝難其人

注 尚書禹曰惟帝其難之第十葉表

今本尚書皇陶謨篇禹曰吁威若時惟帝其難之卷四 第十八葉表

出納惟允

注 尚書帝曰龍命汝作納言夙夜出納朕命惟允第十葉表

今本尚書典範篇帝曰龍命汝作納言夙夜出納朕命惟允卷三 第六葉表

案するに此の注「女」に作る者是なり。足利本尚書「女」に作る。今本尚書「汝」の字

唐初本「女」に作れるに似たり。攷既に第 頁に見ゆ。

弘義讓以易君子

注 尚書武王曰易哉夫子第十葉表

今本尚書牧誓篇王曰易哉夫子卷二 第十八葉表

案するに攷既に第 頁に見ゆ。

振平惠以字小人

注 尚書曰無或敢於小人之攸箴第十葉表

今本尚書盤庚篇上第四葉表 文同じ。

地般江漢

注 尚書曰九江孔殷第二葉表

案するに既に第二。一頁に出づ。

明德慎五

注 尚書王曰文王克明德慎罰第十葉表

今本尚書康誥篇王若曰惟乃丕顯考文王克明德慎罰卷十四 第三葉表

案するに尚書此の經の傳に曰く「能顯用俊德」と。是れ「顯用」を以て「明」を釋

し「俊德」を以て「德」を釋せしなり。

今此の碑文の説を攷ふるに「明德」二字是れ一語俊德を顯用すとの謂に非ざるに似

たり。然るに李善此れに注して康誥を引く其の説協はす。

又案するに今康誥此の「明德」の語に類する者を尚書内に非むるに多方「罔不明德

慎罰」文侯之命「克慎明德」有り。而して二篇の「德」は傳習釋して「有德」と爲し

て「俊德」と爲さず。「俊德」の二字を以て「德」の字を釋せるは惟康誥此の經の傳の

み。然らば康誥の「明德」は本「明明德」に作りしに非ざるか。經、正に「明明德」に作る。故に傳特に「俊德」を以て之を釋し、李善亦引いて此の碑文の「明德」の語を證せしに非ざるか。段玉裁曰く、「荀卿正論篇書曰克明明德。德玉裁按此引康誥也」と。又曰く、「尚書大傳周傳曰書曰惟乃丕顯考文王克明俊德。德玉裁按俊字當是本作明此必漢人所改大傳孫卿言明明皆今文尚書也」附錄卷上と。今古文其の本二に非ず。今文「明明德」の語亦以て僞孔氏本の舊を推すの旁證と爲すを得む。

蕞駁胥萃

注 尚書曰今商王受爲天下逋逃主第十三葉裏

今本尚書武成篇今商王受爲天下逋逃主第十三葉裏。案するに尚書此の文の傳に曰く、「逋亡也天下罪人逃亡者而紂爲魁主寇聚淵府數澤首也言受用逃亡者與之爲魁首爲主人萃訓聚也言若其數入寇故云寇聚水深謂之淵藏物謂之府史遷急就篇云司農少府國之淵淵府類故言淵府水鍾謂之澤無水則名數駁澤大同故言數澤萃淵駁三者各爲物室言紂與亡人爲主亡人歸之若蟲之寇聚魚歸淵府數集駁澤言紂爲大姦也」第十三葉裏と。此れに據れば正義は此の傳を讀みて、「而紂爲魁主」の下に句し寇聚淵府數澤の三者を相對せしめしを知る。隨つて經を讀みては亦「逋逃主」の下に於て何を絶ち萃淵駁相對せしめしこと明かなり。然るに正義下文又曰く「據傳意主字下讀爲便」と。此れに據れば則ち經を讀みて「逋逃」下に逗し「主」

爲の字去聲に讀む

萃淵駁」を解して「主於萃淵駁」と爲せるに似たり。傳文既に含糊正義亦支離正義傳

今文逋正文を攷ふるに見れば明かに「萃」一字一語虚置たり。「淵駁」二字一語實置たり。而して李善之に注して尚書を引けば是れ萃は尚書此の文を讀みて「爲天下逋逃主」を以て一句と爲し「萃淵駁」を解して適ほ「萃於淵駁」のごとくせしなるべし。果して然らば李の讀は左氏昭公七年傳「紂爲天下逋逃主萃淵駁」の杜注杜注又案するに正文此の句の下句「蕞蒲攸在」は左氏昭公廿年傳文に本づけるに似たれば傳を引く。此の句亦恐らくは左氏傳文前出に據れるなるべし。

蕞渠心前

注 尚書曰厥厥渠魁第十三葉裏

案するに既に第 頁に出づ。

青服滿塗夷歌成韻

注 尚書曰島夷卉服第十三葉裏

案するに此の注「島」の字疑ふらくは當に「夷」に作るべし。攷既に詳に第 頁に見る。

而邁疾強困欬焉大漸

注 尚書曰疾大漸惟艱病曰臻既強困第十三葉裏

隨つて李善は傳を讀んで「爲魁主」の下に句し「寇聚淵府數澤」を解して「寇聚於淵府數澤」の意と爲せしかと疑はる。

案するに既に第 五二七頁に出づ。
遠有慚徳

注 尚書曰惟有慚徳 第廿六葉表 第三行
今本尚書仲虺之誥篇 卷八 第廿五葉表 文同じ。

惟幾而爾固
注 尚書曰疾大漸惟幾 第廿六葉表 第七行

案するに既に第 五二七頁に出づ。

時皇上納麓在辰登庸伊始

注 尚書曰納于大麓烈風雷雨弗迷 第廿六葉表 第五行

案するに既に第 四三三頁に出づ。
注 尚書曰若時登庸 第廿六葉表 左より第三行

上原
足利本四部本並野下
案平本と下に作る。

又案するに正文「時皇上納麓在辰登庸伊始」を飫するに明帝將に登用せられて天子と爲らむとし先づ試用せらるるを謂へるに似たり。
錢注此の如く又卷四十八揚子雲劇秦美新「陛下以至聖之徳龍興登庸」の「登庸」の語は正に登庸嗣位を謂ふ。

皮錫瑞堯典「若時登庸」下の攷證に曰く「張守節正義 正義 曰言將登用之嗣位也以登庸爲登用嗣位蓋本漢人舊說三家今文之遺揚雄美新云々此今文說以登庸爲登帝位之證」と。皮説の如くんば此の文及び美新の文用ひる所の「登庸」の語其の証皆

今文説に从へる者と謂ふべし。

今李善此の文に注して尚書を引き又美新に注して「登庸已見上文」の尚書を指す。
云ふも李必すしも尚書の「登庸」を解して登庸嗣位の意と爲せるには非ず惟其の語の據る所を證せしのみなるべし。

分命既親

注 尚書曰分命義叔 第廿七葉表 第七行

今本尚書堯典篇分命義仲 第廿七葉表 第七行
案するに攷既に第 一〇二頁に比し。

望曲阜而含悲

注 尚書曰魯侯伯禽宅曲阜 第廿七葉表 第九行

案するに既に第 三九九頁に出づ。

至公以奉上鳴謙以接下
注 尚書曰奉先思孝接下思恭 第廿七葉表 第四行

今本尚書太甲篇中 卷八 第廿三葉表 文同じ。

涉夏納漢

注 尚書曰涉于漢 第廿八葉表 第七行

今本尚書禹貢篇涉于洛傳曰漢上曰洛 卷六 第廿九葉表
又涉于江沱潛漢逾于洛 第廿七葉表 釋文に曰く「本可作潛于漢非」と。

案するに尚書「趙于漢」に作る者徴無し。再攷を疎つ。

卷第六十

仕彦昇 齊竟陵文宣王行狀

編配陳服

注 尚書曰非台小子敢行編配第二葉表 第七行

今本尚書湯誓篇卷八 第三葉表文同じ。

車夏形勝

注 尚書王曰爰建爾于上公尹茲東夏第二葉表 第八行

今本尚書微子之命篇王若曰隔司爾建爾于上公尹茲東夏卷十三 第六葉表

案するに「爰」に作る者徴無し。再攷を疎つ。

敷輿邦啟

注 尚書曰司徒掌邦教第四葉表 第六行

今本尚書周官篇卷十八 第四葉表文同じ。

下敷五典

注 尚書帝曰契汝作司徒敬敷五教第四葉表 第八行

案するに卷卅八仕彦昇爲范如輿作主立太宰碑表注引く所「五教」の二字を重ね李善の舊を存す。攷彼の條に見ゆ。

注 又曰五典第四葉表 第九行

案するに既に第五。五頁に出づ。

儀形國胄

注 尚書曰垂命汝典樂教胄子第四葉表 第八行

案するに攷既に第二。頁に詳なり。

式見敷奏百揆時序

注 尚書曰敷奏以言第四葉表 第七行

案するに既に第三。三頁に出づ。

注 又曰納于百揆百揆時敘

案するに攷既に第三。七六頁に見ゆ。

舊惟淮海今則神攷

注 尚書曰淮海惟揚州第一葉表 末行

今本尚書禹貢篇淮海惟揚州卷六 第十一葉表

案するに岩崎本尚書内野本尚書正に「揚」に作り此の注と同じ。

王念孫讀書雜誌卷四之五（漢書天文志）に於て揚州の「揚」當に木に从ふべく牛に从ふべからざることを詳論す。其の説是なり。

段氏經解揚州字五阮氏小正揚地攷勅記及公卿禮會職方攷勅記にも説有れと云蓋其の情なるに非かず。

内藤博士景昭敦煌本尚書・岩崎本尚書・内野本尚書俱に正に「楊」に作り、此の注引く所と合す。

皮錫瑞曰く「李巡注爾雅曰江南其氣慘勁厥性輕揚故曰揚州」案するに皮氏公羊注公羊疏引く。釋名揚州國曰揚州州界多水水波揚也。傳李劉之說漢時今文家揚州字或亦以手作揚。今文家證卷二第廿三葉表と。皮説ゆすしも是ならず。凡そ漢人の語を釋する。惟其の音に據りて其の字形に據らざるを常とす。君尊也白虎通。風之爲言胡也白虎通。日實也。月關也釋文。王者往也風俗通。霸者把也風俗通。德得也釋名。等の如き皆是れなり。是を以て或は揚州を解して揚波の意と爲す者有りと雖も直に以て其の字才に从へりとは斷すべからず。段王叔曰く「後人因江南其氣燥勁厥性輕揚之云改爲揚州不知古人多假借所重惟音則州名當依古从木也」釋名卷三と。段説之を得たるに近し。

敷奏朝端百揆惟穆

注尚書曰敷奏以言第六葉表第三行

案するに既に第三六三頁に出づ。

注尚書曰百揆時敘

案するに攷既に第三七六頁に見ゆ。

寄重先顧

注尚書曰成王將崩命召公畢公相康王作顧命第六葉表第四行

案するに既に第四四八頁に出づ。

奄見敷落

注尚書曰帝乃殂落第六葉表第七行

案するに李善の舊「殂」を「徂」に作りしに似たり。攷既に第一七三頁に見ゆ。

龜詳襲古

注尚書曰謀及卜筮第六葉表第七行

案するに既に第一五九頁に出づ。

注又曰乃卜三龜一習吉第六葉表第八行

案するに既に第二六三頁に出づ。

可追崇假黃鉞

注尚書曰王左杖黃鉞第六葉表第九行

今本尚書牧誓篇王左杖黃鉞第十五葉表

案するに説文に「氏大斧也从ナ上聲」段本第十二篇下氏部と有れば「鉞」の字當に「氏」に从ふべきに古書往往「氏」に从ふ者有リ蓋し一畫を嫡せしなり。神田本尚書「氏」に从ふこと此の注と同じ。

他人之善若己有之

注尚書秦穆公曰人之有伎若己有之第六葉表第六行

今本尚書秦穆公曰人之有伎若己有之第六葉表第六行足利本四部手抄野本「伎」と「技」に作る。

又經公曰經人之有伎若己有之第十三葉表

案するに此の注「伎」に作る本有り、「技」に作る本有り李善の舊定め難しと雖も此の經九條本内野本尚書俱に「伎」に作り蓋下「奇技淫巧」神田本「伎」に作れば此の注或は「伎」に作る者なるか。（古抄本「伎」に作り）「伎」の字を動記す。説文を攷ふるに「伎」は與なり（人部）「技」は巧なり。（工部）然れども古「伎」を借りて「技」と爲す例有れば（杜預説文并諸技の注に詳なり）此の「有技」の「技」亦「伎」に作る本有るを妨げざるなり。

注 攷攷無恙

尚書曰禹子亦思曰攷攷（第六行）胡氏攷攷に曰く曰禹當作禹曰言本皆倒と。

今本尚書益稷篇禹拜曰都帝子何言子思曰攷攷（初葉表）

案するに攷攷に第一七九頁に詳なり。

注 又曰無恙無荒

案するに既に第一七九頁に出づ。

大新彌留

注 尚書曰疾大漸惟幾病日臻既彌留（第八葉表）

案するに既に第一五三七頁に出づ。

陸士衡 弔魏武帝文

豈不以竊高明之質而不免卑濁之累

注 尚書曰高明（子思）今本尚書洪範篇高明（子思）今本尚書洪範篇高明（子思）

案するに夏侯孝若東方朔書贊注尚書を引いて準注本は「亮」を「亮」に作る。

此の注尚書を引くの下又「高明謂日月世」の六字有り。姜暉謂へらく此の六字尚書注を并引せるなりと。乃ち之が説を爲して曰く「尚書孔傳高明謂天疏云天之德高明近世王氏鳴盛孫氏星衍集馬鄭注余氏蕭客銓古注但有馬融曰高明君子亦以德懷

世左氏文五年傳杜注高明猶亢爽世漢書敘傳師古注洪範云高明子思謂人雖有高明之

度而當執柔乃能威（威の字）德世皆無高明日月之辭疑洪範此節鄭注已逸也。（梁氏初經者曰六第廿葉表引）

と。然れども此の六字必すしも尚書注を引けるには非ざるなり。今文選正文を攷

ふるに「資高明之質而不免卑濁之累」は「日蝕由乎文分」と相應じ「居常安之勢

而終嬰傾離之患」は「山崩起於朽壤」と相應ず。乃ち知る「高明之質」は「日月」

を指し「常安之勢」は「山岳」を指すを。是を以て注又「高明謂日月世」と言へる

のみ。上引尚書の「高明」に注せしには非ざるなり。設し李善をして洪範注を引か

しめは當に「某注曰」の字有るべきなり。

已而格上下者

帝文李注引尚書翌日乃瘳孔安國曰翌日明日也然則唐初尚書未詳也凡古書翌日字斷無作翼者唐注漢書其作翼者皆天寶已後漢人妄改也唐書翼也 附翼卷十四 第六葉裏

次洛酒而大新指六軍曰念哉唐注漢書

尚書曰東至於洛酒第十三葉表

今本尚書禹貢篇東過洛酒至于大伾卷六 第六葉裏

案するに攷既に第一二六頁に見ゆ。

注尚書曰帝念哉

案するに既に第一二六頁に出づ。

恨末命之微詳

注尚書曰道揚末命第十三葉裏 第九行

今本尚書顧命篇皇右憑王几道揚末命命汝嗣訓卷十八 第七葉表案するに攷既に第三八五頁に詳なり。

王僧達 祭顏光祿文

夫德以過樹

注尚書曰樹德務遠第十六葉裏 第五行

今本尚書秦誓篇下卷十一 第十二葉裏

文同じ。

學次經沙

注尚書曰披于流沙第十六葉裏 第四行 四部本漢書本「流」の上「西」の字有り。足利本四部本漢書本「六」字有り。此に作る。
今本尚書禹貢篇西披于流沙卷六 第三葉裏

[illegible]

其書主として、（一）尚書は、孔氏傳本を採ること當に疑ふべからず。然るに諸書記する
 所に據れば、隋唐の時所謂孔子傳本、尚書なる者大約三種有りたるに似たり。即ち王肅
 本、堯典「蒼術五典」以下の經字を分ちて、舜典篇と爲し、以て、僖孔氏本、堯典に續けたる
 者、其の一なり。（二）王肅字叔共、琅邪人、魏中興末、爲太學博士、授博士官、（三）孔氏傳本に於て、
 堯典篇の「三十三篇」を分ちて、（四）堯典、舜典、禹貢、皋陶謨、（五）皋陶謨、（六）皋陶謨、（七）皋陶謨、（八）皋陶謨、（九）皋陶謨、（十）皋陶謨、（十一）皋陶謨、（十二）皋陶謨、（十三）皋陶謨、（十四）皋陶謨、（十五）皋陶謨、（十六）皋陶謨、（十七）皋陶謨、（十八）皋陶謨、（十九）皋陶謨、（二十）皋陶謨、（二十一）皋陶謨、（二十二）皋陶謨、（二十三）皋陶謨、（二十四）皋陶謨、（二十五）皋陶謨、（二十六）皋陶謨、（二十七）皋陶謨、（二十八）皋陶謨、（二十九）皋陶謨、（三十）皋陶謨、（三十一）皋陶謨、（三十二）皋陶謨、（三十三）皋陶謨、（三十四）皋陶謨、（三十五）皋陶謨、（三十六）皋陶謨、（三十七）皋陶謨、（三十八）皋陶謨、（三十九）皋陶謨、（四十）皋陶謨、（四十一）皋陶謨、（四十二）皋陶謨、（四十三）皋陶謨、（四十四）皋陶謨、（四十五）皋陶謨、（四十六）皋陶謨、（四十七）皋陶謨、（四十八）皋陶謨、（四十九）皋陶謨、（五十）皋陶謨、（五十一）皋陶謨、（五十二）皋陶謨、（五十三）皋陶謨、（五十四）皋陶謨、（五十五）皋陶謨、（五十六）皋陶謨、（五十七）皋陶謨、（五十八）皋陶謨、（五十九）皋陶謨、（六十）皋陶謨、（六十一）皋陶謨、（六十二）皋陶謨、（六十三）皋陶謨、（六十四）皋陶謨、（六十五）皋陶謨、（六十六）皋陶謨、（六十七）皋陶謨、（六十八）皋陶謨、（六十九）皋陶謨、（七十）皋陶謨、（七十一）皋陶謨、（七十二）皋陶謨、（七十三）皋陶謨、（七十四）皋陶謨、（七十五）皋陶謨、（七十六）皋陶謨、（七十七）皋陶謨、（七十八）皋陶謨、（七十九）皋陶謨、（八十）皋陶謨、（八十一）皋陶謨、（八十二）皋陶謨、（八十三）皋陶謨、（八十四）皋陶謨、（八十五）皋陶謨、（八十六）皋陶謨、（八十七）皋陶謨、（八十八）皋陶謨、（八十九）皋陶謨、（九十）皋陶謨、（九十一）皋陶謨、（九十二）皋陶謨、（九十三）皋陶謨、（九十四）皋陶謨、（九十五）皋陶謨、（九十六）皋陶謨、（九十七）皋陶謨、（九十八）皋陶謨、（九十九）皋陶謨、（一百）皋陶謨、（一百一）皋陶謨、（一百二）皋陶謨、（一百三）皋陶謨、（一百四）皋陶謨、（一百五）皋陶謨、（一百六）皋陶謨、（一百七）皋陶謨、（一百八）皋陶謨、（一百九）皋陶謨、（二百）皋陶謨、（二百一）皋陶謨、（二百二）皋陶謨、（二百三）皋陶謨、（二百四）皋陶謨、（二百五）皋陶謨、（二百六）皋陶謨、（二百七）皋陶謨、（二百八）皋陶謨、（二百九）皋陶謨、（三百）皋陶謨、（三百一）皋陶謨、（三百二）皋陶謨、（三百三）皋陶謨、（三百四）皋陶謨、（三百五）皋陶謨、（三百六）皋陶謨、（三百七）皋陶謨、（三百八）皋陶謨、（三百九）皋陶謨、（四百）皋陶謨、（四百一）皋陶謨、（四百二）皋陶謨、（四百三）皋陶謨、（四百四）皋陶謨、（四百五）皋陶謨、（四百六）皋陶謨、（四百七）皋陶謨、（四百八）皋陶謨、（四百九）皋陶謨、（五百）皋陶謨、（五百一）皋陶謨、（五百二）皋陶謨、（五百三）皋陶謨、（五百四）皋陶謨、（五百五）皋陶謨、（五百六）皋陶謨、（五百七）皋陶謨、（五百八）皋陶謨、（五百九）皋陶謨、（六百）皋陶謨、（六百一）皋陶謨、（六百二）皋陶謨、（六百三）皋陶謨、（六百四）皋陶謨、（六百五）皋陶謨、（六百六）皋陶謨、（六百七）皋陶謨、（六百八）皋陶謨、（六百九）皋陶謨、（七百）皋陶謨、（七百一）皋陶謨、（七百二）皋陶謨、（七百三）皋陶謨、（七百四）皋陶謨、（七百五）皋陶謨、（七百六）皋陶謨、（七百七）皋陶謨、（七百八）皋陶謨、（七百九）皋陶謨、（八百）皋陶謨、（八百一）皋陶謨、（八百二）皋陶謨、（八百三）皋陶謨、（八百四）皋陶謨、（八百五）皋陶謨、（八百六）皋陶謨、（八百七）皋陶謨、（八百八）皋陶謨、（八百九）皋陶謨、（九百）皋陶謨、（九百一）皋陶謨、（九百二）皋陶謨、（九百三）皋陶謨、（九百四）皋陶謨、（九百五）皋陶謨、（九百六）皋陶謨、（九百七）皋陶謨、（九百八）皋陶謨、（九百九）皋陶謨、（一千）皋陶謨、（一千一）皋陶謨、（一千二）皋陶謨、（一千三）皋陶謨、（一千四）皋陶謨、（一千五）皋陶謨、（一千六）皋陶謨、（一千七）皋陶謨、（一千八）皋陶謨、（一千九）皋陶謨、（二千）皋陶謨、（二千一）皋陶謨、（二千二）皋陶謨、（二千三）皋陶謨、（二千四）皋陶謨、（二千五）皋陶謨、（二千六）皋陶謨、（二千七）皋陶謨、（二千八）皋陶謨、（二千九）皋陶謨、（三千）皋陶謨、（三千一）皋陶謨、（三千二）皋陶謨、（三千三）皋陶謨、（三千四）皋陶謨、（三千五）皋陶謨、（三千六）皋陶謨、（三千七）皋陶謨、（三千八）皋陶謨、（三千九）皋陶謨、（四千）皋陶謨、（四千一）皋陶謨、（四千二）皋陶謨、（四千三）皋陶謨、（四千四）皋陶謨、（四千五）皋陶謨、（四千六）皋陶謨、（四千七）皋陶謨、（四千八）皋陶謨、（四千九）皋陶謨、（五千）皋陶謨、（五千一）皋陶謨、（五千二）皋陶謨、（五千三）皋陶謨、（五千四）皋陶謨、（五千五）皋陶謨、（五千六）皋陶謨、（五千七）皋陶謨、（五千八）皋陶謨、（五千九）皋陶謨、（六千）皋陶謨、（六千一）皋陶謨、（六千二）皋陶謨、（六千三）皋陶謨、（六千四）皋陶謨、（六千五）皋陶謨、（六千六）皋陶謨、（六千七）皋陶謨、（六千八）皋陶謨、（六千九）皋陶謨、（七千）皋陶謨、（七千一）皋陶謨、（七千二）皋陶謨、（七千三）皋陶謨、（七千四）皋陶謨、（七千五）皋陶謨、（七千六）皋陶謨、（七千七）皋陶謨、（七千八）皋陶謨、（七千九）皋陶謨、（八千）皋陶謨、（八千一）皋陶謨、（八千二）皋陶謨、（八千三）皋

然らば李善據る所の孔傳本は右に擧げたる三本の内其の何れに屬する者なりや。今李善引く所の尚書を攷ふるに卷一東都賦注卷十一魯靈光殿賦注泉福殿賦注卷十五思玄賦注卷卅一江文通雜體詩注卷卅七勸進表注卷四十五宮室賦注卷四十六王元長三月三日曲水詩序注卷四十八劇秦美新注等に於て「曰若稽古帝舜曰重華協于帝堯哲文明溫恭允塞」を僉升開乃命以位」の一句或は數句を引き卷十西征賦注卷卅三廬陵王墓下作注卷五十四辨命論注卷六十齊竟陵文宣王行狀注等に於て「帝乃徂落」を引く。而して「曰若稽古帝堯云々」の廿八字は姚方輿本舜典の一本にのみ有り「帝乃徂落」は姚方輿本舜典のみ此くの如く作るを以て前典經文李善據る所は乃ち姚本舜典なるを知らる。

李善據る所の尙典は正に姚本なること終に疑ふべからず。而して李善尙書を引くに尙典のみは姚本に據り庾篇は則ち王注尙典を補へる本。若しくは范注尙典を補へる本より采ること當に之れ有るべからざれば其の據る所の尙書は姚本尙典を以て東晉の書を補へる本なりしこと亦容に疑ふべからざるなり。然らば則ち李善本尙書は孔穎達等尙書正義の據る所の本及び現今通行本に同一種に屬するを知るなり。然り而して李善本尙書は正義本及び現行本に同一種に屬すと雖も其の間字句句逗の異同固より異なるらず。又竝しく姚本尙典を補へる尙書かと疑はるる唐の定本及び

欠

卷五十九齊故安陸昭王碑文注尚書曰納于大麓烈風雷雨弗迷孔安國曰麓錄也亮納舜使錄萬機之政

案するに李善引く所の傳文「納」の上「亮」の字多し。
沈約宋書百官志上「王肅注尚書納于大麓曰亮納舜於尊顯之官大錄萬機之政也」
本志廿七卷を引く。王注亦「納」の上「亮」の字有りたるに似たり。
又案するに李善引く所沈約引く所首或は意を以て「亮」の字を加へしやも亦未だ知るべからず。

今本尚書與典論哲文明溫恭允塞孔安國曰舜有深智文明溫恭之德信允塞上下
卷十一何平叔景福殿賦注尚書曰重華濬哲文明溫恭允塞孔安國曰舜有深智文明溫恭之德信允塞四表上下也

案するに所本傳「允塞」を作る者は「允」「亮」字形相似て誤れるのみ。傳既に經の「允」を訓するに「信」を以てすれば傳「信」の下又「允」の字有るべきに非ざるなり。正義本正義信能允。足利古本考文。岳本既合抄勘。尚「允」に作りて李善本と正に合す。
李本此の傳「允塞」の下「四表」の二字多し。山井鼎考文に據れば足利古本「允塞四表至于上下也」に作りて李本と甚だ近し。此の偏孔傳想らくは堯典の「允彼四表格于上下」に本づけるものなるべければ足利古本最も偏孔傳の舊を採ると謂ふを得む。疑ふらくは李本亦足利古本と相同じかりしに文竊轉寫者此の注「四表」の下「至于」の二字を刪去せしに非ざるか。

尚書正義此の傳を擧げて、「言能充滿天地之間矣典所謂格于上下是也」不言四表者以四表外無極非可窮滿故不言之」と言へは其の傳既に「四表至于」の四字無かりしなり。阮元正義本を是とし、足利古本を非とするに意有るに似たれども、校勘記足利古本は李善引く所と相近くして而も尤も偏孔氏の舊を採するかと疑はるるを以て、妄に之を非とすべからざるなり。

今本尚書典義杜預注王衡以齊七政傳機衡王者正天文之器可運轉者阮氏校勘記曰在本國本傳王作王屋也卷五十三運命論注尚書曰玆機王衡以齊七政孔安國曰機衡王者正天文之器可運轉者

今本尚書典義杜預注王衡以齊七政傳機衡王者正天文之器可運轉者阮氏校勘記曰在本國本傳王作王屋也卷五十三運命論注尚書曰玆機王衡以齊七政孔安國曰機衡王者正天文之器可運轉者

今本尚書典義杜預注王衡以齊七政傳機衡王者正天文之器可運轉者阮氏校勘記曰在本國本傳王作王屋也卷五十三運命論注尚書曰玆機王衡以齊七政孔安國曰機衡王者正天文之器可運轉者

今本尚書典義杜預注王衡以齊七政傳機衡王者正天文之器可運轉者阮氏校勘記曰在本國本傳王作王屋也卷五十三運命論注尚書曰玆機王衡以齊七政孔安國曰機衡王者正天文之器可運轉者

今本尚書典義杜預注王衡以齊七政傳機衡王者正天文之器可運轉者阮氏校勘記曰在本國本傳王作王屋也卷五十三運命論注尚書曰玆機王衡以齊七政孔安國曰機衡王者正天文之器可運轉者

は正義本亦「所」の字無きに似たり。文説を攷ふるに、「所」の字無き者を長と爲す。

今本尚書典義望于山川傳九州名山大川五岳四瀆之屬皆一時望祭之

卷三祭平子東京賦注孔安國尚書傳曰杜遠者望而祭之

案するに李善引く所は尚典の傳文ならむに、而も今本尚書傳此の文無し。

漢書郊祀志上「望于山川」の節師古注に曰く「望者謂杜遠者望而祭之」史記五帝本紀望于山川也。其の解相同し。と。李善引く所の孔傳と正に合す。節師古也す據る所有るべし。

今本尚書典義望于山川傳九州名山大川五岳四瀆之屬皆一時望祭之

卷五十七通安仁馬注尚書曰魯果滑夏孔安國曰滑紀也

案するに李善の尚書「滑」に作りて「滑」に作らず。攷既に第五一三頁に見ゆ。

今本尚書典義望于山川傳九州名山大川五岳四瀆之屬皆一時望祭之

卷五十七馬注尚書曰魯果滑夏孔安國曰滑紀也

案するに李善據る所の尚書「滑」の字に作りて「滑」の字に作らず。攷既に第五二五頁に見ゆ。

今本尚書典義望于山川傳九州名山大川五岳四瀆之屬皆一時望祭之

卷二祭平子西京賦注孔安國尚書傳曰敬重戒也

案するに説文第三篇上言部に曰く「敬重戒也。以言以敬敬亦聲」と。又第八篇上人部に曰く「敬重也。以言以敬敬亦聲」と。是れ「敬」「重」兩字音義俱に同じきなり。然れども、

眞本玉篇卷九「敬」字の下「尚書口水敬誓孔安國曰敬書戒也」を引き慧琳一切經音義「鵝聲」を出して其の注に曰く「孔注尚書云敬戒也古今正字從言敬聲」卷八十五と野王琳引く所善引く所と正に合すれば李善の尚書自ら「敬」に作りて「敬」に作らざりしかと疑はる。乃氏第五十三李中耀州七律敬言有之「敬」無し唐韻并八換又李善據る所の尚書傳文既に「敬」に作れりとせば其の經文亦「敬」眞本玉篇敬書を引いて經傳即正に敬に作る若しくは「敬」に作りて「敬」に作らざりしならむ。何となれば若し經「敬」に作らば傳之を改めて「敬」に作るを要せざればなり。故に李善の尚書は經傳俱に「敬」に作りしか否らずんば經は「敬」に作り傳は之を改めて「敬」に作りしか二者其の一なりしならむ。

今本尚書大禹謨卜不習吉。○**傳**習因也。
卷五十六楊仲武詩注尚書曰又曰卜不彛吉。○**孔安國曰**彛因也。

案するに李善標所の尚書大禹謨「鯀」に作りて「白」に作らず、攷既に第五一〇頁に見ゆ。

夜思之須明行之可以爲卿大夫

卷廿六 謝玄暉壯郡臥病呈沈尚書詩注尚書曰夙夜汲明有家孔安國曰夙早也汲深也早夜思之須明行之

案するに「今本尚書傳」一「汝須也」の文解すべからず、疑ふらくは字の誤有るべし。

段玉裁曰く「伯孔博浚須也不可解馬季長曰浚大也說者傳諸駭大也之訓王叔諤謂浚
是傑之字誤古義多假傑係須也卽許頤也馬云倭大也卽說文人部之倭大也」博學堂
段說甚だ理有るに似たり。然れども古文今文其の本二有るに非ざるに古文若し「保
に作らば今文「邛」の字要本記云後漢書との關係終に解すべからず。之に反して古文「浚」
今文「邛」ならば二者の關係も容易に之を知る可し。余正釋詁朝旦風晨曉早也郭注に
曰く「浚亦明也」と。說文新附明曉也而して許大帥
て「浚」の或體と爲せば「浚」は卽ち「浚」なるを知る。又援言に曰く「翌明也」と。
「邛」は卽ち「翌」の字。然らば則ち「浚」「邛」の義皆「明」なり。故に古文は「浚」に作
り今文は「邛」に作れるなり。

又史記夏本紀「日宣三德蚤夜朗明有家」の集解「孔安國曰三德九德之中有其三也卿大夫稱家明行之可以尚卿大夫」を引く。裴駰固より孔傳を節引せしなるべしと雖も、其の引文より推せば裴見る所の孔傳決して「須明行之」に作らざりしを知るべし。段し集解引く所の「明」の上に「須」の字を補はむが裴注終に何の謂なるかを知らべからざるに至らむ。

此れに據りて之を攷ふるに古文尚書「浚」の字は「濬」の字の誤に非ず。惟今本偽經傳「浚」の字誤有るべきのみ。

今李善引く所の孔傳正に「深、深也」に作る。李引く所の孔傳下須明行之の「深を」深と爲す。今當て本注に作るべし。而も馬融、卓臨、譙注「深、深也」に作る。馬融、卓臨、譙注「深、深也」に作るべし。

のみ、
尚書正義に於けるに、此の條の「作會」は「作會」に作りて傳はるるに、足利古本尚書内野本尚書並に經
は「作會」に作りて傳はるるに、此の條の「作會」は「作會」に作りて傳はるるに、足利古本尚書内野本尚書並に經

科漢碑即志下 益授經義」の語注、古文尚書抄作會孔安國曰以五系成此書正五
引き、五系成此書正 益授經文「會馬鄭作權」と言ひ、左氏昭公廿五年正義益授を引いて
「作會」に作り、尚書正義「會若古聚之名云々」の文有る等に據れば、孔氏本經
文「會」に作りて「權」に作るを唐初以前既に之れ有りしかと疑はる。然れども、
說文「權」の字の下篇第三十上尚書を引いて正に「權」に作り、馬鄭本亦「權」に作れば、孔氏本
當に「權」に作るを以て長と尚すべし。

今本尚書出貢草木新包傳新進長包叢生

卷十五 謝靈運酬從弟惠連詩注尚書曰草木漸苞孔安國曰漸進長苞叢生也

宋するに岩崎本尚書經傳俱に「包」に作り文選集注卷八第七輯する所の文選鈔「包」
安國注尚書曰漸進長包莠生包」を引いて亦正に「包」に作る。尚書正義を攷ふるに其の
據る所の傳文亦「包」に作れるを知る。李善據る所の尚書「包」に作りて「包」に作ら
ざるの攷既に第二九六頁に詳なり。

今本尚書禹貢條篇既歟傳已布生

卷十三潘安仁秋興賦注孔安國尚書傳曰又曰已布而生也

案するに李善引く所の傳「布」の下「而」の字多し

今本尚書無頁四陽既宅傳四方之宅已可居

卷十四 顏延年 褚白馬賦 五方卒厭 四奧入貢 注尚書曰 四奧既宅 孔安國曰 四方之宅 可居

案するに此の賦の正文「四典」の語は上句「王方」の言に對して四邊の人を言ふ

然らば則ち此の語に注して「四方之宅」を引くは其の語未だ成りたるなし。

「說文」十三篇土部曰：「土，可居也。从土與聲。𡵓，古文𡵓字也。按四方土可居。」

段玉裁曰：「言方十三角二日，則四方之土可定居者也。」案：字在《西都賦》。注：說文：「偏，孔傳曰：四方之宅可居。宅，字。」

王上之爲自孔專取諸說文說文書訓釋由貢王上之爲自孔專取諸說文說文書訓釋由貢

此の正文「四奥」の語に注して引く所の孔傳亦「四方之上可居」に作りて乃ち

可なるのみ。李善の蘊益し此くの如かりしなるべし。

今本尚書甘誓有虞氏威侮五行圖五行之德王者相承所取法

卷五十次休文宋書謝靈運傳論注孔安國尚書傳曰五行之德王者相承以取法

室するに今本尚書傳「所」の字、李_善引く所は「以」の字に作る。

今本尚書仲尼之語惟王信克寬克仁彰信非民信言湯寬仁之德明信於天下

卷卅五 張景陽七命注尚書仲虺曰惟王克寬克仁彰信非民

室するに幸甚據る所の傳文(湯)の下(有)の字多かりしに似たり。傳文も甚つて

「有」の字有る者訪に於て長と爲す

卷十顏延年皇太子釋奠會詩注孔安國尚書傳曰書述也

案するに今本尚書「事」の字、惟湯詒に一見するのみなれば、李善引く所の孔傳は當に是れ湯詒の傳文なるべし。

陸氏釋文「事」を出し注に曰く「允格反述也」と。釋文「述也」の訓李引く所の孔傳と正に合す。蓋し唐初此くの如く作る本有りたるならむ。

湯詒正義傳を經して曰く「事訓述也述前所以申達故事無違也」と。正義此の曲説を爲せば其の傳文は既に「事述也」に作れるに似たり。

今本尚書盤庚上不常厥邑于今五邦（國）湯邊（邊）。卷四十八班孟堅典引注尚書湯詒曰王歸自克（克）之字胡氏發見之夏至于毫（毫）孔安國傳曰湯邊於毫。

案するに李善此の注尚書經文は湯詒を引き傳文は則ち之を盤庚より采れるなり。時に此の傳文を引ける者は典引正文「京邊、鎮毫」に作れるを以てなり。

李善の尚書盤庚傳「邊」の下「於」の字有りしに似たり。「於」の字有る者文證に於て傳る。

今本尚書盤庚上若顧木之有由（由）如顧仆之木有用生（生）。卷三張平子東京賦注孔安國尚書傳曰用生（生）。案するに李善引く所の孔傳に依れば其の見る所の盤庚經文「生」に作らずして「於」に作れるを知る。

釋文「生」の字を大書し小注に曰く「五達反本又作於馬云顧木而肆生曰於」と。然

らば則ち李善の見る所の陸德明引く所の一本と合するに似たり。尚書正義此の傳を經して曰く「釋詁云於餘也李連曰於顧木之餘也郭璞云晉衛之問曰於於是言不死顧其根更生於於云々」と。正義引く所の釋詁李注郭注皆「於」の字に作り而も正義中「於」の字の同異を經せざれば正義據る所の本亦「於」に作りしかと疑はる。（註）

説文を檢するに「於」の字を収めず。第六篇上本部に曰く「於伐木餘也從木歛聲商書曰若顧木之有由歛聲歛或從木辭聲不古文歛從木無頭聲亦古文歛」段注本と。而し於與者蓋於本作歛轉寫從俗作於耳或云於即於之譌體（註）。又曰陸氏は「於」を以て「歛」の古文の別體と爲し説文引於聲部聲行は「於」を以て「於」の別體と爲す。又漢書注上又傳註下三氏の説觀れか足るを知る。若し本尚書「於」を於に作る。

李善引く所の孔傳「於」に作るは其の據る所の尚書自らは是れ此くの如かりしなり。足利古本尚書正に「於」に作る。（註）。又應永經音義に曰く「余正聲餘也於也言本辭聲生於於也」（註）。又聲琳音義「於聲」を出し注して曰く「上宰才反韻英云於植也考聲云於樹之餘於也從我木聲字聲に於に於る」（註）。又「於聲」の字皆「於」に作る。

説文を攷ふるに第六篇上本部に曰く「於樂備長版也於木生聲」と。而して徐灝説文解字注等に曰く「於補約版之謂之於引申爲凡栽植之義」云と。然らば孔傳「於

所以を讀へるにて、此の六字一連以て「修文教」の句に繋れるなり。然らば則ち「行禮射設庠序」の六字を承くるの下句は「修文教」に作る者文説に於て長と爲す。猶大禹説「舜于羽于兩階」の傳文亦「修闡文教」の句有り。知るべし。伯武成傳本「闡修文教」に作りしこと當に疑ふべからざるを。

尚書正義此の傳文を釋して曰く「樂記云武王克殷清河而西車甲鬻而瀕之府庫倒載于文包之以虎皮天下知武王之不得用兵也散軍而郊射左射維首右射馳虛而書革之射息也是偃武修文之事故傳引之郊射是禮射也王制論四代學名云虞謂之庠夏謂之序故言設庠序修文教也」と。此れに依れば、孔氏等據る所の傳文は今本と略同じく、而も孔氏等は之を讀んで、「倒載于文包以虎皮示不用行禮射」句設庠序進修文教」と爲せるに似たり。孔氏等の讀恐らくは非。

今本尚書正義曰恭園傳信言曰從國是則可從視曰明聰曰聰是則可從恭嚴格也明必精審聰必微諦

案するに李善尚書注を連引するに「某曰」と言ひて注者の名を示すを常とするに惟此の引のみ「注曰」に作りて誰氏なるかを言はず。今本文選恐らくは誤奪有るべし。今此の引を以て王鳴盛輯する所の馬鄭注と較するに皆合せず。王肅此の注選して知るべからざるを以て之を較するに由無きも李善王注を引くこと甚だ稀なれば此の引恐らくは王注に非じ。然るに試みに此の引を以て伯孔傳と較するに

其の讀ふ所悉く相合す。疑ふらくは此れ是れ伯孔傳なるべし。

果して然らば李善引く所は今本傳文に比して惟其の文次と「明必精審」の「精」の字とのみ相合せず。其の文次の異なるは蓋し李善文選正文の次に順ひて改め引けるなるべければ今之を讀せず。其の「精」の字今本「清」に作ると同じからざるに至つては是れ必ずや李善の本此の如く作られしならむ。

今洪範伯孔傳を攷るに「聰曰聰」を訓釋するに「必微諦」を以てし「思曰審」に注しては「必通審」と讀へば、此の「視曰明」の傳亦「精審」に作る者善本なるに似たり。

漢書五行志中之下「傳曰視之不明是謂不聰時則有羊飢」を引き其の下又「劉歆以爲羊太目而不精明視氣毀故有羊飢」を引く。其の引く所は今文説なりと雖も亦以て伯孔傳「精審」に作る者を長と爲すの據に供するを得む。

今本尚書正義曰恭園傳陰陽

卷四十七京兆伯三國名臣序注孔安國尚書傳曰雲陰氣也

案するに段玉裁曰く「正義曰雲非氣陰陽也」又曰「雲聲近陰詩云雲雨其聲

陰陽」則「雲」是「陰」義故以雲爲「陰」是「陰」也。此作「正」義時經文作「雲」不作「雲」甚顯白

と。又曰く「京兆伯三國名臣序注非命世執權者李善注曰孔安國尚書傳曰雲陰

氣也」也。此唐初本作「雲」之明證也。新唐書十三

李善引く所の孔傳「陰氣」に作るは轉寫者注上文「爾雅曰天氣下地氣不應曰雲」

に涉りて誤れるかと疑はる。

今本尚書洪範月之從星則以風雨傳月經於其則多風離於畢則多雨

卷十三謝希逸月賦注尚書曰月之從星則以風以雨孔安國尚書傳曰月經于其則多風離于

畢則多雨卷十九張衡傳注

案するに史記宋微子世家集解引く所の孔傳亦「經于」に作り「離于」に作る。北

堂書鈔卷五十一而「尚書云月經于畢則多雨」を引く。書鈔引く所疑ふらくは是

れ本孔傳の文。而して亦「于」に作りて「於」に作らず。

今本尚書金縢王翌日乃瘳明康差也

卷六十陸士衡弔魏武帝文注尚書曰王翌日乃瘳孔安國曰翌日明日也康差也

案するに今本尚書傳「翌明」の二字を李善引く所は「翌日明日也」の五字に作る。

李善本尚書「翌」に作りて「翌」に作らざりしこと既に第五四六頁に於て考せり。此

の引二「日」の字多き者徴無し。

今本尚書大誥王曰爾惟舊人爾王克遠省爾知寧王若勤哉孔安國傳曰目所親見法之又明

卷五十四陸士衡五等論注尚書曰爾惟舊人爾王克遠省爾知寧王若勤哉孔安國傳曰目所

親見法之又明之也。

案するに李善引く所の傳文「明」下「之也」の二字多し。足利古本尚書と正に合す。

文説を效ふるに「之也」有る者甚だ是なり。

今本尚書召誥王來紹上帝自服于土中孔安國傳曰王今來居洛邑繼天而治躬自服行教化於地勢

正中

卷一班孟堅東都賦注尚書召誥曰王來紹上帝自服于土中孔安國傳曰今來居洛邑地勢之中

也卷三東京賦注引く所の孔傳

案するに李善引く所の孔傳「地勢之中」に作りて「正中」に作らず。此れ其の尚

書自ら然りしなり。後漢書班固傳李賢注「尚書曰王來紹上帝自服于土中孔安國曰

洛邑地勢之中也」を引いて亦正に「之」の字に作る。

傳文文説を效ふるに「之」の字に作る者甚だ是なり。今本「正」に作るは「之」の字の

誤なるべし。

今本尚書洛誥序召公既相宅經移卜河朔黎水兆乃卜淵水東遷水西惟洛食孔安國傳曰必先墨畫

龜然後灼之兆順食墨。

卷三張平子東京賦注尚書曰召公既相宅卜惟洛食孔安國傳曰卜必先墨畫龜然後灼之兆順

食墨吉也。

案するに李善引く所の孔傳「食墨」の下「吉」の字多し。

今此の孔傳を觀讀するに其の意兆其の墨畫の處を順食すれば則ち吉順食せされは

則ち吉ならざるを謂ふに似たり。蓋し「食墨」は吉なり。其の墨畫の處を順食

するを以て吉と稱すなり。然らば則ち傳文「兆順食墨」の下、當に「吉」の字有るべ

し。上に既に「順食」と言ひて而も其の下「吉」の字無くんば文説未だ定からざる

なり。今本傳文「食墨」の下章文有るなり。

尚書正義「傳我使至食墨」を標出し其の傳に曰く「凡ト之者必先以墨畫龜要所依此墨然後灼之求其兆順食此墨畫之處」と、此れに依れば正義本既に「主」の字無きに似たり。

今本尚書舜仲之命昭帝紀于庶人三年不齒罪輕故退爲庶人三年之後乃齒錄卷廿書子建上貴躬應詔詩表注尚書曰降黜于庶人三年不齒孔安國曰三年之後乃齒錄之。

案するに李善引く所の孔傳「録」の下「之」の字多し。文證を攷ふるに當に此の字有る者を以て長と斷すべし。

今本尚書多方亦惟有夏之民叨懌傳故亦惟有夏之民貢助懌懌而逆命卷十七王子淵淵篇賦注尚書曰叨懌日致孔安國曰懌懌懌懌

案するに李善引く所の孔傳「懌」の字に作るは其の尚書自ら此くの如かりしなり。尚書正義經を釋して「故亦惟有夏之民貢助懌懌而逆逆逆逆」の文有り。此れ恐らくは傳文に據れるなるべければ孔氏等の尚書傳文亦「懌」に作れるを知る。

今本尚書周命思免厥愆是所以免其過愆卷廿一庶子諱覽古詩注尚書曰思免厥愆孔安國曰免過也。

案するに今本尚書周命此の經の傳「免過也」の文無し。大禹謨傳及び說命下傳並に「免過也」の文有り。蓋李善此の注尚書經文は周命を引き孔傳は則ち他篇より採れるか。果して然らば李善の尚書大禹謨若しくは說命下の傳經及び傳傳皆「免過」

の字に作りて「免」の字に作らざりしなり。「免」の攷紙に第二六九頁に見ゆ。今本尚書呂刑呂刑其罰百鎊傳六兩曰鎊鎊黃鐘也卷廿六王元長永明九年第秀才文注尚書呂刑曰穆王訓夏賡賡賡其罰百鎊孔安國曰六兩曰鎊鎊黃鐘也

案するに「鎊」の字尙無し。右三十九條は李善引く所の孔傳と今本尚書孔傳と其の文同じからざる者左るか又李善明かに孔安國尚書傳を引けるに今本尚書傳其の文無き者有り。即ち左の如し。孔安國尚書傳曰康安也。蓋「西都賦注」

案するに今本尚書益稷益稷康上益康中說命上西伯戲戲洪範大誥康諸名諸多士無遠多方周官畢命文康之命の傳皆「安」の字を以て經の「康」の字を易ふれども「康安也」の文無し。

眞本玉篇卷廿二部康字の下「尚書康康康孔安國曰康康安也」を引く。孔安國尚書傳曰康安也。蓋「西都賦注」

案するに高步瀛曰く「傳孔傳無殯畫也之文洛誥君奭等篇皆以畫註單字字するに今本尚書に作らず。單乃殯之借字故李注云然」然れども李善據る所の傳或は「殯畫也」の明文有りたるやも知るべからず又其の經「殯」に作りて「單」に作らざりしやも亦知るべからざれば高説邊に以ふ能はざるなり。

玄應字經音義「殯畫」を大書し其の注「尚書乃殯文祖注云殯畫也」第二册第八十を引

く。玄應引く所は名諱の文なり。玄應據る所の尚書經文「殯」に作り注「殯蓋也」の文有りたるかと疑はる。但其の尚書何本なるやを知らず。慧琳音義に至つては明に「孔注尚書云殯蓋也」を引く。第六十卷七葉、卷八十八、應引く所既に此の如し。是れ遽に高説に从ふ能はざる所以なり。

孔安國尚書傳曰諱也。西都賦注

案するに今本尚書名諸無遠の傳「教詩」連文以て經の「諱」の字を訓釋せるも、「諱教也」の文無し。

孔安國尚書傳曰崇等也。卷三卷京賦注

案するに今本尚書牧誓傳「崇等」の語を以て經の「是崇是長」を訓釋すれども、「崇等也」の文無し。

尚書曰怵惕惟厲孔安國曰怵惕懼也。東京賦注

案するに今本尚書罔命傳「怵惕」を以て經の「怵惕」を訓釋すれども、「怵惕懼也」の文無し。

玄應衆經音義本「尚書怵惕唯厲孔安國曰怵惕懼」案するに當に「懼也」第二卷第百十七葉表、卷八十八葉裏

孔安國尚書傳曰伋伋壯勇之貌也。卷七卷京賦注

案するに今本尚書秦誓傳「伋伋壯勇之夫」を以て經の「伋伋勇夫」を訓釋すれども「伋伋壯勇之貌也」の文無し。

孔安國尚書傳曰一車一也。卷七卷西都賦注

案するに今本尚書酒誥傳「車一」を以て經の「一」を訓釋すれども「一車一也」の文無し。

孔安國尚書傳曰數也。卷十卷西都賦注

案するに今本尚書康誥傳「數」を以て經の「數」の字を釋するも「數也也」の文無し。

孔安國尚書傳曰賜也。西都賦注

案するに今本尚書「賜」字京國詩篇に惟一見するのみにて而も傳は之を訓するに「賜賜」二字を以てし「賜也也」の文無し。金剛經村田命等の「賜」は傳習訓釋して「賜賜」に誤す。

孔安國尚書傳曰賜也。卷十三卷西都賦注

案するに今本尚書酒誥傳「賜」を以て經の「賜」を訓釋し又呂刑傳「賜」を以て經の「賜」を訓釋すれども「賜也也」の文無し。慧琳音義「孔安國注尚書云賜賜也」を引く。卷十四葉

孔安國尚書傳曰遠也。通賦注

案するに今本尚書「迨」の字無し。李善據る所は則ち此の字有り。文選に弟

兄に見ゆ。

孔安國尚書傳曰懼危也。卷十卷中詩注

案するに今本尚書五子之歎傳「懼」傳曰教煌本は危貌の文有りて「懼危也」の文無し。

孔安國尚書傳曰：「須待也。」卷十四昭二十五年詩注

案：するに、今本尚書五子之取序傳「待」を以て「須」の字を易へ、顧命傳「須待」連文以て經の「須」を訓釋すれども、多方の「須」の字「須待也」の文無し。

孔安國尚書傳曰：「誕取也。」卷十五五子之取序傳

案：するに、今本尚書無逸の傳「取誕」連文以て經の「誕」を訓釋すれども、「誕取也」の文無し。

通本玉篇卷九誕字の下「尚書乃逸乃藩辟誕孔安國曰誕取也」を引き、又慧琳音義「孔注尚書云誕取也」を引く。卷十四昭二十五年詩注

孔安國尚書傳曰：「仲尼之語。」卷十六仲尼之語傳

案：するに、今本尚書「各」の字仲尼之語に「一見するのみ」なれば、李善引く所當に是れ仲尼之語の傳文なるべし。然るに今本仲尼之語傳「各惜」連文以て經の「各」を訓釋すれども、「各惜也」の文無し。

慧琳音義卷七「孔安國注尚書云各惜也」を引き、卷十六「孔注尚書云各惜也」を引く。卷十六仲尼之語傳

孔安國尚書傳曰：「密近也。」卷十七密近也

案：するに、今本尚書太甲上傳「近」を以て經の「密」の字を易ふれども、「密近也」の文は之れ無し。

孔安國尚書傳曰：「數厭也。」卷十八數厭也

案：するに、今本尚書太甲中微子之命洛誥康誥の傳「厭」を以て經の「數」の字を易ふるも、「數厭也」の文無し。
慧琳音義「孔注尚書云數厭也」を引く。卷十八數厭也

尚書曰：「政事惟殷。」卷十九政事惟殷傳

案：するに、今本尚書「殷」の字說命中に惟一見するのみ。而して其の傳「醇粹」連文以て經の「醇」の字を訓釋するも、「醇粹也」の文は之れ無し。

孔安國尚書傳曰：「臆厚也。」卷二十臆厚也

案：するに、今本尚書「臆」の字太誥に「一見して傳訓釋するに「臆厚」を以てし通誥に三見して傳皆易ふるに「厚」の字を以てす。而して「臆厚也」の文無し。

孔安國尚書傳曰：「懼。」卷二十一懼傳

案：するに、今本尚書泰誓中傳「危懼不安」を以て經の「懼」を訓釋するも「懼懼危懼」の文無し。

慧琳音義卷七十八「懼」の下「孔注尚書云危懼也」を引き、李善引く所と正に合す。卷七十八懼傳

孔安國尚書傳曰：「慍也。」卷七十九慍傳

案：するに、今本尚書皋陶謨傳「慍」連文以て經の「慍」の字を訓釋すれども、「慍也」の文無し。

孔安國尚書傳曰：「庶。」卷八十一庶傳

案するに今本尚書大誥傳「疵病」連文以て經の「疵」を訓釋し、呂刑傳「病」を以て經の「疵」を註すれども「疵病也」の文は之れ無し。
 慧琳音義「孔注尚書云疵病也」を引く。卷十二第二頁 卷十四第一頁 又「孔注尚書疵病也」を引く。卷四十七

尚書曰邦乃其昌孔安國曰昌盛也。卷五十八第二頁 案其昌字上
 案するに引く所の尚書は仲虺之誥の文なり。然るに今本仲虺之誥の傳「王者如此國乃昌盛」に作りて「昌盛也」の文は則ち之れ無し。又今本尚書「昌言」四見し本尚書二章「其昌」亦洪範に見ゆれども而も其の傳皆「昌盛也」の文無し。
 尚書曰疾大漸惟終孔安國曰幾危殆。卷五十九第二頁 案其殆字上
 案するに今本尚書顧命傳「危殆」を以て經の「幾」の字を訓釋するのみにて「幾危殆」の文は之れ無し。

右廿四條は明かに今本尚書傳に其の文無くして而も李善之を引く。是れ李善の尚書傳文本此の明文有りて今本と同じからざりしが抑李善の尚書傳文本今本と異らざるに李善之を意取せしに過ぎざるが處に定むべからざるに似たり。
 但此の類必ずしも李善意取せしに非じと疑ふべき理由二有り。

卷十三謝希逸月賦注「尚書曰我有周無斁」を引き其の下又「爾雅曰歡厭也」を引いて而も尚書傳我有周無斁の孔傳「斁」を易へて「厭」と爲せるを采らす。卷廿陸士衡皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩注「尚書曰世篤忠貞」を引き其の下又「毛萇詩傳曰篤

厚也」を引いて而も尚書「世篤忠貞」の孔傳「篤」を易へて「厚」と爲せるを采らす。
 卷卅五潘元茂補魏公九錫文注「尚書曰夙夜出納朕命惟允」を引き其の下又「爾雅曰允信也」を引いて而も尚書夙夜云々の孔傳「允」を易へて「信」と爲せるを采らす。此の類尚多し。李善若し孔傳經文を易字せる者を意取して直に「孔安國尚書傳曰某某世」に作るを例とせば月賦等の注に於ても亦特に爾雅毛萇詩傳を引くを須たず、客に直に「孔安國曰某某世」を引くべきなり。然るに今此の事無きより觀れば李善引いて「孔安國尚書傳曰某某世」に作る者は皆其の尚書傳自ら其の明文有りしかと疑はざるを得ざるなり。

又偽孔傳本「某某世」の訓詁の文有りたるに今本之を奪し或は誤行して其の舊を案せる者尠まからず。其の數例を擧げむ。

禹貢九川滌源傳九州之川已滌除泉源無壅塞矣

今本傳文に據れば孔「滌除」二字を以て經の「滌」の字を釋す。然るに、原本王篇卷第十九水部滌字の下「尚書九川滌源孔安國曰滌除也除原泉無壅塞也」「原泉」の二字本亦本、原、野、本、九、水、部、滌、字、下、有、之、作、記、云、引、之、又、慧、琳、音、義、卷、四、十、六、第、十、一、頁、上、尚、書、九、川、滌、源、孔、安、國、曰、滌、除、也、引、之、又、卷、四、十、五、第、十、五、頁、上、此、れ、に、據、れ、ば、顧、野、王、慧、琳、見、る、所、の、尚、書、傳、「滌除也」の文有りたるに似たり。

五子之歌乃盤遊無度傳盤樂遊說無法度

今本傳文に據れば傳は「盤樂」の二字を以て經の「盤」の字を訓釋せしに似たりども、

其の當然らず、今本傳「盤」の下一「樂」字を奪せしなり。羅氏敦煌本尚書足利古本尚書並に正に「盤」定本は「樂」作樂遊遊無法度に作る。正義經を釋して「太康乃復愛樂遊遊無有法度」と訓へば其の據る所の尚書傳本「盤」下「樂」の字を奪ねしに似たり。正義傳遊遊に據りて「愛樂」遊遊と訓へるなり。

胤征兇紀于酒畔官離次傳沈謂醉冥失次位也

今本傳文に據れば、「醉冥失次位」の五字皆「沈」の字を訓せるに似たり。然れども、此の傳と其の經とを并せ致ふれば傳「失次位」の語は經「沈」の字と相渉る無きを知る。今羅氏敦煌本を檢するに、此の傳「沈謂醉冥失次位也」に作りて、「次」の上正に「失」の字無く、内野本「沈」の右旁に「次」の字あり。與本玉篇卷九欠部「次」の字下「尚書畔官離次孔安國曰次位也」を引いて、亦正に「次位也」に作る。又尚書正義此の經を釋して「沈沒昏亂於酒邊叛其所掌之官離其所居位次」と訓へば、其の據る所の傳亦「次位」の上「失」の字無かりしに似たり。然らば、則ち此の傳本「醉冥」二字を以て經の「沈」を訓じ、「位」一字を以て經の「次」を訓せしなり。今本「次位」の上「失」の字を行して文證乃ち晦し。

盤庚中咸造勿廢王庭傳造至也眾皆至王庭庶範慢

今本傳文に據れば、傳「廢」の二字を以て經の「廢」の字を訓釋せしに似たり。然るに、段玉裁曰く「釋玄應衆經音義卷十五娑鳩條下引尚書咸造勿廢孔安國曰娑鳩也傷也王裁按應者字之誤本傳本作娑鳩其所引孔傳亦與今不同」尚書娑鳩條下初葉と。此れに據れば、玄應據る所の傳「娑」の字の訓詁の文有りたるかと疑はる。

君牙冬祁寒小民亦惟曰怨寒冬大寒亦天之常道民猶怨咨

今本傳文に據れば、經「祁」の字、傳惟易へて「大」に作るのみなるに、玄應衆經音義卷一第「尚書冬祁寒小民亦惟怨咨孔疏に安國曰祁大也冬大寒民猶怨也」を引いて、「祁大也」の三字有り。此れを應據る所の尚書自ら此くの如く作りしならむ。

此の五例、以て古本尚書傳は、今本に比して訓詁の文多かりし明證と稱すべし。古本既に此くの如しとせば、李善引いて「孔安國尚書傳曰某某也」に作れる者亦其の尚書傳自ら其の文有りしかと疑はざるを得ざるなり。

之を要するに、今本尚書は、衛包の改字を経たる本據せしは非に、玄應衆經音義に詳なり者なれば、李善用ひし所の尚書が、今本よりも古字多かりしは、固より其の所なれど、當に古今字の異同のみならず、廣く經文傳文に於ても李善の本、今本と大に異りしこと當に疑ふべからざるなり。而して李善引く所に據りて、今本を訂すべき者固より尠なからざるを知るなり。

第三章 李善本尚書と尚書定本

唐の太宗、顏師古に詔して五經を攷定せしめ、貞觀二年唐書高祖紀、貞觀七年十一月文苑英華序丁丑新定五經を天下に頒つ。舊唐書所謂定本とは是れなり。文苑英華序定本の通布、貞觀七年西曆紀元六四三年になれば、李善文選注を上れる顯慶二年六百五年に先だつこと二十五年。唐書高祖紀六年なりとの條に依れば、李善文選注は上れる。なるを以て李善尚書を援引するに定本を用ひ得ざりしに非ず。是を以て李善本尚書と定本との異同を攷ふるは甚だ興味有る問題なり。

然れども尙書定本は纔に尙書正義中に引かるる若七條を採するのみにて、其の餘復た知るべからず。而も正義引く所正義本と異なるは惟二條のみなれば、是れ定本と正義本と異なるべき所なり。其の異同を示すことしからざる可なり。以て李善本の異同を詳攷するに由無し。

但大略、右考作室既臣法斂子乃弗肯堂知片構斂父藍斂子乃弗肯施則皆獲」定本二「列の下皆「弗」の字有るに李善此の經を四引して卷五十四「敬之曰王季子太叔伯仲雍注」俱に此の二「弗」の字皆無し。此の一條の異同を以て之を推せば李善用ひし所の尙書は、恐らくな定本に非じと疑はる。文選鈔三篇各反尋鄭義并引「尙書云惟父基定本乃不肯堂知片構」を引く

第四章 李善本尚書と正義本尚書

第一節 五經正義の撰定

唐代五經正義撰定の始末は湖南先生景宋鄭單本尚書正義解題の軒先生五經正義撰定答問（鄭博士史記）諸橋博士經學研究序說第一篇に詳なれば今復に述へず。但正義撰定の功罪れるの年報に就いては竊に疑うて決する能はざる者有るを以て聊、鄙見を記して大方の是正を仰がむと欲す。

諸橋博士謂へらく「正義の幣定は貞觀十二年に着せられしが其の成れるは通鑑に據れば十四年なりとせられ無元元龜は數年乃成と云ひて其の年を明記せず。然れども十六年詳義更定の事より推ふれば十五年頃迄には一段落つけるものの如し」と。

經典を研究序説第一篇附記の記事を應取す。

今通鑑を案するに唐紀十一本中上京上以師說多門章句繁雜命孔
穎達與諸儒協定五經疏讀之正義中上京學者習之」と。其の正義協定の功を以て十四年に
成れりと稱すこと正に語協博士の言の如し。然れども通鑑此の事を十四年に案けた
るは甚だ疑ふべき者有り。

唐書要に曰く「貞觀十二年國子祭酒孔穎達撰五經義疏一百七十卷名曰義贊有詔改爲

五經正義太學博士馬嘉運奇摘之有詔更令詳定未竟而卒。卷二十七 論經義と。會要の文を替
諄するに是れ正義の撰定十二年に始まりと謂へるに非ずして、十二年に成れること
を謂へるなり。又舊唐書儒學傳序は、正義撰定の記事を、貞觀十四年の記事の前に列し
たれば舊唐書編者亦是の書は十三年以前に成れりと斷せる者の如し。然らば則ち會
要舊唐書の記する所皆通鑑と合せず。

通鑑何に據りて此の事を十四年の條に記せしかを知らずと雖も或は是れ舊唐書孔穎達傳「(貞觀)十四年太宗幸國學觀釋奠命顏師古講孝經既畢顏達上經義頌手詔褒美」先是顏師古司馬才章王恭王琰等詣儒學授詔定五經義訓凡一百八十卷名曰五經義疏の文に據れるに非ざる無けむや。若し然らば通鑑の記事誤る。

今礼部達傳を細讀するに其の記する所は正義十四年に成れりと謂ふには非ず。其の「先是云々」は下文「時又有太學博士馬嘉運駁郭達所撰正義詔更令詳定功竟未就十七年以年老致仕十八年云々二十二年卒」に蒙り郭達正義詳定の功を竟へずして致仕するに至れる原由を叙述せるのみ。正義撰定成れることと十四年の記事とは相渉るな
きなり。

通鑑の十四年註に信すべからず。而して會要の記事信すべからざるの理無きを以て予は會要に从ひて五經正義撰定の功略成れるは貞觀十二年西曆三八六年と爲さむと欲す。錢謙益唐文苑英華序正義紀述未だ此年の事を茫然不知然則錢謙益錢全堂唐文苑英華序正義紀述未だ此年の事を茫然不知然則然らば正義の略成れるは李善文選注を上れる顯慶三年に先だつこと廿年にたり。隨つて李善尚書を引くに

當りて正善據る所の本と同種の者を用ひ得ざりしには非ざるなり。是を以て此の章に於ては正善據る所の尚書とを善引く所の尚書との關係を致へむと欲す。而して此の二本の關係を致へむには、先づ正善據る所の本と定本及び今本との關係を明かにするを要す。

第二節 正義本尚書と尚書定本

引類詩尚書正義序に曰く「古文經雖然早出晚始得行」江左學者咸以祖焉近至隋初始流河朔其爲正義者竊大寶樂衛書鄭師鄭玄劉焯劉勰等其諸公旨每多或因循帖經注文義者略惟劉焯劉勰最爲詳確」と又曰く「今奉明初考定是非謹繫唐書獨斷問見覽古人之傳記簡近代之異同其是而而去其非削其煩而增其簡此亦非附臆說少據實聞」と此二劉に本づく所多かりしを知る。

是を以て尚書正義直に舊說を承襲

して自ら遷しするべきことと傳へしに言ふ。人尚書に於て然れども孔氏等徒に舊跋を假託せしみにて別に據る所の經傳無かりしとは致ふべからず。必ずや先づ用ふる所の底本有り而して後之に隨ひて多く舊跋を採擷せしむるべし。今其の底本を跋に名づけて正義本尚書と呼ぶ。然らば則ち孔氏等の據つて以て底本と爲せし所と尚書定本との關係は如何。

唐太宗既に顏師古に命じて五經の定本を作らしめ後學に孔穎達等に詔して五經正義

者其の三なり。定本を引いて惟與文與句違を示すに止まる者其の四なり。此の第三類及び第四類に屬する者、或も正義本と定本との關係を知るの資と爲すに足る。且に其の數條を記さむ。

周南琴瑟序琴瑟后妃之志也和平則婦人樂有子矣正義本「和平」の上「子」の字有り。

正義 若天下亂離兵役不息則我躬不問於此之時豈思子也今天下和平於是婦人始樂有子矣經三章皆樂有子之事也定本和平上無天下二字據等正義本「和平」の上「正」に「天下」の二字有りしなり。正義明かに「今天下和平」と言へば其の據る所の序「和平」の上「正」に「天下」と爲し「平」を解して「政教平」と爲せるに合せず。是を以て又定本「天下」二字無きを引いて其の據る所の本誤れることを明かにせり。

小雅車攻大庖不盈正義本「庖」の字有り。傳三曰充君之庖正義本「庖」の字有り。

正義 王制及公羊穀梁皆云充君之庖無廚字鄭云庖今之廚則傳本亦無廚字庖衍字也定本亦無廚字十之三

正義據る所の七傳「充君之庖廚」に作るを以て「廚」の字衍なることを攷して其の證を定本に求む。

右二條正義據る所の本を非とし、定本を是とする例

小雅沔水沔沔流水其流湯湯正義本「湯」の字有り。傳言放縱無所入也

正義 言水放散縱長無所入猶諸侯奢泰放恣無所臣事也：定本云放行無所入集注云放

忍す

此の傳文正義本は「放縱」に作り、定本は「放行」に作り、集注本は「放恣」に作りしなり。

魯頌駉駉馬在坰之野正義本「駉」の字有り。

正義 駉駉然駉駉肥強也所牧養之良馬也：定本駉馬之字作牡馬正義本「駉」の字有り。正義本經文は「牧馬」に作りて趙氏定訓書證に所謂河北本と合し、定本は「牡馬」に作りて江南本と合せしなり。

右二條定本を引いて異文を示せる例

召南采芣芣之祁祁正義本「芣」の字有り。傳言還歸家祭事畢夫人釋祭服而去正義本「芣」の字有り。正義 故箋云祭畢釋祭服而去是去事也髮髻其威儀祁祁然而安舒是有儀也定本云祭事畢夫人釋祭服而髮髻無去字正義本「去」の字有り。

正義 此れ正義本の箋は「去」の字有りて其の下に於て句を斷ち定本は「去」の字無く、「髮髻」に於て句せるを謂ふ。

野風綠衣序綠衣衛莊姜備己也妾上僂夫人失位而作是詩也正義本「莊姜」の字有り。注妾上僂者謂公子州吁之母母嬰而州吁正義本「母」の字有り。正義 陰三年左傳曰：「又曰公子州吁嬖人之子、是州吁之母嬖也、又曰有寵而好兵、石碏諫曰：『寵而不監、鮮矣。』是州吁也。定本妾上僂者謂公子州吁之母也、母嬰而州吁正義本「母」の字有り。

曰寵而不監、鮮矣、是州吁也。定本妾上僂者謂公子州吁之母也、母嬰而州吁正義本「母」の字有り。

す。封氏開見記に曰く「開元以來省司將試舉又皆先納所習之本文字差互輒以習本爲定義或可通雖與官本不台上司發於收聲即放過」（卷三）。直觀開元相距ること六十年其の開定本の轉寫漸く廣くして其の文字の異同次第に生じ遂に此の習本許容の事有るに至れるならむも亦定本正義に於しも相合せず應試者の不便多かりしことも其の因をなせるに非ざる無けむや。

既に此の節を草して後鶴書堂義書無名氏撰毛詩圖說定本一卷を收むるを知り即ち之を讀むに是れ毛詩正義全書引く所の定本今定本を録出せる者なり。乃ち是の書を以て予が摘録せし所に比ぶるに彼れ予より少きこと四十二條。彼れ據る所の毛詩正義何本なるかを知らざれども恐らくは其の録出未だ盡くさざる者有らむ。

又鶴書堂義書收むる所に鄭注林檎毛詩注疏校勘記校字補（通志廿四年八月節）有り。毛詩正義引く所の定本今定本に就き説を爲して曰く

案正義引今定本或引定本攷北齊鄭茂及隋蕭詵劉焯於秘書經史均舊有攷定唐貞觀初更詔顏師古定正五經其正義稱定本者當是齊隋以來之本其稱今定本者當是師古本加一今字疏義顯有區別

又曰く

又案正義屢引定本集注或作定本集本或作定集注本俱定本杜前攷集注宋崔靈恩撰亦是定本尙從前傳本之證

又曰く

行義正義今定本集注作徒歌者與園有桃相涉誤案引今定本杜集注前全詩止此一節今字疑衍

と。鄭氏疏を讀んで精なるは以て鄭と爲すべきも其の説は則ち遽に从ふべからず。

案するに隋書卷六十六鄭茂傳に曰く「奉詔於秘書省刊定載籍」と。又卷七十五儒林劉焯傳に曰く「與諸儒於秘書省考定羣書」（北史劉焯傳同）と。乃ち鄭劉の考定せるは載籍一般にして時に力を經書の刊定に注せしは非ざれば段に其の考定せる經書之れ有らしむるも後儒之を傳へて定本と稱せしや否や隨る疑はし。蕭詵の經史正定の若きは該傳に事に从ひし何と名見る所を執りて遂に相是非し又しうして就る能はざりしこと隋書本傳明文有り（北史卷六十六）然らば則ち此れ等の記事以て齊隋の定本有りたるの證と爲すべからず。

又若し正義引く所の定本と今定本と各別ならは定本と今定本との間にも亦異同あるべきに五經正義惟定本今定本と俗本古本との異同を言へるのみにて定本と今定本との異同を言へる者一も有る無し（正義卷一）然るに正義に曰く「尚書後定本今定本との異同を言へる者一も有る無し」（正義卷一）と事にて定本と今定本の異同の事無かるべし。

又試みに毛詩正義引く所の今定本定本を檢するに

齊風正義 今定本を引くこと九にして定本を引くこと止だ一。

曉風正義 今定本を引くこと四にして定本を引かず。

召南正義 今定本を引かずして定本を引くこと十七。

小雅正義 今定本を引くこと止三にして定本を引くこと八十九。

大雅正義 今定本を引かずして定本を引くこと五十五。

頌正義 今定本を引かずして定本を引くこと三十七。

此れに據れば齊風・韓風正義は殆んど皆今定本に作り、召南・雅頌正義は殆んど皆定本に作る。乃ち疑ふらくは正義を撰する時諸儒分據事に从ひ、或は今定本と言ふを常とする者有り或は定本と言ふを常とする者有りたるのみ。（傳記正義）

又師氏は正義定本集注を刊せし時、定本前に在るの故を以て定本は齊・魯の本なりと謂へども年代を以てせば梁の崔靈思は齊・魯の前に在り。正義定本を前に置きしは、蓋し其の當朝認定の本なるを以てのみ。

以上の理由により今定本定本分別の説終に从ふべからざるなり。

愚思を以てせば今定本とは本主として古本に對して言へるの語にして、（傳記正義）定本とは主として俗本に對して言へるの語なり。今定本と定本とを混じて或は今定本と言ひ或は定本と言ひしのみなるべし。（傳記正義）

（昭和十二年正月十七日記す）

第三節 正義本尚書と今本尚書

阮刻本尚書注疏は十行本を主とせる者なりと謂はるるが、（傳記正義）十行本の源を遡れば、蓋し即ち岳珂九經三傳沿革例に所謂建本にして、而も其の據る所の建本は既に注疏合刻せる者なるに似たり。（傳記正義）今建本經傳の由つて出でし所を案にすれば、蓋し阮刻本經傳を以て、今の正義釋する所に較べれば、兩者相合せざる者決して數なからず。

此の阮刻本尚書經傳と正義釋する所と相合せざる者阮氏校勘記多く之を指摘す。（傳記正義）今其の數條を示さむ。
 尚典歲二月東巡守至于岱宗（傳記正義）正義侯天子中土故稱守。巡行之

正義傳を釋して曰く「故言諸侯爲天子中土故稱守而往巡行之」と。此れに依れば、

注守謂諸侯天子中土故時往巡行之也」を引いて亦「巡之上、往」の字有り。此の

姚傳恐らくは王注を襲へるなるべければ正義本蓋し姚傳の舊に近かるべし。

微子卿士師師非度（傳記正義）正義相師效前非法度

正義傳を釋して曰く「士訓事也故卿士爲六卿典事」と。

此れに據れば正義本傳「典事」に作りて、「典士」に作らざりしを知る。岩崎本縮氏敦煌本雲窗齋刻本俱に正に「典事」に作りて正義本と合す。

康誥王曰嗚呼辟汝小子封惟命不予常傳以民安則不絕亡汝故當念天命之不於常
正義經を釋して曰く「王命言曰嗚呼以民安則不汝絶亡之故汝小子封當念天命之不
於常也」と。

正義恐らくは傳文に據りて此の經を爲す。然らば正義本此の傳「不汝絶亡」に作
りて「不絶亡汝」に作らざりしならむ。足利古本正に「不汝絶亡」に作り清原宣
賢鈔本の諸條博士藏る所亦本「不汝絶亡」に作る者を廟記す。

通詁版或諸曰羣飲汝勿休
正義經を釋して曰く「民今飲酒相與羣聚是不用上命則汝收捕之勿令失矣」と。
正義「飲酒」を先に言ひ「羣聚」を後に言ふ。其の經「飲羣」に作りて「羣飲」
に作らざりしに似たり。宣賢本本「飲羣」に作る者を廟記す。

召誥今冲子嗣則無違壽考傳聖子言成王少嗣位治政無違壽考成人之言欲其法之
正義に曰く「今童子爲王嗣位治政則無違壽考考成人宜用老成人之言法古人爲治」
傳すと。又曰く「壽謂長命考是老稱無違壽考長命之老人故其取老人之言而法效之」
傳すと。

正義に據れば其の用ふる所の傳文疑ふらくは「無違壽考成人老成人之言欲其法之」
に作りしか否らずんば「無違壽考成人欲其法之」に作りしかならむ。何れにせよ、
今本傳文と同じか否ざりしに當に疑ふべからず。宣賢本旁記する所に依れば一
本「無違壽考成人」に作りて「之言」二字無き者有りたるを知る。遺著本此の傳文に無
き者有りたるを知る。

遺著本此の傳文に無き者有りたるを知る。
無違自時厥後立王生則逸生則逸不知稼穡之艱難

正義此の經を釋して曰く「從是三王其後所立之王生則逸生則逸不知稼穡之艱難」と。
又多士「自成湯至于帝乙云々」の傳の正義に曰く「傳篇說中宗高宗祖甲三王以外
其後立王生則逸生則逸亦罔或能書」と。乃ち知る正義本無違「生則逸」の三字を重ね
ざりしを。

陳喬樞「古文尚書重注則逸句：今據中論所引知今文不重注則逸句也」
謂へども今正義本亦「生則逸」を愛せざれば、權り今文のみ然りしに非ざるなり。
先儒既に指摘せし所及び右の諸例に據りて攷ふるに今本尚書と正義本との異同決し
て尠少に非ざるを知るなり。

第四節 李善本尚書と正義本尚書

李善本尚書と今本尚書との異同は既に第二章に於て之を攷へ李善本尚書と定本と同
一に非ざること本既に第三章に於て之を明かにせり。而して本章第二節及び第三節
に於て攷へし所に據れば正義本尚書は定本に非ず亦必ずしも今本と合する者に非ず。
是に於て本節に於ては脚李善本と正義本との異同を攷へむと欲す。但今本文選既に後
人の改竄を経て李善本尚書の舊を判定し難き者多く今の尚書正義亦衛同改定以後
の尚書に據りて刪定せられたる所有るやも亦未だ知るべからざるを以て必ずしも唐

初の舊を存する者に非じ。

されは今般李君の舊と信すべき者と較、孔氏の舊と信すべき者に就きて其の異同を干條を攷ふるに止めた。正義より之と釋して而も蓋し合ふ者あり、然るに第二篇に於て引續せしめて此の點に於ては蓋し合ふ者あるを以て思ふ者のみぞ云々

尚書曰明明駁斥陋

堯典正義 女王世子論

文王世子の正義は「楊在道」

正義直に「揚」の字と

其の經文本より「獲」に

賦
書
に
重
き
方
日
迄
夫

辭典正義
辭既有深遠

充○滿○天○地○之○間○堯○典○所○謂○

卷三

此れに據れば、正義本引

す。第五七一頁参照

同書曰歲二月東巡將至于岱

書曰五月南巡狩

典義正義 王者所爲巡

10

1

卷之四

巡行問民疾苦孟子稱是

作狎白虎通云王者所以

人彼困名以附說不如是

此れに據れば正義本

東邊守」と言ひては官口守、又
西邊守」と言ひて是正に「守

尚書曰肆觀羣臣

舜典正義

正義本經は東條文蔵

せしなるへし（一書）四

司書曰契文作司徒敬新

典正義 汝作司徒

正義本經文「五教」

尚書曰。蠻夷猾。夏孔安國。

辭典正義、猾者狡猾

「滑」の「亂」爲るは常

爲さむや。

尚書帝曰噶若予上下草木曰益哉卷八羽書疏注

益典正義、馬鄭王本皆爲益曰益哉是字相近而彼誤耳卷八羽書疏注

正義本經「益曰」に作りて李善本と同じからざりしなり。

尚書曰ト不龍吉孔安國龍吉因世也卷五十六楊

大禹謨正義、表記云ト益不相龍吉鄭云龍吉也然則習與龍吉同重衣謂之龍吉是後因前故

爲四也卷四

正義本經傳俱に「益」に作りて「龍吉」に作らず。故に正義此の迂曲の説を爲す。

尚書禹曰予乘四載隨山欒木卷八羽書疏注

大禹謨正義、此經乃云隨山刊木刊木爲治水治水論於九州故云隨行九州之山林裏二

十五年左傳云井理木刊刊是除木之義也毛傳云除木曰樸故曰刊樸其木關通道路以治

水卷五

此九に據れば正義本は經傳皆「刊」の字に作りしなり。段玉裁曰く「玩正義則經之

改刊杜天寶以前卷八羽書疏注

尚書曰益遷有無化居卷八羽書疏注

益遷此の經「益遷」に作る者は其の傳「益易也遷徙也」に作る。卷八羽書疏注

今益遷正義を案するに經を釋して「又勸勉天下徙有之無交易其所居積」と言ひ、又

傳を釋しては「勸勉天下徙有之無者謂徙我所有往彼無鄉取彼所有以清我之所無」

第三と言ふ。是れ正義本經「樹」(或は樸)に作り、傳は之を訓じて「勉」と爲せること

第三と言ふ。是れ正義本經「樹」(或は樸)に作り、傳は之を訓じて「勉」と爲せること

今本と同じかりしなり。

孔安國尚書傳曰益五彩也卷八羽書疏注

此の引文に依つて之を推せば李善本益遷經文は「作繪」に作りて「作會」に作らざ

りしを知る。

今益遷正義「會者合取之名下云以五采所刻本影施於五色作服知會謂五色也」卷八羽書疏注

を説するに其の據る所の傳文は「會五采也」に作りて「會」の上「繪」の字無かりし

を知り、隨つて其の經も亦「作會」に作りて「作繪」に作らざりしを知るなり。卷八羽書疏注

五十七面中

孔安國尚書傳曰率述也卷八羽書疏注

引く所は當に是れ湯詒の傳なるべし。湯詒正義に曰く「率訓述也述前所以申述故

率尚述也」卷八羽書疏注

是れ正義本傳文「率述也」に作りて「率述也」に作らざり

しなり。卷八羽書疏注

尚書曰導河自積石南至于華陰卷八羽書疏注

禹貢導弱水の正義に曰く

凡此九水立文不同弱水黑水汎水不出于山文單故以水配其餘六水文與山連既影於山

不須言水積石山非河上源記施功之處故云導河積石言發首積石起也導江先山後水淮

渭洛先水後山皆是中文詳略無義例也又淮渭洛言自某山者皆是發源此山欲使導於導

導

河。故。加。自。耳。卷六 第六葉裏

と。正義本「積石」の上「自」の字無かりしこと甚だ顯明。

又正義此の文に従へば孔氏等は准洛洛經皆「自某山」に作りて「自」の字有るは、是れ其の水名某山より發するが爲なりと解するに似たり。然れども其の解似すしも今本尚書傳孔傳と合せず。乃ち「導洛自熊耳」は正義の説の如くんは「洛」の源は熊耳より發すと爲さざるべからず。然るに今本（澤州）伊洛間既入于河の傳に曰く「洛出上洛山」と。又（寧山）熊耳外方桐柏至于陪尾の傳に曰く「洛經熊耳」と。是れ猶孔氏は熊耳山を以て洛の源と爲さざるなり。

水經注卷十五（洛水）に曰く「（經）洛水出京兆上洛縣譙山」（注）洛水又東逕熊耳山北出焉所謂導洛自熊耳博考志曰洛出熊耳蓋開其源者是也」王氏校本と。其の記する所偏孔傳の説と甚だ近し。

但導山の傳「洛經熊耳」の正義に「洛出熊耳」と言へば正義本尚書の傳は「洛經熊耳」の「經」を「出」に作りしかと疑はる。果して然らば孔氏等洛水熊耳山に出づと謂ふ者亦故無きに非ず。然れども若し正義本の傳上文「洛出上洛山」に作り下又「洛出熊耳」に作れりとせば孔氏等偏に上洛山正義に曰く地理志云洛水出弘農上洛縣譙山北出焉と傳傳者導洛山北出焉と能耳正義に曰く地理志云洛水出弘農上洛縣譙山北出焉との關係を釋すべきに今の正義其の文無く且導山の傳「洛經熊耳」の正義上文地理志を引いて熊耳山を以て伊水の出づる所と爲しながら其の下文又「洛出熊耳」と言へるは前後相

錯するを免れず。未だ知らず正義本「熊耳外方桐柏至于陪尾」の傳本より「洛出熊耳」に作りて今本と異りしか將傳本「洛經熊耳」に作りて惟今の正義「洛出熊耳」の「出」の字誤れるのみなるか。

尚書曰王自商至于豐乃饗武修文孔安國曰關修文教卷廿九補公詩注

武成正義を定するに孔氏等饗る所の傳「饗」の上「關」の字無く又孔氏等此の傳文を句すること李善と同じからず。攷既に第五八四頁に詳なり。

尚書曰言曰從獵曰恭親曰明注曰明也精審卷廿九補公詩注

洪範正義、親明於善惡故心清微而審察也卷十一第九葉裏正義傳を釋して「清微而審察」と言へば其の傳は「清審」に作りて「精審」に作らざりしなり。

尚書曰雨曰暘曰燠曰寒曰風五是來備名以其序庶草解廉卷十九補公詩注

或曰曰雨曰暘曰燠曰寒曰風曰時五是來備名以其序庶草解廉卷十九補公詩注

正義に曰く「時」は五氣の成るを指して「五時」といふことなり（事は既に前章に詳なり）

洪範正義經を釋して曰く

將說其驗先立其名五者行於天地之間人物所以得生成也其名曰雨所以潤萬物也曰暘所以乾萬物也曰燠所以長萬物也曰寒所以成萬物也曰風所以動萬物也此是五氣之名曰時言五者名以時來所以無衆事之驗也更述時與不時之事五者於是來皆備足須順則風來須雨則雨來其來名以次序則衆事皆備而豐茂矣卷廿三葉表

「衝即古撞字」、「孔讀爲烏鳥」、「箴地音義同」、「洪範正義」、「圖經也」、「梓材正義」、「二文皆言即古塗字」、「秦聖正義」、「冒即古世」等の例のごとくなるべし。今此の釋無きを以てすれば、其の經文既に「勳」に作られしかと疑はる。

[illegible]

今尚書正義を效法するに、經文の古字に就いて其の古字なる所以を釋せる者固より多し。然るに鄭本^{鄭玄}、宋本^{宋濂}、明本^{明倫彙編}、清本^{清儒}、各異なり。其の正誤を定むるに、古字を用ひたるに、正義中之を釋せざる者亦尠ならず。即ち

皇祖護庶明勳賢の「勳」正義本は「屬」に作りしに第五四頁参照正義「屬」と「勳」この關係を

傳せず。盤庚上「率籲衆慝」の「慝」正義本は「𢀛」に作りしに參照。正義「𢀛」と「𢀛」との關係を傳せず。顧命「先哲在左塾之前」の「𢀛」正義本は「𢀛」に作りしに頁三三五。正義「𢀛」と「𢀛」との關係を傳せず。又呂刑「爰始淫亂刑罰」今本此の二字「極斃」の正義「劉極人憊」と讀へば其の意は「極」を「𢀛」に作り傳乃ち「𢀛」を易へて「極」に作りしこと疑ふべからざるに岩崎孝正に傳を傳せる正義中。「𢀛」「極」の關係を讀へる文無き等其の例なり。

然らば、則ち今本正義中、古字を釋するの文、無きの故を以て、必ずしも直に其の經本より其の古字無しとは謂ふべからざるなり。

但李善本尚書奏典「明明敝仄陋」の「欺」與典「蠻夷貢貢」の「滑」大禹謨「隨山槩木」の「采」金縢「王有虔不怠」の「采」無逸「弗皇暇食」の「皇」等は正義本既に「揚」「肩」「重」「追」等に作られて今本に同じく奏典「安酈納日」の「飲」を敦煌本釋文は「渴」に作れるに正義本既に「飲」に作り「許說行數通謂之」「羅氏累印敦増本甘誓」「予則攸器々」の「攸」傳世正義本「契子若しくは」「契」に作られたるに似、正義本「生商卷別列武庚字爲子」を訓するに今小雅車攻傳正義「契」に作り「武庚」なる字註解を引く一本義本「武庚」の字は當仁五義廿四引くと同すなり此れは皆正義本の誤り也然るに正義本「岩崎李及び羅氏敦増本衛子」「找舊員刻子」の「員」正義本「云」に作りしに似、義に至つて「爾」を擇むと秦固正「たれば正義本尚書は少くとも比較的古字多からざる本なりしかと疑はる。」「字多かりしが是に定むべからず。」若し然らば前記李善本に用ひられたる古字は正義本盡くは之れ有りしに非ざらむ。

之を要するに、李善本は今本と合せずして、正義本と合する所固より勘互からずと雖も、
兩本相異なる所亦決して勘互からざりしなり。而も兩本相合せざる所は、概ね李善本を
以て長と勘すべきこと、本節に示せる諸例に據りて之を知るを得べし。

第五章 李善本尚書と現存隸古定尚書

現存隸古定尚書の内、自ら對校するを得たる者に、岩崎氏東洋文庫藏本（東京）、九條家藏本（東京）、神田氏藏本（東京）、東洋學堂藏本（東京）、觀智院藏本（東京）、原家藏本（東京）、古持堂藏本（東京）、羅振玉景印本（東京）、楊守敬景寫本（東京）、盧蔭蓀藏本（東京）、羅振玉景印本（東京）、鳴沙石室本（東京）、內藤博士景敦煌石室本（東京）、小島博士景敦煌石室本（東京）、足利學校遺蹟圖書館藏本（東京）、石室本（東京）、後西郷藏本（東京）、以上十一内野氏藏本（東京）、足利學校遺蹟圖書館藏本（東京）、以上二有。中野氏藏本（東京）、對校に際しては、同所附の寫本を参照する。而して此れ等隸古定本は、皆所謂衛包改字以前の面目を存すること、勘互からざる者なるは、世既に定論有り、中に就き岩崎本、九條本、神田本は、本同一通に屬して、現存隸古定本の白眉と稱せらるる者なり。而も先づ神田本、九條本、岩崎本、以上三本、其の六、第七、八、九、十、十一、の五本、今李善本尚書經文の今本と異れる所を以て、此れ等隸古定本に較すれば、正に相合する者甚だ多きこと、既に論名雖も、而も互に異れる所亦無きに非ず。其の異同の主なる者を表示すること左の如し。（各條の上に加へたる數字は、第二章（甲）文字の異同表の番號を示す。）

<p>益稷</p> <p>(1) 隨山刊木</p> <p>(2) 隨水刊木</p> <p>(3) 隨山刊木</p> <p>(4) 隨水刊木</p> <p>(5) 隨山刊木</p> <p>(6) 隨水刊木</p> <p>(7) 隨山刊木</p> <p>(8) 隨水刊木</p> <p>(9) 隨山刊木</p> <p>(10) 隨水刊木</p> <p>(11) 隨山刊木</p> <p>(12) 隨水刊木</p> <p>(13) 隨山刊木</p>	<p>今本尚書</p> <p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p> <p>武內氏藏本</p>
<p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p> <p>武內氏藏本</p>
<p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p> <p>武內氏藏本</p>
<p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p> <p>武內氏藏本</p>
<p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p> <p>才</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p> <p>武內氏藏本</p>

<p>今本尚書</p> <p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>
<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>
<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>
<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>
<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>	<p>李善所引</p> <p>內野本</p> <p>定利本</p>

今本尚書	李善所引	內野本	足利本	羅氏景印	九條本
○ (3) 降災于夏以彰厥罪	○ (2) 弗忍荼毒	○ (3) 予則罕戮汝	○ (4) 惟王不通聲色	○ (5) 後予后來其蘇	○ (6) 仲虺之誥
湯誥	湯誥	湯誥	湯誥	湯誥	湯誥
今本尚書	李善所引	內野本	足利本	羅氏景印	九條本
○ (3) 降災于夏以彰厥罪	○ (2) 弗忍荼毒	○ (3) 予則罕戮汝	○ (4) 惟王不通聲色	○ (5) 後予后來其蘇	○ (6) 仲虺之誥
湯誥	湯誥	湯誥	湯誥	湯誥	湯誥
今本尚書	李善所引	內野本	足利本	羅氏景印	九條本
○ (3) 降災于夏以彰厥罪	○ (2) 弗忍荼毒	○ (3) 予則罕戮汝	○ (4) 惟王不通聲色	○ (5) 後予后來其蘇	○ (6) 仲虺之誥
湯誥	湯誥	湯誥	湯誥	湯誥	湯誥

(23) 朔南暨聲敎	(20) 四陳既宅	(18) 東別自定	(17) 至于大伾	(16) 又東至于孟津	(14) 導河積石	(13) 西戎即叙	(11) 包匭菁茅	(10) 沱替既道	(9) 駁包拯柚	(8) 島夷卉服	(7) 篠簜既敷	(6) 震澤底定	(5) 彭蠡既豬	(4) 淮海惟揚州	(3) 草木漸苞	出貢	今本尚書
泉	與	池	伾	盟	序	苞	匭	沱	苞	島	夷	底	豬	揚	苞		李善引
泉	長	沱	伾	孟	叙	苞	匭	沱	苞	島	夷	底	豬	揚	苞		內野本
泉	地	沱	伾	孟	叙	苞	匭	沱	苞	島	夷	底	豬	揚	苞		足利本
																	岩崎本
泉																	新刊 地理本
																	新刊 地理本
泉	與	池	伾	孟	叙	苞	匭	沱	苞	島	夷	底	豬	揚	苞		九條本

(2) 召敵讎不怠	(1) 乃瘞癰神祇之犧牲性用	微子	(7) 敢對揚天子之休命	(6) 后惟克辟	(5) 龜惟鹽梅	(2) 用汝作舟楫	(1) 俾以形秀
弗全	弗全	無 _レ 之字		卑	介	楫	於
弗姪	弗姪	有 _レ 之字		俾	爾	楫	于
弗 _不 姪	弗 _不 姪	有 _レ 之字		俾	介	楫	于
弗全	弗全	無 _レ 之字		卑	介	楫	于
弗全	弗全	有 _レ 之字		卑	介	楫 _{無_レ之字}	于
不姪	不姪	有 _レ 之字		俾	爾	楫	
弗全	弗全	有 _レ 之字		卑	介	楫	于

<p>② 懷。懷。危懼。</p> <p>④ (4) 懷。懷。危懼。</p>	<p>③ 伊訓。</p>	<p>② (2) 古有夏先后方懋厥德。</p> <p>③ (3) 與人不求備檢身若不及。</p> <p>⑤ (5) 爾惟不德罔大。</p>	<p>太甲。</p>	<p>② (1) 太甲既立不。明伊尹放諸桐。</p>
<p>葉</p>	<p>桐</p>	<p>弗</p>	<p>弗</p>	<p>桐</p>
<p>懷</p>	<p>懋</p>	<p>弗</p>	<p>弗</p>	<p>桐</p>
<p>懷</p>	<p>懋</p>	<p>弗</p>	<p>弗</p>	<p>桐</p>
<p>懷</p>	<p>懋</p>	<p>弗</p>	<p>弗</p>	<p>桐</p>

⑤ 不。迪有顯戮	弗	弗	弗	弗	弗
② 時甲子昧爽。	夷	夷	夷	夷	夷
④ 逖矣西土之人	遇	遇	遇	遇	遇
⑤ 緡爾。戈比爾干	尔・尔	爾・爾	爾・爾	尔・尔	尔・尔
⑥ 古人有言曰。玆維難戩	曰の字無し	曰の字有り	曰の字有り	曰の字無し	曰の字無し
⑦ 予發維赫。行天之罰	才	才	才	才	才
⑧ 爾哉。夫子尚桓桓	才	才	才	才	才
武成	才	才	才	才	才
① 乃僇武修。文	脩	脩	脩	脩	脩
⑥ 討比干。篲	脩	脩	脩	脩	脩
⑦ 式商容。閼	脩	脩	脩	脩	脩
⑧ 紂。桀之業	脩	脩	脩	脩	脩
⑨ 紂。桀之業	脩	脩	脩	脩	脩
⑩ 位。事惟能	位	位	位	位	位

⑤ 不。迪有顯戮	弗	弗	弗	弗	弗
② 時甲子昧爽。	夷	夷	夷	夷	夷
④ 逖矣西土之人	遇	遇	遇	遇	遇
⑤ 緡爾。戈比爾干	尔・尔	爾・爾	爾・爾	尔・尔	尔・尔
⑥ 古人有言曰。玆維難戩	曰の字無し	曰の字有り	曰の字有り	曰の字無し	曰の字無し
⑦ 予發維赫。行天之罰	才	才	才	才	才
⑧ 爾哉。夫子尚桓桓	才	才	才	才	才
武成	才	才	才	才	才
① 乃僇武修。文	脩	脩	脩	脩	脩
⑥ 討比干。篲	脩	脩	脩	脩	脩
⑦ 式商容。閼	脩	脩	脩	脩	脩
⑧ 紂。桀之業	脩	脩	脩	脩	脩
⑨ 紂。桀之業	脩	脩	脩	脩	脩
⑩ 位。事惟能	位	位	位	位	位

<p>◎ (1) 殿既得。ト則經卷</p>	<p>◎ (1) 國公相成王將黜般。</p>
<p>◎ (2) 西土人亦不靜。</p>	<p>◎ (2) 西土人亦不靜。</p>
<p>◎ (3) 薛子冲人永思難。</p>	<p>◎ (3) 薛子冲人永思難。</p>
<p>◎ (4) 若考作室既底法。</p>	<p>◎ (4) 若考作室既底法。</p>
<p>◎ (5) 爾亦不知天命不易。</p>	<p>◎ (5) 爾亦不知天命不易。</p>
<p>◎ (6) 率由典常以蕃王室。</p>	<p>◎ (6) 率由典常以蕃王室。</p>
<p>◎ (7) 傲子之命。</p>	<p>◎ (7) 傲子之命。</p>
<p>◎ (8) 率由典常以蕃王室。</p>	<p>◎ (8) 率由典常以蕃王室。</p>

[illegible]

今本尚書	李善所引	内野本	足利本	元條本	小島虎造本
立政 (1) 文王罔攸兼于庶言 庶獄庶慎	迨	迨	攸	迨	迨

今本尚書	李善所引	内野本	足利本	中原家本
周官 ○(1) 萬國咸寧 ○(3) 寅亮天地弼予一人 君陳 ○(2) 惟孝友于兄弟 ○(3) 爾有嘉謀嘉猷 顧命 ○(1) 病日臻既彌留 ○(2) 昔君文王武王 ○(3) 出紹衣于庭越翼日乙丑王崩 ○(4) 先朝在左塾之前 ○(5) 皇后憑玉几道揚末命	李善所引 邦・余 或・予 寅・予 寅・予 寅・予 爾 惟孝于孝 惟孝于孝 惟孝于孝 爾	内野本 或・予 寅・予 寅・予 寅・予 爾 惟孝于孝 惟孝于孝 惟孝于孝 爾	足利本 寅・予 寅・予 寅・予 寅・予 爾 惟孝于孝 惟孝于孝 惟孝于孝 爾	中原家本 寅・予 寅・予 寅・予 寅・予 爾 惟孝于孝 惟孝于孝 惟孝于孝 爾

今本尚書	李善所引	内野本	足利本	岩崎本
康王之誥 ○(1) 昔君文武 (2) 不顧心之臣 畢命 (1) 政由俗革 (2) 彰善癉惡 (3) 敝化奢靡 (5) 罔不咸賴 君牙 (2) 今命爾予翼作股肱心膂 四命 (2) 思免厥愆 (3) 繩紂糾謬 呂刑 (2) 延及于平民 (3) 告爾祥刑 (5) 哀敬拍獄	李善所引 二先 式益 二其(昔康王) 二昔	内野本 式益 内野本 足利本 二昔	足利本 二其(昔康王) 二昔	岩崎本 二昔

に作り「賢愚」の「賢」本「賢」に作りしに後人皆受に加筆して今字に改めたる筆枝擧に皇あらす。此の類皆墨色筆致を諦視して之を辨すべし。足利本の此れ等の例より推せば、隸古定本或は亦此の類の改易を免れざりしかと疑はる。

讀者既に隸古定本に就いて旁改添注を施し或は直に其の古字を改めて今字に作ることをあらむか、轉寫者輒ち之に从ひて或は徑に經文の古字を今字に改め寫し或は皆に本注の文字を經文に加ふることに有りしなるべく又字似て經文文字を誤り書せること亦免れざる所なり。此れ等のこと亦今の隸古定本を攷へて之を推すを得べし。

先づ轉寫の際次第に古字を改めて今字に作ることに有るの例を示さむ。

岩崎本、女猷黠乃心亡憂加使。(盤庚上)

雲閣藏則本、女猷黠乃心亡憂以康。

内野本、女猷黠乃心亡憂以康。

足利本、女猷黠乃心無衛從康。

說文第十篇下亦部に曰く「鼻、從也。从自以六亦。鼻、虞書曰若丹朱。鼻、論若微論諸鼻。湯舟」と。而して彙典「象微」敦理本釋文「鼻」の字を出し「古款字五報反」と注されは、陸見る所の彙典亦「鼻」の字を用ひたるを知る。汗簡百部尚書を引いて正に「鼻」に作る。然らば、此の經岩崎本、雲閣本、内野本「鼻」に作る者是にして、足利本「微」に作るは後人の改むる所なり。しと雖へるも其の説少すしと當らず。又岩崎本「康」に作る者是にして、雲閣本以下「康」に作るは皆後人の改むる所なり。

君牙「嗣守文武成康遺緒」の「康」亦岩崎本「康」に作る。是れ尚書康安康康の字本或は「康」に作りしなり。說文「補穀之皮也。从禾庚聲。爾雅或省作」第七篇「平位西方。象秋時。其物庚庚有實也」下庚部而して「康」の引伸の義を安樂と爲し世所無也。又岩崎本、王司敬民宅非天無黠。紀亡豐于尼。(高宗形日)

雲閣藏則本、王司敬民宅非天無黠。紀亡豐于尼。

内野本、王司敬民宅非天無黠。紀亡豐于尼。

足利本、王司敬民宅非天無黠。紀亡豐于尼。

說文に據れば「鼻」は「鼻」の古文なり。鼻、從也。从自以六亦。鼻、虞書曰若丹朱。鼻、論若微論諸鼻。湯舟

又今本尚書「康」の字四見。說文中「康」字一見。鼻、從也。从自以六亦。鼻、虞書曰若丹朱。鼻、論若微論諸鼻。湯舟疑ふらくは、東晉の書今の「鼻」の字皆本「鼻」に作りしなり。而して、鼻、從也。从自以六亦。鼻、虞書曰若丹朱。鼻、論若微論諸鼻。湯舟神田本亦「鼻」に作り、圓命の「鼻」は岩崎本「鼻」に作る。然れども東晉の書本「鼻」の字を改めて「尼」に作ることに有るべからず。說文に曰く「尼、從後近之」者ハ鼻と。

吉崎本、女亡老。備成人亡弱。孫又幼（盤庚上）

内野本、女亡老。備成人亡弱。孫又幼

足利本、女亡老。備成人亡弱。孫又幼

岩崎本、女亡老。備成人亡弱。孫又幼

段玉裁曰く「古文尚書作無老備成人無弱。孫有幼。鄭注老弱皆輕忽之意也。備孔傳與

鄭注本同。孔傳老成人三字爲經文老備。張本非孔作。備老成人也。唐石經作老備。不誤。今

版本作備老。因老成人三字口習。既教又誤。魯孔傳故倒。亂之校傳云。不用老成人之言。是

老備之。不徒則孤幼受害。是弱易之正義。曰老。謂見其年老。謂其無所復知。弱。謂見其幼弱。

謂其未有所識。鄭云老弱皆輕忽之意也。老成人之言云。可徒不用其言。是老備之。也不徒

則水泉。雖弱孤幼受害。不危其害。則是卑弱輕易之也。古文尚書作無老備成人無弱。孫有幼。段說是なり。

岩崎本以下の三本誤らず。足利本、鄭注刻本、皆傳文「老成人」の語に依りて經

文を案せるなり。

岩崎本、予若弱。哀茲新邑（盤庚中）

内野本、予若弱。哀茲新邑

足利本、予若弱。哀茲新邑

内野本、足利本「邑」の上「新」の字多し。是れ傳文「懷此新邑」に據りて行せしな

り。

岩崎本、殷火即喪。指乃功弗亡。罔考提（西伯敷誓）

内野本、殷火即喪。指乃功弗亡。罔考提

足利本、殷火即喪。指乃功弗亡。罔考提

岩崎本、殷火即喪。指乃功弗亡。罔考提

岩崎本以下四本皆「弗亡罔考提」に作る。内野本、足利本、乃ち「邦」の上「余」の字

多し。是れ古文尚書本「余」字無かりしに。内野本、足利本、は傳文「女不得無死。戮於

殷國」に據りて此の字を増せるなるべし。

當に能く隸古定本の古字を改めて今字に作れるのみならず其の用字亦若干の統理を加へられたるに似たり。即ち隸古定本は同一「𠂔」の字を用ひて傳或は「𠂔」と訓じ或は「𠂔」と訓じ或は「𠂔」と訓するに今本は則ち傳「𠂔」と訓する時は「𠂔」に作り傳「𠂔」と訓する時は「𠂔」に作りて「𠂔」兩字判然分用し隸古定本は傳「𠂔」と訓するの「𠂔」符害の害均しく「𠂔」の一字を用ひたるに今本は則ち「𠂔」と訓する字は「𠂔」に作り符害の字は猶「𠂔」に作りて「𠂔」「𠂔」兩字分用するが如き例に據りて之を知るべし。

又隸古定本は所謂俗字を用ゐること多かりしに似たるに今本は多く之を正字に改めたり。例へば隸古定本「**害**」「**害**」「**害**」「**害**」「**害**」は「**害**」に似たるものなり。今本は則ち「**害**」「**害**」「**害**」「**害**」「**害**」等に正せるが如き是れなり。五文字皆俗字に非ず。今本の改定意は、由りて之を敬れば、今本尙書は東晉の舊を失せること弥多きを知るべく、随つて其の李善本の異同取も多きは固より當然のことなりと謂はざるべからざるなり。

李善本尙書と今本正義本、現存神古定本との間に夫れ夫れ異同を生ぜし所以右に述べたるが如し。而して其の異同の中明かに李善本を以て長と爲すべき者甚だ多く第五卷校勘表に於て回印を附せる諸條の若きは淺見を以てすれば各本尙書皆非にして、獨り李善引く所に據りてのみ衆智の舊を知り得る者なり。

又第二章に示せる李善引く所の傳文と今本傳文との異同に於ても亦李善引く所を以て長と爲すべき者夥なからざるなり。

盧文弨曰く、「尚書舊古文東晉時始出宋元以來疑者承矣近世諸儒攻之尤不遺餘力然猶知其僞而不可去也」（録其凡）と。東晉の僞古文極且去るべからず。況や其の傳ふる所の遺古文をや。三家今文の本既に永嘉の亂に滅び、（穆文馬鄭主注の諸本）宋の諸書目以下復に録する無し。然らば今に於て尚兩漢尚書の舊を推知するを得る者は幸にして東晉の書獨り存する有るを以てに非ずや。是を以て尚書の學は東晉の書の眞面を明かにするを以て第一緊要の事と爲さざるべからず。然るに清懷乃ち多く是の書を宋に究せ、口を開けば輒ち曰く僞孔本耳に作る非なりと。段玉裁の精深を以てすら猶直に曰く「正晉唐之改改存周漢之駁文」と。而も其の據る所の周漢の駁文誰か亦晉唐の改改無きを保せむや。然らば則ち周漢の舊を明かにせむと欲せば、先づ東晉の舊を明かにせざるべからず。東晉の舊明かにして周漢の舊乃ち推すべきのみ。予詳薄而も敢て此の一篇を舉せし者は其の意主として李善注の舊を明かにして以て文選の論解を容易ならしむるに在りと雖も亦以て聊、微力を東晉の書の究竟に攷さむことを欲せしなり。

[illegible]

終に本論文各章に於て論述せし所要約するに、略々次の十點に歸すべし。

- (一) 宋板文選は世人の太に珍重する所なれども、之を學術的に觀る時は、皆後人の竄改異入を経たること多く、加之寫者刻工の譌誤亦夥なからざるを以て、其價值遙に舊鈔本の下に位す。
- (二) 從來文選を論ずる者概ね諸本を參訂せず、殊に未だ嘗て舊鈔本を以て校勘せず是を以て其の所論往々謬れる有り。
- (三) 李善文選注に於て諸書を引用すること頗る多きが其の援引には自ら一定の義例有り。
- (四) 李注引文義例に則り、又文選諸本を參訂し、以て李注引く所の尚書を攷定するに、從來、

李注尚書を引けりと爲せし者其の實或は然らざる有り從來李注尚書を引けるに非ずと爲せし者亦其の實或は然らざる有るを知る。

(五) 清朝の尚書家多く李注所引の尚書を引證せしと雖も未だ嘗て李善主として據りし所の尚書の何本なるを攷定せず。是に於てか或は徑に於て今文尚書攷證の資に供し或は直に以て眞古文論定の材と爲すの過誤を犯せり。然るに今之を攷究せし結果李善の尚書は姚方輿本與本與典の一本を以て補へる偽孔傳本^{（四）}にして而も其の經傳傳に今本尚書と異る所多きのみならず唐の定本正義本現存諸古定諸本とも全くは同じからず且唐の正義本現存諸古定本よりも優れる者なることを知る。

(六) 東晉尚書の舊傳り李注所引の尚書にのみ殘れる所尠なからず。

(七) 李善本尚書の攷定に據りて左の諸點を明かにし得。

- (1) 清儒或は以て孔安國改易の字なりと爲し或は以て偽孔氏改易の字なりと爲せる者必ずしも然らず。
- (2) 清儒或は以て今文古文の書同とし或は以て眞古文偽古文の異同と爲せる者必ずしも然らず。
- (3) 従つて今文尚書と古文尚書^{（五）}眞古文尚書と偽孔傳本尚書とは夫々後世の人が攷へる程全く字句の異同多かりしものには非じ。
- (4) 唐初以前の諸古定本は段借字俗字多く同一意義の文字も前後必ずしも其の字形を一にせず同一字形の文字にして前後其の義を異にする有り。後世の尚書の如

く用字整齊なる者に非ず。

(5) 諸古定本の文字の改易は多く轉寫の際漸々行はれし者にして夫の尙包の改字に至つては論者の謂へるが如きの多きに上れるに非ず。

(6) 先儒偽古文各篇經文の本づく所を攷證せし者多けれども皆東晉の舊文を攷定せず直に今本偽古文のみに據りて立論せしを以て其の説往々誤謬有るを免かれず。

(八) 李注所引の尚書の舊を明かにすることに據りて李善の文選正文に對する解釋を明確にし得。

(九) 胡氏文選攷異阮氏尚書攷動記皆當に補訂すべき所尠なからず。

(十) 本篇に於ては主として李注所引の尚書に就いて論述せしが更に李注所引の其の佐の諸書に就いて夫々詳攷せば從來李注所引を以て今本と異れりと爲せし者も或は決して其の異文に非ざる有るを知るべく又從來異文と爲さずして等閑に附せし者も或は其の實重要なる異文なる有るを知るに至るべし。而して李注所引の諸書の詳攷は獨り文選研究上重要なることなるのみならず亦其の書の研究上肝要のこと

に屬す。

尚本論文に於て攷定せし結果李善本尚書經文が明かに今本尚書と異りと認めらるる諸條及び今本尚書と異りしかと疑はるる諸條と清朝尚書家が李善所引を以て今本尚書の異文と爲し以て其の論述に採擇せし諸條とを比較對照して左に附載せむ。

表中清儒氏名の各欄に書せる大字は其の採擇せし李善本尚書の經文文字なり。それらの中には本論文に於て攷定せし李善本文字と必ずしも合せざる有り。是れ彼惟一

徑の文選にのみ據るに止りて李善の舊を詳攷せざるに因るなり。

又清儒名欄内に——を記せるは清儒尚書研究の專書に於て予が攷定せし李善本尚書經文と同じき尚書異文若しくは尚書異文を推定すべき材料を博采しながら而も李注所引を採らざる者を示す。例へば表の堯典(2)「放勛」の「勛」字、(3)「允賢克讓」の「讓」字、江聲以下皆古本尚書此の如く作りしなるべしと推定しながら李善本正に此の字に作れる者を引證せざるを以て欄内に——を記して之を表はすが如し。此の類甚だ多きは清儒必ずしも李善本を以て采るに足らずと爲せしには非ず恐らくは是れ彼の據る所の文選、善本に非ずして、其の李注所引の尚書、今本と同じかりしに因るか否らずんば詳に文選を攷せざりしに因るなり。

又清儒名欄内に——を記せるは予が攷定せし李善本尚書に據れば明かに今本尚書と異りと認めらるるか若しくは今本尚書と異なるかと疑はるるに彼等に李善所引を援引せざるのみならず亦其の異文有ることに論及せざる者を示す。例へば表の堯典(3)「允賢克讓」の「賢」字恐らくは古文尚書の舊を存するに、段玉裁以下皆尚書此の如く作る者有るを論せず、(9)「曰從舜」の「從」字恐らくは古文尚書の舊を存するに、江聲以下皆尚書此の如く作る者有るを論せざるを以て欄内に——を記して之を表はすが如し。但此の類の内諸家李善注所引の異文を以て采るに足らずと爲して之に論及せざる者固より之れ有らむも文選を詳攷せざりしが爲に之を遺漏せし者亦尠なからざるべし。而して此の兩者の判定は頗る困難なるを以て今(1)文選各本互に異同有りて李善の舊定むべ

からざる者(2)文選各本均しく其の字に作るも而も未だ以て李善の舊と定むべき瑣證を得ざる者(3)欄内に於て「李善所引尚書」と雖も苟くも今本尚書と異なる者は一併に之を表示して再攷に資す。

又清儒名欄に於て括弧内に分注せし所は其の尚書研究の專著に於て述べられたる尚書異文に對する斷案の要點なり。此れ等は予が攷定せし李善本尚書に據りて立論すれば彼の斷案遂に从ふべからざるを以て聊々之を附記して參攷に資せむとするなり。例へば今本尚書「金曰禹說」に就いて江聲皮錫瑞王先謙皆「今古文俱に『禹曰』に作り偽孔本の『金曰』に作ると謂ひ陳高樞は古文は『禹曰』に作り今文は『金曰』に作り偽孔氏反て今文に从ふと謂へども今李善所引の偽孔氏本正に「禹曰」に作れば四家の説必しも是ならず、今本洪範「曰而曰鳴曰鳩曰鳳曰時五者來備」の四字に作るは古文「五是來備」の四字に作るは段玉裁王先謙皆「曰時五者來備」の六字に作るは古文「五是來備」の四字に作るは今文なりと謂へども今李善本「五是來備」の四字に作られしかと疑はるれば段玉裁の説必しも是ならず是を以て名欄、右諸家の説の要點を分注するが如し。王鳴盛尚書攷

今本尚書	李善注	本義	江聲	王鳴盛	段玉裁	孫星衍	陳喬樞	皮錫瑞	王先謙
(1) 曰。若。舊。古。帝。堯。	粵	一〇三			粵				王云。曰。舊。古。帝。堯。今。文。曰。或。作。也。三家。文。
(2) 放。勳。欽。明。文。思。安。在。	勳	三九一			勳				王云。作。勳。今。文。作。勳。王云。今。文。作。勳。
(3) 允。然。克。讓。	讓	一四七							王云。作。讓。今。文。作。讓。
(4) 克。明。俊。德。	俊	三六六							王云。今。文。作。俊。
(5) 協。和。萬。邦。	叶。萬	三六九							王云。今。文。作。協。
(6) 黎。民。於。變。時。雍。	雍	三二二							王云。今。文。作。雍。
(7) 帝。曰。咨。四。岳。曷。畀。二。伯。又。	諮	二九四							王云。今。文。作。諮。
(8) 明。明。揚。側。陋。	敷。仄	四七一			敷。仄			楊。仄。文。讀。今。所。引。以。為。王。讀。側。陋。今。文。與。古。文。同。王。讀。敷。仄。以。事。所。引。為。多。文。作。之。證。	
(9) 有。下。曰。處。賢。	達	四四五							
(10) 克。諧。以。孝。烝。烝。乂。不。格。	某。說。非	五〇六							

今本尚書	李善注	本義	江聲	王鳴盛	段玉裁	孫星衍	陳喬樞	皮錫瑞	王先謙
(1) 百。揆。時。敘。	序	三七六			不				王云。作。叙。今。文。作。序。
(2) 舜。讓。于。德。弗。嗣。	不	四五六							王云。今。文。作。不。
(3) 受。終。于。文。祖。	於。?	四九六							王云。今。文。作。受。
(4) 杜。璫。璫。王。斷。	杜。璫。璫。王。斷。	二五三							王云。今。文。作。杜。
(5) 班。旋。于。羣。后。	班。旋。于。羣。后。	四八三							王云。今。文。作。班。
(6) 歲。二。月。車。巡。守。	行	一八八							王云。今。文。作。行。
(7) 肆。觀。東。后。	肆	一五五							王云。今。文。作。肆。
(8) 五。月。南。巡。守。至。于。南。岳。	行。南	四四六							王云。今。文。作。五。
(9) 八。月。西。巡。守。至。于。西。岳。	行。西								王云。今。文。作。八。
(10) 十。一。月。朔。巡。守。至。于。北。岳。	行。北								王云。今。文。作。十。
(11) 惟。刑。之。恤。哉。	卹	一六五			卹				王云。今。文。作。卹。

今本尚書	所著尚書	篇目	江聲	王鳴盛	段玉裁	孫星衍	陳高樞	皮錫瑞	王先謙
(10) 流共工于幽州	州	四九二							
(11) 殛三苗于三危	於？	四九二							
(12) 帝乃殂落	殂	一七三							
(13) 惟時懋哉		四三三							
(14) 讓于稷契暨皋陶	皋陶	四二三							
(15) 敬敷五教在寬	五教の二	三八九							
(16) 帝曰皋陶。蠻夷猾夏	字を重ぬ	四〇三							
(17) 帝曰。兇工	兇工	二九二							
(18) 帝曰。兇工	佳命	二六二							
(19) 帝曰。兇工	禹才	一六七							
(20) 帝曰。兇工	禹才	一六七							
(21) 命。力。作。訓言	爾？	二四八							

今本尚書	所著尚書	篇目	江聲	王鳴盛	段玉裁	孫星衍	陳高樞	皮錫瑞	王先謙
(1) 皋陶矢厥謨	謨	三五二							
(2) 大禹謨	干	五七三							
(3) 文命敷於四海	序	三〇七							
(4) 九功惟敘	序	三〇七							
(5) 九德惟敘	序	三〇七							
(6) 九德惟敘	序	三〇七							
(7) 天之歷數在爾躬	爾	二五三							
(8) 皋陶謨	爾	二五三							
(9) 皋陶謨	爾	二五三							
(10) 皋陶謨	爾	二五三							
(11) 皋陶謨	爾	二五三							
(12) 皋陶謨	爾	二五三							
(13) 皋陶謨	爾	二五三							
(14) 皋陶謨	爾	二五三							

今本尚書	李の引書	本訓	江聲	王鳴盛	段王裁	孫星衍	陳高松	皮錫瑞	王先謙
(3) 忠明。賢	所屬	一五四		王云今本原所改					
(4) 魯。陶曰都杜知人。	谷錄	三四五							
(5) 魯。陶曰都亦行有九德。	谷錄	五二九							
(6) 魯。陶曰寔而業。	谷錄	五二九							
(7) 隨。而麻。	宋	五一九							
(8) 強。而著。	強？。強	五一九							
(9) 俊。又杜官。	高？	二四九							
(10) 百。傳師。	東	九六							
(11) 就。就業。一日二日。結。	萬	四〇九							
(12) 自。我。五。禮。有。康。哉。	五。才	四四七	江云偏孔本 作「幾」 本作「有」						
(1) 予。思。曰。孜孜。	日？	一七九							
(2) 隨。山。刊。木。	榮	二七五							
(3) 樂。還。有。無。化。居。	質	三三三							
(4) 丞。民。乃。粒。	蒸	一三八							

(5) 帝。曰。予。欲。宣。力。四。方。	舜？。余	四四四							
(6) 作。會。	埽	五七七							
(7) 汝。無。面。從。退。有。後。言。	女	三五九							
(8) 敷。納。以。言。	賦？	一四四							
(9) 魯。聖。來。儀。	鳳？	一五九							
(10) 魯。陶。拜。手。稽。首。歸。言。曰。	咎。蘇	一八七							
(11) 慶。省。乃。成。	汝？。成。の 下。功。の。字。有 り？								
(12) 元。首。明。哉。股。肱。良。哉。	才。才	四四八							
(13) 基。事。墜。哉。	才。才	二二六							
禹。貢	於？ 「土」の下。世。の 字。有。り？	九七 四七八							
(1) 決。右。錫。石。入。于。河。									
(2) 厥。土。黑。膚。									
(3) 草。木。漚。包。	楊	二九六 江云偏孔 本作「包」							
(4) 淮。海。惟。提。州。		五四一							

今本尚書		序	江聲	王鳴盛	段王樹	孫星衍	陳壽	皮錫瑞	王先謙
(4) 禮則紀	即？	一七九							
(5) 爾惟	尔・爾？	三五〇							
(6) 予弗克	卑	三三八							
(7) 敢對揚天子之休命	之の字誤し	三四七							
(1) 乃殪殪神祇之繫牲	全	三三三							
(2) 召敵	弗	四二四							
(1) 惟十有一年武王伐殷	克？	四〇三							
(2) 節渡孟津	度，盟？	四〇四							
(3) 雖有周親不如人	若	三三三							
(4) 今商王受得備五行	今の字誤し	五三五							
(5) 不迪有麗	非	一七七							
(6) 鳴呼惟我文考	予？	二二〇							
(1) 與受戰于牧野	於？	四六							
(2) 時甲子昧爽	爽	四三							
(3) 王相至千商郊牧野乃	王の上武	三六〇							

孫星衍
傳本制武

王先謙
文也今文上上

今本尚書		序	江聲	王鳴盛	段王樹	孫星衍	陳壽	皮錫瑞	王先謙
(4) 進至西土之人	進	三三三							
(5) 稱爾文比爾于	尔・尔	四〇八							
(6) 古人有言曰北維燕	之の字誤し	四六							
(7) 今予發維恭行天之訓	發	一〇一							
(8) 王曰歸哉天子尚桓桓	王の上武の 字有り？オ	四八二							
(1) 乃偃武修文	偃	二〇九							
(2) 攸牛于桃林之野	於？	一七七							
(3) 至于大王肇基王迹	太・跡？	四三七							
(4) 種厥玄黃	厥？	三七四							
(5) 陳于商郊	陳？	二八〇							
(6) 封比干墓	千の下入 の字有り	五二五							
(7) 式商谷	谷の下入 の字有り	四〇〇							

皮錫瑞
一作

王先謙
文也今文上上

今本尚書	所屬の書	本經文字	江聲	王鳴盛	段玉裁	孫星衍	陳澧	皮錫瑞	王先謙
〔殊契〕 (1) 明王愷。德 (2) 不役耳目。百度惟貞	成。盛？ 弗目の下則 の字有り？ 唯？ 唯？述	三〇七 一〇七 四三八							
〔金勝〕 (1) 王有疾弗豫。	王の上「武」の字 有り？・念 無の上「王」 の字有り？ 翌	五四六 五四六 三〇六	王は「武」の字 「記作」 王は「武」の字 「記作」 王は「武」の字 「記作」						
(2) 無歷天之降寶命									
(3) 王翌日乃瘳。	翌	五四六							
(4) 管叔及其羣弟乃流言於國	「乃」の字 無し？ 弗	四二八 二一三 二一三							
(5) 公將不利於孺子	「下」乃 信周公の 四字に作る？ 肆？	二一三 二一三 五二八							
(6) 其勿縶ト云々									
(7) 惟予冲人弗及知									

大詁	所屬の書	本經文字	江聲	王鳴盛	段玉裁	孫星衍	陳澧	皮錫瑞	王先謙
(1) 周公相成王將黜殷。	殷の下「命」 の字有り。 王の上「公」 の字有り？ 嗣の上「王」 の字有り？ 唯？ 唯？ 唯？ 即の字無し。 土の下「之」の字 有り？・弗靖 思の下「厥」 の字有り。 唯？ 底 弗・弗 无？	三二八 二五五 二五五 三三二 三三二 四六九 一九一 三三七 三三一 四八五 四一七 一九六 四〇四							
(2) 王若曰……									
(3) 嗣無疆大歷服									
(4) 予惟小子若涉淵水予 惟往求朕攸濟									
(5) 紹天明即命									
(6) 西土人亦不靜									
(7) 肆予冲人永思艱									
(8) 爾惟舊人									
(9) 若考作室既居法									
(10) 爾亦不知天命不易									
〔獻子之命〕 (1) 與國威休永世無疆									

王は「武」の字
「記作」
王は「武」の字
「記作」
王は「武」の字
「記作」

呂刑	(1) 呂刑。	(2) 延及于平民	(3) 告爾祥。刑	(4) 其罰百鎰。	(5) 哀敬。折獄	[文]庠之命	(1) 虞弓一。	(2) 蘭。幽。而。移。用。成。而。歸。德。	[書]拉弓	(1) 無敢。寇。攘。踰。垣。牆。	[奉]拉弓	(1) 尚。獻。詞。訟。言。變。則。罔。所。	(2) 公。曰。：。人。之。有。技。若。己。	(3) 不。魯。若。自。其。口。出。
	命？	「干」の字無し	詳	鎰？	矜	十？	余。命？。余	或？	干？	係。	素。穆。兮。夜？	如	一四五	四五三
	四二四	三三四	三〇五	三三三	三八一	三一九	三四六	四三五	二四五	係。	四五三	一四五	四五三	四五三
	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔	江云偏孔
	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳
	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳
	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳
	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳
	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳
	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳
	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳	詳

右の表に據りて明かなるが如く、清儒にして李注所引を援用すること最も多きは段玉裁にて、後の學者は殆んど段の援引を襲用せるに過ぎざるの概有り。而も段の援用據かに廿五條にしてやむ。淺見を以てすれば、苟も尚書の研究に志有る者は、段既に引證せる廿五條の外、^ヤ表裏古文各篇に於て○印を附せる八十二條は必ず之に一穴を拂ふべし。殊に○印を附せる卅條の若きは當に之を重要な證據と爲して更に立論すべき者なりと信ず。然るに清儒此の事無きは是れ未だ文選の研究精審ならざりしに因る。又、^ヤ尚古文各篇に於ても右表○を附せる卅條は東晉の書の舊を知るに最も重要な資料なるに、清儒未だ之を知らず、徒に後人の改竄せる今本尚書に就いて立論せしに過ぎず。惜しむべし。

第三編第五百六十八頁五百六十九頁に掲げたる、李善所引尚書の句逗の今本と異れる者に就いては未だ清儒の尚書句逗を論ずるに際し之を引證せる者を見ざるを以て、今特に其の立論と比較することを爲さず。

文選李善注所引尚書校證

昭和十三年一月廿五日脱稿

昭和十七年八月十五日印刷

昭和十七年八月廿五日發行

(以應寫代印刷)(非賣品)

著者 斯 波 六 郎

書局市皆書町三丁目九百七番地九

發行者 斯 波 六 郎

廣島市水主町二百九十八番地

印刷者 有 本 義 美

919
53

終

書誌情報

簡易レコード表示にする

資料種別 (materialType)

Book

タイトル (title)

文選李善法注所引尚書攷証

タイトルよみ (titleTranscription)

モンゼン リ ゼン ホウ チュウ ショ イン ショウ ショ コウ ショウ

著者 (creator)

斯波六郎 編

著者標目 (creator:NDLNA)

斯波, 六郎, 1894-1959

著者標目よみ (creatorTranscription:NDLNA)

シバ, ロクロウ

出版地 (publicationPlace)

広島

出版者 (publisher)

斯波六郎

出版年月日 (issued)

昭和17

出版年月日(W3CDTF形式) (issued:W3CDTF)

1942

フォーマット(IMT形式) (format:IMT)

image/jp2

容量・大きさ (extent)

680p ; 26cm

原資料(日本全国書誌番号) (sourceIdentifier:JPNO)

46028952

永続的識別子 (identifier:NDLJP)

info:ndljp/pid/1131757

URL (identifier:URI)

http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1131757

NDL請求記号 (callNumber)

928-Sh15ウ

原資料のNDL書誌ID (sourceIdentifier:NDLBibID)

000000690130

NDC (subject:NDC)

928

言語(ISO639-2形式) (language:ISO639-2)

jpn

利用対象者 (audience)

一般

コレクション情報 (type:collection)

図書

デジタル化出版者 (digitizedPublisher)

国立国会図書館

デジタル化日(W3CDTF形式) (dateDigitized:W3CDTF)

2010-03-31

提供者 (provider)

近代デジタルライブラリー

提供制限 (accessRights)

インターネット公開

公開範囲 (rights)

インターネット公開 (保護期間満了)

階層レベル (type:biblevel)

0

作成者典拠ID (creator:NDLNAId)

00070103

出版地 (国名コード) (publicationPlace:ISO3166)

JP

目次 (tableOfContents)

目次 / (0002.jp2)

第一篇 文選李善注引文義例攷 / 1 (0004.jp2)

第一章 引據各本文選李善注優劣攷 / 1 (0004.jp2)

第二章 文選李善注引文義例攷 / 59 (0035.jp2)

第二篇 文選李善注所引尚書條攷 / 91 (0051.jp2)

例言 / 91 (0051.jp2)

卷第一 / 93 (0052.jp2)

卷第二 / 111 (0061.jp2)

卷第三 / 122 (0067.jp2)

卷第四 / 142 (0077.jp2)

卷第五 / 146 (0079.jp2)

卷第六 / 154 (0083.jp2)

卷第七 / 162 (0087.jp2)

卷第八 / 167 (0089.jp2)

卷第九 / 170 (0091.jp2)

卷第十 / 173 (0092.jp2)

卷第十一 / 184 (0099.jp2)

卷第十二 / 198 (0106.jp2)

卷第十三 / 204 (0109.jp2)

卷第十四 / 208 (0111.jp2)

卷第十五 / 213 (0113.jp2)

卷第十六 / 219 (0116.jp2)

卷第十七 / 227 (0120.jp2)

卷第十八 / 232 (0123.jp2)

卷第十九 / 236 (0125.jp2)

卷第廿 / 247 (0130.jp2)

卷第廿一 / 267 (0140.jp2)

卷第廿二 / 272 (0143.jp2)

卷第廿三 / 278 (0146.jp2)

卷第廿四 / 285 (0149.jp2)

卷第廿五 / 293 (0153.jp2)

卷第廿六 / 298 (0156.jp2)

卷第廿七 / 303 (0158.jp2)

卷第廿八 / 308 (0161.jp2)

卷第廿九 / 314 (0164.jp2)

卷第卅 / 317 (0165.jp2)

卷第卅一 / 319 (0166.jp2)

卷第卅四 / 323 (0168.jp2)

卷第卅五 / 329 (0171.jp2)

卷第卅六 / 348 (0181.jp2)

卷第卅七 / 363 (0188.jp2)

卷第卅八 / 378 (0196.jp2)

卷第卅九 / 390 (0202.jp2)

卷第四十 / 393 (0203.jp2)

卷第四十一 / 402 (0208.jp2)

卷第四十二 / 404 (0209.jp2)

卷第四十三 / 406 (0210.jp2)

卷第四十四 / 413 (0213.jp2)

卷第四十五 / 422 (0218.jp2)

卷第四十六 / 427 (0220.jp2)

卷第四十七 / 439 (0226.jp2)

卷第四十八 / 451 (0232.jp2)

卷第四十九 / 463 (0238.jp2)

卷第五十 / 468 (0241.jp2)

卷第五十一 / 473 (0243.jp2)

卷第五十二 / 476 (0245.jp2)

卷第五十三 / 479 (0246.jp2)

卷第五十四 / 485 (0249.jp2)

卷第五十五 / 490 (0252.jp2)

卷第五十六 / 494 (0254.jp2)

附 今本舜典「修五禮至一死賛」下の來注の位置は舊式に非ざるの攷 / 501 (0257.jp2)

卷第五十七 / 511 (0262.jp2)

卷第五十八 / 517 (0265.jp2)

卷第五十九 / 528 (0271.jp2)

卷第六十 / 540 (0277.jp2)

第三篇 李善本尚書總攷 / 551 (0282.jp2)

第一章 總說 / 551 (0282.jp2)

第二章 李善本尚書と今本尚書 / 557 (0286.jp2)

第三章 李善本尚書と尚書定本 / 598 (0300.jp2)

第四章 李善本尚書と正義本尚書 / 599 (0300.jp2)

第一節 五經正義の撰定 / 599 (0300.jp2)

第二節 正義本尚書と尚書定本 / 601 (0301.jp2)

第三節 正義本尚書と今本尚書 / 611 (0306.jp2)

第四節 李善本尚書と正義本尚書 / 613 (0307.jp2)

第五章 李善本尚書と現存隸古定尚書 / 625 (0313.jp2)

第六章 結論 / 641 (0321.jp2)

URL

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1131757>